

波志江西屋敷遺跡

北関東自動車道(高崎～伊勢崎)地域
埋蔵文化財発掘調査報告書 第20集

2003

日 本 道 路 公 団
伊 勢 崎 市
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

波志江西屋敷遺跡

北関東自動車道(高崎～伊勢崎)地域
埋蔵文化財発掘調査報告書 第20集

2003

日 本 道 路 公 団
伊 勢 崎 市
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



波志江西屋敷遊跡全景(写真上が北) 緑は中央が波志江西屋敷遊跡



波志江西屋敷遺跡出土の緑釉陶器



波志江西屋敷遺跡出土の灰釉陶器

序

北関東自動車道は、本県高崎市において関越自動車道から分岐し、茨城県ひたちなか市にいたる延長約150キロメートルの高速自動車国道であります。その間、群馬・栃木・茨城各県の主要都市および東北自動車道・常磐自動車道と結び、地域社会の発展に大きな役割を果たすものと期待されております。

この北関東自動車道の高崎、伊勢崎間約15キロメートルの建設に先立って、平成7年6月から36の遺跡で発掘調査が行われましたが、当事業団ではそのうち、31の遺跡の発掘調査を担当しました。また、それらの遺跡の整理事業は平成10年度から実施しており、本書『波志江西歴敷遺跡』は、その発掘調査報告書第20集として刊行するものです。

本遺跡は、伊勢崎市波志江町内に所在し、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世にわたる各時代の遺構や遺物が発見された遺跡です。

この中で注目されるのは、奈良・平安時代の住居跡及び掘立柱建物跡が多く、遺物とともに検出されたことです。今回調査された遺構と遺物は、群馬の中毛地域の古代の歴史を考える上で貴重な資料となっています。

本書は、考古学研究者はもちろん、郷土の歴史に関心をお持ちの県民の皆様の研究にも大いに役立つものと確信しております。

最後になりますが、日本道路公団東京建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会文化課、伊勢崎市教育委員会、地元関係者の皆様には、発掘調査から本報告書刊行まで終始ご協力を賜り、心から感謝の意を表すとともに、発掘調査に携わった担当者、作業員の方々の労をねぎらい序といたします。

平成15年3月

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 小野 宇三郎

例 言

1. 本書は、北関東自動車道建設に伴い、事前調査された波志江西屋敷遺跡（KT-200）の発掘調査報告書である。本書における報告は、波志江西屋敷遺跡から検出された縄文時代から近世までの遺構・遺物を対象とする。

2. 本遺跡は、群馬県伊勢崎市波志江町地内に所在する。地番は下記の通りである。

伊勢崎市波志江町 237-1 237-2 237-3 238 239 242-3 254 255 256 257 258-1 258-2
258-3 261-1 261-2 261-3 271-1 304-3 307-1 307-2 308 309-1 309-2
309-3 310 311-1 311-2 311-3 311-4 311-6 311-7 312-1 312-4 314-1
315-1 409-1 410-1 410-3 410-4 432-2 438-1 438-2 438-3 438-4
438-7 452-1 454-3 454-4

3. 本遺跡の遺跡名は小字名の西屋敷の前に、大字名の波志江を付し、大字小字名で遺跡名としている。本遺跡は伊勢崎市の西屋敷遺跡を含む。

4. 事業主体 日本道路公園・伊勢崎市土木部

5. 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団・伊勢崎市教育委員会

6. 調査期間 平成10年度調査 平成10年4月1日から平成10年7月31日
平成11年1月1日から平成11年3月31日
平成11年度調査 平成11年4月1日から平成11年8月4日
平成11年11月1日から平成11年12月7日

7. 調査組織

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

事務担当 菅野 清 赤山容造 渡辺 健 住谷 進 神保侑史 水田 稔 坂本敏夫 真下高幸
西田健彦 笠原秀樹 小山建夫 須田朋子 吉田有光 柳岡良宏 岡嶋伸昌 宮崎忠司
片岡徳雄 大澤友治 吉田恵子 並木綾子 今井もと子 内山佳子 若田 誠 佐藤美佐子
本間久美子 北原かおり 狩野真子 本地友美 松下次男 浅見宣記 吉田 茂
調査担当 平成10年度調査 井川達雄 高井佳弘 小室綾子 金井仁史(現太田市立宝泉南小学校)
前田和昭(嘱託)
平成11年度調査 井川達雄 齋藤幸男

伊勢崎市教育委員会

事務担当 田島國明 細谷清三 中澤貞治 村田喜久夫 須長泰一
調査担当 平成11年度調査 矢島克彦 早川隆弘 高木善行 出浦 崇

8. 整理主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

9. 整理期間 平成14年4月1日から平成15年3月31日

10. 整理組織

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

事務担当 小野宇三郎 吉田 豊 神保侑史 萩原利通 巾 隆之 植原恒夫 西田健彦 小山建夫
高橋勇雄 須田朋子 吉田有光 森下弘美 田中賢一 今井もと子 内山佳子 若田 誠

佐藤美佐子 本間久美子 北原かおり 狩野真子 松下次男 吉田 茂

整理担当 平成14年度 角田芳昭

11. 報告書作成関係者

編 集 角田芳昭

本文執筆 第1章1、真下高幸、第4章2、宮崎重雄、3、機崎修一郎、4、株式会社パレオ・ラボ、第5章1、飯森康広、前記以外角田芳昭

遺構写真撮影 各発掘担当者

遺物写真撮影 佐藤元彦

金属器保存処理 関 邦一 土橋まり子 小材浩一

遺物機械実測 田中富子 富沢スミエ 伊東博子 岸 弘子

整理作業 長沼久美子(囑託) 渡邊フサ枝 萩原光枝 立川千栄子 狩野なつ子 鈴木善美

12. 石材同定は群馬県地質研究会の飯島静男氏にお願いした。

13. 馬歯の分析は宮崎重雄氏にお願いした。

14. 石製品、瓦及び鉄製品の観察については当事業団職員大江正行、縄文土器の観察については当事業団職員原雅信、土師器・須恵器・灰釉陶器の年代判定については当事業団職員神谷佳明、陶磁器の年代判定及び産地同定については当事業団職員大西雅弘、石器の観察については当事業団職員岩崎泰一、人骨の分析については当事業団職員機崎修一郎、掘立柱建物跡の観察については当事業団職員飯森康広が行った。

15. 本遺跡の出土遺物及び図面、写真等の資料は群馬県埋蔵文化財調査センターと伊勢崎市教育委員会が保管している。

16. 発掘調査及び本書の作成にあたり、以下の方々にご指導、ご協力を戴いた。記して感謝の意を表したい。

(順不同・敬称略)

伊勢崎市教育委員会 地元関係者各位 金井仁史 前田和昭

凡 例

1. 遺構図に使用した方位は、国家座標の北を表している。国家座標は日本測地系を使用している。
2. 遺構断面図に付した数字は、標高を表している。
3. 本文または表中のグリッドの表記は、発掘調査時における南東隅のグリッドの記載ではなく、編集の都合上、遺構図の右上または内部の位置にくるグリッドを記載した。
4. 遺構図については基本的に下記の縮尺で掲載したが、一部縮尺の異なるものがあるので各挿図中にスケールを貼付してあるので参照されたい。

竪穴住居跡1/60 住居の竈1/30 独立柱建物跡1/60 井戸跡1/60 溝1/200(断面図は1/50) 土坑1/60
 竪穴状遺構1/60 火葬遺構1/20 地下式土坑1/60 円形溝遺構1/60 柱穴列1/60 ビット群1/200

5. 遺構図中のスクリーントーンは、下記のとおりである。



6. 遺物図の縮尺は下記の通りである。一部縮尺の異なるものがあるので、各挿図中にスケールを貼付してあるので参照されたい。

土器及び陶磁器(坏・埴・碗・皿・灯火具・土器の拓影図1/3 鉢・壺類・甕類・甌・焙烙・播り鉢1/4)
 石器(石鏃4/5 スクレイパー1/2 打製石斧・使用痕のある剥片・磨石・敲石・石鏢1/3)
 瓦1/3 土製遺物(土製円盤・土鏢1/2) 金属製遺物(古銭1/1、鉄器・鉄滓1/2) 石製遺物(紡錘車1/2
 砥石1/3 骨蔵器・石臼1/6)

7. 遺物図中に使用したスクリーントーンは、下記の通りである。



8. 遺物写真は、遺物実測図とほぼ同じ縮尺で掲載してある。ただし、破片資料については多少拡大している。
9. 本書で使用した地形図は下記のとおりである。
 国土地理院 1:25,000「大胡」「伊勢崎」
10. 遺構の計測値はすべて実測図をもとに測定したものである。住居跡の床面積については、デジタルプランメーターで3回計測した平均値を採用した。
11. 独立柱建物跡の庇は、柱穴の規模・形状及び柱間が、身舎部分と異なることを基準として認知したため、廊下である可能性も含んだ名称である。その規模については梁行×桁行の順で、庇を伴う場合は+を付すこととした。
12. 遺物観察表の法量について、推定値には全て()を付してある。
13. 遺物観察表の土器の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」に拠った。
13. 本書では、テフラの呼称として下記の略語を用いる。

テフラ等の名称	略 語	年 代	テフラ等の名称	略 語	年 代
浅間A経石	As-A	1783年(天明3年)	榛名二ッ岳渡川テフラ	Hr-FA	6世紀初頭
浅間B経石	As-B	1108年(天仁元年)	浅間C経石	As-C	4世紀初頭

目次

口絵	(5) 土坑	158
序・例言・凡例	(6) ビット群	177
本文目次・挿図目次・写真図版目次	(7) 遺構外出土遺物	184
第1章 発掘調査の経過と方法	1	
1. 発掘調査に至る経緯	1	
2. 発掘調査の方法	2	
3. 発掘調査の経過	4	
4. 基本土層	5	
第2章 遺跡の地理的環境及び歴史的環境	6	
1. 地理的環境	6	
2. 歴史的環境	8	
第3章 検出された遺構と遺物	14	
1. 縄文時代の遺構と遺物	14	
(1) 埋壘	14	
(2) 遺構外出土遺物	15	
2. 古墳時代の遺構と遺物	23	
(1) 竪穴住居跡	23	
(2) 掘立柱建物跡	26	
(3) 円形周溝遺構	27	
(4) 遺構外出土遺物	28	
3. 奈良・平安時代の遺構と遺物	29	
(1) 竪穴住居跡	29	
(2) 掘立柱建物跡	80	
(3) 井戸跡	91	
(4) 溝	95	
(5) 土坑	105	
(6) 遺構外出土遺物	107	
4. 中世以降の遺構と遺物	112	
(1) 掘立柱建物跡・柱穴列	112	
(2) 井戸跡	119	
(3) 溝	131	
(4) その他の遺構	155	
第4章 自然科学分析	188	
1. 自然科学分析にあたって	188	
2. 波志江西屋敷遺跡A区25号溝出土の馬歯について	190	
3. 波志江西屋敷遺跡A区1号火葬遺構出土の人骨について	191	
4. 波志江西屋敷遺跡出土炭化材の放射性炭素年代測定	194	
5. 波志江西屋敷遺跡出土炭化材の樹種同定	196	
第5章 まとめ	199	
1. 波志江西屋敷遺跡A区西の掘立柱建物跡群について	199	
2. 成果と課題	208	
報告書抄録		
写真図版		

挿 図 目 次

第 1 図	波志江西原敷遺跡位置図	1	第 59 図	B 区 1 号住居跡、掘り方	75
第 2 図	調査区設定図	3	第 60 図	B 区 1 号住居跡	76
第 3 図	基本土層模式図	5	第 61 図	B 区 3 号住居跡	76
第 4 図	伊勢崎の地形分布図〔伊勢崎市史〕自然編	7	第 62 図	B 区 3 号住居跡掘り方、電、出土遺物	77
第 5 図	周辺の遺跡位置図	10	第 63 図	B 区 4 号住居跡、掘り方、電、出土遺物	79
第 6 図	A 区 1 号埋塞	14	第 64 図	A 区 4 号獨立柱建物跡、218号ピット出土遺物	80
第 7 図	A 区 1 号埋塞出土遺物	15	第 65 図	A 区 5 号獨立柱建物跡、出土遺物	81
第 8 図	縄文時代遺構外遺物出土土器 (1)	17	第 66 図	A 区 6 号獨立柱建物跡、出土遺物	82
第 9 図	縄文時代遺構外遺物出土土器 (2)	18	第 67 図	A 区 7 号獨立柱建物跡	83
第 10 図	縄文時代遺構外出土土器 (1)	21	第 68 図	A 区 8 号獨立柱建物跡	84
第 11 図	縄文時代遺構外出土土器 (2)	22	第 69 図	A 区 9 号獨立柱建物跡	85
第 12 図	縄文時代遺構外出土土器 (3)	23	第 70 図	A 区 10号獨立柱建物跡、418号ピット出土遺物	85
第 13 図	B 区 2 号住居跡、掘り方	24	第 71 図	A 区 10号獨立柱建物跡	86
第 14 図	B 区 2 号住居跡電、出土遺物	25	第 72 図	A 区 11号獨立柱建物跡、出土遺物	87
第 15 図	B 区 1 号獨立柱建物跡	26	第 73 図	A 区 12号獨立柱建物跡	88
第 16 図	A 区 1 号円形溝遺構、出土遺物	27	第 74 図	D 区 1 号獨立柱建物跡	89
第 17 図	古墳時代遺構外出土遺物	28	第 75 図	D 区 2 号獨立柱建物跡、出土遺物	90
第 18 図	A 区 1 号住居跡、電掘り方、出土遺物	30	第 76 図	D 区 3 号獨立柱建物跡	91
第 19 図	A 区 2 号住居跡、出土遺物	30	第 77 図	A 区 9 号井戸跡	91
第 20 図	A 区 3 号住居跡、掘り方	31	第 78 図	A 区 9 号井戸跡出土遺物 (1)	92
第 21 図	A 区 3 号住居跡電、出土遺物	32	第 79 図	A 区 9 号井戸跡出土遺物 (2)	93
第 22 図	A 区 4 号住居跡出土遺物	34	第 80 図	A 区 11号井戸跡、出土遺物	94
第 23 図	A 区 4・5・6 号住居跡、掘り方、電	35	第 81 図	A 区 12号井戸跡、出土遺物	95
第 24 図	A 区 5 号住居跡出土遺物	37	第 82 図	A 区 20号溝出土遺物	96
第 25 図	A 区 6 号住居跡出土遺物	38	第 83 図	A 区 21号溝出土遺物	96
第 26 図	A 区 7 号住居跡、掘り方	40	第 84 図	A 区 20・21号溝	97
第 27 図	A 区 7 号住居跡電、電掘り方	41	第 85 図	B 区 1・2 号溝	98
第 28 図	A 区 7 号住居跡出土遺物 (1)	42	第 86 図	B 区 1 号溝出土遺物	99
第 29 図	A 区 7 号住居跡出土遺物 (2)	43	第 87 図	B 区 2 号溝出土遺物	100
第 30 図	A 区 8 号住居跡、掘り方	45	第 88 図	B 区 3・4・15号溝	101
第 31 図	A 区 8 号住居跡電、出土遺物	46	第 89 図	B 区 5・6・14・17号溝	102
第 32 図	A 区 9 号住居跡、掘り方、電	48	第 90 図	B 区 5 号溝出土遺物	103
第 33 図	A 区 9 号住居跡電掘り方、出土遺物	49	第 91 図	B 区 14号溝出土遺物	103
第 34 図	A 区 10号住居跡、電	51	第 92 図	B 区 16・D 区 3・4 号溝	104
第 35 図	A 区 10号住居跡出土遺物	52	第 93 図	A 区 107・122・141・163・179・B 区 1・18号土坑	105
第 36 図	A 区 11号住居跡、掘り方、電	53	第 94 図	A 区 107・141・163・179・B 区 18号土坑出土遺物	106
第 37 図	A 区 11号住居跡出土遺物	54	第 95 図	奈良・平安時代遺構外出土遺物 (1)	107
第 38 図	A 区 12号住居跡、掘り方、電	56	第 96 図	奈良・平安時代遺構外出土遺物 (2)	108
第 39 図	A 区 12号住居跡出土遺物	57	第 97 図	奈良・平安時代遺構外出土遺物 (3)	109
第 40 図	A 区 13号住居跡、掘り方、出土遺物	59	第 98 図	A 区 1 号獨立柱建物跡	112
第 41 図	A 区 14号住居跡、掘り方	60	第 99 図	A 区 2 号獨立柱建物跡	113
第 42 図	A 区 14号住居跡電、出土遺物	61	第 100 図	A 区 13号獨立柱建物跡、出土遺物	114
第 43 図	A 区 15号住居跡	61	第 101 図	A 区 14号獨立柱建物跡	115
第 44 図	A 区 15号住居跡掘り方、電、出土遺物	62	第 102 図	A 区 15号獨立柱建物跡	116
第 45 図	A 区 16号住居跡、掘り方、出土遺物	63	第 103 図	A 区 16号獨立柱建物跡	117
第 46 図	A 区 16号住居跡出土遺物	64	第 104 図	A 区 17号獨立柱建物跡、A 区 1・2 号柱穴列	118
第 47 図	A 区 17号住居跡、掘り方	65	第 105 図	A 区 1 号井戸跡、出土遺物	119
第 48 図	A 区 17号住居跡電、出土遺物	66	第 106 図	A 区 2・3 号井戸跡	120
第 49 図	A 区 18号住居跡	96	第 107 図	A 区 4・5 号井戸跡	121
第 50 図	A 区 18号住居跡掘り方、電、出土遺物	87	第 108 図	A 区 5 号井戸跡出土遺物	122
第 51 図	A 区 20号住居跡	88	第 109 図	A 区 6・7 号井戸跡	123
第 52 図	A 区 20号住居跡掘り方、電、出土遺物	89	第 110 図	A 区 8・10号井戸跡	124
第 53 図	A 区 21号住居跡、掘り方、電	90	第 111 図	A 区 13・B 区 1 号井戸跡	125
第 54 図	A 区 22号住居跡、掘り方、出土遺物	71	第 112 図	B 区 1 号井戸跡出土遺物 (1)	126
第 55 図	A 区 23号住居跡、掘り方	72	第 113 図	B 区 1 号井戸跡出土遺物 (2)	127
第 56 図	A 区 23号住居跡出土遺物	73	第 114 図	C 区 1 号井戸跡、出土遺物	129
第 57 図	A 区 24号住居跡	73	第 115 図	C 区 2・3・4 号井戸跡	130
第 58 図	A 区 24号住居跡掘り方、電、出土遺物	74	第 116 図	A 区 1・2・5 号溝	132

第117回	A区3・4・7・8・9号溝	134
第118回	A区11・12号溝	135
第119回	A区14・15・16・17・18・19号溝	136
第120回	A区22・23・24・25号溝、出土遺物	138
第121回	B区7・8・9・10・11・12・13号溝、出土遺物	140
第122回	C区1・2・3・4・5号溝	142
第123回	C区6・7・8・9号溝	144
第124回	C区10・11・32号溝	145
第125回	C区12・13・14・15号溝	147
第126回	C区16・17・18・22号溝、出土遺物	148
第127回	C区19・20・21・23・24・25・26・27・28号溝	151
第128回	C区29・30・31・33号溝	153
第129回	D区1・2号溝、出土遺物	154
第130回	A区1号火葬遺構、掘り方	155
第131回	A区1号地下式土坑	156
第132回	A区2・3号壁穴遺構	156
第133回	A区4・C区1号壁穴遺構	157
第134回	A区1～6号土坑	161
第135回	A区7～12・15～22・28号土坑	162
第136回	A区23～27・29～37号土坑	163
第137回	A区38・39・41～55号土坑	164
第138回	A区56～67号土坑	165
第139回	A区68～70・72～80号土坑	166
第140回	A区81～84・86～95号土坑	167

第141回	A区97～106・108・109・111～113号土坑	168
第142回	A区115～120・124・126・128・130・132・133・135・137・139・140・142号土坑	169
第143回	A区143～156号土坑	170
第144回	A区157～162・164・165・167～169・171～173・175号土坑	171
第145回	A区176・177・180・182～184・B区2～6号土坑	172
第146回	B区7～14・17・19・C区5～7号土坑	173
第147回	C区8・9～18号土坑	174
第148回	C区19～28号土坑	175
第149回	C区29～32・D区1号土坑、出土遺物	176
第150回	ビット出土遺物	181
第151回	A区ビット群〔1〕	182
第152回	A区ビット群〔2〕	183
第153回	中世以降遺構外出土遺物〔1〕	185
第154回	中世以降遺構外出土遺物〔2〕	186
第155回	分析資料出土遺構の位置図及び平面図	189
第156回	1号火葬遺構出土土葬人骨	193
第157回	浪志江西屋敷遺跡出土炭化材樹種	198
第158回	浪志江西屋敷遺跡A区全体図	205
第159回	冷水村東遺跡全体図	206
第160回	金古北十三町遺跡全体図	207
第161回	浪志江西屋敷遺跡の土器の変化	208

表 目 次

第1表	周辺道路一覧表	11・12
第2表	遺構外出土石部計画表	23
第3表	右上隅白濁計測値	190
第4表	放射性炭素年代測定および暦年代校正の結果	195

第5表	浪志江西屋敷遺跡出土炭化材樹種同定結果	197
第6表	浪志江西屋敷遺跡A区独立柱建物跡一覧表	204
第7表	冷水村東・金古北十三町遺跡独立柱建物跡一覧表	205
第8表	浪志江西屋敷遺跡住居跡一覧表	210

写真図版目次

P L 1	A区西側全景 (東から)
	A区西側全景 (西から)
P L 2	A区西端 (埋道下) 全景 (南から)
	B区全景 (西から)
P L 3	C区全景 (西から)
	D区全景 (西から)
P L 4	A区1号埋塞全景 (東から)
	注口土層出土状況 (北から)
	B区2号住居跡全景 (西から)
	B区2号住居跡電線全景 (西から)
	B区2号住居跡掘り方全景 (西から)
P L 5	A区1号独立柱建物跡全景 (南西から)
	A区1号円形周溝遺構全景 (南から)
	A区1号円形周溝遺構全景 (東から)
	A区1号円形周溝遺構(右)・25号溝(左)セクション (南西から)
	A区1号円形周溝遺構セクション (西から)
P L 6	A区1号住居跡全景 (西から)
	A区1号住居跡掘り方セクション (南から)

	A区1号住居跡掘り方全景 (西から)
	A区2号住居跡掘り方全景 (南から)
	A区3号住居跡全景 (西から)
	A区3号住居跡掘り方A-A'セクション (西から)
	A区3号住居跡掘り方B-B'セクション (西から)
	A区3号住居跡掘り方電線 (西から)
	A区3号住居跡掘り方全景 (西から)
P L 7	A区4(左)・5(中)・6(右)号住居跡全景 (西から)
	A区4(左)・5(中)号住居跡全景 (西から)
	A区4号住居跡電線全景 (西から)
	A区4号住居跡掘り方B-B'セクション (西から)
	A区4号住居跡貯蔵穴全景 (北から)
P L 8	A区4(左)・5(中)・6(右)号住居跡掘り方全景 (西から)
	A区5号住居跡全景 (西から)
	A区5号住居跡電線全景 (西から)
	A区5号住居跡電線セクション (西から)
	A区6号住居跡全景 (西から)
P L 9	A区7号住居跡全景 (西から)
	A区7号住居跡遺物出土状況 (西から)
	A区7号住居跡貯蔵穴遺物出土状況 (東から)
	A区7号住居跡掘り方全景 (西から)
	A区7号住居跡電線セクション (西から)

- P L 10
 A区8号住居跡全景 (西から)
 A区8号住居跡セクションB-B' (西から)
 A区8号住居跡電全景 (西から)
 A区8号住居跡床下土坑全景 (西から)
 A区8号住居跡掘り方全景 (西から)
- P L 11
 A区9号住居跡全景 (西から)
 A区9号住居跡セクションB-B' (西から)
 A区9号住居跡電全景 (西から)
 A区9号住居跡電セクションA-A' (南から)
 A区9号住居跡掘り方全景 (西から)
- P L 12
 A区10号住居跡全景 (西から)
 A区10号住居跡電全景 (西から)
 A区10号住居跡電セクションB-B' (南から)
 A区10号住居跡掘り方全景 (西から)
 A区10号住居跡掘り方全景 (西から)
- P L 13
 A区11号住居跡全景 (西から)
 A区11号住居跡セクションA-A' (南から)
 A区11号住居跡電全景 (西から)
 A区11号住居跡電セクションC-C' (南から)
 A区11号住居跡掘り方全景 (西から)
- P L 14
 A区12号住居跡全景 (西から)
 A区12号住居跡セクションA-A' (南から)
 A区12号住居跡電全景 (西から)
 A区12号住居跡 (外) 掘り方・18号住居跡 (内) 全景 (西から)
 A区13号住居跡全景 (西から)
- P L 15
 A区14号住居跡全景 (西から)
 A区14号住居跡セクションA-A' (南から)
 A区14号住居跡電全景 (西から)
 A区14号住居跡掘り方セクション (南から)
 A区14号住居跡掘り方全景 (西から)
- P L 16
 A区15号住居跡全景 (西から)
 A区15号住居跡電全景 (西から)
 A区15号住居跡掘り方全景 (西から)
 A区16号住居跡遺物出土状況 (西から)
 A区16号住居跡掘り方全景 (西から)
- P L 17
 A区17号住居跡全景 (西から)
 A区17号住居跡セクション (南から)
 A区17号住居跡電全景 (西から)
 A区17号住居跡電セクション (南から)
 A区17号住居跡掘り方全景 (西から)
- P L 18
 A区20号住居跡全景 (西から)
 A区20号住居跡セクションA-A' (南から)
 A区20号住居跡遺物出土状況 (西から)
 A区20号住居跡電全景 (西から)
 A区20号住居跡電セクション (南から)
- P L 19
 A区21号住居跡全景 (西から)
 A区21号住居跡電全景 (西から)
 A区21号住居跡電セクションB-B' (南から)
 A区21号住居跡掘り方全景 (西から)
 A区22号住居跡全景 (西から)
 A区22号住居跡セクション (北から)
 A区23号住居跡全景 (西から)
- A区23号住居跡掘り方全景 (西から)
- P L 20
 A区24号住居跡全景 (西から)
 A区20号住居跡・24号住居跡掘り方セクション (東から)
 A区24号住居跡貯蔵穴遺物出土状況 (西から)
 A区24号住居跡遺物出土状況 (北から)
 A区20号住居跡 (外)・24号住居跡 (内) 掘り方全景 (西から)
- P L 21
 B区1号住居跡全景 (西から)
 B区1号住居跡電セクション (南から)
 B区3号住居跡遺物出土状況 (北から)
 B区3号住居跡電全景 (西から)
 B区3号住居跡電セクションB-B' (南から)
 B区4号住居跡全景 (北から)
 B区4号住居跡セクション (東から)
 B区4号住居跡電全景 (北西から)
- P L 22
 A区4~7号掘立柱建物跡全景 (西から)
 A区4号掘立柱建物跡全景 (西から)
 A区5号掘立柱建物跡全景 (西から)
 A区6号掘立柱建物跡全景 (南から)
 A区7号掘立柱建物跡全景 (東から)
- P L 23
 A区8~12号掘立柱建物跡全景 (南から)
 A区8号掘立柱建物跡全景 (西から)
 A区9号掘立柱建物跡全景 (北から)
 A区10号掘立柱建物跡全景 (北から)
 A区11号掘立柱建物跡全景 (北から)
- P L 24
 A区12号掘立柱建物跡全景 (東から)
 D区1号掘立柱建物跡全景 (南から)
 D区2号掘立柱建物跡全景 (西から)
 D区2号掘立柱建物跡P7セクション (西から)
 D区3号掘立柱建物跡全景 (北から)
 A区9号井戸跡全景 (西から)
 A区11号井戸跡全景 (北から)
 A区12号井戸跡全景 (東から)
- P L 25
 A区20・21号溝(右)・B区1・2号溝(左)全景 (西から)
 A区20(左)・21(右)号溝全景 (北から)
 A区20・21号溝セクション (南から)
 B区1号溝遺物出土状況 (東から)
 B区1(左)・2(右)号溝全景 (北から)
- P L 26
 B区3(左)・4(右)号溝全景 (北から)
 B区4(右)・15(左)号溝全景 (南から)
 B区4号溝セクション (南から)
 B区5(左)・14(中左)・6(中右)・17(右)号溝全景 (西から)
 B区5・6号溝セクション (東から)
- P L 27
 B区16号溝全景 (南から)
 D区3号溝全景 (北から)
 D区4号溝全景 (北東から)
 A区107・122号土坑全景 (北東から)
 A区141号土坑全景 (南から)
 A区179号土坑全景 (北から)
 B区1号土坑全景 (西から)
 B区18号土坑セクション (東から)
- P L 28
 A区1号掘立柱建物跡全景 (北から)
 A区2号掘立柱建物跡全景 (北から)
 A区1号井戸跡全景 (西から)

- A区2号并戸跡全量 (西から)
 A区3号并戸跡全量 (西から)
 A区4号并戸跡全量 (北から)
 A区5号并戸跡遺物出土状況 (北から)
 A区5号并戸跡全量 (西から)
- P L 29
 A区6号并戸跡全量 (南から)
 A区7号并戸跡全量 (南から)
 A区8号并戸跡全量 (東から)
 A区10号并戸跡セクション (南から)
 A区13号并戸跡全量 (西から)
 B区1号并戸跡全量 (西から)
 C区3号并戸跡全量
 C区4号并戸跡全量
- P L 30
 A区1号溝全量 (西から)
 A区2・3・4・5号溝全量 (西から)
 A区3号溝全量 (東から)
 A区5号溝全量 (南から)
 A区4・5・7・8・9・10・11・12号溝全量 (西から)
- P L 31
 A区14号溝全量 (北から)
 A区15号溝全量 (北から)
 A区16号溝全量 (北西から)
 A区17号溝全量 (北から)
 A区18号溝全量 (東から)
- P L 32
 A区19号溝全量 (西から)
 A区22・23・24・25号溝全量 (北から)
 A区29号溝高曲出土状況 (西から)
 B区7(右)・8・9・10・11・12(左)号溝全量 (東から)
 B区10・11・12号溝セクション (東から)
 B区13号溝全量 (東から)
- P L 33
 C区1号溝全量 (北西から)
 C区4・5号溝全量 (南東から)
 C区2号溝全量 (南から)
 C区3号溝全量 (南西から)
 C区6号溝全量 (西から)
- P L 34
 C区7号溝全量 (西から)
 C区8・9号溝全量 (南から)
 C区10・11・12号溝全量 (南から)
 C区12・29・30号溝全量 (北から)
- P L 35
 C区12号溝全量 (南から)
 C区13号溝全量 (西から)
 C区16号溝全量 (南から)
 C区15号溝全量 (南から)
 C区14・18・19号溝全量 (西から)
- P L 36
 C区17号溝全量 (西から)
 C区20号溝全量 (東から)
 C区21号溝全量 (西から)
 C区21号溝全量 (西から)
 C区22(右)・23(中)・24(左)号溝全量 (西から)
 C区31号溝全量 (西から)
- P L 37
 C区25・26・27・28号溝全量 (西から)
 C区33号溝全量 (北から)
 D区1(右)・2(左)号溝全量 (南から)
 A区2号土坑全量 (東から)
- A区3号土坑全量 (東から)
- P L 38
 A区4号土坑全量 (南東から)
 A区5号土坑全量 (東から)
 A区6号土坑全量 (北から)
 A区7号土坑全量 (北から)
 A区9号土坑全量 (北東から)
 A区10号土坑全量 (西から)
 A区12号土坑全量 (西から)
 A区15号土坑全量 (南西から)
- P L 39
 A区17号土坑全量 (北から)
 A区18(右)・19(左)号土坑全量 (東から)
 A区20(右)・21(左)号土坑全量 (北から)
 A区22(大)・28(小)号土坑全量 (東から)
 A区23(右)・24(左)号土坑全量 (北から)
 A区25号土坑全量 (東から)
 A区29号土坑全量 (北から)
 A区31号土坑全量 (北から)
- P L 40
 A区33号土坑全量 (北から)
 A区34号土坑全量 (南から)
 A区35号土坑全量 (東から)
 A区36号土坑全量 (東から)
 A区38号土坑全量 (西から)
 A区39号土坑全量 (北から)
 A区42号土坑・38号ピット全量 (北東から)
 A区43号土坑全量 (北から)
- P L 41
 A区44号土坑全量 (西から)
 A区45号土坑全量 (南から)
 A区47号土坑全量 (東から)
 A区48号土坑全量 (北から)
 A区49号土坑全量 (北から)
 A区50号土坑全量 (北から)
 A区52号土坑全量 (東から)
 A区56号土坑全量 (東から)
- P L 42
 A区58号土坑全量 (北から)
 A区60号土坑全量 (北から)
 A区62号土坑全量 (東から)
 A区63号土坑全量 (南から)
 A区64号土坑全量 (西から)
 A区66号土坑全量 (西から)
 A区67号土坑全量 (南から)
 A区69号土坑全量 (西から)
- P L 43
 A区73号土坑全量 (東から)
 A区74号土坑全量 (西から)
 A区75号土坑全量 (南から)
 A区77号土坑全量 (西から)
 A区78号土坑全量 (西から)
 A区81号土坑全量 (東から)
 A区82号土坑全量 (北から)
 A区83号土坑全量 (南から)
- P L 44
 A区86号土坑全量 (北から)
 A区87号土坑全量 (北から)
 A区88号土坑全量 (東から)
 A区89号土坑全量 (西から)
 A区90・91・92・93号土坑全量 (東から)
 A区94号土坑全量 (東から)

- A区97(右)・98(左)号土坑全量(北から)
A区99(左)・100(右)号土坑全量(北から)
- P L 45
A区101号土坑全量(東から)
A区104号土坑全量(北から)
A区106号土坑全量(西から)
A区111号土坑全量(北東から)
A区112号土坑全量(北東から)
A区117(右)・118(左)号土坑全量(西から)
A区119号土坑全量(東から)
A区128号土坑全量(北から)
- P L 46
A区130号土坑全量(北から)
A区132号土坑全量(北から)
A区133号土坑全量(西から)
A区140号土坑全量(南から)
A区142号土坑全量(南から)
A区150(右)・11(左)号土坑全量(西から)
A区152(中)・153(右)・154(左)号土坑全量(南から)
A区156号土坑全量(西から)
- P L 47
A区157号土坑全量(南から)
A区158・159・160・161号土坑全量(西から)
A区162号土坑全量(西から)
A区163(右)・169(左)号土坑全量(北から)
A区164号土坑全量(南から)
A区165号土坑全量(南から)
A区171号土坑全量(北から)
A区172号土坑全量(北から)
- P L 48
A区176(下)・177(上)号土坑全量(東から)
A区180号土坑全量(北から)
A区183号土坑全量(東から)
B区2号土坑全量(南から)
B区3号土坑全量(南から)
B区4号土坑全量(南から)
B区5号土坑全量(北から)
B区6号土坑全量(南から)
- P L 49
B区7号土坑全量(南から)
B区8(大)・9(小)号土坑全量(東から)
B区10・11・12・13号土坑全量(西から)
C区5号土坑全量(東から)
C区6号土坑全量(西から)
C区7号土坑全量(東から)
C区9号土坑全量(西から)
C区10(左)・11(右)号土坑全量(西から)
- P L 50
C区12号土坑全量(北から)
C区13号土坑全量(南から)
C区14号土坑全量(南から)
C区15号土坑全量(南から)
C区17号土坑全量(南から)
C区18号土坑全量(南から)
C区19号土坑全量(西から)
C区20号土坑全量(北から)
- P L 51
C区21号土坑全量(北から)
C区22号土坑全量(南西から)
C区23号土坑全量(西から)
C区26号土坑全量(南から)
C区27号土坑全量(南から)
- C区28号土坑全量(南から)
C区30号土坑全量(北から)
C区31号土坑全量(北から)
- P L 52
C区32号土坑全量(東から)
D区1号土坑全量(東から)
A区1号大塚遺構全量(西から)
A区1号大塚遺構セクション(南から)
A区1・2号柱穴列全量(西から)
A区1号地下式土坑全量(東から)
A区2号竪穴式遺構全量(南東から)
A区3号竪穴式遺構全量(南東から)
- P L 53
A区1号埋蔵出土石器
縄文時代遺構外出土石器(第I・II群)
- P L 54
縄文時代遺構外出土石器(第III群)
縄文時代遺構外出土石器(第IV~VII群)
- P L 55
縄文時代遺構外出土石器
- P L 56
B区2号住居跡、A区1号円形両溝遺構、古墳時代遺構外、A区1・2・3・4号住居跡出土遺物
- P L 57
A区4・5・6号住居跡出土遺物
- P L 58
A区6・7号住居跡出土遺物
- P L 59
A区7・8・9・10号住居跡出土遺物
- P L 60
A区10・11号住居跡出土遺物
- P L 61
A区11・12号住居跡出土遺物
- P L 62
A区13・14・15・16号住居跡出土遺物
- P L 63
A区17・18・20・22・23・24号住居跡出土遺物
- P L 64
A区24・B区3・4号住居跡、A区218・418号ピット、A区5・6・10・11号竪立柱建物跡出土遺物
- P L 65
D区2号竪立柱建物跡、A区9・11号井戸跡出土遺物
- P L 66
A区12号井戸跡、A区20・21・B区1・2・5・14号溝、A区107・163号土坑出土遺物
- P L 67
A区163・141・179・B区18号土坑、奈良・平安時代遺構外出土遺物(1)
- P L 68
奈良・平安時代遺構外出土遺物(2)
- P L 69
A区13号竪立柱建物跡、A区1・5・B区1号井戸跡出土遺物
- P L 70
B区1・C区1号井戸跡出土遺物
- P L 71上
A区25・B区8・12・C区22・D区1・2号溝、A区25・44・118号土坑、A区254・401号ピット出土遺物
- P L 71下
中世以降遺構外出土遺物(1)
- P L 72
中世以降遺構外出土遺物(2)

第1章 発掘調査の経過と方法

1. 発掘調査の経緯

北関東自動車道（高崎～伊勢崎）地域埋蔵文化財発掘調査事業は、高崎市上滝町（高崎ジャンクション）から伊勢崎市三和町（伊勢崎インターチェンジ）の間、延長14.9kmの路線内に所在する遺跡を対象とする。平成7年度の全体計画では、遺跡数は35遺跡、総面積687,429㎡（註1）であった。

事業着手に先立ち、群馬県教育委員会文化スポーツ部文化財保護課（現文化課）、群馬県土木部道路建設課高速道路対策室、原因者である日本道路公団東京第二建設局により協議が行われ、その結果、本線部分の発掘調査については財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施することに決定した。

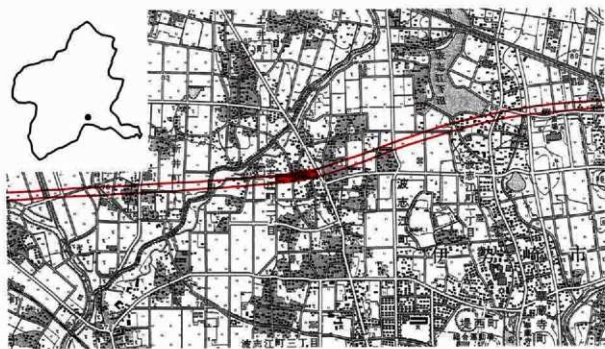
平成7年6月、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団により本格的発掘調査が高崎市上滝町において着手され、以後用地取得、工事計画に基づく道路公団と群馬県教育委員会との協議に従って進められた。事業区間内全体の進行は、高崎市所在遺跡を皮

切りに、平成8年1月に前橋市所在遺跡、平成8年3月に伊勢崎市所在遺跡と続くが、波志江西屋敷遺跡の発掘着手は平成10年4月であった。

発掘調査に先立ち、群馬県教育委員会文化スポーツ部文化財保護課（現文化課）が、平成8年7月31日から8月5日及び平成8年11月11日にかけて波志江地区の試掘調査を実施した。試掘は伊勢崎市と前橋市の境界部を流下する神沢川左岸から東へ用地買収の済んだ農地部分についてのトレンチ調査であった。本遺跡は、当時住宅地であったため試掘を行うことができなかった。しかし、住宅地内の植木の移動に伴う掘削跡から土師器を主体とする遺物が多数出土し、古代の集落の存在が予想された。

本遺跡の発掘調査は、平成10年4月10日より、集落跡が想定される遺跡の西側から開始した。

註1 後に上滝五反畑遺跡が調査対象遺跡に加えられ、36遺跡となる。



第1図 波志江西屋敷遺跡位置図

0 1 : 25,000 1 km

2. 発掘調査の方法

(1)グリッドの設定には、日本平面直角座標（国家座標）を基準に5m方眼を設定した。X軸=38,900、Y軸=-58,300を基準にし、100mピッチ杭はX軸及びY軸の座標値を全桁で表示し、他の並杭は下3桁のX軸及びY軸の座標値を表示した。グリッドの名称は、南東隅を起点にし、下3桁のX軸及びY軸の座標値で表現した。（第2図参照）

(2)本遺跡の発掘調査に当たって、調査の進捗状況を把握し、効率よく調査を進めるため、遺跡地内を東西南北に交差する市道により、便宜的に調査区を設定した。調査区の呼称は遺跡の南西端から時計回りにA区・B区・C区・D区とした。（第2図参照）なお、調査時にはB区内を通る市道により、さらにB-1区・B-2区・B-3区と細分している。また、C区も調査年度の違いから、C-1区・C-2区と分けて呼称していた。しかし、本書においては、上記のような調査区の細分は不要と考え、A区・B区・C区・D区の4つの調査区のみとすることにした。また、本書における遺構名称は、各調査区ごとに、種別ごとに通し番号を付している。（例 A区1号住居跡）

(3)表土掘削には、調査の効率を図るため掘削機械を利用した。また、遺構の確認作業及び埋土の除去については発掘作業員の手で行った。

(4)個別の遺構の調査では、埋土の土層観察用ベルトを任意に設定して、移植ゴテ等により掘り下げ、遺構断面測量（縮尺1/20）及び断面の写真撮影を行い、埋土の堆積状況を把握した。

(5)遺構平面測量は、平板を使用し、調査担当者及び発掘作業員が主にあった。必要に応じて1/10・1/20・1/40・1/100の縮尺を選択して測量した。ただし、全体図のような広範囲に及ぶ測量は、測量会社に委託した。

(6)作成された遺構平面図には、遺跡名・遺構名またはグリッド名・図種・縮尺・レベル高・ベンチマークの高さ・標高・方位・実測者名・作成年月日を

記入し、図面の一枚一枚に通し番号をつけて、調査区や遺構ごとにまとめておいた。

(7)記録写真の撮影には、基本的に6×7、35mmの白黒フィルムとリバーサルフィルムを使用した。調査区全体の写真撮影（個々の遺構でも必要に応じて）については、高所作業車を使用したり、業者に委託してラジコンヘリ等による撮影を行った。

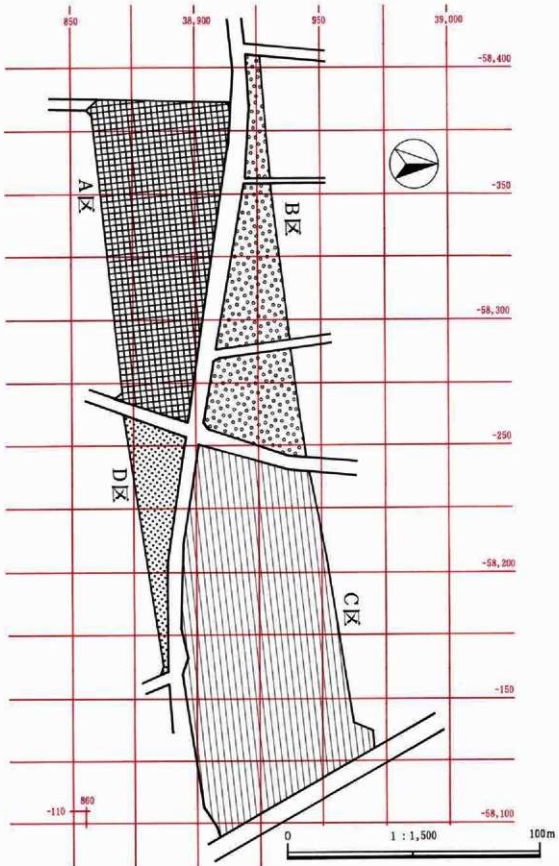
(8)撮影したフィルムは現像処理し、白黒フィルムはペタ焼きをした。ペタ焼きをしたものをネガ検索用台紙に遺構ごとに貼り付け、撮影対象・撮影方向・撮影日・フィルム番号を記入し整理した。リバーサルフィルムはコマごとに遺跡名・撮影対象・撮影方向・撮影日を記入し、遺構ごとに整理した。

(9)遺物の取り上げに際しては、遺構単位、グリッド単位を基本とした。遺構の遺物については平面図内に番号を付し、欄外にその標高値を記載した。また、遺物の注記は遺跡略号（KT-200）・調査区・遺構名またはグリッド名・遺物番号を書き込んだ。

(10)遺構確認面での調査を終えた後、調査区の埋め戻しを行う前に、トレンチを設定し、最終確認を行った。



発掘作業風景



第2図 調査区設定図

3. 発掘調査の経過

平成10年4月1日より調査の準備を始め、4月10日に調査事務所を開設し、発掘調査を開始した。同年7月に建設工事の関係で、本遺跡地内のA区西端に現市道の迂回路及び迂回路水路を建設することが予定されており、当該箇所から発掘調査を進めた。ここから、縄文時代から近世に至るまでの多くの遺構や遺物が密集するように検出された。検出された遺構の多くは重複しており、その見極めに苦労したが、6月末に、A区西端の調査を終了し、埋め戻しを行った。また、前述の迂回路及び迂回路水路の建設後に壊される現市道下を急遽、本遺跡の担当者が発掘調査をすることになり、8月上旬に調査を実施した。この現市道下の調査成果はA区の調査として取り扱うことにした。8月上旬より12月末まで本遺跡の発掘調査を中断し、隣接する波志江中野面遺跡の調査に加わるようになった。これは同遺跡地内の溝渠工事が急がれたため、該当箇所の発掘調査を2班体制で臨むことになったからである。

平成11年1月になり、新たに担当者、作業員を増員し、2班体制で本遺跡の発掘調査を再開した。A区東側・B区・C区・D区の遺構確認調査を併行して進めた。A区東側からは竪穴住居跡・掘立柱建物跡・井戸跡・溝・土坑等、B区からは竪穴住居跡・掘立柱建物跡・井戸跡・溝・土坑等、C区からは井戸跡・土坑等、D区からは掘立柱建物跡・溝等の貴重な遺構が検出された。3月末にA区・B区・C区西側・D区西側の調査を終え、平成10年度調査終了箇所を日本道路公団に引き渡した。

平成11年4月よりC区東側及びD区東側の調査を行い、溝・土坑・井戸跡等を検出した。途中、家屋の転居の関係で調査を中断した期間もあったが、6月上旬にD区の調査を終了し、12月上旬に本遺跡の全ての発掘調査を終了した。

以上、波志江西屋敷遺跡の調査期間は平成10年4月1日から平成11年12月7日まで（途中、中断した期間を考慮して）の1年1ヶ月間である。また調査

対象表面積は18,215㎡（延べ面積も同じ）に及ぶ。この間、縄文～近世に至るまでの数多くの遺構と遺物を検出することができた。

以下の調査日誌抄録は、調査の経過がわかるものや主な遺構の調査を抜粋して掲載する。

調査日誌抄録

平成10年度調査

- 1998年4. 10 発掘調査事務所開設。A区西側の表土掘削始まる。遺構確認作業開始。
4. 20 A区1号・2号井戸跡調査開始。
5. 28 A区西側を高所作業車により全景写真撮影。
6. 25 A区1号・2号住居跡調査終了。A区西側の発掘調査をほぼ終え、建設工事に際する箇所を埋め戻す。
6. 26 A区5号住居跡調査。A区167～109号土坑調査。
7. 7 A区1号埋戻調査。
7. 29 A区16号・17号溝調査。
8. 3 A区現市道下調査開始。
8. 11 A区現市道下調査終了。
8. 1～12, 31まで本遺跡の発掘調査を中断し、隣接する波志江中野面遺跡の調査に加わる。

1999年1. 5 波志江西屋敷遺跡の調査再開。B区・C区・D区の表土掘削始まる。

1. 12 A区8号・9号住居跡調査。
1. 13 C区1号井戸跡、1号土坑調査。
1. 20 A区10号・11号・12号住居跡調査。
1. 22 D区1～3号土坑、1号・2号溝調査。
1. 26 C区的全景写真撮影。
2. 3 B区2号住居跡、2～7号土坑調査。
2. 10 B区3号・4号住居跡調査。
2. 16 B区2号掘立柱建物跡調査。
2. 17 高所作業車により、B区的全景撮影。
2. 23 A区14号・15号住居跡調査。B区15号土坑調査。
3. 2 A区24号住居跡調査、緑釉陶器出土。A区21号住居跡、11号掘立柱建物跡調査。
3. 5 A区12号掘立柱建物跡、22～25号溝、21号・22号・24号住居跡、1号円形溝調査。
3. 6 A区23号住居跡、12号掘立柱建物跡調査。
3. 9 D区1～3号掘立柱建物跡調査。
3. 11 ラジコンヘリにより、B区西端、A区全景撮影。
3. 24 A区・B区・C区西側、D区西側の発掘調査を終了し、日本道路公団へ引き渡す。

平成11年度調査

- 1999年4. 2 C区東側、D区東側の調査始まる。
4. 5 C区8～11号土坑、1号溝調査。
4. 15 C区23号土坑、1号井戸跡、7号・11号・12号溝調査。
6. 10 D区東側調査終了。
6. 21 C区13号・14号・16号・17号溝調査。
7. 8 C区24号土坑、21号溝調査。
7. 29 C区26号土坑、22号・23号溝調査。
11. 22 C区27号土坑、31号溝調査。
12. 2 C区30号・32号溝調査。
12. 7 C区調査終了。波志江西屋敷遺跡発掘調査終了。

4. 基本土層

本遺跡地の基本土層は、下記の通りである。また、第3図に示した基本土層の模式図は、本遺跡のA区の堆積状況をもとに作成したものである。しかし、遺跡の中央部（A・B区の東端、C・D区の西端）は低地部になっており、低地部を挟んで遺跡の東西に広がる微高地部と土層の堆積状況が若干異なる点も見られる。

本遺跡の土層の全体的な傾向は、表土の堆積が浅く、10~20cmほど表土を取り除くと奈良・平安時代や近世の遺構が検出された。遺構の埋土は褐色土・黒褐色土または暗褐色土がほとんどである。これらの土には白色の軽石粒が混入している。しかし、本遺跡では、時期把握の際の鏡層ともなるAs-B軽石層やAs-C軽石層の純層は確認されていない。古墳時代や奈良・平安時代の土層である黒色土や黒褐色土（場所によっては暗褐色土）を観察すると、軽石粒の大きさや混入の具合に違いが見られる。

I層 褐色土	表土。軟質。砂粒多い。草の根が多い。大きな石なども見られる。
II層 褐色土	所々黒褐色土が混じる。軟質。中近世の土層である。多くの土坑と溝がこの土を埋没土としており。この時期の土坑は長方形のものが多い。
III層 黒褐色土	奈良・平安時代の竪穴住居跡の埋土である。1mm程度の灰白色軽石粒が混入している。A区の中央部では、暗褐色土になっている。やや硬質。
IV層 黒色土	古墳時代の遺構の埋没土である。As-C軽石と思われる2~3mmの白色軽石粒を多く含む。A区1号円形両溝遺構の周囲の埋没土である。やや粘性がある。
V層 黒褐色土	縄文時代の遺構の埋土である。黄褐色の砂粒を多く含む。この時代の遺構としては縄文時代後期のA区1号埋土だけである。
VI層 黄褐色土	竪穴住居跡の多くがこの土層まで掘り込んでいる。やや砂質で、調査区によっては褐色土に近いところもある。
VII層 灰白色土	粘質。鉄分と思われる褐色のブロックを全体的に含む。ところによっては白色シルトと標記した。井戸跡の崩落した土に見られる。
VIII層 暗灰黄色土	砂質土である。5~10mmの礫を含むところもある。

VIII層以下は、砂質と粘質の土層が交互にでてくる様相を示す。これは、この遺跡が「伊勢崎台地」と呼ばれる砂質土が堆積した地形に所在するためと思われる。この「伊勢崎台地」の形成時期に要因するとおもわれるが、本遺跡内には上部ロームの良好な堆積はみられなかった。なお、本遺跡周辺の地形についての詳細は「第2章 地理的環境及び歴史的環境 1. 地理的環境」を参照のこと。

I層 褐色土
II層 褐色土
III層 黒褐色土または暗褐色土
IV層 黒色土
V層 黒褐色土
VI層 黄褐色土
VII層 灰白色土
VIII層 暗灰黄色土

第3図 基本土層模式図

第2章 遺跡の地理的環境及び歴史的環境

1. 地理的環境

本遺跡の所在する伊勢崎市は、群馬県の南部に位置する、現在人口約13万人の都市である。北は前橋市・佐波郡赤堀町、東は同郡東村・境町と、南は利根川を境に埼玉県本庄市、西は佐波郡玉村町とそれぞれ接している。主な交通網としては、市の北部を北関東自動車道(高崎～伊勢崎間)が東西方向に通り、北東端を国道17号(上武バイパス)がかすめ、南部を国道354号が東西方向に通る。鉄道はJR両毛線、東武伊勢崎線が通っている。

同市は関東平野の北西端にあたり、市域の大部分は平坦な地形となっている。市域南西境を利根川が、東部を粕川が、中央部を広瀬川が、その西側を菰川がそれぞれ南東に流れる。また、同市を構成する地形の形成に影響をもつ赤城山の南面に位置する。地形の形成時期及び要因から同市は次の5つに分けることができる。(第4図参照のこと)

市域の北部及び東部に、赤城山斜面台地がある。この台地は、今からおよそ30万年前後に形成され、伊勢崎市を構成する地形の中では、最も古いものである。また、ここは古い時代の赤城山の裾野を形成していた部分であり、その形成の要因は赤城山の噴火によるものである。この台地を形成する地層は凝灰質粘土層からできている。市内の豊城町にある八寸権現山や華蔵寺公園の小丘に代表される泥流丘(流れ山)もこの台地周辺に数多く見られる。これらの泥流丘は赤城山がその活動末期に起こした水蒸気爆発により、山頂東南部が破壊され、泥流となって、流下した際に形成されたものである。八寸権現山の斜面から、旧石器時代の人々の生活の痕跡が確認された。また、華蔵寺裏山古墳は泥流丘を利用して構築されたものである。

市域の東部は、大間々扇状地と呼ばれる扇状地が広がる。この扇状地の縁の上には関東ローム層が、

粘土化した状態で覆っている。比較的水利に恵まれ、市の北東部の三和町付近には男井戸、掛矢清水、鯉沼、佐波郡東村との境にはあまが池等の湧水池が分布し、これら湧水池の南方には浅く細長い谷底平野(浸食谷)の発達が見られる。現在これらの谷底平野は水田となっているが、古代においても水田耕作に適した土地であったと考えられる。湧水池付近や浸食谷の縁辺部は多くの集落遺跡が途切れることなく分布しており、伊勢崎市の中でも集落遺跡の集中する地域となっている。

広瀬川低地帯と利根川との間に広がる台地を前橋台地と呼ぶ。この台地は浅間火山起源とされる泥流堆積物が、前橋市付近を中心に利根川に沿って堆積し形成された台地の末端にあたる。始良カルデラの火山灰が降った直後に形成されたと見られることから、その形成時期はおおよそ21,000年前から17,000年くらい前と考えられている。

市域の北西部から中央部にかけての赤城山斜面台地を除いた地域に、伊勢崎台地が広がる。この台地は赤城山の斜面から大量の伊勢崎砂層と呼ばれる砂質物質が短期間に堆積して形成されたものである。この台地の土層にローム層が堆積していないことから、洪積世の末期頃から沖積世初頭に堆積した極めて新しい地形と考えられている。この台地が広がる地域は伊勢崎市の北部及び東部と同様に遺跡が多いところである。広瀬川低地帯を臨む神沢川や荒砥川の西縁部には縄文時代や弥生時代の遺跡が見られる。また、この台地内に点在する微高地の縁辺に古墳時代や奈良・平安時代の集落遺跡が見られる。

市域の西部の広瀬川と前橋台地や利根川に挟まれた地域は、かつて利根川が流れていた地域であり、旧河道地形が網目状をなして残存し、また、旧中州と考えられる微高地が点在し、複雑な地形となっている

る。5つの地形の中では比較的新しい沖積平野で、広瀬川低地帯と呼ぶ。伊勢崎市の中では最も広大で低平な地形である。旧河道に囲まれた微高地上には、いくつかの集落遺跡が存在することが認められているが、市内北部地域に見られるような遺跡の濃密な分布状況は認められない。利根川の流路であったというこの地域の地形的特質から、人々が安定した生活を維持することが難しかったと考えられる。以上が伊勢崎市の地形区分についての概略である。

最後に、本遺跡の立地について記述する。本遺跡は伊勢崎市域からみてその北部に位置する。標高は81m前後である。前述した5つの地形区分では伊勢崎台地上に所在する。本遺跡はその中央部に低地が入りこむが、全体的には台地上にある。本遺跡の西

側に位置するA・B区は台地の縁辺にあたり、縄文時代～中近世までの遺構や遺物が数多く検出された。特にA区からは奈良・平安時代の竪穴住居跡が23軒、ほぼ同時期の竪柱建物跡が9棟検出されている。本遺跡の中央の低地部からは奈良・平安時代の溝が検出された。本遺跡の東側に位置するC・D区は台地部にあたり、本遺跡の中でも標高の高い地域になっている。これらの調査区からは、奈良・平安時代の遺構の検出は少なく、中近世の溝・井戸跡・土坑が検出されている。

参考文献

- 【伊勢崎市史】自然編 伊勢崎市 1967
 【伊勢崎市史】通史編1 原始古代中世 伊勢崎市 1987



第4図 伊勢崎の地形分布図（『伊勢崎市史』自然編）

2. 歴史的環境

本遺跡が所在する赤城山南麓地域周辺の主な遺跡を各時代ごとにまとめてみた。その概要は次の通りである。

旧石器時代 赤城山南麓地域は、台地や扇状地形でローム層の堆積がよいためか、旧石器時代の遺跡も多く見られる。特に、昭和49年から始まった上武国道の発掘調査では掘下八幡遺跡(17)、飯土井二本松遺跡(22)、飯土井中央遺跡(23)、二之宮千足遺跡(27)など10ヶ所程の遺跡から旧石器時代の遺物や石器製作跡と思われるユニット等が検出されている。また、下触牛伏遺跡(20)では第2文化層から出土した旧石器が直径50mの範囲に環状に分布する様子が検出された。これらは「環状ブロック」あるいは「環状ユニット」と呼ばれ、旧石器時代のムラの姿を想起する事が出来る貴重な遺跡として知られている。北関東自動車道関連の発掘調査においても、波志江西宿遺跡(38)で旧石器時代の遺物が多数検出されている。

縄文時代 縄文時代草創期の遺跡としては、草創期後半の稲荷台式期の集落が検出された今井三郎堂遺跡(13)、今井見切塚遺跡(14)がある。この時期の住居跡が数多く見つかった例は県内では初めてのことである。また、ハの字状の爪形文を縦位に施文する土器が出土した下触牛伏遺跡(20)がある。早期の遺跡としては、押型文と捺系文系土器、スタンプ形石器が多数出土した波志江中屋敷遺跡(36)がある。この遺跡では、同時期の竪穴住居跡が2軒検出されている。また、糸痕文系の尖底器形の深鉢が出土した飯土井二本松遺跡(22)がある。前期の遺跡としては、踏張りb式期の遺構や遺物が見つかった荒砥上ノ坊遺跡(6)、波志江天神山遺跡(18)、荒砥二之堰遺跡(21)などがある。これらの遺跡からは、踏張りb式を主体とした土器がまとまって出土しており、沖積地や湧水池を囲む台地上に営まれた小規模な縄文時代前期の集落の姿が明らかにされている。中期の遺跡としては、二本松遺跡(10)、荒砥二之堰遺跡(21)、波志

江中野面遺跡(32)、荒砥前原遺跡(46)などがある。荒砥前原遺跡(46)では、中期後半の加曾利E3式期の新しい時期を中心に加曾利E4式期に竪穴住居跡の形が円形から楕円形の敷石住居へと大きく変化する様相が確認された。後期の遺跡としては、称名寺I式期から堀之内式期の楕円形敷石住居跡が7軒検出された荒砥二之堰遺跡(21)がある。晩期の遺跡としては、安行・大洞式土器が遺物包含層から出土した八坂遺跡(45)がある。

弥生時代 この地域では弥生時代の遺跡の検出数が少なく、大集落を営んだ形跡もあまり認められない。荒砥川周辺地域の中期後半の竪穴住居跡が検出された遺跡としては、鶴谷遺跡群(5)、荒砥島原遺跡(29)などがある。また、中期後半から後期にかけての竪穴住居跡が検出された荒砥前原遺跡(46)などがある。伊勢崎台地上では中期後半の竪穴住居跡が検出された中相遺跡(42)、中期後半、後期ともに竪穴住居跡が検出された西太田遺跡(44)などがある。西太田遺跡(44)では4軒の竪穴住居跡が検出されている。3軒は中期後半のものである。そのうちの1軒からは完形の太型短刃石斧2点と偏平片刃石斧1点がセットで出土している。また、後期の住居跡からは茨城県の十王台式土器の系譜をひくとみられる甕の出土があり、当時の人々の暮らしぶりや他地域との交流が窺える。

古墳時代 古墳時代の遺跡は、赤城南麓の扇状地形を浸食する小河川や湧水を谷頭とする沖積平野の縁辺などに数多く見られる。前期の主な集落遺跡としては、荒砥上ノ坊遺跡(6)、荒砥上久久保遺跡(12)、荒砥二之堰遺跡(21)、荒砥島原遺跡(29)、波志江中野面遺跡(32)、波志江西宿遺跡(38)などがある。荒砥上ノ坊遺跡(6)では出土土器の中に外來系の土器が多数含まれており、古墳時代初頭の土器の様相を示している。波志江中野面遺跡(32)ではパレス式土器やS字状口縁台付甕に象徴される東海系の土器が出土した住居跡群と、前方後方形周溝墓を伴う方形

周溝墓群が見つかっており、小地域をまとめる首長の存在を想起させる。前方後方形周溝墓が検出された遺跡としては堤東遺跡(3)等もある。波志江中宿遺跡(39)では、木器と共に多数の粘土採掘坑が検出された。中期の主な集落遺跡としては、二本松遺跡(10)、柳久保遺跡(4)、荒砥天宮遺跡(28)、中組遺跡(42)などがある。柳久保遺跡(4)では1辺9mを超える大型の住居跡が検出されている。また、この時期に築造された主な古墳としては、埋葬施設として長持型石棺の可能性が高い、全長125mの前方後円墳であるお富士山古墳(43)、家形埴輪が出土した赤堀茶臼山古墳、今井神社古墳などがある。荒砥荒子遺跡(7)では古墳時代中期の居館跡が検出されており、注目を集めた。後期の主な集落遺跡としては下舩下寺遺跡(11)、中畑遺跡(15)、岡屋敷遺跡(34)、上西根遺跡(40)、八幡町遺跡(41)、西太田遺跡(44)などがある。中畑遺跡(15)では後期の竪穴住居19軒のうち3軒は張り出しを備えた大型の住居跡であり、古墳時代末期の社会構造を知る上で重要である。また、八幡町遺跡(41)の住居跡からは、石製模造品が多く検出されている。この時期に築造された主な古墳としては前二子、中二子、後二子等の国指定史跡の前方後円墳がままとって存在する大室古墳群(2)、祝堂古墳(19)などがある。また、今井三騎堂遺跡(13)の12号墳の前庭部から唐三彩陶枕の破片が出土している。古墳時代の水田跡が検出された遺跡としては、二之宮千足遺跡(27)、下増田越渡遺跡(30)、波志江中屋敷西遺跡(35)、波志江中屋敷東遺跡(36)、波志江中屋敷東遺跡(37)などがある。二之宮千足遺跡(27)はAs-C下水田を始め、5面の古墳時代の水田跡が検出されている。古墳時代後期から平安時代にかけて、溜井灌漑が導入され、赤城山南麓地域でも耕地拡大の様相が見られる。波志江中屋敷東遺跡(37)ではAs-C混水田跡の畦畔から建築部材等に使用された木材が大量に出土している。

奈良・平安時代 奈良・平安時代の遺跡は沖積平野の縁辺から台地に見られるようになり、赤城山南麓地域の開発が進む。また、その集落規模も大きくな

る。さらに、製鉄・鍛冶関連遺構などの生業に関する遺構の検出も増える。この時代の主な集落遺跡としては波志江西屋敷遺跡(1)、堤東遺跡(3)、柳久保遺跡(4)、鶴谷遺跡群(5)、荒砥上ノ坊遺跡(6)、荒砥大日塚遺跡(9)、二本松遺跡(10)、荒砥上川久保遺跡(12)、飯土井二本松遺跡(22)、二之宮宮下東遺跡(25)、二之宮千足遺跡(27)、荒砥天宮遺跡(28)、下増田越渡遺跡(30)、波志江中野面遺跡(32)、中組遺跡(42)、西太田遺跡(44)などがある。As-B下水田跡が検出された遺跡としては、二之宮千足遺跡(27)、荒砥天宮遺跡(28)、荒砥島原遺跡(29)、下増田越渡遺跡(30)、萩原遺跡(31)などがある。二之宮宮下東遺跡(25)では、水田跡から牛の足跡が確認されている。製鉄・鍛冶関連遺構が検出された遺跡としては、荒砥上川久保遺跡(12)、今井三騎堂遺跡(13)今井見切塚遺跡(14)、二之宮宮東遺跡(24)、二之宮千足遺跡(27)などがある。今井三騎堂遺跡(13)、今井見切塚遺跡(14)では斜面から送風管や竈座など施設を備えた製鉄炉や炭窯が検出され、当時の製鉄の様相を示している。西太田遺跡(44)では砂鉄や粘土の集積遺構が検出された。

中近世 中世初期の水田堰遺構として、国指定史跡の女堀(8)がある。女堀は前橋市上泉町付近から佐波郡東村西国定の終点まで13km、幅15mから30m、深さ3mから4mの長大な水田堰遺構である。発掘調査により、当時のずさんな工事の様子や通水されなかった事実が明らかにされた。屋敷跡や館跡の見つかった遺跡としては五目牛南組遺跡(16)、二之宮宮東遺跡(24)、二之宮宮下東遺跡(25)、二之宮宮下西遺跡(26)、岡屋敷遺跡(34)、波志江中屋敷西遺跡(35)、波志江中屋敷東遺跡(36)などがある。五目牛南組遺跡(16)では、嘉永年間創建の赤城形民家の跡が検出された。岡屋敷遺跡(34)では、二重の堀と外堀の内側に土塁をもつ近世の環濠屋敷の北側部分を検出した。城跡としては、赤石城址(33)がある。この城は『伊勢崎風土記』によると、赤石左衛門尉によって築造され、その後大永元(1521)年に赤石氏は伊勢崎に本拠を移したという。



第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	遺跡の概要
1	波志江西屋敷遺跡 (本遺跡)	伊勢崎市波志江町	縄文時代後期の埋蔵1。古墳時代後期の竪穴住居跡1。奈良・平安時代の竪穴住居跡25、獨立柱建物跡12。中近世の竪立柱建物跡、井戸跡、溝、土坑等。
2	大室古墳群	前橋市西大室町 東大室町	国指定史跡の前方後円墳がまとまって存在する。3基の大室前方後円墳と2基の小型前方後円墳が並立する。いずれも6世紀後半から後半の間に築造された古墳である。前二子古墳(墳丘長94m)、中二子古墳(墳丘長111m)、後二子古墳(墳丘長85m)。
3	堤東遺跡	前橋市荒子町	周溝墓3(2号周溝墓は前方後方形)、竪穴住居跡12(平安時代の住居跡が中心)、小竈遺構1、竪穴状遺構1。
4	柳久保遺跡群	前橋市荒子町	旧石器時代の遺物(黒色安山岩製のナイフ形石器)。縄文時代の遺物(押型文、捺赤文、無文土器、スタンプ形石器等)。古墳時代の竪穴住居跡30(前期10・中期15・後期5)奈良時代の竪穴住居跡23、獨立柱建物跡25。
5	關谷遺跡群	前橋市荒口町、荒子町、二之宮町	弥生時代の竪穴住居跡2。古墳時代前期～後期の竪穴住居跡104(後期が多い)。奈良・平安時代の竪穴住居跡62。中世古墓20、黒石群。女塚遺構の一部を抽出。古墳時代の焼失住居から炭化米を検出。
6	寛砥上ノ坊遺跡	前橋市二之宮町 寛子町	縄文時代前期の竪穴住居跡3。古墳時代の竪穴住居跡60(前期31、中・後期29)、周溝墓6、土坑4。奈良時代の竪穴住居跡55、土坑15、溝1、鉄生産関連遺物。平安時代の竪穴住居跡120、獨立柱建物跡、馬具。中近世の竪立柱建物跡、井戸跡、溝、土坑、火葬墓。
7	寛砥瓦子遺跡	前橋市寛子町	古墳時代中期の堀と柵列を伴う居居。古墳時代中期の竪穴住居跡4、竪穴状遺構2、井戸跡1、土坑2、溝2。古墳時代後期の竪穴住居跡10。奈良時代の竪穴住居跡3。平安時代の竪穴住居跡3、溝14、土坑22、井戸跡2。
8	女塚	前橋市上泉町から 佐波郡東村西園定	前橋市上泉町から前橋市東部の荒口町、二之宮町、佐波郡赤堀町を経て佐波郡東村西園定に及ぶ全長13km、幅15～30m・深さ3～4mの長大な中世初期の用水路。1983年に国指定史跡となる。
9	寛砥大日塚遺跡	前橋市二之宮町 荒口町	古墳時代の竪穴住居跡11(前期2・後期9)。奈良時代の竪穴住居跡14。平安時代の竪穴住居跡3。A・B下水田跡。竪穴状遺構、溝、井戸跡、土坑。
10	二本松遺跡	前橋市飯土井町	縄文時代中期の竪穴住居跡2(加曾利E式期)。古墳時代中期の竪穴住居跡6。奈良・平安時代の竪穴住居跡94、獨立柱建物跡3。国指定史跡(女塚)220m分調査。
11	下船下寺遺跡	佐波郡赤堀町下船	縄文時代前期～後期の遺物を含む。古墳時代後期の竪穴住居跡26。奈良・平安時代の竪穴住居跡21・獨立柱建物跡3。古墳と想定される周溝遺構5を抽出。近世井戸跡5、大溝1。古墳時代前期の方形周溝墓6、古墳時代前期～平安時代の竪穴住居跡106、井戸跡4。粟落は平安時代が主で小竈遺構もある。奈良時代の堀、平安時代の方形陶甕、陶付籠等出土。
12	京砥上川久保遺跡	前橋市大室町	旧石器時代の3つの文化層より約6,500点の石器を抽出。縄文時代の竪穴住居跡62(草創期、前期)、貯蔵穴、胎穴、黒石。古墳時代の墳墓14、12号墳の崩壊部から唐三彩陶胎の破片が出土。奈良・平安時代の竪穴住居跡17、炭塚2、製鉄関連遺構3、火葬墓18。
13	今井三輪堂遺跡	前橋市東大室町 佐波郡赤堀町今井	旧石器時代の3つの文化層より約5,000点の石器を抽出。縄文時代の竪穴住居跡34(草創期、前期)、貯蔵穴、胎穴。古墳時代の墳墓14。奈良・平安時代の竪穴住居跡9、炭塚0、製鉄関連遺構6、火葬墓5。中近世の竪穴建物、溝、溝、溝。
14	今井見切塚遺跡	前橋市東大室町 佐波郡赤堀町今井	縄文時代前期、後期の包含層。古墳時代中・後期の竪穴住居跡35、獨立柱建物跡1、柱穴多数出土。
15	中畑遺跡	佐波郡赤堀町	縄文時代前期(花楸下層式)の竪穴住居跡1、土坑37、埋蔵2。弥生時代後期の再葬墓1。古墳時代の円墳5、竪穴式小石塚1。古代の木炭釜、鉄斧、鉾型も出土。近世、近代の屋敷の遺構群。
16	五日牛南組遺跡	佐波郡赤堀町五日 牛	旧石器時代の石器集中地点20。縄文時代前期の竪穴住居跡1、土坑4。遺物包含層より早期～後期の土器。奈良・平安時代の竪穴住居跡9、獨立柱建物跡1、墨書土器多い。
17	堀下八幡遺跡	佐波郡赤堀町堀下	縄文時代前期後半の土器がまとまって出土した包含層、胎穴5、土坑1。近世以降の竪立柱建物跡1、土坑32、井戸跡1。近代のサタ遺構。
18	波志江天神山遺跡	伊勢崎市波志江町	墳丘の直径は30mの平地に築かれた円墳、2重の周溝、基石を持つ。主体部は角四石安山岩使用の隅穴式四輪室石室。築造の時期は7世紀末と考えられる。
19	祝堂古墳	伊勢崎市波志江町	旧石器時代の文化層を2層検出し、約3,000点の遺物を出土。縄文時代草創期の爪形文土器。前期の竪穴住居跡2、胎穴25、土坑18、黒石3。古墳時代後期の竪穴住居跡13、7世紀の古墳10(円墳、方墳、横穴式石室)。平安時代の竪穴住居跡1。
20	下船牛伏遺跡	佐波郡赤堀町下船	縄文時代後期の石器群。縄文時代早期～中期の遺物を含む。古墳時代前期の竪穴住居跡1、奈良・平安時代の竪穴住居跡24。中近世の溝、土坑。
21	寛砥二之塚遺跡	前橋市飯土井町	旧石器時代の石器集中地点5。縄文時代草創期の爪形文・押型文土器、胎穴3。古墳時代後期の焼失住居跡1。平安時代の竪穴住居跡1。
22	飯土井二本松遺跡	前橋市飯土井町	平安時代の竪穴住居跡23、水田跡、水路、小竈遺構。中世の船跡、近世の屋敷跡、井戸跡、近世信仰遺物。
23	飯土井中央遺跡	前橋市飯土井町	
24	二之宮宮東遺跡	前橋市二之宮町	

第2章 遺跡の地理的環境及び歴史的環境

番号	遺跡名	所在地	遺跡の概要
25	二之宮宮下東遺跡	前橋市二之宮町	縄文時代の陥穴1。古墳時代後期～奈良・平安時代の集落、As-B下水田跡、溝、藩井。中世の竈跡、堀、竪穴状遺構、井戸跡、土坑。埋文文字の「天」を記した墨書土器出土。
26	二之宮宮下西遺跡	前橋市二之宮町	旧石器時代の土坑。縄文時代の陥穴。古墳時代後期～平安時代の竪穴住居跡65、水田跡。中近世の竈跡、堀、土橋状の掘り残し、墓塚、井戸跡、溝、土坑、ピット。
27	二之宮千足遺跡	前橋市二之宮町	旧石器時代の文化層2。縄文時代の埋文1、陥穴3、葉石遺構7。古墳時代の5面の水田跡、水路、藩井、木組遺構。奈良・平安時代の竪穴住居跡27、小竈遺構1、水田跡。中近世以降の井戸跡、土坑墓、藩井。
28	瓦葺天之宮遺跡	前橋市二之宮町	古墳時代中期～平安時代の竪穴住居跡206、B区6号住居跡から畿内産の埴文土器出土。古代の藩井4、As-B下水田跡。
29	瓦葺島原遺跡	前橋市二之宮町	弥生時代中期の竪穴住居跡2。古墳時代前期の竪穴住居跡8、方形周溝墓6。古墳時代中期～平安時代の竪穴住居跡56、As-B下水田跡、竪立柱建物跡1、土坑13、溝状遺構13。
30	下増田越後遺跡	前橋市上増田町、下増田町、二之宮町	古墳時代前期の方形周溝墓3、水田跡、溝。奈良・平安時代の竪穴住居跡52、As-B下及び洪水層下の水田跡、溝。中近世の井戸跡、溝。
31	萩原遺跡	前橋市二之宮町 新井町	縄文時代の石跡、凹石。古墳時代～平安時代の竪穴住居跡56、竪立柱建物跡2、As-B下水田跡、溝15。近世の井戸跡4。近世以降の土坑、墓坑多数。
32	波志江中野園遺跡	伊勢崎市波志江町	縄文時代中期の竪穴住居跡10、土坑8、埋文11。古墳時代前期の竪穴住居跡28、竪立柱建物跡2、方形周溝墓19、バラススタイルの竪出土。奈良・平安時代の竪穴住居跡2、竪立柱建物跡6、As-B下水田跡、溝。中近世土坑墓、井戸跡、溝、土坑。
33	赤石城址	前橋市飯土井町	「群馬県古城址の研究」によると、本丸は高さ4mの土塁を巡らし、南と北に虎口を開き、西側は谷地形で北辺、東辺、南辺の3方に塹があったという。調査は本丸に並列する南側の外側部分で、深さ約2m、上端幅約5mのV字状の堀、堀に平行して柱列を検出。
34	両国敷遺跡	伊勢崎市波志江町	古墳時代後期の竪穴住居跡11、土坑群、溝2、小竈遺構。奈良・平安時代の竪穴住居跡15。近世の竈屋敷跡(二重の堀、土器あり)、竪立柱建物跡1、井戸跡24、土坑6、墓16、竪穴状遺構4。近現代の土坑多数。
35	波志江中屋敷西遺跡	伊勢崎市波志江町	縄文時代～弥生時代のピット多数、土坑。古墳時代の水田跡、溝3。奈良・平安時代の竪穴住居跡5、溝45、墓跡。中近世の竈跡、堀、竪立柱建物跡、ピット、土坑、土坑墓、井戸跡。
36	波志江中屋敷東遺跡	伊勢崎市波志江町	縄文時代早期の竪穴住居跡2。古墳時代の水田跡。平安時代の竪穴住居跡2、井戸跡1、溝9、土坑・ピット多数。中近世の竈屋敷跡、竪立柱建物跡13、井戸跡38、溝、土坑、ピット。
37	波志江中屋敷東遺跡	伊勢崎市波志江町	縄文時代前期の土坑。古墳時代前期の水田跡、溝、土坑。水田畦畔から、建築部材・農具・印かけ板・骨箸等が出土。平安時代の水田跡、溝、土坑。近世の溝、土坑。
38	波志江西沼遺跡	伊勢崎市波志江町	旧石器時代の文化層2。縄文時代早期の土器、打製石斧、石鏃。古墳時代前期の竪穴住居跡19、竪立柱建物跡2。中近世の溝、土坑、井戸跡、墓群作坑。
39	波志江中宿遺跡	伊勢崎市波志江町	旧石器時代の遺物。古墳時代前期の竪穴住居跡1、粘土採掘坑66。古墳時代の溝、As-C張水田跡。As-B下水田跡。平安時代の溝。中近世の井戸跡、土坑、ピット、溝。
40	上西橋遺跡	伊勢崎市鹿島町	古墳時代の竪穴住居跡25(前期24)、方形周溝墓5。奈良時代の竪穴住居跡1。石墓1、溝15。中近世の井戸跡3。
41	八幡町遺跡	伊勢崎市八幡町	古墳時代の竪穴住居跡71(後期58)、井戸跡、溝、土坑、ピットも検出。遺物では石製模造品が多く出土(B地区18号住居跡から勾玉形と剣形が出土)。
42	中組遺跡	伊勢崎市波志江町 安瀬町	弥生時代中期の竪穴住居跡1。古墳時代の竪穴住居跡11(前期1・中期4・後期6)方形周溝墓1。奈良時代の竪穴住居跡18。平安時代の竪穴住居跡3、竪立柱建物跡1、溝1。
43	お富士山古墳	伊勢崎市安瀬町	全長125mの前方後円墳、墳丘は3段に構築され、河原石積み葺の葺石があり、円筒埴輪列が確認されている。幅約30mの扇形の周堀をもつ。後円部面に長持形石棺がある。5世紀中葉の首長墓の可能性が高い。乳文鏡、滑石製石製模造品(刀子、埴器)、管玉など出土。
44	西太田遺跡	伊勢崎市安瀬町	弥生時代中期～平安時代におたる竪穴住居跡209(弥生時代中期住居跡3・後期1)。中期の住居から太形打石斧、扁片打石斧が出土。奈良時代の砂鉄炭積遺構、粘土集積遺構、竪立柱建物跡9、井戸跡17、溝8、ピット、土坑墓。
45	八坂遺跡	伊勢崎市波志江町	縄文時代後期中葉の配石遺構。遺物包含層から縄文中期～晩期にかけての土器片、石鏃、土器、耳飾り、獣骨などが出土している。
46	瓦葺前田遺跡	前橋市二宮町	縄文時代中期の竪穴住居跡14(加曾利B式期、竪穴住居跡2を含む)、埋文土器1、土坑7。弥生時代の竪穴住居跡5(中期2、後期3)、竪穴状遺構3。古墳時代前期竪穴住居跡18、大竈石鏃、石剣出土。築造時期不明の直径23mの円墳。

參考文獻

1. 本書
2. 『後二子古墳・小二子古墳』『前二子古墳』『中二子古墳』『小二子古墳』前橋市教育委員會 1992・1993・1995・1997
3. 『堤東遺跡』群馬県教育委員會 1985
4. 『駒久保遺跡群』I・VII 前橋市埋藏文化財調査団 1985・1988
5. 『鶴谷遺跡群』『鶴谷遺跡群』II 前橋市教育委員會 1980・1981
6. 『寬砥上ノ坊遺跡』I～IV 財団法人群馬県埋藏文化財調査事業団 1995・1996・1997・1998
7. 『寬砥荒子遺跡』財団法人群馬県埋藏文化財調査事業団 2000
8. 『女塚』財団法人群馬県埋藏文化財調査事業団 1984
9. 『寬砥六日塚遺跡』財団法人群馬県埋藏文化財調査事業団 1994
10. 『前橋市文化財調査報告書』13 前橋市教育委員會 1983
『女塚』財団法人群馬県埋藏文化財調査事業団 1985
11. 『下越下寺遺跡及び磯十二所遺跡発掘調査概報』赤堀町教育委員會 1987
12. 『寬砥上川久保遺跡』財団法人群馬県埋藏文化財調査事業団 1982
13. 『今井三郎堂遺跡』『年報』17・18・19 財団法人群馬県埋藏文化財調査事業団 1998・1999・2000
14. 『今井見切塚遺跡』『年報』17・18・19・20 財団法人群馬県埋藏文化財調査事業団 1998・1999・2000・2001
15. 『中畑遺跡 女塚用水遺構発掘調査概報』赤堀町教育委員會 1986
16. 『五日牛南畑遺跡』財団法人群馬県埋藏文化財調査事業団 1992
17. 『堀下八幡遺跡』財団法人群馬県埋藏文化財調査事業団 1990
18. 『善上本山遺跡・波志江穴尻遺跡・波志江天神山遺跡』財団法人群馬県埋藏文化財調査事業団 1992
19. 『牛伏第1号墳・祝富古墳・大沼上遺跡』伊勢崎市教育委員會 1982
20. 『下畑牛伏遺跡』財団法人群馬県埋藏文化財調査事業団 1986
21. 『寬砥二之塚遺跡』財団法人群馬県埋藏文化財調査事業団 1985
22. 『飯土二本松遺跡 下江田前遺跡』財団法人群馬県埋藏文化財調査事業団 1991
23. 『飯土井中央遺跡』財団法人群馬県埋藏文化財調査事業団 1991
24. 『二之宮宮東遺跡』財団法人群馬県埋藏文化財調査事業団 1994
25. 『二之宮宮下東遺跡』財団法人群馬県埋藏文化財調査事業団 1994
26. 『二之宮宮下西遺跡』『年報』6 財団法人群馬県埋藏文化財調査事業団 1987
27. 『二之宮千足遺跡』財団法人群馬県埋藏文化財調査事業団 1992
28. 『寬砥天之宮遺跡』財団法人群馬県埋藏文化財調査事業団 1988
29. 『寬砥島原遺跡』財団法人群馬県埋藏文化財調査事業団 1983
30. 『下増田越後遺跡』『年報』17 財団法人群馬県埋藏文化財調査事業団 1998
31. 『萩原遺跡』『年報』17・18 財団法人群馬県埋藏文化財調査事業団 1998・1999
32. 『波志江中野田遺跡』(1)(2) 財団法人群馬県埋藏文化財調査事業団 2001・2002
33. 『寬砥前原遺跡・赤石城址』財団法人群馬県埋藏文化財調査事業団 1985
34. 『岡屋敷遺跡』『年報』18・19 財団法人群馬県埋藏文化財調査事業団 1999・2000
35. 『波志江中屋敷西遺跡』『年報』17・18 財団法人群馬県埋藏文化財調査事業団 1998・1999
36. 『波志江中屋敷東遺跡』『年報』18・19 財団法人群馬県埋藏文化財調査事業団 1999・2000
37. 『波志江中屋敷東遺跡』財団法人群馬県埋藏文化財調査事業団 2002
38. 『波志江西宿遺跡』『年報』18・19 財団法人群馬県埋藏文化財調査事業団 1999・2000
39. 『波志江中宿遺跡』財団法人群馬県埋藏文化財調査事業団 2001
『波志江中宿遺跡』『年報』17・18・19 財団法人群馬県埋藏文化財調査事業団 1998・1999・2000
40. 『上西根遺跡』伊勢崎市教育委員會 1985
41. 『八幡町遺跡(B地区)』『八幡町遺跡(D地区)』伊勢崎市教育委員會 1988・1990
42. 『中組遺跡』伊勢崎市教育委員會 1982
『中組遺跡』群馬県教育委員會 1985
『中組遺跡』財団法人群馬県埋藏文化財調査事業団 2001
43. 山本良知『御富士山古墳発掘調査概報』1966
『御富士山古墳範圍確認調査報告書』伊勢崎市教育委員會 1990
44. 『西太田遺跡』伊勢崎市教育委員會 1983
45. 『八坂遺跡』『伊勢崎市史』通史編1 原始古代中世 伊勢崎市 1987
46. 33前掲書

第3章 検出された遺構と遺物

1. 縄文時代の遺構と遺物

開探する波志江中野面遺跡において、縄文時代中期から晩期にかけて、多くの遺構や遺物が検出されており、本遺跡においても同様な傾向であろうと予想された。しかし、実際に検出された遺構は後期の埋壔が1基だけであった。遺物の出土量も余り多くなく、土器が遺物収納箱で2箱、石器が2箱であった。これらの遺物は縄文時代前期後葉から後期後葉にかけての資料であり、黒褐色土を主体とする縄文時代の包含層から出土している。主に遺跡の西側の台地から出土している。

(1) 埋壔

A区1号埋壔(第6図 P L 4・53)

位置 本埋壔は遺跡の北西端に近い895・-343グリッドに位置する。近くには平安時代のA区3号住居跡、A区141号土坑がある。

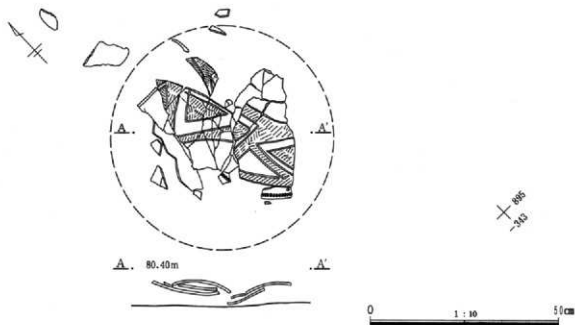
概要 後期深鉢形土器の破片が重なって出土した。調査時にはこれら土器片の周囲から土坑状の掘り込

み等が確認できなかったため、縄文土器出土状況と呼称した。整理作業においてこれらの土器片は1個体の深鉢形土器になること、破片の出土位置に高低差があることが分かった。そこで、本書においては口縁部を上にした正位の状態で埋設された埋壔と考え、A区1号埋壔として報告することにした。

遺物 本埋壔からは後期深鉢形土器が1個体のみ検出されている。その土器について説明する。

<土器>

1は、縄之内式期の大型の深鉢形土器である。底部は欠損している。口唇部は短く内折している。無文の口縁部に8字状貼付文を4単位貼付し、1列の刺突痕のある隆帯を巡らしている。8字状貼付文のうち2つは欠落しており、この貼付文をつけた際の孔が器面に残っている。残っている8字状の貼付文のうちの1つの近くで刺突痕のある隆帯の下に、横に並んだ2つの孔がある。この孔は焼成後に表裏両面から穿孔されたものであり、補修孔と思われる。

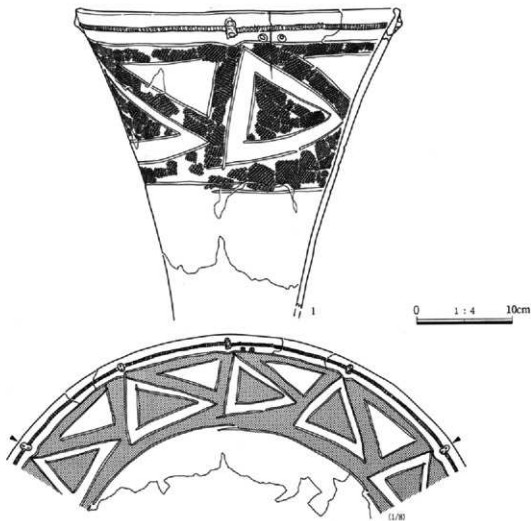


第6図 A区1号埋壔

1. 縄文時代の遺構と遺物

胴部上半に三角形をモチーフにした幾何学文が細く、はっきりした線で描かれている。幾何学文内はRL（0段多条）が縦位、斜位に充填されている。

胴部下半は、無文であり、よく研磨されている。また、口縁部から胴部下半まで厚みがほぼ同じである。



第7図 A区1号埋壺出土遺物

(2) 遺構外出土遺物

縄文時代遺構外遺物の出土量は余り多くなく、遺物収納箱で4箱ほどである。以下土器と石器に分けて説明する。

<土器> (第7～9図、PL53・54)

本遺跡から出土した土器の量は、遺物収納箱で2箱ほどであり、中期後半を主体とする土器が大量に出土した隣接する波志江中野面遺跡と比べると少ない。今回出土した土器は黒褐色土を主体とする台地中央部から検出されたものである。前期後葉から後期後葉にかけての資料であり、中期の資料が他より

も多い。これらの土器について記述するにあたり、次のように各土器群を大別し観察を行った。

- 第I群 前期後葉土器群（諸磯式土器）
- 第II群 中期中葉土器群（阿玉台式土器、勝坂式の終末期～加曾利E式古段階の土器）
- 第III群 中期後葉土器群（加曾利E式土器）
- 第IV群 後期初頭土器群（称名寺式土器）
- 第V群 後期前葉土器群（堀之内式土器）
- 第VI群 後期後葉土器群（加曾利B式土器）
- 第VII群 その他の土器
- 第VIII群 その他（土製円盤）

第I群 (第8図1・2 P L53)

本群は、前期後葉に位置付けられる土器群で、諸磯式土器である。本遺跡の調査では、この時期で検出された遺構はなく、包含層から出土した土器の量も多くない。

1は器面の磨減が進んでいる。文様は爪形刺突をもつ平行沈線で文様を描くもので、横位に2列、縦位に2列、斜位に施文されている。2は半裁竹管による平行沈線で文様を描かれる土器である。4条1組の平行沈線による文様構成になっている。集合沈線状となる数条の平行沈線により、三角状の隙間に弧状の文様を描く。

第II群 (第8図3~18 P L53)

本群は、中期中葉に位置付けられる土器群で、阿玉台式土器、勝板式の終末期から加曾利E式古段階の土器を主体とする。本遺跡の調査では、この時期で検出された遺構はなく、包含層から出土した土器の量も余り多くない。これらの土器は、1類を阿玉台式土器、2類を勝板式の終末期から加曾利E式古段階の土器として分類した。

1類 (3)

阿玉台式土器を本類とした。3は器面の磨減が進んでいる。文様は2列の角押で描かれている。また、この土器は胎土に雲母が多く含まれている。

2類 (4~18)

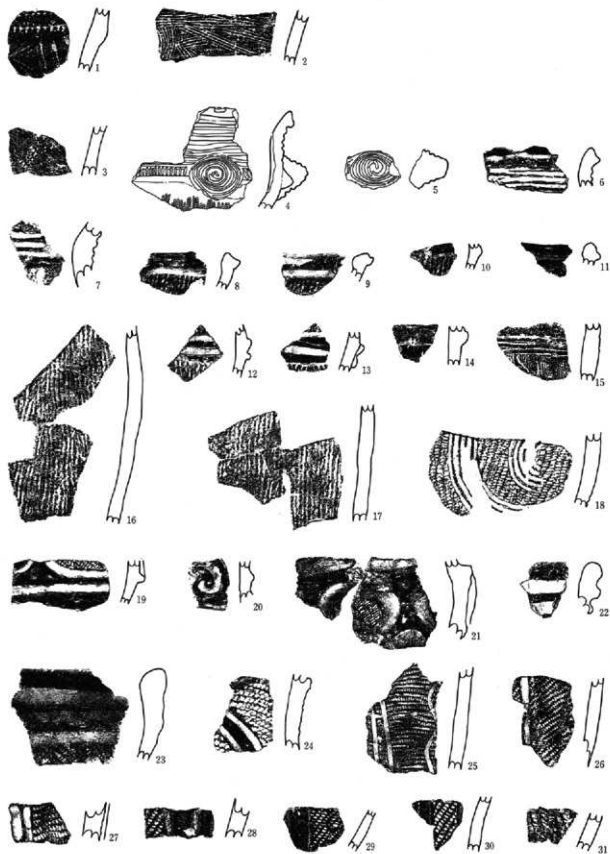
勝板式の終末期から加曾利E式古段階の土器を本類とした。4は口縁直下に幅の狭い無文部をもち、1条の鈎状突起が巡る。また、その下に横位の平行沈線文が施文されている。さらに、その下に断面三角形の上面に刻み目を施す鈎状突起が巡り、4単位のコイル状の突起を有する。胴部は摺糸文Lが縦位に施文されている。5はコイル状の突起である。5は4と同一個体と思われる。6は4と同様に口唇部に幅の狭い無文部をもち、1条の鈎状突起が巡る。その下に横位の平行沈線文が施文されている。6も4と同一個体と思われる。7は4~6に比べて、厚みのある土器片である。横位の平行沈線文が施文さ

れている。8は口縁直下より、断面三角形の隆帯が横位に貼付され、この隆帯による区画をもつと思われる。区画内は摺糸文Lが縦位に施文されている。9も8と同様に口縁直下に隆帯による区画をもつと思われる。9はこの隆帯がしたい口縁と同一になる。また、文様と思われるが曲線状の沈線が見える。区画内は摺糸文Lが縦位に施文されている。10・11も口縁直下に横位の隆帯をもち、8・9と同じような文様構成をもつと思われる。摺糸文Lが施文されている。12~18は胴部片である。12・13は中央部に沈線を刻みつけたような横位の隆帯が施文されている。隆帯の上下に摺糸文Lが縦位に施文されている。14は指頭痕のような圧痕をもつ隆帯が巡る。15は平行沈線文の下に弧状の区画をもつ。区画内及び平行沈線文の上位には細い摺糸文Lが縦位に施文されている。16・17は摺糸文Lが施文されている胴部である。18は縄文R Lを縦位、斜位に施文したのち、半裁竹管によると思われる5本1組の平行沈線文で渦巻き文を描く。

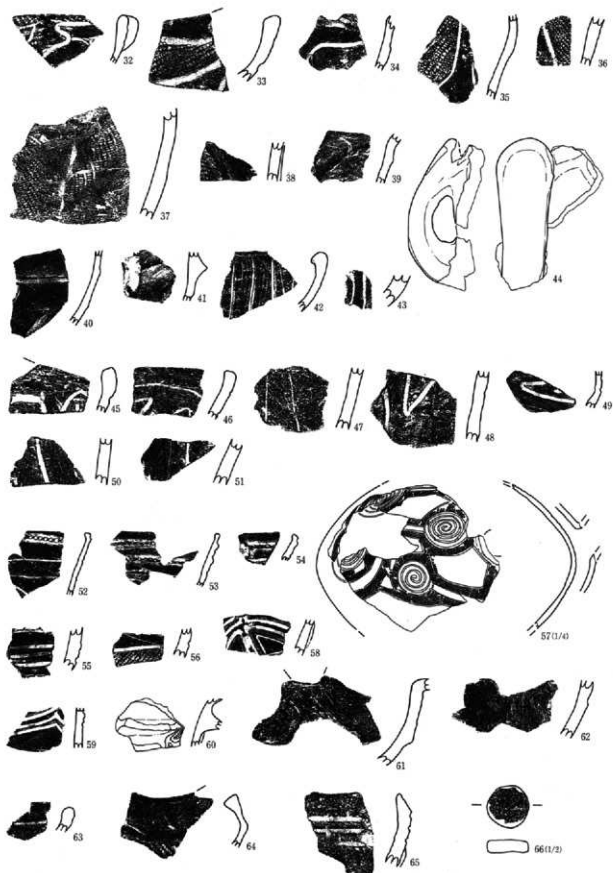
第III群 (第8・9図19~44 P L54)

本群は、中期後葉に位置付けられる土器群で、加曾利E式土器である。本遺跡の調査では、この時期で検出された遺構はない。しかし、包含層から出土した土器の量は、この群の土器が本遺跡の主体をなす。

19~31は隆帯や沈線によって区画された口縁部文様帯を有する土器をまとめた。19・20は胎土及び焼成の感じから同一個体と思われる。19は隆帯による区画をもち、口縁部文様帯を形成する。この区画内に20の渦巻き文様がつくと思われる。この区画内の縄文はR Lが横位に施文されている。また、口縁部文様帯の下は無文の部分をもつ。21は隆帯による楕円状の区画をもつ土器である。区画内の縄文はR L(0段多条)が横位に施文されている。22も隆帯による区画を有すると思われる。23は太い沈線による区画を有する深鉢形土器である。区画内の縄文はR Lが横位に施文されている。24は沈線による区画を



第8図 縄文時代遺構外出土土器(1)



第9図 縄文時代遺構外出土土器(2)

0 1:3 10cm

1. 縄文時代の遺構と遺物

口縁部にもち、胴部に2条1組の沈線によるU字状の懸垂文が垂下すると思われる。縄文はLRLが縦位、斜位に施文されている。25~61は胴部である。25は3条1組の沈線による懸垂文、蛇行沈線文が垂下すると思われる。縄文はLRが斜位に施文されている。26は1条の沈線が垂下しているが、欠け口の様子から2条1組の懸垂文が垂下すると思われる。縄文はRLが縦位に施文されている。27は断面三角形の隆帯が垂下する胴部である。縄文はRL(0段多条)が縦位、斜位に施文されている。28~30は磨消懸垂文が垂下する胴部である。28~30の縄文はRLが縦位に施文されている。31の縄文はLR(0段多条)が施文されている。32~42は口縁部文様帯が簡略化され、胴部の文様が主文様となる土器をまとめた。32は平口縁となる深鉢形土器である。口縁が前にせり出し、突起状になっている。この突起状を取り囲む様に沈線による文様が描かれている。口唇部及び突起状の部分にはRLが横位、縦位に施文されている。33は波状口縁となる深鉢形土器である。沈線による文様が波頂部に集まるような構成になっている。区画内の縄文はRLが縦位、斜位に施文されている。34は口唇部が外反する。口縁直下に横位に1条の微隆帯をもつ。また、胴部にはU字状の区画が垂下すると思われる。区画内の縄文はRLが縦位に施文されている。35は胴上半に細い沈線により区画された文様が描かれている。磨消された区画は口縁部にのびる。縄文はRLが縦位に施文されている。36も35と同じような文様構成と思われる。区画内の縄文はLRが縦位に施文されている。37は波状口縁となる深鉢形土器である。口縁部には無でたようなあまりはつきりしない沈線による弧状の線がみられる。その下に波頂部に集まるような沈線による弧状の区画が描かれる。区画内の縄文は、LRが縦位、斜位に施文されている。38・39は微隆帯による弧状の文様を描く。39は全体的に無でつけられているようで文様があまりはつきりしない。区画内は38・39ともにLRが縦位に施文されている。40は内外面ともによく磨かれている土器である。口縁直下に

1条の微隆帯が横位に施文されている。胴部上半に微隆帯による三日月状の区画を描く。区画内に縄文は施文されていない。41は口縁直下に断面三角形の隆帯が斜位に貼付されている。この隆帯は穿孔されている箇所をもつ。周囲は磨かれている。また、胴部上半に弧状の沈線が見える。42は口縁直下から斜位に条線がやや曲線状に施文されている。条線の太さの違いにより、施文具の単位がわかる。43・44は構状把手をまとめた。43は外面に2条1組の平行沈線が垂下する。平行沈線の内側は無文で、同サイドには斜位に細かい沈線が施文されている。側面、内面は磨かれている。44の外面及び側面には沈線の痕跡があるが、はつきりしない。接する胴部片には断面三角形の微隆帯による区画を有するが区画内の文様ははつきりしない。

第IV群(第9図45~51 P L54)

本群は、後期初頭に位置付けられる土器群で、称名寺式土器である。本遺跡の調査では、この時期で検出された遺構はない。

45は突起状の高まりをもつ、波状口縁となる土器である。口縁直下に沈線による区画が描かれている。また、区画された内部は刺突が施されている。46は平口縁となる土器である。口縁直下に横位の沈線が施文され、その下に沈線で描かれた区画が見える。区画内についてははつきりしない。47~51は胴部片である。47は細い沈線の区画が垂下する。区画内の縄文は摩耗して、鮮明ではないが、LRが縦位に施文されていると思われる。48は縦位の沈線と沈線による区画を有する。区画内は磨り消されたようになっている。49も沈線による区画をもち、区画内に刺突が施文されている。50・51は1条の沈線が縦位に垂下する。

第V群(第9図52~62 P L54)

本群は、後期前葉に位置付けられる土器群で、堀之内式土器である。本遺跡の調査では、この時期で検出された遺構はA区1号埋壙がある。

第3章 検出された遺構と遺物

52～54は堀之内2式にみられる深鉢形土器である。52・53の口唇部は折り返したようになっている。52は口縁直下に刺突痕のある隆帯が1条巡る。以下に幾何学文と思われる平行する沈線の区画と斜め方向の沈線が描かれている。区画内の縄文ははっきりしないがRLが横位に施文されていると思われる。53は口縁直下に刺突痕のある隆帯が2条巡る。以下に平行する沈線の区画が描かれている。区画内の文様ははっきりしない。全体的に内外面ともに丁寧に磨かれている。54は口唇部が内折する。口縁直下に刺突痕のある隆帯が1条巡る。この隆帯のところに8字状貼付文がつけられている。以下に沈線が横位に描かれている。55・56は胴部片である。55は数条の平行沈線が横位に施文されている。56は平行する沈線の区画内にRLが横位に施文されている。57～62は注口土器である。いずれも注口部分は出土していない。57は算盤珠に近い器形である。推定であるが、最大径は27.4cmを測る。胴部に反時計回りの渦巻き文とRLが縦位、横位、斜位に充填された平行沈線文、菱形のような無文部で構成された文様をもつ。全体的に非常に丁寧に磨かれている。注口の位置については返しが一部残存しており、図上で推定してみた。58～60は同一個体と思われる。断面薄針状の隆帯を沈線と細かい刺突列で挟むような単位で三角形や弧状の文様を描く。60は把手の部分となっている。61・62は同一個体と思われる。器形は算盤珠に近いものと思われる。器面は櫛歯状工具で削りつけたような部分とよく磨かれている部分、粘土を撫でつけたようなところがある。61は返しが残存しており、注口の部分と思われる。62も返しが残存している。櫛状把手の部分と思われる。

第VI群 (第9図63・64 P L54)

本群は、後期後葉に位置付けられる土器群で、加曾利B式土器である。本遺跡の調査では、この時期で検出された遺構はない。

62は口唇部が丸みをもつ、口縁直下に横位の沈線が施文されている。63は算盤珠状の器形をもつ土器

である。胴上半に縄文が施文されているがはっきりしない。LRが横位に施文されていると思われる。

第VII群 (第9図65 P L54)

本群は、後期に位置付けられる土器群で、形式ははっきりしない。

65は、口縁が内傾し、3条の平行沈線が横位に施文されている。平行沈線に縦位の短い刻みが施されている。胴部上半に弧状の隆帯をもつ。

第VIII群 (第9図66 P L54)

本群は、土製円盤を扱った。本遺跡から出土した土製円盤は66のみ1点である。66は全体的によく磨かれている。表面には墨糸文かと思われる縄文の痕跡がかすかに見える。また、側縁部に接合痕がみえる。中期の土器を利用したものと思われる。

<石器> (第10～12図 P L55)

出土した石器の量は遺物収納箱で2箱である。これらの中には未製品や剥片類も含まれており、本書に掲載した石器はその一部である。出土した石器は黒褐色土を主体とする縄文時代の包含層から出土したものである。また、古墳時代以降の遺構から出土した縄文時代の石器も本項で扱っている。石器の器種でみると、打製石斧が13点と多く、次にスクレイパーが7点と続く。

石鏃 (第10図1～3 P L55)

出土した石鏃は3点である。うち、ほぼ完形のもの1点である。有茎石鏃はなく、3点すべて無茎石鏃である。使用された石材には、チャート、黒色安山岩がある。

スクレイパー (第10図4～10 P L55)

出土したスクレイパーは7点である。使用される素材には、縦長剥片または横長剥片が用いられ、側縁部に片面あるいは両面から比較的平坦な剝離を連続的に施し、鋭利な刃部を作り出している。使用さ

れた石材には、チャート、黒色頁岩、珪質頁岩、粗粒輝石安山岩がある。

使用痕のある剥片 (第11図11~14 P L55)

使用痕のある剥片としては4点ある。使用された石材には、黒色頁岩、頁岩、粗粒輝石安山岩がある。

打製石斧 (第11図15~27 P L55)

出土した打製石斧は13点である。これらの打製石斧の形状には、短冊形・撥形・分銅形等のものがあるが、石材による形状差は認められない。二次加工されたものや、刃部に摩耗痕を明瞭に残すものが認められる。また、中央部に摩耗痕、側縁部に刃部をつぶした痕跡が見られる打製石斧もある。使用された石材には、黒色頁岩、珪質頁岩、灰色安山岩がある。

石鏃 (第11図28 P L55)

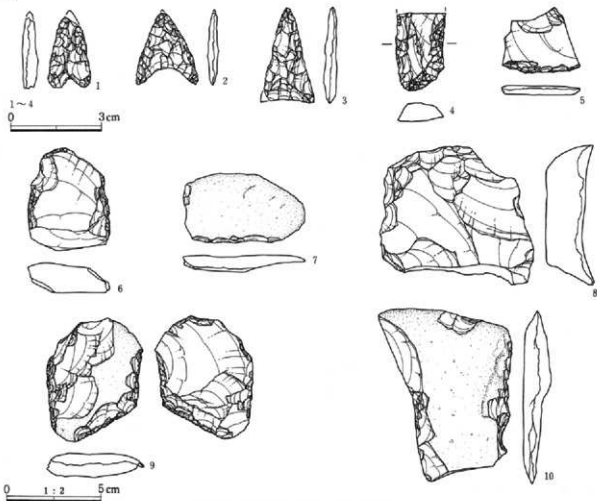
出土した石鏃は1点である。上下に抉りが入り、表面はよく磨かれている。使用された石材は粗粒輝石安山岩である。

磨石 (第11・12図29~31 P L55)

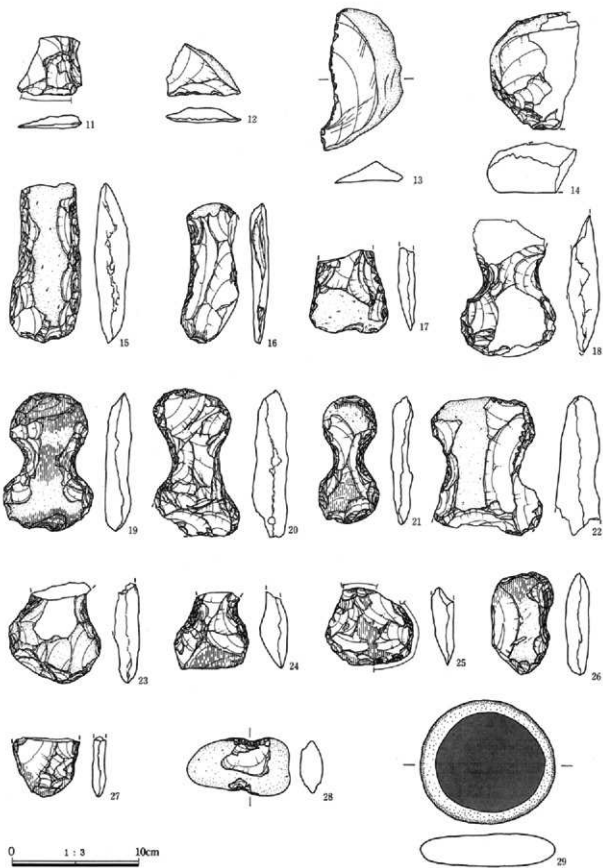
出土した磨石は3点である。いずれも断面は楕円形で、表裏面共によく磨かれている。使用された石材は粗粒輝石安山岩である。

敲石 (第12図32 P L55)

出土した敲石は1点である。縦横両断面は楕円形で、表面はよく磨かれている。下面に敲打痕が残る。使用された石材は粗粒輝石安山岩である。

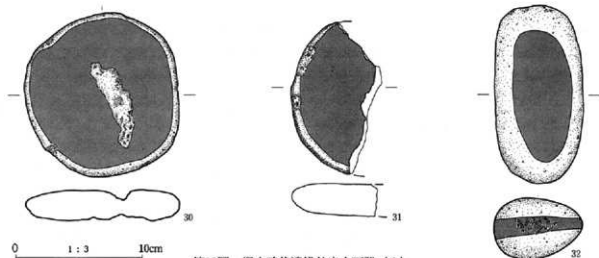


第10図 縄文時代遺構外出土石器 (1)



第11図 縄文時代遺構外出土石器（2）

2. 古墳時代の遺構と遺物



第12図 縄文時代遺構外出土石器(3)

第2表 遺構外石器計測表

No	石 材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g
1	チャート	(2.35)	1.40	0.55	(1.5)
2	黒色安山岩	2.40	2.00	0.35	1.2
3	#	3.20	1.70	0.45	1.5

スクレイパー

No	石 材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g
4	チャート	2.6	1.65	0.6	3.4
5	黒色頁岩	3.5	4.1	0.5	6.8
6	#	5.4	4.4	1.6	42.4
7	#	3.5	6.5	0.9	86.3
8	#	6.8	8.0	2.1	140.6
9	珪質頁岩	6.5	5.2	1.3	44.3
10	粗粒輝石安山岩	9.1	6.3	1.4	86.3

使用痕のある断片

No	石 材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g
11	頁岩	4.7	5.0	1.0	16.9
12	黒色頁岩	4.1	5.9	2.2	23.6
13	#	11.1	6.5	1.6	89.6
14	#	9.3	(7.0)	(4.0)	(283.2)

打製石片

No	石 材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g
15	珪質頁岩	12.7	5.6	2.7	251.4
16	黒色頁岩	11.1	4.0	1.4	74.0

No	石 材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g
17	黒色頁岩	(6.6)	6.2	1.4	(63.2)
18	#	(10.8)	7.5	2.5	(153.2)
19	#	10.8	7.2	2.0	169.5
20	#	11.7	7.0	2.8	210.9
21	#	10.1	4.8	1.7	78.9
22	灰色安山岩	(11.0)	8.7	3.5	(342.1)
23	黒色頁岩	(7.9)	7.2	2.0	(123.2)
24	珪質頁岩	(6.1)	6.5	2.2	(77.7)
25	#	(6.0)	6.8	1.7	(77.6)
26	黒色頁岩	8.1	4.3	1.9	90.7
27	珪質頁岩	(4.7)	5.3	1.1	(30.4)

石鏝

No	石 材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g
28	粗粒輝石安山岩	4.6	8.2	2.0	107.0

磨石

No	石 材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g
29	粗粒輝石安山岩	9.7	10.6	2.5	412.2
30	#	11.3	13.0	2.4	574.6
31	#	(12.0)	(6.7)	2.7	(308.5)

磨石

No	石 材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g
32	粗粒輝石安山岩	14.1	7.0	4.5	755.8

2. 古墳時代の遺構と遺物

本遺跡から検出された古墳時代の遺構と遺物は少ない。検出された遺構としては、竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟、円形周溝遺構1基のみである。遺構外遺物としては、土師器器台の脚部片、埴、甕、円筒埴輪の破片資料等がある。

(1) 竪穴住居跡

B区2号住居跡(第13・14図 P L 4・56)

位置 本住居跡はB区中央部にあり、923・-315グリッドに位置する。

重複 本住居跡はB区8号・9号・10号溝に掘り込まれている。

形状 本住居跡の形状は、東西方向を長辺とするが、ほぼ方形である。その規模は東西方向3.40m、南北方向3.22mである。床面積は9.44m²である。

方位 N-90°-E

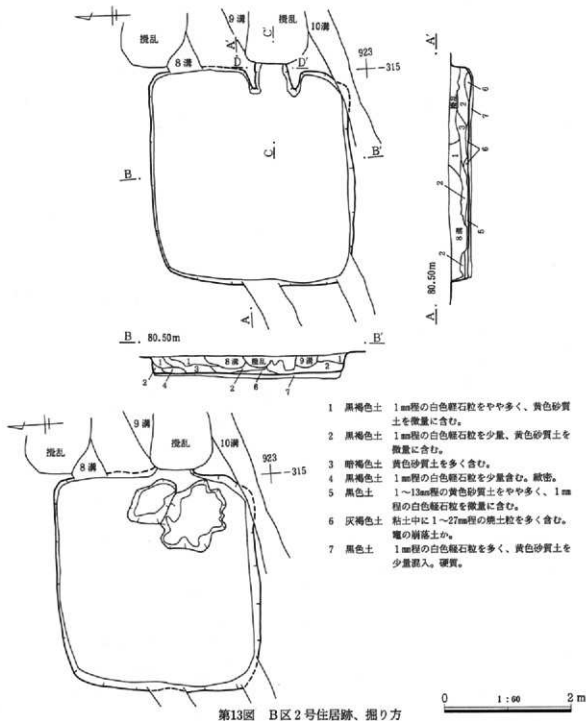
第3章 検出された遺構と遺物

構造 本住居跡の埋土の上方を溝や攪乱が掘り込んでいるが、軽石粒の混じる黒色土を主体とした硬い床面が検出されている。柱穴・周溝・貯蔵穴等は検出されていない。

竈 竈は本住居跡の東壁面のやや南寄りを掘り込んで造られている。竈の煙道部を攪乱に掘り込まれ、さらに、上面をB区9号溝に掘り込まれており、残

存状態は余りよくない。残存する竈の規模は煙道方向49cm、燃烧部幅44cmを測る。

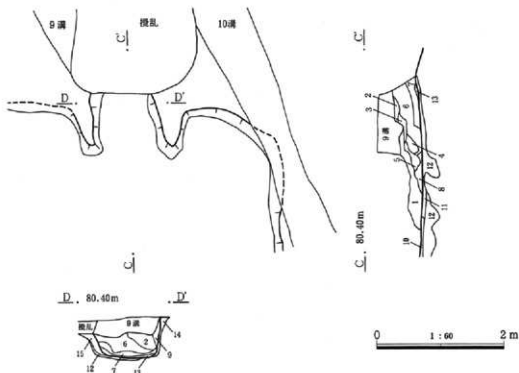
出土遺物 本住居跡から出土した遺物の数は少ない。住居埋土から土師器環・甕が出土している。この土師器環はその器形から、7世紀後半のものと思われる。



- 1 黒褐色土 1mm程の白色軽石粒をやや多く、黄色砂質土を微量に含む。
- 2 黒褐色土 1mm程の白色軽石粒を少量、黄色砂質土を微量に含む。
- 3 暗褐色土 黄色砂質土を多く含む。
- 4 黒褐色土 1mm程の白色軽石粒を少量含む。緻密。
- 5 黒色土 1~13mm程の黄色砂質土をやや多く、1mm程の白色軽石粒を微量に含む。
- 6 灰褐色土 粘土中に1~27mm程の焼土粒を多く含む。竈の崩落土か。
- 7 黒色土 1mm程の白色軽石粒を多く、黄色砂質土を少量混入。硬質。

第13図 B区2号住居跡、掘り方

2. 古墳時代の遺構と遺物



- | | | | |
|---------|-----------------------------------|---------|--|
| 1 黒色土 | 1mm程の白色軽石粒を少量、1~3mm程の焼土粒をやや多く含む。 | 9 黒色土 | 1mm程の白色軽石粒、1~3mm程の焼土粒、1~3mm程の粘土粒を多く含む。 |
| 2 黒褐色土 | 1mm程の白色軽石粒を少量、1~12mm程の焼土粒をやや多く含む。 | 10 黒色土 | 褐色粘土少量、1mm程の焼土粒少量混入。全体的に粘質が強い。 |
| 3 黒褐色土 | 焼土粒を多く含む。 | 11 褐色粘土 | 1mm程の白色軽石粒を少量混入。硬質。 |
| 4 暗灰色土 | 1~3mm程の褐色粘土粒を多く含む。 | 12 黒色土 | 黄色砂質土を多く、1mm程の白色軽石粒を少量混入。 |
| 5 暗褐色土 | 粘土層中に1mm程の焼土粒を少量含む。 | 13 灰色土 | 灰色及び暗灰色の灰層。 |
| 6 褐色土 | 粘土層中に1~7mm程の焼土粒を多く含む。 | 14 暗褐色土 | 1~4mm程の焼土粒を多く含んだ粘土層。 |
| 7 暗赤褐色土 | 褐色粘土を多く、暗灰色の灰を少量含む焼土層。 | 15 暗褐色土 | 1~3mm程の焼土粒を少量含んだ粘土層。 |
| 8 黒褐色土 | 1~6mm程の焼土粒を多く、1~4mm程の粘土粒を少量含む。 | | |



第14図 B区2号住居跡、出土遺物

B区2号住居跡

番号	種類 器種	残存 量 法 (cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・器形・文様の特徴
1	土師器 杯	口縁~体部片 口径(11.6) 器高(3.3)底径 -	埋土	①細砂 ②酸化焙 軟質 ③褐色	体部外面に稜をもち、外反する口縁部。 外面 口縁部は横ナデ。体部は瓦削り。 内面 口縁部は横ナデ。以下はナデ。
2	土師器 椀	口縁片 口径(23.6) 器高(2.7)底径 -	埋土	①砂粒 ②酸化焙 硬質 ③よい褐色	外反する口縁部。器部は丸い。 外面 口唇部は横ナデ。以下はナデ。 内面 横ナデ。

(2) 掘立柱建物跡

B区1号掘立柱建物跡 (第15図 P L 5)

位置 本遺構はB区中央部の南端に近い922・-329グリッドに位置する。近くにはB区2号住居跡や11号溝がある。

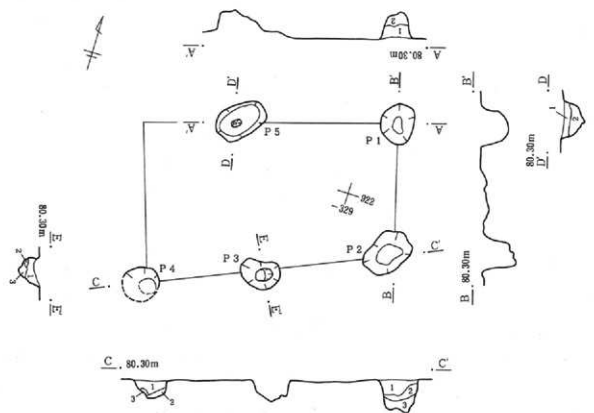
重複 なし。 **主軸方位** N-70°-E

形態 梁側の柱間が西にいくほど広がりを見せて、ややゆがんだ形態になっているが、1×2間(2.10～(2.61)m×3.87～(4.05)m)の東西棟になると思われる。P5が北へずれている。桁行の柱間は1.47～2.61m、平均値1.935mであまり一定していない。北西隅の柱穴が検出できなかった。

柱穴 柱穴の平面形は楕円形のものが多く、土坑状になっている。P4は覆土により南側が掘りこまれている。柱穴の規模は径43～79cm、深さ26～52cmを測る。柱痕跡は、P3・P5のようによくわかるものもあるが、はっきりしないものが多い。本掘立柱建物跡は遺物の出土はなく、柱穴の埋土の堆積状況で年代を決めている。埋土は黒褐色土を主体にして、やや大粒の軽石粒が多く混入しており、基本土層のIV層に近いと思われる。

内部施設 なし。

出土遺物 なし。



- 1 黒褐色土 1mm程度の白色軽石粒を多く含む。
- 2 暗褐色土 1層に似ているが、褐色砂質土を多く含む。
- 3 黒色土 灰色砂粒を多く含む。

第15図 B区1号掘立柱建物跡

(3) 円形周溝遺構

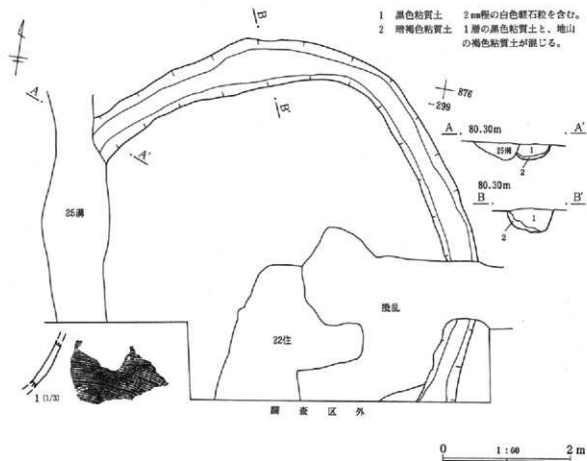
A区1号円形周溝遺構 (第16図 P L 5・56)

位置 本遺構は、A区の南東端近くの876・-299グリッドに位置する。

重複 西側の周溝部分を中世以降のA区25号溝が、上面を平安時代のA区22号住居跡が掘り込む。

概要 本遺構の南側部分は調査対象外にあたり、調査することはできなかった。また、周溝内からの遺物の出土も少なく、本遺構の全容を解明することは難しい。そこで、本書では、円形周溝基あるいは方形周溝基の可能性を残しながらも、円形周溝遺構と

して記載することにした。本遺構の周溝も含めた規模は南北方向で最大5.72m、東西方向で5.88mを測る。周溝の廻りは円形とも方形とも見える。周溝の上端幅は0.42~0.80m、下端幅は0.20~0.52m、周溝の掘り込みの深さは26~38cmを測る。周溝の断面形はやや丸みのある逆台形状を呈する。周溝の埋土は大粒の白色軽石粒を多く含む黒色土が主体である。埋土、出土遺物から古墳時代の遺構と思われる。**出土遺物** 周溝の埋土からハケメ痕のある甕の胴部の破片が出土している。



第16図 A区1号円形周溝遺構、出土遺物

A区円形周溝遺構

番号	種類 器種	残存 方法 量(cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
1	土師甕 口縁 底径	胴部片 - 器高 - - 底径 -	周溝 埋土	①明砂 黒色細粒 ②酸化焰 硬質 ③褐色	丸みのある胴部。 外面 斜め方向のハケメ。 内面 ナダ。

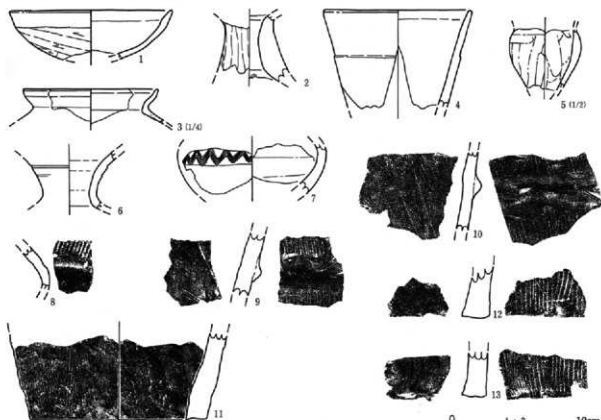
(4) 遺構外出土遺物(第17図1~13 P L56)

古墳時代の遺構外出土遺物としては、土師器環、器台の脚部片、埴、ミニチュア土器、甕、甕、円筒埴輪の破片資料がある。土師器甕は古墳時代前期、土師器環、器台、埴、甕は古墳時代後期のものと思われる。本遺跡では古墳時代の遺構は前述した通りあまり検出されていない。しかし本遺跡の西に隣接する波志江中野面遺跡では前方後方形周溝墓をはじめ、古墳時代前期の集落が検出され、東に隣接する阿屋敷遺跡からは大規模な古墳時代後期の集落が検出されており、その関連性が窺える。また、円筒埴輪の破片資料はいずれも2条3段構成の円筒埴輪の

破片と思われる。基底部片が3点、突部部を含む胴部片が2点出土している。調査区内から古墳は検出されなかったが、『上毛古墳総覧』(註1)によれば、本遺跡の所在する波志江地区で105基の古墳が確認されており、伊勢崎市の中でも古墳が多く確認されている地区となっている(註2)。本遺跡の東には、やや離れるが、間之山古墳群や台所山古墳群などもあり、これらの古墳群との関連も考えられる。

註1 1938年に、群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告として刊行された県内の古墳の分布調査報告書

註2 前掲の『上毛古墳総覧』によれば、伊勢崎市全体では514基の古墳が確認されている。



第17図 古墳時代遺構外出土遺物

古墳時代遺構外出土遺物

番号	種類 器種	残存 法 量(cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	形状・器形・文様の特徴
1	土師器 環	口～基部1/5 口径(12.7) 器高(3.9)底径—	C区 グリッド	①粗砂 ②酸化焰 硬質 ③褐色	丸底で口縁部はわずかに内湾傾向を有する。 外面 口縁部は横ナデ。底部は篋削り。 内面 口縁部は横ナデ。以下はナデ。
2	土師器 器台	脚受～脚上部 口径—器高(5.8) 底径—	B区 グリッド	①粗砂 黒色細粒 ②酸化焰 硬質 ③におい褐色	脚受部に径2cmの孔をもつ。脚部に向かい、広がる様相をみせる。 外面 篋削り。 内面 ナデ。下部は横ナデ。

3. 奈良・平安時代の遺構と遺物

番号	種類 器種	残存 量(cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
3	土師器 甕	口縁部片 口径(14.2) 器高(3.7)底径 -	A区 グリッド	①細砂 白色細粒 ②酸化焰 硬質 ③にぶい黄褐色	面取りをして後を有する口縁部。 外面 口縁部は横ナデ。胴部はナデ。 内面 口縁部は横ナデ。以下はナデ。
4	土師器 埴	口縁~胴部 口径(11.8) 器高(7.8)底径 -	A区 20号住居 跡	①細砂 白色粒 ②酸化焰 硬質 ③赤褐色	①細砂 白色粒 ②酸化焰 硬質 ③赤褐色 外積する器部。球形の胴部をもつと思われる。 外面 胴部の中程に段をもつ。横ナデ。 内面 横ナデ。
5	土師器 ミニチュ ア土器	体部片 口径 - 器高(3.3) 底径 -	A区 グリッド	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③褐色	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③褐色 口縁付近の器形や形状から嬰状のミニチュア土器と思われる。 外面 ナデ。 内面 ナデ。
6	須恵器 甕	胴部片 口径 - 器高(4.6) 底径 -	B区 1号溝 埋土	①砂粒 ②還元焰 硬質 ③暗灰色	外反しながら立ち上がる胴部。縦線成形。 外面 自然釉の塊あり。 内面 自然釉あり。
7	須恵器 甕	体部片 口径 - 器高(3.9) 底径 -	C区 14号溝 埋土	①細砂 黒色細粒 ②還元焰 硬質 ③灰色	最大径がやや上にある。丸底と思われる胴部。 外面 7条1組の波状文が1列横位に施文されている。 内面 ナデ。
8	須恵器 甕	体部片 口径 - 器高 - 底径 -	B区 グリッド	①白色粒 ②還元焰 硬質 ③灰色	中程に段をもつ胴部。 外面 体部上半に斜位刻突文あり。自然釉がかかる。 内面 ナデ。
9	円筒埴輪	胴部片 口径 - 器高 - 底径 -	D区 グリッド	①白色細粒 赤色細粒 ②酸化焰 普通 ③にぶい褐色	突唇の断面形状は三角形。やや粗雑で太さの違うところがある。 外面 一次調整の縦方向のハケメが施されている。 内面 斜め方向のハケメが施されている。
10	円筒埴輪	胴部片 口径 - 器高 - 底径 -	D区 グリッド	①細砂 白色細粒 ②酸化焰 普通 ③にぶい褐色	突唇の断面形状は三角形である。 外面 一次調整の縦方向のハケメが施されている。 内面 一部、斜め方向のハケメが施されている。
11	円筒埴輪	基底部片 口径 - 器高 - 底径 -	D区 グリッド	①白色細粒 ②酸化焰 良好 ③にぶい褐色	外面 胴部は一次調整の縦方向のハケメが施されている。底部に砂及び小石の圧痕が残る。 内面 ナデ。
12	円筒埴輪	基底部片 口径 - 器高 - 底径 -	D区 グリッド	①細砂 白色細粒 ②酸化焰 普通 ③にぶい褐色	外面 胴部は一次調整の縦方向のハケメが施されている。底部に砂及び小石の圧痕、1cmほどの小石が残る。 内面 ナデ。
13	円筒埴輪	基底部片 口径 - 器高 - 底径 -	D区 グリッド	①細砂 白色細粒 ②酸化焰 普通 ③にぶい褐色	外面 胴部は一次調整の縦方向のハケメが施されている。底部に砂及び小石の圧痕、2mmほどの粒石が残る。 内面 ナデ。

3. 奈良・平安時代の遺構と遺物

本遺跡の奈良・平安時代の遺構としては、竪穴住居跡26軒、掘立柱建物跡12棟、井戸跡3基、土坑6基、溝14条が検出されている。検出された遺構の多くはA区の中央部に集中する。

(1) 竪穴住居跡

A区1号住居跡(第18図 P L 6・56)

位置 本住居跡は、A区の北西部にあり、904-362グリッドに位置する。また、A区2号住居跡、4号竪穴状遺構とは近接している。

重複 なし。

形状 本住居跡の北側部分は攪乱に掘り込まれている。また本住居跡の大部分は削平されており、壁、床面の残存が悪く、竈の周辺が確認されただけであ

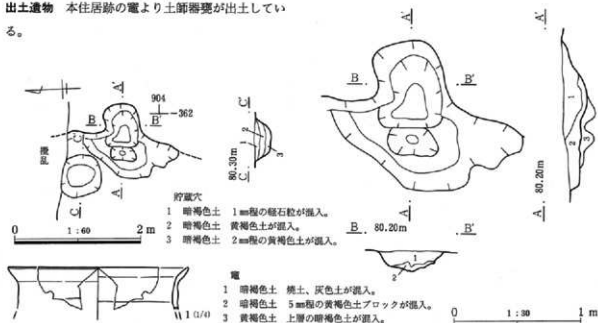
る。そのため、本住居跡の形状ははっきりしない。

方位 N-99°E

構造 本住居跡の大部分が削平されており、床面はほとんど確認できなかった。住居の構造として確認できたのは竈の周辺及び貯蔵穴のみである。貯蔵穴は竈の左袖近くで検出されている。この貯蔵穴の北側の上端は攪乱により掘り込まれている。平面の形状はほぼ円形である。径は63~66cm、深さ36cmを測る。埋土は軽石粒を含む暗褐色土を主体にし、黄褐色土が混入した土である。

竈 本住居跡の竈は東壁面を掘り込んで造られている。竈も床面同様に削平をうけており、使用面の残存は余りよくない。残存する竈の規模は、煙道方向68cm、燃焼部幅52.5cmを測る。

出土遺物 本住居跡の竈より土師器甕が出土している。



第18図 A区1号住居跡、竈掘り方、出土遺物

A区1号住居跡

番号	種類 器種	残存 法 量(cm)	出土位置	①土土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
1	土師器 甕	口縁部片 口徑(18.8)器高(4.4) 底径 —	竈	①細砂 ②酸化岩 硬質 ③にょい赤褐色	コの字状の口縁を有する。口縁部の屈曲は強い。 内外面 口縁部上半を強く横ナデ。

A区2号住居跡 (第19図 P L 6・56)

位置 本住居跡はA区の北西部にあり、900・-362グリッドに位置する。前述したA区1号住居跡とは近接している。

重複 A区2号溝に掘り込まれている。

形状 本住居跡の壁、床面の南側部分はA区2号溝に掘り込まれており、その形状ははっきりしない。

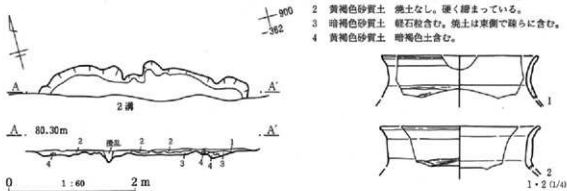
方位 N-109°-E

構造 本住居跡の大部分はA区2号溝に掘り込まれ

ており、北側の壁面及びその周囲の床面が確認されただけである。北側の壁面も攪乱やビットにより重複を受けている。

竈 土層の堆積状況から東壁面を掘り込んで造られていると思われるが、A区2号溝に掘り込まれており、確定はできない。

出土遺物 本住居跡の埋土より土師器甕が出土している。



第19図 A区2号住居跡、出土遺物

A区2号住居跡

番号	種類 器種	残存 法 量(cm)	出土位置	①粘土②焼成③色調	器形・器彩・文様の特徴
1	土師器 壺	口縁部片 口径(16.3)器高(4.5) 底径—	埋土	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③橙色	コの字状の口縁を有するが、口縁部の屈曲はやや弱い。 外面 □縁部は横ナデ。胴部は笈削り。 内面 □縁部はナデ。
2	土師器 壺	口縁部片 口径(16.5)器高(4.6) 底径—	埋土	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③にじみ赤褐色	コの字状の口縁を有する。口縁部の屈曲は強い。 外面 □縁部上半は横ナデ。以下はナデ。胴部との境に工具痕？ 内面 □縁部上半は横ナデ。以下はナデ。

A区3号住居跡 (第20・21図 P L 6・56)

位置 本住居跡はA区のほぼ中央部の北側にあり、897・-342グリッドに位置する。本住居跡の南に縄文時代の1号埋壺が検出されている。また、平安時代のA区14号溝が本住居跡の西側を通る。

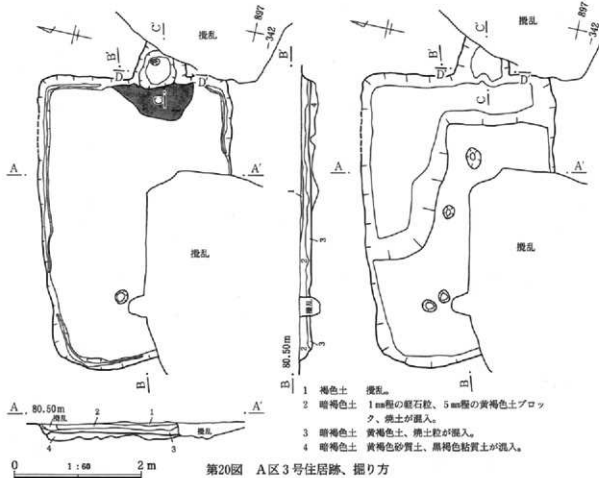
重複 なし。

形状 本住居跡は南西部を攪乱に大きく掘り込まれている。また竈の煙道部及び住居跡の東壁面も攪乱に掘り込まれている。本住居跡の形状は、東西方向に長辺をもつ長方形である。本住居跡の規模は、東西方向4.62m、南北方向3.02mを測る。推定される

床面積は(11.22)㎡である。

方位 N-75°-E

構造 本住居跡は、発掘調査時に重複住居跡としてA区3号住居跡とA区3B住居跡と呼称されていたが、整理作業の中で平面図、断面図、写真等の調査資料を検討した結果、重複住居跡ではなく1軒の住居跡とする方がよいのではないかと考え、本書ではA区3号住居跡と記載することにした。本住居跡からは貯蔵穴、柱穴等は検出されていない。壁面の周囲に幅1.5~10cm、深さ6cmの溝が巡る。本住居跡

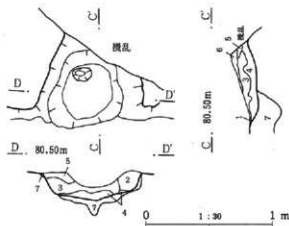


第3章 検出された遺構と遺物

の埋土は軽石粒を含む暗褐色土を主体にし、黄褐色土及び焼土粒が混入した土である。

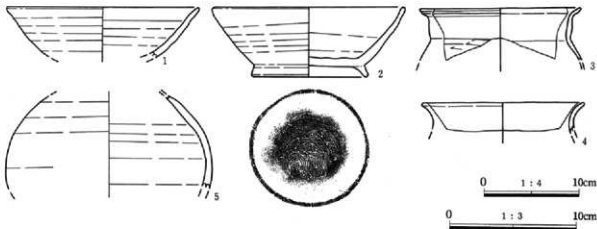
竈 竈は本住居跡の東壁面の中程を掘り込んで造られている。竈の両袖・煙道部は、攪乱により掘り込まれており、確認できなかった。竈前面の床面に焼土が検出されている。残存する竈の規模は、煙道方向58cm、燃焼部幅78cmを測る。

出土遺物 本住居跡の竈内や埋土から土師器甕、須恵器埴・壺・甕等が出土している。



竈

- 1 暗褐色土 黄色砂質土が混入。
- 2 暗赤褐色土 焼土が主体。黄色砂質土を多く含む。
- 3 暗赤褐色土 焼土が主体。灰色土を含む。
- 4 灰色土 焼土、炭化物を疎らに含む。
- 5 灰色土 焼土、炭化物、灰を含む。
- 6 暗赤褐色土 焼土が主体。灰色土が多い。
- 7 暗黄褐色土 粘質土。暗褐色土を含む。



第21図 A区3号住居跡竈、出土遺物

A区3号住居跡

番号	種類	残存量 (cm)	出土位置	①土質②構成③色調	器形・器形・文様の特徴
1	須恵埴 埴	口縁部片 口径(15.0)器高(4.0) 底径 -	埋土	①粗砂 ②還元焰 硬質 ③灰色	口縁部がやや外反する。縦線器形。 外面 口縁部は横ナデ。 内面 口縁部は横ナデ。
2	須恵埴 埴	口縁～高台部 口径(15.6)器高5.5 底径 8.2	埋土	①粗砂 1mm程の粒子 ②還元焰 硬質 ③灰色	口縁部はやや内湾する。縦線器形。右回転糸切り。 外面 口縁部は横ナデ。 内面 口縁部は横ナデ。
3	土師器 甕	口縁部片 口径(16.7)器高(5.5) 底径 -	竈	①粗砂 白色粒 ②還元焰 硬質 ③による暗褐色	コの字状の口縁を有する。口縁部の屈曲は強い。 外面 口縁部は横ナデ。胴部は横方向の荒削り。 内面 口縁部は横ナデ。
4	土師器 甕	口縁部片 口径(16.8)器高(3.3) 底径 -	埋土	①粗砂 ②還元焰 硬質 ③褐色	口縁部の屈曲はやや弱い。口唇端部は外傾し、面をもつ。 外面 横ナデ。 内面 横ナデ。
5	須恵器 壺	胴部片 口径 - 器高(10.1) 底径 -	埋土	①1～4mmの白色粒 ②還元焰 硬質 ③灰色	最大径を中程にもつ胴部。 外面 縦線器形後ナデ。 内面 ナデ。

A区4号住居跡 (第22・23図 P L 7・56・57)

位置 本住居跡はA区のほぼ中央部にあり、878・-346グリッドに位置する。A区14号溝が本住居跡の西側を通る。

重複 A区5号住居跡、6号住居跡と重複する。また、A区5号掘立柱建物跡、6号掘立柱建物跡と重複する。

形状 本住居跡の形状は東西方向に長辺をもつ長方形である。その規模は東西方向5.94m、南北方向5.40mを測る。床面積は(29.68)m²である。

方位 N-100°E

構造 本住居跡の南の壁面は6号住居跡に、床面の中央部は5号住居跡に掘り込まれている。掘り方面の調査の際に4号住居跡の外形を把握することができた。5号住居跡の竈の右袖付近の床下から貯蔵穴と思われる穴が検出された。この穴の平面形状は楕円形で、径は79~97cm、深さは19cmを測る。内部より遺物は出土していない。埋土は黒褐色土や暗褐色土であった。柱穴、周溝等は検出されていない。

竈 竈は本住居跡の東壁面を掘り込んで造られている。両袖が残存し、燃焼部前へせり出すようなつくりになっている。竈の規模は煙道方向74cm、燃焼部幅66cmを測る。なお、竈前の床面下より、A区5号掘立柱建物跡のピットが検出されている。

出土遺物 床面・竈・埋土から土師器台付壺・壺、須恵器壺・壺・甕、須恵器を転用した紡錘車、灰砂陶器壺等が出土している。

A区5号住居跡 (第23図 P L 8・57)

位置 本住居跡はA区のほぼ中央部にあり、878・-346グリッドに位置する。A区14号溝が本住居跡の西側を通る。

重複 A区4号住居跡、6号住居跡と重複する。また、A区5号掘立柱建物跡と重複する。

形状 本住居跡はA区4号住居跡の中央部を掘り込んで造られている。南壁面は6号住居跡に掘り込まれている。3つの住居跡の深さが同じ位なので、それぞれの住居跡を確認するのに苦労した。本住居跡

の形状は、東西方向に長辺をもつ長方形である。その規模は東西方向4.05m、南北方向3.65mを測る。床面積は(15.36)m²である。

方位 N-98°E

構造 床面の高さが他の重複住居と差がなく、本住居跡の床面を検出する際に苦労した。本住居跡の北西部の床面に焼土が集中して検出された。貯蔵穴、柱穴、周溝等は検出されていない。

竈 竈は東壁面の南寄り掘り込んで造られている。右側面は攪乱により壊されている。残存している竈の規模は、煙道方向106cm、燃焼部幅50cmを測る。本住居跡の竈煙道部の右下より、A区5号掘立柱建物跡のピットが検出されている。

出土遺物 本住居跡の床面・竈・埋土より土師器壺・壺、須恵器壺・壺・皿が出土している。

A区6号住居跡 (第23図 P L 7・8・57・58)

位置 本住居跡はA区のほぼ中央部にあり、875・-348グリッドに位置する。A区14号溝が本住居跡の西側を通る。

重複 A区4号住居跡、5号住居跡と重複する。また、A区5号掘立柱建物跡と重複する。

形状 本住居跡の形状は東西方向に長辺をもつ長方形になると思われる。その規模は東西方向4.30m、南北方向3.16mである。床面積は(12.58)m²である。

方位 N-93°E

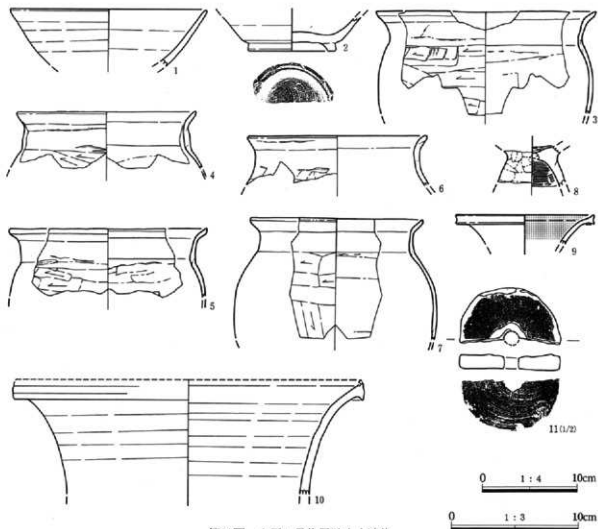
構造 本住居跡の竈及び周辺の床面、東壁面は攪乱により壊されている。北壁面付近、竈の前、南壁面に沿って、床面上から焼土が帯状や塊状に検出されている。貯蔵穴、柱穴は検出されていない。

竈 東壁面を掘り込んで造られていたと思われる。竈は攪乱により壊されているので、検出されていないが、東側の床面の焼土から竈に使用されたと思われる縦15.8cm・横10.9cm・厚さ5.2cm・重さ1,594.6gの粗粒輝石安山岩が出土している。この石の表面はよく磨られており、縄文時代の台石や磨石を転用した可能性も考えられる。

第3章 検出された遺構と遺物

出土遺物 本住居跡の床面・掘り方より、土師器
 坏・甕、須恵器坏・埴、鉄製品が出土している。須

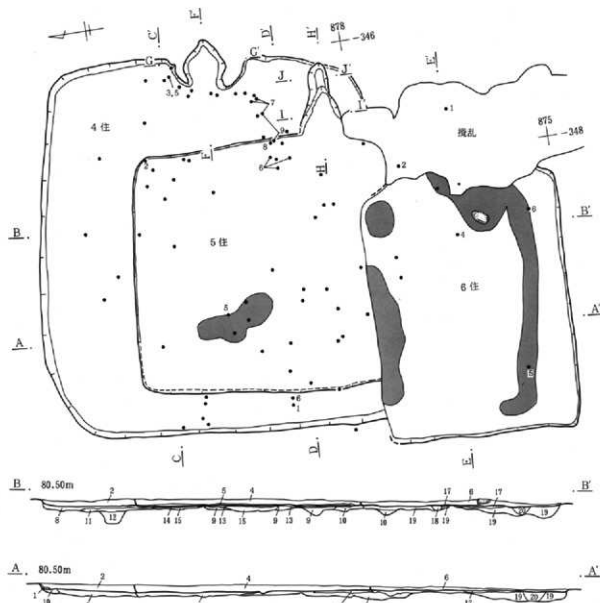
恵器埴の底部には「東」と線刻されているものもあ
 る。鉄製品の中には刀子が出土している。



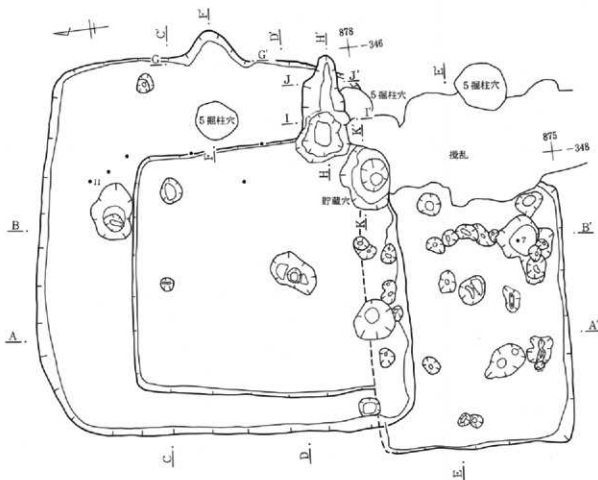
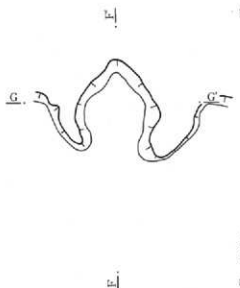
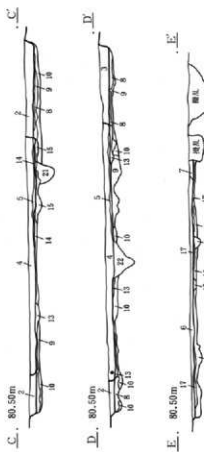
第22図 A区4号住居跡出土遺物

A区4号住居跡

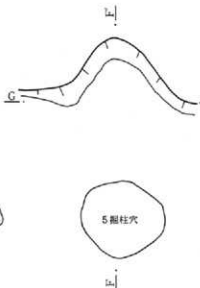
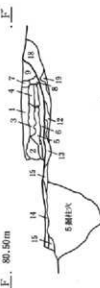
番号	種類 器種	残存 量(cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・器形・文様の特徴
1	須恵器 埴	口縁片 口径(15.4)器高(4.4) 底径 -	床直	①粗砂 1mm程の粒子 ②還元焰 やや軟質 ③灰色	口縁部の外反が見られない。輪縁整形。 外面 口縁部は横ナデ。輪縁整形後ナデ。 内面 輪縁整形後ナデ。
2	須恵器 埴	底～高台部 口径 - 器高(2.7) 底径(7.0)	床直	①粗砂 ②還元焰 硬質 ③灰色	腹部が強く張る。輪縁整形。右回転糸切り。 外面 高台の周辺は度による調整がある。高台に弱い沈線有り。 内面 輪縁整形後ナデ。
3	土師器 甕	口縁～肩部片 口径(23.2)器高(11.0) 底径 -	床直	①砂粒 白色粒 ②酸化焰 硬質 ③にょい赤褐色	コの字状の口縁を有する。口縁部上半の外傾は強い。 外面 口縁部は横ナデ。胴部は横方向の直削り。 内面 胴部は横ナデ。
4	土師器 甕	口縁～肩部片 口径(18.8)器高(6.0) 底径 -	甕	①粗砂 白色粒 ②酸化焰 硬質 ③にょい赤褐色	コの字状の口縁を有する。口縁部の屈曲は強い。 外面 口縁部は横ナデ。胴部は横方向の直削り。 内面 胴部はナデ。
5	土師器 甕	口縁～肩部片 口径(20.8)器高(7.2) 底径 -	甕	①粗砂 ②酸化焰 硬質 ③にょい褐色	コの字状の口縁を有する。口縁部の屈曲は強い。 外面 口縁部は横ナデ。口縁部と肩部の境に寬のあたりの痕跡。 内面 胴部はナデ。



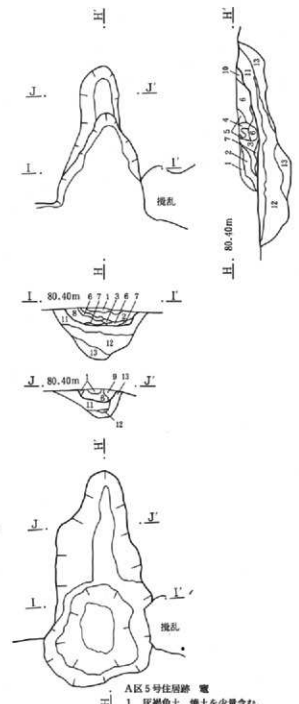
- A区4号・5号・6号住居跡
- 暗褐色粘質土 1mm程度の軽石粒が混入。
 - 暗褐色粘質土 1mm程度の軽石粒、焼土粒、褐色土粒が混入。
 - 褐色粘質土 1mm程度の軽石粒、焼土粒、灰白色土粒が混入。
 - 暗褐色粘質土 1mm程度の軽石粒、焼土粒、褐色土粒が混入。
 - 暗褐色土 黄色土、炭化物、焼土を含む。跡まりが強い。
 - 暗褐色粘質土 1mm程度の軽石粒、焼土粒が混入。
 - 褐色粘質土 焼土混入。
 - 暗褐色土 微小な軽石粒、焼土を含む。
 - 灰褐色土 焼土跡、黄色砂質土を含む。
 - 灰黄褐色土 黄色砂質土を含む。
 - 灰黄褐色土 白色シルト、褐色土を含む。
 - 灰黄褐色土 白色シルト、黄色砂質土、暗褐色土を含む。
 - 暗褐色土 微小な軽石粒を多く含む。非常に硬い焼土を含む。
 - 暗褐色土 焼土、炭化物、白色シルト、灰褐色土を含む。硬く締まっている。
 - 暗褐色土 黄色砂質土のブロックを含む。
 - 暗灰黄色土 微小な軽石粒を多く含む非常に硬い。
 - 暗褐色土 焼土を練りに含む硬く締まっている。
 - 暗褐色土 焼土跡らを含む。
 - 黄褐色土 軽石、焼土を含む。
 - 暗褐色土 焼土を多く含む。
 - 暗褐色土 黄色砂質土まじり。
 - 暗褐色土 焼土を多く含む。



- A区4号住居跡 竈
- 黒褐色土 2~5mm程度の焼土粒、1mm程度の粘土が混入。
 - 褐色土 褐色土に比べ3~10mm程度の焼土粒、粘土共に多く、褐色の構築材が混入。
 - 暗褐色土 2層に似ているが、構築材の混入が少ない。
 - 暗褐色土 3層よりも、構築材が多く混入。
 - 黒褐色土 灰褐色。少量の焼土が混入。土跡2点。
 - 黒褐色土 当時の使用面に堆積した灰褐色。
 - 黒褐色土 1~3mm程度の焼土粒が混入。
 - 褐色土 構築材か？
 - 黒褐色土 3~5mm程度の焼土粒が混入。
 - 黄褐色粘質土 構築材。表面は赤く焼けている。
 - 褐色土 焼土、炭化物を練らに含む。
 - 暗褐色土 炭化物を練らに含む。
 - 暗褐色土 焼土、炭化物が多い。
 - 灰褐色土 焼土跡、硬く締まっている(灰褐色)。
 - 灰褐色土 黄色砂質土を含む(住居跡り方)。
 - 暗褐色土 黄色砂質土のブロックを含む。
 - 暗褐色土 焼土、炭化物を多く含む。
 - 灰褐色土 焼土、炭化物を含む。
 - 黄褐色砂質土 地山のくずれたもの。



- A区4号住居跡 野蔵穴
- 黒褐色土 焼土、炭化物跡り。
 - 暗褐色土 炭化物、土跡ら。軽石粒多い。
 - 灰褐色土 焼土を多く含む。
 - 灰褐色土 3層に似ているが、3層よりも黒色が強い。
 - 灰黄褐色土 焼土、炭化物跡り。黄色砂質土を含む。

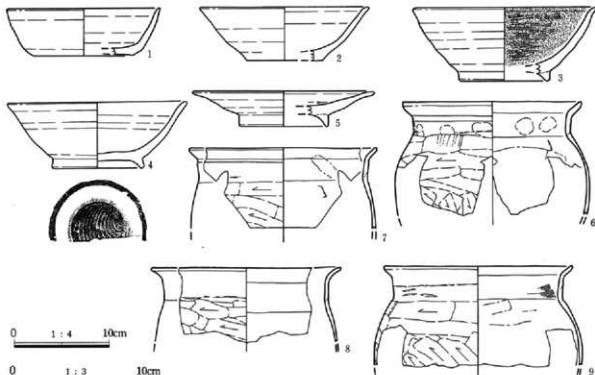


- A区5号住居跡 竈
- 灰褐色土 焼土を少量含む。
 - 灰褐色土 焼土、炭化物、灰が混入。
 - 暗褐色土 焼土、炭化物を含む。
 - 暗褐色土 軽石粒を含む。
 - 灰褐色土 焼土が混入。
 - 灰褐色土 2層と同じ。最下部に焼土の層があり、これが天井部の崩落と思われる。
 - 灰褐色土 灰と炭化物。
 - 灰褐色土 2に似ているが、灰が多い。
 - 暗褐色土 焼土、灰を含む。
 - 非褐色土 焼土層、よく焼けている。
 - 灰褐色土 焼土が多い。
 - 暗褐色土 焼土、炭化物、灰を含む。
 - 黒褐色土 焼土を練らに含む。

第23図 A区4・5・6号住居跡、掘り方、竈

3. 奈良・平安時代の遺構と遺物

番号	種類 器種	残存 法 量(cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
6	土師器 甕	口縁1/3 口径(19.0)器高(5.3) 底径 -	床直	①細粒 白色粒 ②酸化焰 硬質 ③明赤褐色	コの字状の口縁を有する。口縁部の屈曲はやや弱い。 外面 口縁部上半は横ナデ。口縁部と肩部の境に工具の痕跡。 内面 ナデ。
7	土師器 甕	口縁~胴部 口径(18.2)器高(12.6) 底径 -	床直	①細砂 白色粒 ②酸化焰 硬質 ③よい褐色	コの字状の口縁を有する。口縁部の屈曲は強い。 外面 口縁部は横ナデ。胴部は横・縦方向の筋削り。 内面 ナデ。
8	土師器 台付甕	台上部片 口径 - 器高(4.3) 底径 -	埋土	①細砂 白色粒 ②酸化焰 硬質 ③明赤褐色	直線的に外傾する。 外面 ナデ。 内面 ハケメ。
9	灰釉陶器 長頸甕	口縁~胴1/4 口径(10.8)器高(2.3) 底径 -	甕	①緻密 ②還元焰 硬質 ③黄灰色	外開する口縁部。口縁端部は外傾し、外に向かって面をもつ。
10	須恵器 甕	口縁部片 口径(36.4)器高(12.0) 底径 -	埋土	①砂粒 白色粒 ②酸化焰 軟質 ③よい褐色	外反する口縁部。口縁端部は外傾し、外に向かって面をもつ。 外面 ナデ。 内面 ナデ。
11	土製品 紡錘車	1/2 口径5.4 狭径 5.3 孔径0.8 厚さ0.9 重さ15.4g	床直	①細砂 白色粒 ②還元焰 硬質 ③灰色	須恵器坏底部の転用。断面は長方形。表面はナデ。裏面は糸切り 痕が残る。



第24図 A区5号住居跡出土遺物

A区5号住居跡

番号	種類 器種	残存 法 量(cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
1	須恵器 坏	口縁~底1/4 口径(11.8)器高 3.7 底径(8.6)	埋土	①粗砂 ②還元焰 硬質 ③灰色	口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。右回転糸切り。 外面 轆轤整形後ナデ。 内面 轆轤整形後ナデ。
2	須恵器 坏	口縁~底1/5 口径(13.2)器高 4.2 底径(6.0)	床直	①粗砂 1mm程度の粒子 ②還元焰 硬質 ③暗灰色	胴部はやや狭り、口縁部は外反する。右回転糸切り。 外面 口縁部は横ナデ。以下、轆轤整形後ナデ。 内面 轆轤整形後ナデ。
3	須恵器 埴	口縁~底部片 口径(14.2)器高 5.8 底径(6.4)	埋土	①粗砂 赤色粒 ②酸化焰 軟質 ③よい褐色	胴部が強く狭り、口縁部は外反する。 外面 口縁部は横ナデ。以下ナデ。 内面 荒磨き後黒色処理。

A区6号住居跡

番号	種類 器種	残存 法 量(cm, g)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
1	土師器 坏	口縁~底1/2 口径 11.9 器高 3.2 底径 8.6	掘り方	①砂粒 赤色粒 ②炭化焙 硬質 ③明赤褐色	平底で口縁部は直線的に外傾する。 外面 底部は彫削り。
2	須惠器 坏	口縁~底1/4 口径(12.0)器高 3.8 底径 6.6	床直	①細砂 ②還元焙 硬質 ③灰色	口縁部はやや外反する。右回転糸切り。 外面 口縁部は横ナデ。以下、輪縁整形後ナデ。 内面 見込み部に「東」の刻書あり。
3	須惠器 坏	口縁~底1/2 口径(15.4)器高 5.5 底径 (7.2)	掘り方	①砂粒 ②還元焙 硬質 ③灰色	口縁部はやや外反する。右回転糸切り。付け高台。 内面 輪縁整形後ナデ。見込み部に「東」と思われる刻書あり。
4	須惠器 坏	口縁~底1/5 口径(13.0)器高 5.5 底径 (6.4)	床直	①細砂 ②還元焙 硬質 ③黄灰色	口縁部は大きく外反する。 外面 輪縁整形後ナデ。体部に「東」の刻書あり。 内面 輪縁整形後ナデ。見込み部に「東」の刻書あり。
5	須惠器 坏	底~高台部 口径 - 器高(3.1) 底径 7.1	床直	①細砂 ②還元焙 硬質 ③灰色	腰部が強く張る。右回転糸切り。 外面 輪縁整形後ナデ。 内面 輪縁整形後ナデ。
6	土師器 甕	口縁~肩1/4 口径(21.2)器高(9.1) 底径 -	床直	①砂粒 白色粒 ②炭化焙 硬質 ③褐色	コの字状の口縁を有する。口縁部の屈曲はやや弱い。 外面 口縁部は横ナデ。胴部は横・斜め方向の彫削り。 内面 ハケメ。
7	鉄製品 刀子	棟区~茎 長さ 4.3 幅 1.15 厚さ 0.4 重さ 2.63	掘り方		棟区が直角に近い形で作られている。表面はクラック状に割れが入っている。古代歌と思われる。

A区7号住居跡 (第26~29図 P L 9・58・59)

位置 本住居跡はA区中央部南端にあり、870・一345グリッドに位置する。本住居跡の近くにはA区4号・5号・6号住居跡がある。

重複 A区6号掘立建物跡と重複している。

形状 本住居跡の形状は東西方向に長辺をもつ長方形である。その規模は東西方向4.43m、南北方向4.02mである。床面積は11.79m²である。

方位 N-84°-E

構造 本住居跡の竈及び竈を有する東壁面は攪乱により、その多くを壊されている。他の壁面も攪乱により、掘り込まれている箇所があった。壁面の周囲に幅5~17cm、深さ37~41cmの周溝が巡る。

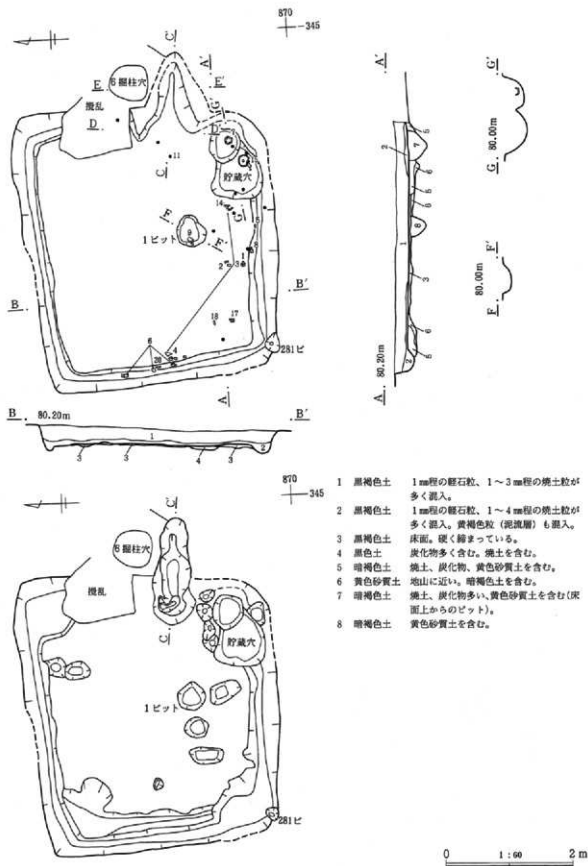
竈の右袖近くの床面より、貯蔵穴が検出された。その平面形状は、円形及び楕円形で大小の貯蔵穴が2つ連続している。小さいほうの径は49~54cm、深さは33cm、大きい方の径は76~92cm、深さは37cmを測る。埋土は、焼土、炭化物を含む暗褐色土である。この貯蔵穴から土師器蓋・小型甕が出土している。

床面中央部のやや南寄りには1号ピットが検出され

た。調査時には、282号ピットと呼称されていたが、本書においては本住居跡のピットとし、1号ピットとして掲載することにした。このピットの平面形状は、ほぼ円形で、径42~48cm・深さ15cmを測る。埋土は、貯蔵穴と同様に焼土、炭化物を含む暗褐色土である。このピットからは、須惠器塊が出土している。本住居跡から柱穴は検出されていない。

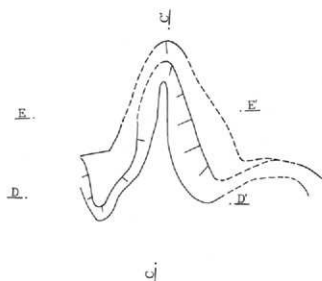
竈 竈は本住居跡の東壁面を掘り込んで造られている。攪乱により煙道及び右袖付近を壊されている。残存している竈から想定した規模は、煙道方向130cm、燃焼部幅74cmを測る。

出土遺物 本住居跡の床面・貯蔵穴・埋土から、土師器坏・鉢・甕、須惠器坏・壺・蓋、羽口、刀子、釘、板状の器種不明の鉄製品等が出土している。土師器坏の中には底部外面に「金」の墨書が書かれているもの、底部内外面に「太」の墨書が書かれているものも出土している。また、羽口は径の割りに短くなっており、溶融したと思われる。

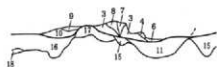


第26図 A区7号住居跡、掘り方

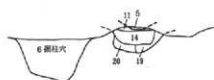
3. 奈良・平安時代の遺構と遺物



D. 80.30m D



E. 80.30m E



E. E



D. D

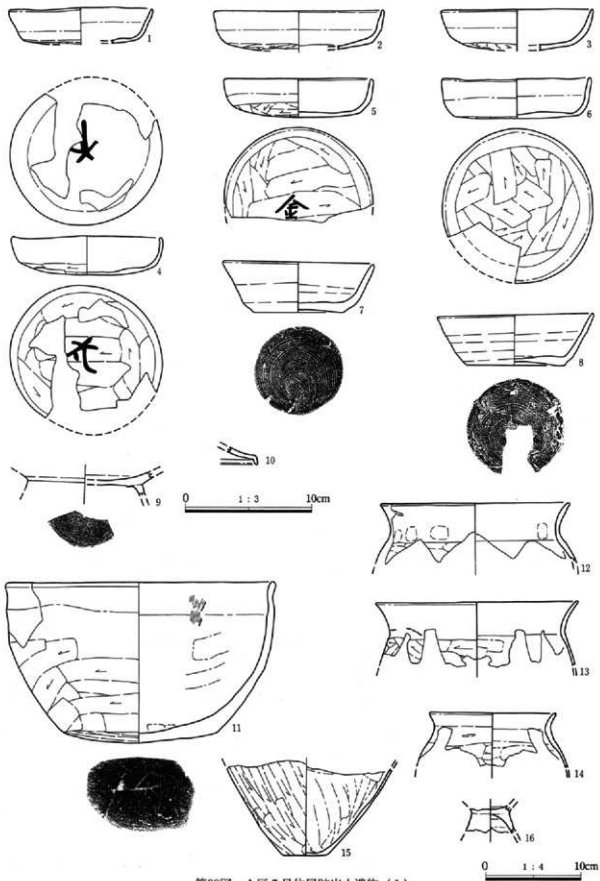


C. 80.30m C

- 電
- 1 暗褐色土 焼土粒を多量、電の天井石(表面が焼けている)を含む。
 - 2 暗褐色土 焼土多量を含む。
 - 3 黄褐色土 焼土多量を含む。5mm程の灰白色粘質土粒を含む。青灰色粘質土が混入。
 - 4 黄褐色土 焼土含む。青灰色粘質土含む。
 - 5 黄褐色土 焼土及び焼土粒が、多量に混入。青灰色粘質土微量に混入。
 - 6 青灰色土 焼土を含む(煙道部)。
 - 7 黄褐色土 焼土粒微量に混入。
 - 8 黄褐色土 7層よりも褐色味が強い、灰白色土(粘性少)を含む。
 - 9 黄褐色土 焼土を含む。黄褐色土粒が混入。
 - 10 黄褐色土 焼土少量、黒色土、黄褐色土粒が混入。
 - 11 黄褐色土 焼土、炭化物、暗灰褐色土、黄色砂質土を含む。
 - 12 黄褐色土 炭化物、灰層、焼土、暗灰褐色土、黄色砂質土を含む。
 - 13 黄褐色土 上面は黒褐色土が張り、非常に硬い。
 - 14 黄褐色土 11層に似ているが、焼土が多い。
 - 15 灰黄褐色土 焼土、炭化物が混入。
 - 16 灰褐色土 炭化物、焼土粒を含む。
 - 17 灰褐色土 焼土を含む(竈構築材)。
 - 18 灰褐色土 地山の黄色砂質土と、16層が強じったもの。
 - 19 黄褐色土 地山の黄色砂質土の崩れた土。
 - 20 灰褐色土 焼土、炭化物、黄色砂質土を含む。
 - 21 灰褐色土 焼土、炭化物を含む。

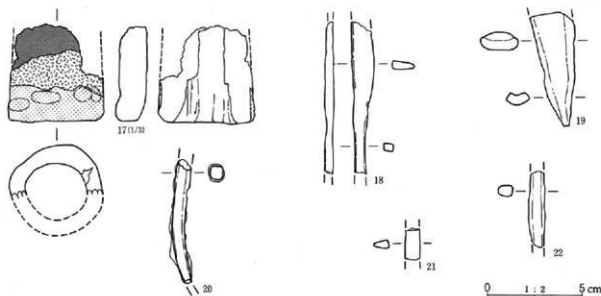
0 1:30 1m

第27図 A区7号住居跡竈、竈掘り方



第28図 A区7号住居跡出土遺物(1)

3. 奈良・平安時代の遺構と遺物



第29図 A区7号住居跡出土遺物(2)

A区7号住居跡

番号	種類 器種	残存 法 量(cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
1	土師器 杯	口縁～底1/5 口径(11.1)器高 2.9 底径(9.2)	床直	①細砂 白色粒少量 ②酸化焰 硬質 ③にぶい橙色	口縁部はわずかに内湾気味に外傾する。 外面 口縁部は横ナゲ。底部は寛削り。 内面 口縁部は横ナゲ。以下はナゲ。
2	土師器 杯	口縁～底1/3 口径(13.2)器高(3.0) 底径(11.6)	床直	①細砂 白色粒砂 ②酸化焰 硬質 ③にぶい黄褐色	口縁部はわずかに内湾気味に外傾する。 外面 口縁部は横ナゲ。底部は寛削り。 内面 口縁部は横ナゲ。以下はナゲ。
3	土師器 杯	口縁～底1/4 口径(11.6)器高 3.2 底径 —	床直	①砂粒 ②酸化焰 硬質 ③明赤褐色	口縁部はわずかに内湾気味に外傾する。 外面 口縁部は横ナゲ。底部は寛削り。 内面 口縁部は横ナゲ。以下はナゲ。
4	土師器 杯	口縁～底2/3 口径 11.7 器高 3.1 底径 10.8	床直	①細砂 白色粒 ②酸化焰 硬質 ③明褐色	口縁部はわずかに内湾気味に外傾する。 外面 口縁部は横ナゲ。底部は寛削り。底部に「太」の墨書あり。 内面 口縁部は横ナゲ。見込み部に「太」と思われる墨書あり。
5	土師器 杯	口縁～底1/2 口径 11.5 器高 3.0 底径 —	床直	①細砂 白色粒 ②酸化焰 硬質 ③にぶい赤褐色	口縁部はわずかに内湾気味に外傾する。 外面 口縁部は横ナゲ。底部は寛削り。底部に「金」の墨書あり。 内面 口縁部は横ナゲ。以下はナゲ。
6	土師器 杯	口縁～底3/4 口径 11.6 器高 3.2 底径 9.8	床直	①細砂 白色細粒 ②酸化焰 硬質 ③にぶい橙色	口縁部はわずかに内湾気味に外傾する。平底に近い。 外面 口縁部は横ナゲ。底部は寛削り。 内面 口縁部は横ナゲ。
7	須恵器 杯	完形 口径 11.7 器高 3.9 底径 7.0	埋土	①赤色・白色粒 小石 ②やや酸化焰 硬質 ③内面 にぶい赤褐色 外面 灰黄褐色	口縁部がわずかに外反する。輪縁整形。右回転糸切り。 外面 口縁部は横ナゲ。 内面 口縁部は横ナゲ。
8	須恵器 杯	口縁～底3/4 口径 12.1 器高 4.2 底径 7.7	床直	①緻密 ②還元焰 硬質 ③灰色	口縁部がわずかに外反する。輪縁整形。右回転糸切り。 外面 口縁部は横ナゲ。 内面 口縁部は横ナゲ。
9	須恵器 塊	底部片 口径 — 器高(2.0) 底径 —	床直	①緻密 ②やや酸化焰 硬質 ③褐灰色	付け高台。輪縁整形。右回転糸切り。 外面 高台部は横ナゲ。
10	須恵器 蓋	口縁部片 口径 — 器高 — 底径 —	貯蔵穴	①=細粒の白色粒 ②やや酸化焰 硬質 ③にぶい橙色	やや内傾しながら口縁部に至る。
11	土師器 鉢	口縁～底3/4 口径(20.8)器高 12.7 底径 12.1	床直	①粗砂 ②酸化焰 硬質 ③橙色	口縁端部がやや外反する。底部に木葉痕あり。前代の流入遺物か? 外面 口縁部は横ナゲ。体部は横方向の寛削り。 内面 口縁部は横ナゲ。以下は寛ナゲ。
12	土師器 甕	口縁～肩1/2 口径(19.6)器高(6.4) 底径 —	床直	①砂粒 白色粒少量 ②酸化焰 硬質 ③明赤褐色	口縁部上半にわずかな唇部が見られる。 外面 口縁部は横ナゲ。指頭痕を残す。胴部は横方向の寛削り。 内面 口縁部は横ナゲ。指頭痕を残す。以下はナゲ。

第3章 検出された遺構と遺物

番号	種類 器種	検出 位置	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・器種・文様の特徴
13	土師器 壺	口縁～肩部 口径(21.0)器高(6.9) 底径 -	埋土	①砂粒 白色粒少量 ②酸化焰 硬質 ③にぶい褐色	口縁部上半にわずかな器曲部が見られる。 外面 口縁部は横ナデ。胴部は横・斜め方向の直削り。 内面 口縁部は横ナデ。指面底を覆す。以下は横ナデ。
14	土師器 壺	口縁～肩1/2 口径(13.0)器高 5.7 底径 -	床底	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③にぶい褐色	口縁部上半にわずかな器曲部が見られる。口縁部の器壁が厚い。 外面 口縁部は横ナデ。胴部は横方向の直削り。 内面 口縁部は横ナデ。以下は横ナデ。
15	土師器 壺	胴中～底部 口径 - 器高(10.0) 底径 6.6	+8	①砂粒少量 ②酸化焰 硬質 ③暗褐色	すばまり、径が小さい底部。 外面 斜め方向の直削り。 内面 横ナデ。
16	土師器 台付壺	台部片 口径 - 器高(2.8) 底径 -	埋土	①細砂 白色細砂 ②酸化焰 硬質 ③にぶい赤褐色	器壁に厚みをもつ台部。 外面 横方向のナデ。磨滅が著しい。 内面 底部はナデ。台部は横ナデ。
17	土製品 羽口	1/2 外径 7.5 内径 4.8 長さ 7.8	+8	①細砂 白色粒 ②差 ③にぶい黄褐色	2.5cm強ずつ溶融・還元・酸化の箇所に分かれる。スサが侵入している。
18	鉄製品 刀子	区一茎 長さ 8.0 幅 1.20 厚さ 0.45 重さ 5.67	+8		棟区がだらからではっきりしない。刃区は茎が堅むようになっている。表面はクラック状に割れが入っている。古代鉄と思われる。
19	鉄製品 器種不明 板状	不明 長さ 6.0 幅 2.3 厚さ 0.3 重さ 16.18	埋土		先端の形状。細くなる部分はねじれている。表面はクラック状に割れが入っている。古代鉄と思われる。
20	鉄製品 釘?	後端部欠 長さ 6.6 幅 - 厚さ - 重さ 9.89	床底		先端からやや太くなる形状。断面は方形。表面はクラック状に割れが入っている。古代鉄と思われる。
21	鉄製品 刀子	茎 長さ 1.7 幅 1.8 厚さ 0.4 重さ 0.94	埋土		断面が三角形になっている。表面はクラック状に割れが入っている。古代鉄と思われる。
22	鉄製品 釘?	両端欠 長さ 4.1 幅 - 厚さ - 重さ 4.65	埋土		断面は方形である。表面はクラック状に割れが入っている。古代鉄と思われる。

A区8号住居跡 (第30・31図 P L10・59)

位置 本住居跡はA区中央部南端にあり、871・-326グリッドに位置する。

重複 A区9号・12号掘立柱建物跡、A区13号住居跡、16号溝と重複している。

形状 本住居跡の形状は東西方向に長辺をもつ長方形である。その規模は東西方向4.95m、南北方向3.86mである。床面積は(15.29)m²である。

方位 N-99°-E

構造 本住居跡はA区13号住居跡を掘り込んでいる。また、本住居跡の床面下よりA区9号・12号掘立柱建物跡のピットが、西壁前及び竈近くから検出されている。A区16号溝は本住居跡を北から南東方向にかけて掘り込んでいる。

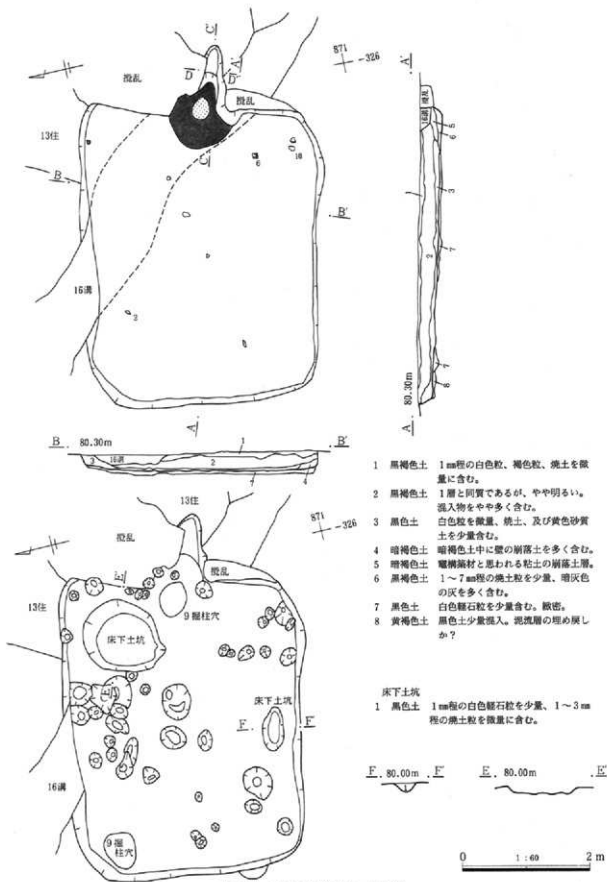
南壁面近くに床下土坑が検出された。その形状は楕円形で直径の短軸は33cm、長軸は70cm、深さは14cmを測る。この床下土坑から遺物は出土していない。

また、竈の左袖近くにも床下土坑と思われる穴が検出された。形状はほぼ円形で、直径110～135cm、深さは12cmを測る。やはり、遺物は出土していない。

また、本住居内から、周溝及び柱穴は検出されていない。

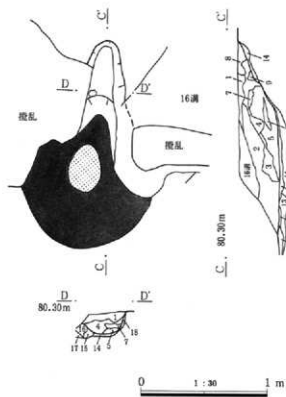
竈 竈は本住居跡の東壁面の中央部を掘り込んで造られている。攪乱及び16号溝により、壊されている。竈前の床面上に灰及び炭が集中している箇所がみられた。この竈の規模は煙道方向100cm、燃焼部幅47cmを測る。

出土遺物 床面・竈・掘り方面・埋土から土師器杯・壺、須恵器杯・塊、灰釉陶器碗・皿、羽口の破片、板棒状の鉄製品、碗形の鉄滓が出土している。土師器杯の中に火滓の痕跡が残るものもある。また、埋土から火を受けた痕跡のある石片も出土している。

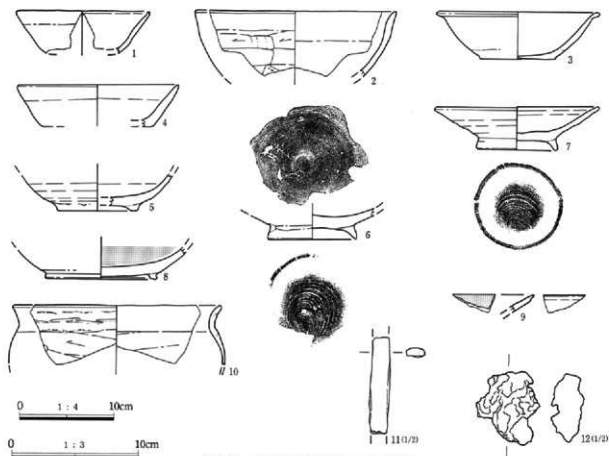


第30図 A区8号住居跡、掘り方

第3章 検出された遺構と遺物



- 電
- | | |
|---------|---|
| 1 黒褐色土 | 白色軽石粒をやや多く、1~7mm程の焼土粒を少量含む。 |
| 2 黒褐色土 | 1層の土に白色軽石粒を少量、1~10mm程の焼土粒をやや多く含む。土層中に粘土と焼土のブロックを含む。 |
| 3 黄褐色土 | 焼土を少量含んだ粘土層。 |
| 4 暗赤褐色土 | 炭を微量、3mm程の焼土粒を多く含んだ焼土層。 |
| 5 赤褐色土 | 20mm程の焼土ブロックを少量含んだ焼土層。 |
| 6 黒色土 | 炭層。 |
| 7 黒色土 | 白色軽石粒を少量含む。 |
| 8 暗褐色土 | 1mm程の焼土粒、1~4mm程の粘土粒を多く含む。焼土ブロック。 |
| 9 赤褐色土 | 焼土ブロック。 |
| 10 黒褐色土 | 白色軽石粒、及び焼土粒、炭を少量含む。緻密。 |
| 11 暗灰色土 | 白色軽石粒を少量、黄褐色土が多く混入。炭を少量含む。 |
| 12 暗灰色土 | 炭層に1~12mm程の焼土粒、灰白色の炭を多く含む。 |
| 13 黒色土 | 1~17mm程の焼土粒、1mm程の白色軽石粒を少量含んだ炭層。 |
| 14 黒褐色土 | 1mm程の白色軽石粒、及び1~3mm程の焼土粒を少量含む。 |
| 15 赤褐色土 | 1mm以下の焼土粒、及び5mm程の焼土粒を多く含む。 |
| 16 黒色土 | 1mm以下の焼土粒を多く含む。 |
| 17 黒色土 | 16層と同質だが、焼土粒の混入がやや多い。 |
| 18 黒褐色土 | 1mm以下の焼土粒を多く含む。 |



第31図 A区8号住居跡電、出土遺物

3. 奈良・平安時代の遺構と遺物

A区8号住居跡

番号	種類	残存 法 量(cm, g)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・器形・文様の特徴
1	土師器 罎	口縁部片 口径(10.3) 器高(3.3) 底径—	床直	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③にんじろ褐色	口縁部は直線的に外傾する。 外面 口縁部は横ナデ。以下はナデ。 内面 口縁部は横ナデ。以下はナデ調整。
2	土師器 鉢	口縁部片 口径(15.7) 器高(5.2) 底径—	床直	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③にんじろ褐色	内筒が立ち上がり、口縁部は外反する。 外面 口縁部は横ナデ。体部は横方向の直削り。 内面 口縁部は横ナデ。以下はナデ。重ね焼き直有り。
3	須恵器 罎	口縁~底部片 口径(12.4) 器高 3.7 底径(6.0)	埋土	①細砂 白色粒 ②還元焰 硬質 ③灰色	体部が丸みをもち、口縁部は強く外反する。轆轤器形。右回転糸切り。
4	須恵器 罎	口縁~底部片 口径 12.6 器高 3.3 底径(8.8)	掘り方	①細砂 ②還元焰 硬質 ③灰色	口縁部は直線的に外反する。底部に糸切り痕有り。 外面 口縁部は横ナデ。以下は轆轤器形後ナデ。 内面 口縁部は横ナデ。以下はナデ調整。
5	須恵器 罎	胴~底1/4 口径— 器高(2.8) 底径(6.0)	埋土	①細砂 ②還元焰 硬質 ③にんじろ褐色	胴部が丸る器形。轆轤器形。右回転糸切り。貼り付け高台。酸化焰焼成部分有り。
6	須恵器 罎	底部片 口径— 器高(2.4) 底径(6.8)	埋土	①細砂 ②還元焰 硬質 ③にんじろ褐色	胴部が丸る器形。轆轤器形。右回転糸切り。貼り付け高台。高台部に貼り付け時のものと思われる強いナデ有り。見込み部に線刻らしいもの有り。
7	須恵器 皿	ほぼ完形 口径 12.6 器高 3.5 底径 5.4	埋土	①細砂 ②還元焰 硬質 ③灰色	胴部が丸る器形、口縁部が外反する。轆轤器形。右回転糸切り。貼り付け高台。
8	灰釉陶器 甕	体~高台1/4 口径— 器高(2.6) 底径(7.8)	竈	①緻密 ②還元焰 硬質 ③灰色	胴部が丸る器形。轆轤器形。右回転糸切り。貼り付け高台。黒炭14号炭式期。内面のみ施釉。
9	灰釉陶器 皿	口縁部片 口径(10.0) 器高— 底径—	竈	①緻密 ②還元焰 硬質 ③灰色	口縁部に段をもつ。内面のみ施釉。
10	土師器 罎	口縁~肩部 口径(21.6) 器高(6.3) 底径—	床直	①細砂 白色粒少量 ②酸化焰 硬質 ③にんじろ褐色	胴部上半に最大径をもつ。口縁部の凹曲は弱い。 外面 口縁部は横ナデ。裏当たり痕が残る。胴部は横方向の直削り。 内面 口縁部は横ナデ。以下はナデ。
11	鉄製品 器種不明 板棒状	不明 長さ 5.1 幅 1.1 厚さ 0.4 重さ 5.61	埋土	断面は長方形である。表面はクラック状に割れが入っている。古代鉄と思われる。刀子の裏か。	
12	灰土	長さ 6.25 幅 5.0 厚さ 2.6 重さ 71.1	竈	全体的に赤褐色で覆われている。灰片や砂材等が入り込んでいない。磁石を近づけるとやや吸い付く。	

A区9号住居跡(第32・33図 P L11・59)

位置 本住居跡はA区中央部南端にあり、871・—315グリッドに位置する。本住居跡の近くにはA区10号・11号・12号掘立柱建物跡やA区8号・13号住居跡がある。

重複 なし。

形状 本住居跡は北壁面を掘りに掘り込まれているが、その形状はほぼ方形に近い。やや東西方向の辺が長い。その規模は東西方向3.42m、南北方向3.18mである。本住居跡の推定床面積は(9.46)㎡である。

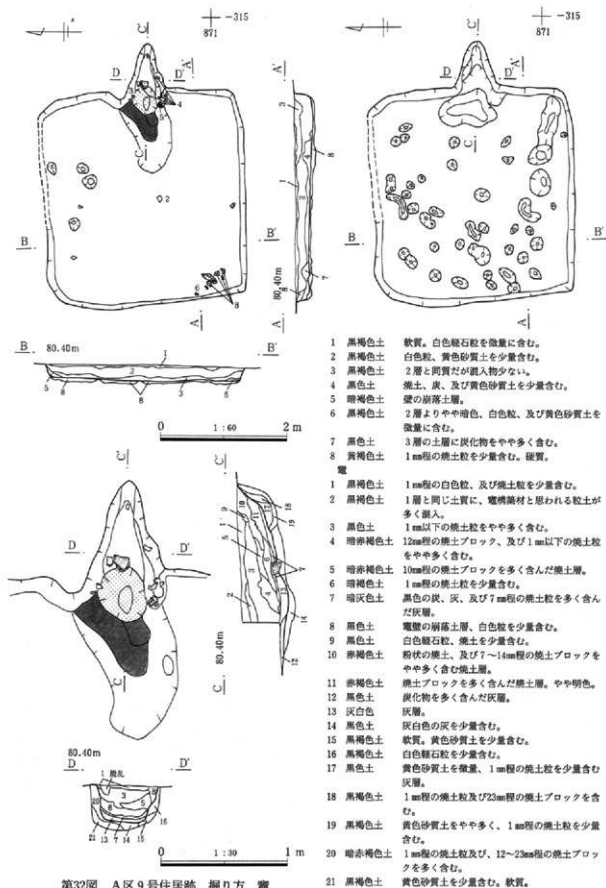
方位 N-87°-E

構造 本住居跡の床面は黄褐色土を主体に黒褐色土が混入した土できており、焼土粒も含む。全体的

に硬質である。床高は79.93mを測る。本住居跡の南西隅の床面から炭化材を含む遺物出土している。貯蔵穴・柱穴・周溝等は検出されていない。

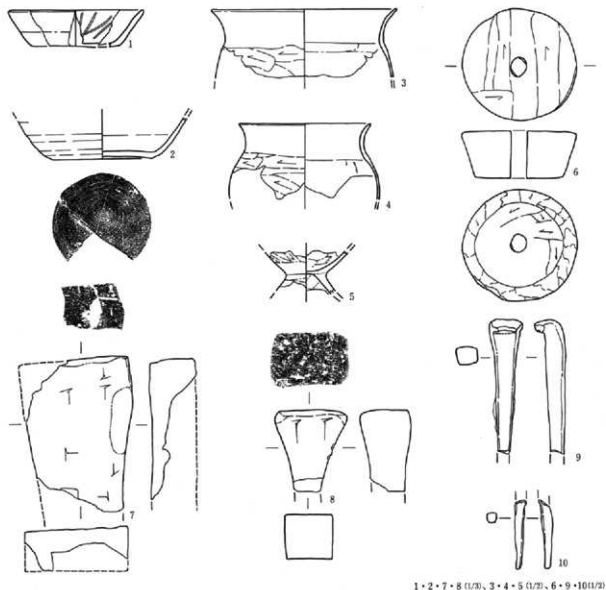
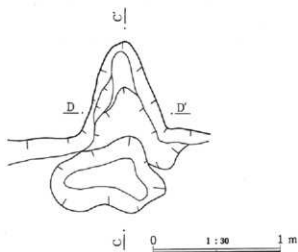
竈 竈は本住居跡の東壁面のほぼ中央部を掘り込んで造られている。竈内から支脚石として使用されたと思われる縦12.0cm・横9.3cm・厚さ5.5cm・重さ756.9gの粗粒輝石安山岩が出土している。この石は火を受けて、表面がはげている。また、竈の手前の床面から灰や炭が集中して検出された。掘り方面の調査では竈前の床面が土坑状になった。本住居跡の竈の規模は煙道方向100cm、燃焼部幅45cmを測る。

第3章 検出された遺構と遺物



第32図 A区9号住居跡、掘り方、電

出土遺物 床面の南西隅や住居及び竈の埋土から放射状の暗文が施された土師器杯・小型甕・台付甕・甕、須恵器杯、須恵質の紡錘車、磁石、釘（使用釘も含む）、炭化材が出土している。紡錘車は須恵質で寛削りの痕跡が残り、自然釉が掛かる。県内でも出土例はあまりないと思われる。また、取り上げられた炭化材は触ると壊れてしまうような脆い状態であったが、自然科学分析を依頼した。その結果については第4章4・5の本文を参照のこと。



第33図 A区9号住居跡竈掘り方、出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

A区9号住居跡

番号	種類 器種	残存 法 量(cm, g)	出土位置	①胎土②構成③色調	器形・整形・文様の特徴
1	土師器 坏	口縁~底部片 口径(10.4)器高 2.9 底径(7.0)	埋土	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③にぶい赤褐色	口縁部は直線的に外傾する。 外面 口縁部上半は横ナデ。底部は直削り。 内面 口縁部は横ナデ。以下はナデ調整。放射状の暗文あり。
2	須恵器 坏	体上部~底部片 口径 - 器高(3.11) 底径(7.8)	床直	①砂粒 白色粒 ②還元焰 硬質 ③灰色	直線的に立ち上がる。横軸整形。底部右面転糸切り後回転削り。
3	土師器 壺	口縁~肩部 口径(19.4)器高(7.2) 底径 -	甕	①細砂 白色粒 ②酸化焰 硬質 ③明赤褐色	胴部上半に最大径をもつ。口縁部の屈曲は弱い。 外面 口縁部は横ナデ。肩当たり底が残る。胴部は横方向の削り。 内面 口縁部は横ナデ。胴部は直ナデ。
4	土師器 壺	口縁~肩部 口径(13.8)器高(7.9) 底径 -	床直	①細砂 白色粒 ②酸化焰 硬質 ③にぶい赤褐色	胴部上半に最大径をもつ。口縁部の屈曲は弱い。 外面 口縁部は横ナデ。肩当たり底が残る。胴部は横方向の削り。 内面 口縁部は横ナデ。以下はナデ。
5	土師器 台付罌	底~台座片 口径 - 器高(4.5) 底径 4.2	甕	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③にぶい褐色	丸みをもって立ち上がる胴部。 外面 底部は縦・斜方向の削り。台座はナデ。 内面 底部、台座ともに直ナデ。
6	土師品 紡錘車	兜形 口径6.05 孔径4.8 孔径0.8 厚さ2.5 重さ114.9	埋土	①細砂 ②還元焰 硬質 ③灰色	須恵質の紡錘車で他の新種からの転用ではない。断面は厚台形。 上面・下面は藍ケズリ肌、側面は直ナデの底が残る。部分的に自然釉がついている。
7	石製品 砥石	欠損品 長さ12.3 幅 8.2 厚さ3.7 重さ320.9	床直	砥沢石	研磨主体は小形を研ぐ。金属だけでなく木、角などを研いだことも想定される。被熱を受け、色の変化あり。使用面は表・両側部の計3面。天の小口面の削り目あり。欠損時は旧時である。中砥。
8	石製品 砥石	欠損品 長さ(6.4) 幅 5.8 厚さ4.1 重さ172.0	床直	砥沢石	研磨主体は中形位を研ぐ。金属を研いだと想定される。使用面は表・裏・両側部の計4面。天の小口面の削り目あり。欠損時は旧時である。中砥。
9	鉄製品 釘	先端部欠 長さ7.2 幅 - 厚さ - 重さ17.90	埋土		後縁に向かって太くなる。一端を折り曲げて頭としている。断面は方形である。表面はクラック状に割れが入っている。古代鉄と思われる。
10	鉄製品 釘	先端部 長さ3.7 幅 - 厚さ - 重さ1.30	埋土		断面は方形である。表面はクラック状に割れが入っている。古代鉄と思われる。先端が曲がっており、使用されたものと思われる。

A区10号住居跡 (第34・35図 P L12・60)

位置 本住居跡はA区中央部にあり、880・-319グリッドに位置する。本住居跡の近くにはA区8号・13号住居跡、A区12号獨立柱建物跡がある。

重複 A区10号獨立柱建物跡と重複する。

形状 本住居跡は床面の多くの部分を攪乱により掘り込まれている。しかし、その形状は東西方向に長辺をもつ長方形になると思われる。その規模は東西方向4.78m、南北方向3.36mである。床面積は(14.36)㎡である。

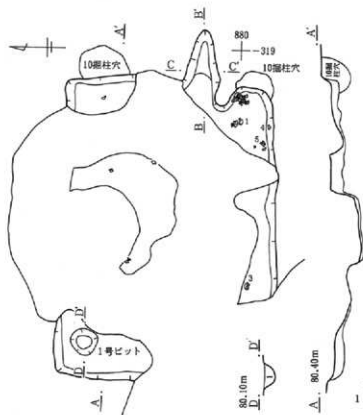
方位 N-92°-E

構造 本住居跡の北壁面、南西部及び多くの床面は攪乱によって、掘り込まれている。東壁面及びその付近の床下より、A区10号獨立柱建物跡のピットが検出されている。本住居跡の北西隅の床面から1号ピットが検出されている。このピットの平面形状は、

ほぼ円形で、径42~45cm・深さ18cmを測る。また、柱穴・周溝は検出されていない。

甕 甕は本住居跡の東壁面の南寄り掘り込んで造られている。左袖部は攪乱により掘り込まれているが、右袖は残存している。甕の規模は、煙道方向100.8cm、燃焼部幅40cmを測る。

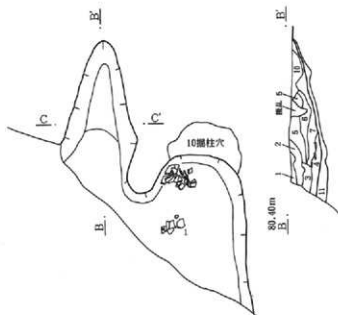
出土遺物 甕の右袖付近の床面及び住居の埋土から土師器壺、須恵器坏・皿、灰釉陶器皿が出土している。



1号ピット

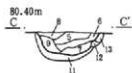
- 1 黒褐色粘質土 1～2mm程の白色軽石粒、10mm程の黄褐色土ブロックが混入。

0 1:50 2m



80.40m

80.40m



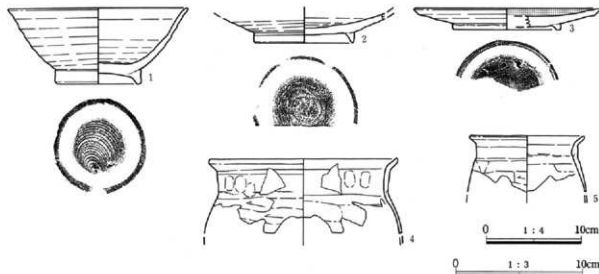
竈

- 1 暗褐色土 1mm程の白色軽石粒、及び1～3mm程の焼土粒を微量に含む。
 2 暗褐色土 1層と同質だが、1～7mm程の焼土粒、2～4mm程の粘土粒をやや多く含む。
 3 黒褐色土 1mm程の焼土粒、灰をやや多く含む。
 4 黒色土 1mm程の焼土粒を少量含む灰層。
 5 暗赤褐色土 1～7mm程の焼土粒、7mm程の粘土粒を多く含む。
 6 暗赤褐色土 5層と同質だが、焼土粒をやや多く含む。
 7 暗赤褐色土 7～9mm程の硬質の焼土粒、灰、及び暗灰色の灰を多く含む。
 8 暗褐色土 1～3mm程の焼土粒を少量含む。
 9 暗赤褐色土 1～3mm程の焼土粒、粘土粒及び灰色の灰を少量含む。
 10 黒褐色土 1～5mm程の焼土粒をやや多く、粘土粒を微量に含む。
 11 黒色土 1～9mm程の焼土粒、灰白色の灰、炭、白色軽石粒を少量含む。
 12 黒褐色土 11層と似ているが、焼土粒を多く含む。
 13 黒褐色土 1～3mm程の焼土粒を少量含む。

0 1:30 1m

第34図 A区10号住居跡、竈

第3章 検出された遺構と遺物



第35図 A区10号住居跡出土遺物

A区10号住居跡

番号	種類	残存量 (cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
1	須恵器 埴	口縁～底1/4 口径(13.9)器高 6.0 底径(6.0)	埋土	①砂粒 ②酸化焙 硬質 ③にぶい黄褐色	縁部が張り、口縁部がやや外反する。轆轤整形。右回転糸切り。貼り付け高台。
2	須恵器 皿	体～底部 口径 - 器高(2.4) 底径(7.4)	床直	①砂粒 白色粒 ②還元焙 硬質 ③灰青色	縁部が張り。轆轤整形。右回転糸切り後回転調整。
3	灰釉陶器 皿	口縁～底1/3 口径(14.4)器高 1.7 底径(7.8)	埋土	①積土 ②還元焙 硬質 ③灰青～にぶい黄褐色	底部に厚みをもつ。轆轤整形。高さ14号窯式跡。角高台。外面 底部は右回転糸切り後回転調整。内面 全体的に磨釉。
4	土師器 壺	口縁～肩1/3 口径(19.8)器高(7.9) 底径 -	床直	①細砂 白色細粒 ②酸化焙 硬質 ③明赤褐色	コの字状の口縁を有する。口縁部の筋曲強い。外面 口縁部は横ナデ。指跡が残る。胴部は横方向の盛り。内面 口縁部は横ナデ。指跡が残る。胴部はナデ。
5	土師器 壺	口縁～胴上部 口径(11.8)器高(5.9) 底径 -	埋土	①細砂 ②酸化焙 硬質 ③にぶい赤褐色	コの字状の口縁を有する。胴部上半の盛りが強い。外面 口縁部は横ナデ。胴部は横方向の盛り。内面 口縁部は横ナデ。胴部は長ナデ。

A区11号住居跡 (第36・37図 P L13・60・61)

位置 本住居跡はA区中央部にあり、887・-317グリッドに位置する。本住居跡の近くにはA区12号・18号住居跡がある。

重複 なし。

形状 本住居跡の形状は東西方向に長辺をもつ隅丸長方形である。その規模は東西方向3.72m、南北方向2.91mである。床面積は9.43m²である。

方位 N-100°-E

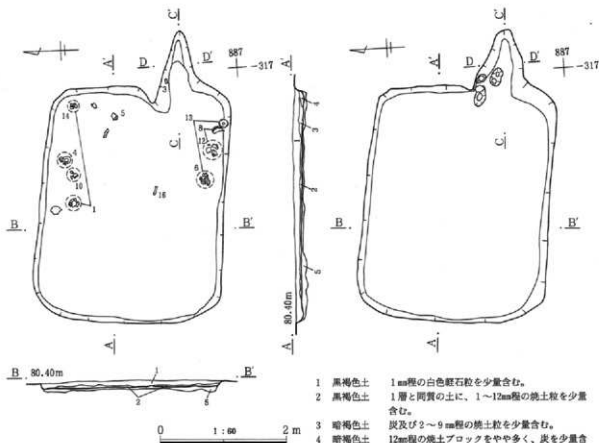
構造 床面は黒褐色土に褐色土粒がまざった土でできている。本住居跡からは柱穴・周溝・貯蔵穴等は

検出されていない。

竈 竈は本住居跡の東壁面のやや南寄りを掘り込んで造られている。左袖部分は良好に残存するが、右袖部分はほとんど残っていない。竈の規模は煙道方向110cm、燃焼部幅45cmを測る。

出土遺物 本住居跡の北壁面・南壁面付近の床面及び住居埋土から、土師器台付壺・壺、須恵器埴・長頸瓶、道具の一部分と思われる鉄製品が出土している。6の土師器壺は同一個体として、図上復元している。

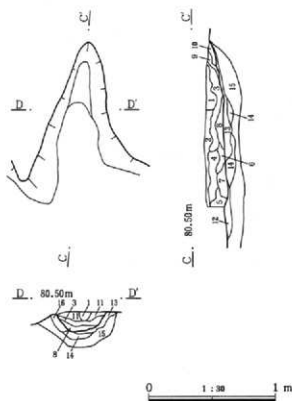
3. 奈良・平安時代の遺構と遺物



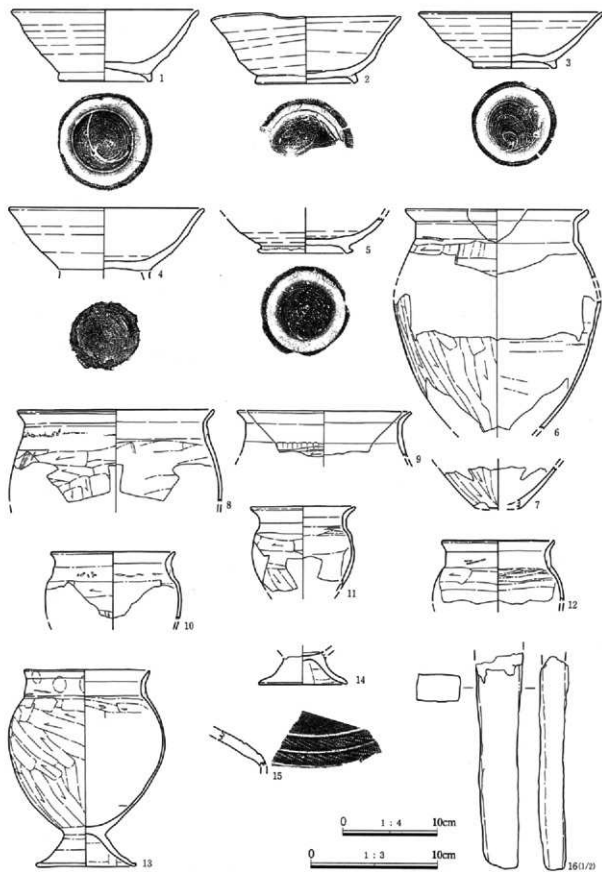
- | | |
|--------|------------------------------|
| 1 黒褐色土 | 1mm程の白色軽石粒を少量含む。 |
| 2 黒褐色土 | 1層と同質の土に、1~12mm程の焼土粒を少量含む。 |
| 3 暗褐色土 | 炭及び2~9mm程の焼土粒を少量含む。 |
| 4 暗褐色土 | 12mm程の焼土ブロックをやや多く、炭を少量含む。 |
| 5 黒褐色土 | 1mm程の白色軽石粒、1~2mm程の褐色砂粒を少量含む。 |

竈

- | | |
|---------|--|
| 1 赤褐色土 | 1~32mm程の焼土が多く混入。 |
| 2 黒褐色土 | 1mm程の粘土粒、1~7mm程の焼土粒、1mm程の白色軽石粒がやや多く混入。 |
| 3 暗褐色土 | 1~7mm程の焼土粒が多く、1mm程の白色軽石粒が少量混入。 |
| 4 暗褐色土 | 1~4mm程の粘土粒が多く、1~10mm程の焼土粒、1mm程の白色軽石粒が少量混入。 |
| 5 暗褐色土 | 1mm程の粘土粒、1mm程の焼土粒、白色軽石粒が少量混入。 |
| 6 暗灰色土 | 全体的に灰が混入した粘土層。 |
| 7 黒色土 | 1~3mm程の焼土粒、1mm程の粘土粒が微量混入。 |
| 8 暗赤褐色土 | 1~13mm程の焼土粒が多く、炭、白色軽石粒が少量混入。 |
| 9 暗褐色土 | 1mm程の焼土粒が少量混入。軟質。 |
| 10 黒色土 | 1~7mm程の焼土粒がやや多く、1mm程の白色軽石粒が少量混入。 |
| 11 暗褐色土 | 1~10mm程の焼土粒が少量混入。 |
| 12 暗褐色土 | 1~3mm程の焼土粒が少量混入した灰層。 |
| 13 暗褐色土 | 1~9mm程の焼土粒、1~7mm程の炭がやや多く混入。 |
| 14 暗褐色土 | 1~7mm程の焼土粒をやや多く、1~7mm程の炭を少量含んだ灰層。 |
| 15 黒色土 | 1mm程の白色軽石粒を少量、1~13mm程の焼土粒を少量含む。 |
| 16 赤褐色土 | 1~17mm程の焼土粒を多く含む。 |



第36図 A区11号住居跡、掘り方、竈



第37図 A区11号住居跡出土遺物

3. 奈良・平安時代の遺構と遺物

A区11号住居跡

番号	種類	残存 法 法 (cm, g)	出土位置	①土質②構成③色調	形状・装形・文様の特徴
1	須恵器 埴	口縁～底2/3 口径(14.6) 器高 5.6 底径 6.7	+6	①砂粒 ②還元焰 硬質 ③灰白色	胴部が張り、口縁部は外反する。口縁部外面と見込み部に墨書と思われる痕跡があるが、判読できず。縦輪整形。右回転未切り。 口縁部内面は、横ナデ。
2	須恵器 埴	口縁～底2/3 口径(15.0) 器高 5.6 底径 7.0	掘り方	①細砂 白色粒 ②還元焰 軟質 ③にぶい褐色	胴部が張り、口縁部は外反する。体部高台周辺は輪轆整形後回転調整。底部は未切り後ナデ。
3	須恵器 埴	口縁～底1/4 口径(14.2) 器高 4.4 底径 6.1	電	①細砂 1mm程度の粒子 ②還元焰 硬質 ③桃黄色	胴部の張りはやや弱い。口縁部は外反する。縦輪整形。右回転未切り。
4	須恵器 埴	口縁～底1/4 口径(15.3) 器高(4.9) 底径(7.0)	床直	①砂粒 ②還元焰 軟質 ③灰黄色	胴部の張りはやや弱い。口縁部は外反する。縦輪整形。内面は輪轆成形後横ナデ。
5	須恵器 埴	体～底部 口径 - 器高(2.8) 底径 6.8	床直	①細砂 赤褐色粒 ②還元焰 硬質 ③にぶい褐色	胴部が張る。縦輪整形。右回転未切り。高台は外周する。
6	土師器 甕	口縁～胴下部 口径(19.4) 器高(23.5) 底径 -	電	①砂粒 赤褐色粒 ②還元焰 硬質 ③明赤褐色	コの字状の口縁を有する。口縁部の屈曲強い。口縁に弱い凹縁有り。外面 口縁部は横ナデ。胴部は横・縦方向の瓦割り。内面 口縁部は横ナデ。胴部は置ナデ。
7	土師器 甕	底部 口径 - 器高(4.5) 底径 -	電	①砂粒 赤褐色粒 ②還元焰 硬質 ③明赤褐色	底部にむかってすぼまる。遺物6と同一の可能性あり。外面 縦・斜め方向の瓦割り。内面 ナデ。
8	土師器 甕	口縁～胴1/2 口径(20.6) 器高(9.7) 底径 -	床直	①細砂 ②還元焰 硬質 ③にぶい褐色	口縁部の屈曲が強い。口縁に弱い凹縁有り。胴部上半の張りが弱い。外面 口縁部は横ナデ。接合痕が有り。胴部は横・縦方向の瓦割り。内面 口縁部は横ナデ。胴部は置ナデ。
9	土師器 甕	口縁1/3 口径(18.3) 器高(4.8) 底径 -	埋土	①細砂 白色粒 ②還元焰 硬質 ③褐色	コの字状の口縁を有する。胴部上半の張りが強く、屈曲がやや弱い。外面 口縁部は横ナデ。胴部上半に階段状の瓦割り有り。内面 口縁部は横ナデ。
10	土師器 甕	口縁～胴1/2 口径(13.0) 器高(7.0) 底径 -	電	①砂粒 ②還元焰 硬質 ③褐色	コの字状の口縁を有する。口縁部上半の横ナデが強い。口縁部の中程で壁をもつようになっている。外面 口縁部は横ナデ。胴部は横・縦方向の瓦割り。内面 口縁部は横ナデ。
11	土師器 甕	口縁～胴部片 口径(11.0) 器高(8.9) 底径 -	掘り方	①細砂 ②還元焰 硬質 ③にぶい赤褐色	口縁部部に弱い凹縁を有するコの字状の口縁。外面 口縁部上半は強い横ナデ。胴部は横・斜め方向の瓦割り。内面 口縁部は横ナデ。胴部はナデ。
12	土師器 甕	口縁～胴部 口径(11.8) 器高(6.7) 底径 -	床直	①砂粒 ②還元焰 硬質 ③にぶい赤褐色	口縁部部に凹縁を有するコの字状の口縁。外面 口縁部は横ナデ。蓋の当たり痕有り。胴部は横方向の瓦割り。内面 口縁部は横ナデ。胴部上半は置ナデ。
13	土師器 台付甕	口縁～台4/5 口径 13.2 器高 20.8 底径 10.4	床直	①砂粒 ②還元焰 硬質 ③赤褐色	口縁部上半の屈曲はやや弱い。コの字状の口縁を有する。外面 口縁部は横ナデ。指痕痕有り。胴部は横・斜め方向の瓦割り。内面 口縁部は横ナデ。胴部上半は置ナデ。台部の顔は横ナデ。
14	土師器 台付甕	台部2/3 口径 - 器高(3.5) 底径 9.2	床直	①細砂 白色粒 ②還元焰 硬質 ③黒褐色	ラッパ状に広がる台部。外面 置ナデ。内面 横・縦方向の瓦割り。
15	須恵器 長頸瓶	胴部片 口径 - 器高 - 底径 -	埋土	①細砂 ②還元焰 硬質 ③灰色	3条の紋線の間斜め方向の刺突文が2段施文されている。
16	鉄製品 磨蝕不明 道具?	不明 長さ11.5 幅 2.5 厚さ 1.5 重さ84.89	床直		断面は長方形である。厚みがあり、重い。器縁は道具の一部と思われる。表面はクラック状に割れが入っている。古代鉄と思われる。

A区12号住居跡 (第38・39図 P L14・61)

位置 本住居跡はA区中央部にあり、889-322グリッドに位置する。本住居跡の近くにはA区11号住居跡がある。

重複 A区18号住居跡と重複している。A区18号住居跡の上面に本住居跡が造られている。

形状 本住居跡の形状は南北方向を長辺とする長方形である。その規模は東西方向2.86m、南北方向3.86mである。床面積は9.47㎡である。

方位 N-97°-E

構造 本住居跡の掘り方にあたる部分から、A区18

第3章 検出された遺構と遺物

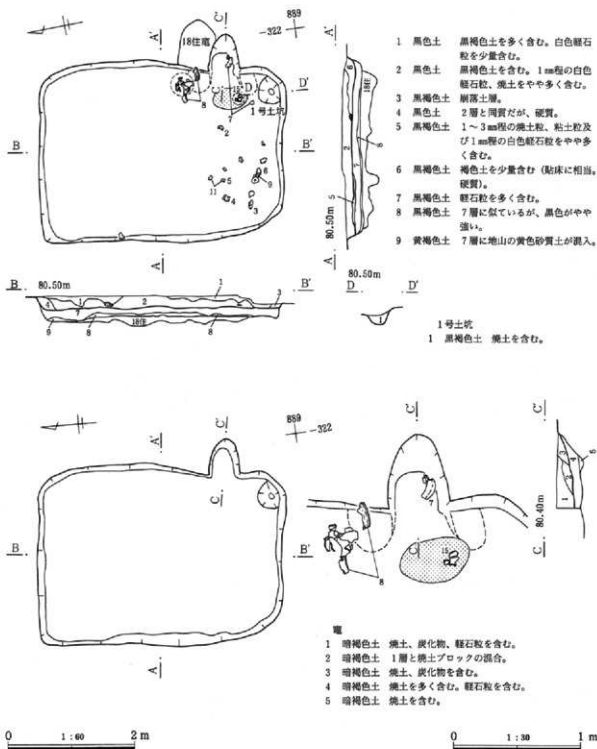
号住居跡が検出されている。

本住居跡の柱穴・周溝・貯蔵穴等は検出されていない。

竈 竈は本住居跡の東壁面のやや南寄り掘り込んで造られている。竈の両袖付近の壁面を観察すると

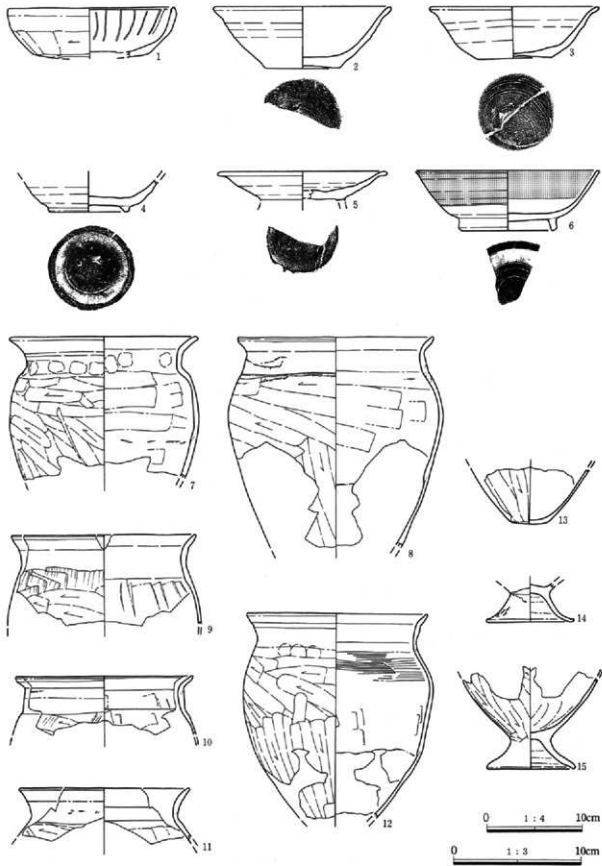
点線で書かれた箇所に存在したと思われる。竈の規模は、煙道方向61cm、燃焼部幅44cmを測る。

出土遺物 本住居跡の床面・掘り方面・埋土から土師器杯・台付壺・壺、須恵器杯・埴・皿、灰釉陶器碗が出土している。



第38図 A区12号住居跡、掘り方、竈

3. 奈良・平安時代の遺構と遺物



第39図 A区12号住居跡出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

A区12号住居跡

番号	種類 器種	残存 量(cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・彫形・文様の特徴
1	土師器 環	口縁～底3/4 口径 13.0 器高(3.9) 底径 9.0	電	①砂粒 白色細粒 ②酸化焰 硬質 ③にぶい赤褐色	口縁部は内湾気味に立ち上がり、肩部は直立する。 外面 口縁部上半は横ナデ。体部は横方向の寛削り。底部も寛削り。 内面 口縁部は横ナデ。放射状の暗文あり。
2	須恵器 環	口縁～底部 口径(13.8)器高 4.9 底径(5.8)	掘り方	①黒色・白色細粒 ②還元焰 硬質 ③灰白色	胴部がやや張り、口縁部でやや外反する。輪軸整形。右回転糸切り。
3	須恵器 環	口縁～底2/3 口径 13.2 器高 4.2 底径 5.8	床直	①細砂 ②還元焰 硬質 ③灰白色	胴部がやや張り、口縁部で強く外反する。輪軸整形。右回転糸切り。
4	須恵器 埴	体下部～底部 口径 - 器高(2.5) 底径 6.4	床直	①粗砂 赤褐色粒 ②やや酸化焰 硬質 ③にぶい黄褐色	胴部が張る。輪軸整形。右回転糸切り。高台周辺はナデ調整。
5	須恵器 皿	口縁～底1/5 口径(13.2)器高(2.2) 底径(6.3)	床直	①砂粒 ②やや酸化焰 軟質 ③にぶい黄褐色	胴部がやや張り、口縁部で強く外反する。口唇部に重み有り。輪軸整形。右回転糸切り。
6	灰釉陶器 甕	口縁～底1/5 口径(14.3)器高 4.8 底径(7.2)	床直	①緻密 ②還元焰 硬質 ③灰白色	胴部が張り、口縁部で僅かに外反する。内外面に灰釉の刷毛掛け有り。光ヶ丘1号窯式刷。
7	土師器 壺	口縁～胴1/3 口径(19.6)器高(15.1) 底径 -	床直	①粗粒 赤褐色粒 ②酸化焰 硬質 ③にぶい赤褐色	コの字状の口縁を有する。口縁部の屈曲が強い。 外面 口縁部は横ナデ。指環状有り。胴部は横・斜方向の寛削り。 内面 口縁部は横ナデ。指環状有り。以下は寛ナデ。
8	土師器 壺	口縁～胴1/2 口径 20.6 器高(22.2) 底径 -	電	①細粒 赤褐色粒 ②酸化焰 硬質 ③にぶい褐色	口縁部部に沈線有するコの字状の口縁。 外面 口縁部は横ナデ。接合部有り。胴部は横・斜・縦の寛削り。 内面 口縁部は横ナデ。以下は寛ナデ。
9	土師器 壺	口縁～肩部片 口径(19.3)器高(9.6) 底径 -	掘り方	①赤褐色・白色粒 ②酸化焰 硬質 ③明赤褐色	コの字状の口縁を有する。口縁部の屈曲はやや弱い。 外面 口縁部は横ナデ。胴部は横方向の寛削り。指環状の削り有り。 内面 口縁部は横ナデ。以下は寛ナデ。
10	土師器 壺	口縁～肩部片 口径(18.6)器高(6.2) 底径 -	床直	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③褐色	コの字状の口縁を有する。口縁部部に面をもつ。口縁の屈曲が強い。 外面 口縁部は横ナデ。指環状有り。胴部は斜方向の寛削り。 内面 口縁部上半は横ナデ。以下は寛ナデ。
11	土師器 壺	口縁片 口径(18.0)器高(5.7) 底径 -	床直	①細砂 白色細粒 ②酸化焰 硬質 ③にぶい褐色	コの字状の口縁を有する。口縁部上半の外反が弱い。 外面 口縁部は横ナデ。胴部は横方向の寛削り。 内面 口縁部は横ナデ。以下は寛ナデ。
12	土師器 壺	口縁～胴2/3 口径 19.1 器高(21.6) 底径 -	電	①粗砂 赤褐色粒 ②酸化焰 硬質 ③褐色	コの字状の口縁を有する。口縁部上半に凹線を有する。 外面 口縁部は横ナデ。指環状有り。胴部は斜・横・縦の寛削り。 内面 口縁部は横ナデ。以下は寛ナデ。
13	土師器 壺	底部 口径 - 器高(6.9) 底径 4.0	埋土	①細砂 赤褐色粒 ②酸化焰 硬質 ③褐色	底部ですばまる。 外面 胴部は縦方向の寛削り。 内面 ナデ。
14	土師器 台付壺	台部 口径 - 器高(4.1) 底径(8.8)	床直	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③灰褐色	ラッパ状に開く台部。 外面 ナデ。 内面 ナデ。
15	土師器 台付壺	底～台1/2 口径 - 器高(10.9) 底径(9.0)	電	①砂粒 赤褐色粒 ②酸化焰 硬質 ③にぶい赤褐色	底部ですばまり、ラッパ状の台が付く。 外面 胴部は斜・縦方向の寛削り。台部は横ナデ。他はナデ。 内面 台部は横ナデ。

A区13号住居跡(第40図 P.L14・62)

位置 本住居跡はA区中央部南端にあり、872・-323グリッドに位置する。本住居跡の近くにはA区10号住居跡がある。

重複 A区8号住居跡、A区12号掘立柱建物跡、A区16号溝と重複している。

形状 本住居跡は大半を覆乱及びA区8号住居跡によって掘り込まれているので、その形状ははっきり

しない。しかし、周囲の住居跡の形状から、本住居跡も東西方向を長辺とする長方形であろうと推定できる。

方位 N-92°-E(他の住居跡と同様に東壁面に竈が造られていたと想定した場合)

構造 本住居跡はA区16号溝に掘り込まれ、12号掘立柱建物跡のピットを掘り込んでいる。柱穴・周溝

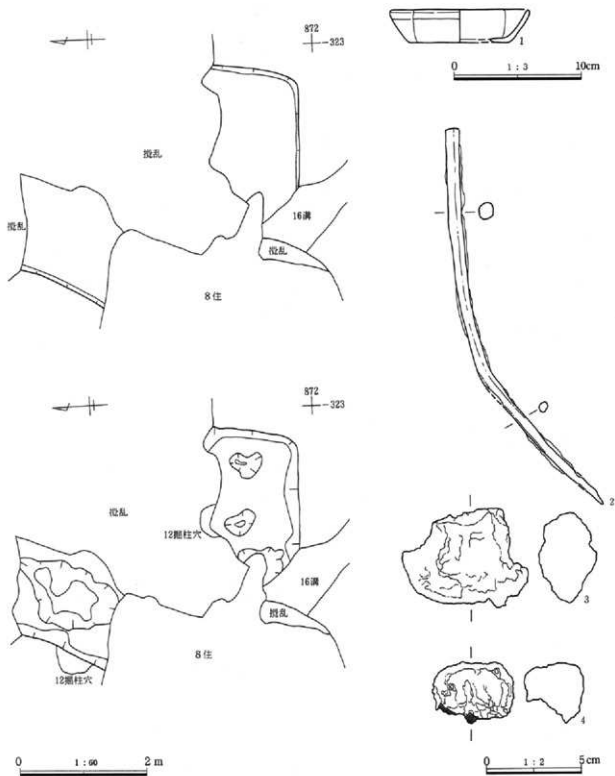
3. 奈良・平安時代の遺構と遺物

・貯蔵穴等は検出されていない。

竈 攪乱のため、竈の位置を確認することができなかった。

出土遺物 住居埋土及び掘り方から土師器環、椀

形の鉄滓、棒状の鉄製品が出土している。



第40図 A区13号住居跡、掘り方、出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

A区13号住居跡

番号	種類 種類	残 存 量 (cm, g)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
1	土師器 環	口縁～底部 口径(11.8)器高 2.6 底径(7.8)	掘り方	①砂粒 白色粒少量 ②酸化焙 硬質 ③にぶい赤褐色	口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。 外面 口縁部は横ナデ。以下はナデ。底部は掘削り。 内面 口縁部は横ナデ。以下はナデ。
2	鉄製品 楕円不明 棒状	不明 長さ22.4 幅 一 厚さ 一 重さ 15.45	掘り方	先細りの形状をしている。断面は方形に近い。輪か?表面はクラック状に割れが入りこんでいて、古代鉄と思われる。	
3	鉄滓 楕円形棒	長さ7.8 幅 9.9 厚さ 4.6 重さ293.1	埋土	平面形は丸みをもつ。表面に粒が集まったような部分と小さな穴がある部分が見える。5mm程度の小石が入り込んでいる。全体的に褐色土に覆われている。	
4	鉄滓	長さ4.9 幅 5.4 厚さ 5.5 重さ127.1	掘り方	外形は箱形である。ところどころ泥や石が入り込んでいる。	

A区14号住居跡 (第41・42図 P L15・62)

位置 本住居跡はA区の東部南端にあり、879・ー294グリッドに位置する。本住居跡の近くにはA区15号・16号・23号住居跡がある。

重複 なし。

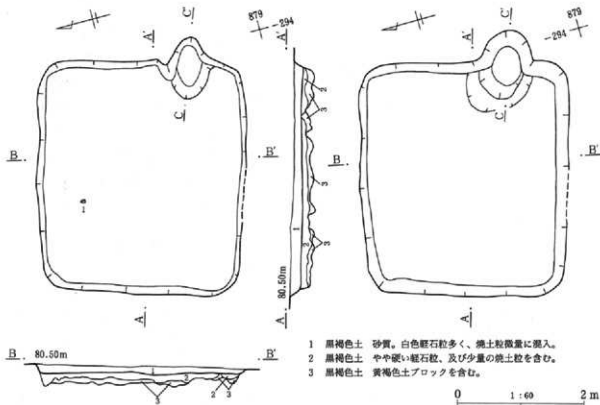
形状 本住居跡の形状は、東西方向を長辺とする長方形である。その規模は東西方向3.68m、南北方向3.29mである。床面積は10.41㎡である。

方位 N-105°-E

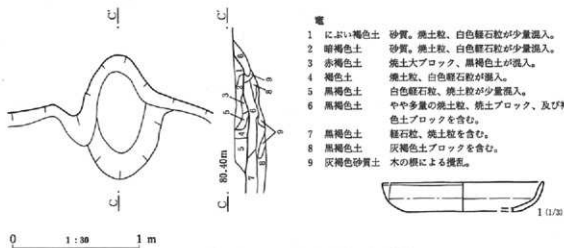
構造 埋土は軽石粒を含む黒褐色土である。柱穴・周溝・貯蔵穴等は検出されていない。

竈 竈は本住居跡の東壁面のやや南寄り掘り込んで造られている。竈の右袖は検出できなかったが、左袖は残存していた。竈の規模は煙道方向59cm、燃燒部幅45cmを測る。

出土遺物 出土した遺物の量は少なく、住居埋土から土師器環が出土している。



第41図 A区14号住居跡、掘り方



第42図 A区14号住居跡、出土遺物

A区14号住居跡

番号	種類	残存法	残存量(cm)	出土位置	①粘土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
1	土師器 環	口縁~底1/5 口径(12.5)器高 2.3 底径(9.0)		埋土	①細砂 ②酸化褐 硬質 ③におい褐色	口縁部はやや内湾気味に外傾する。肩部はやや外反する。 外面 □口縁部は横ナデ。以下はナデ。底部は凹削り。 内面 □口縁部は横ナデ。以下はナデ。

A区15号住居跡(第43・44図 P L16・62)

位置 本住居跡はA区の東部南端にあり、884・-290グリッドに位置する。本住居跡の近くにはA区14号・16号・23号住居跡がある。

重複 なし。

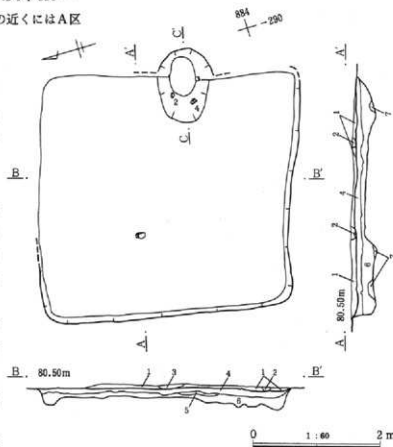
形状 本住居跡の形状は、南北方向を長辺とする長方形である。その規模は東西方向3.90m、南北方向4.08mである。床面積は14.03m²である。

方位 N-108°-E

構造 埋土の堆積が薄く、すぐに床面になる。柱穴・周溝・貯蔵穴等は検出されていないが、掘り方調査のおり、中央部よりやや北側に少し高いテラス状のところを検出された。

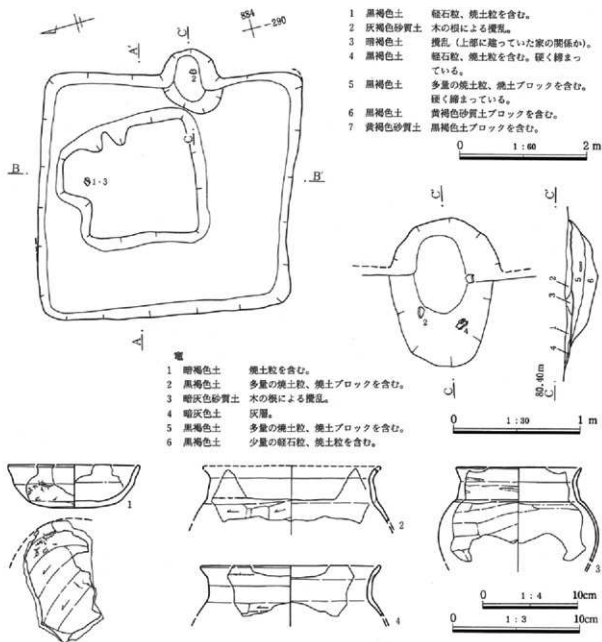
竈 竈は本住居跡の東壁面のやや南寄りを掘り込んで造られている。両袖、煙道部の残りが余りよくない。電の規模は煙道方向49cm、燃焼部幅75cmを測る。

出土遺物 本住居跡の竈や掘り方面から土師器環・甕が出土している。



第43図 A区15号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



第44図 A区15号住居跡掘り方、竈、出土遺物

A区15号住居跡

番号	種類 器種	残存 法 量(cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・器種・文様の特徴
1	土師器 罎	口縁～底部 口径(10.2)器高 3.3 底径 -	掘り方	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③によい赤褐色	口縁部はやや内湾気味に外傾する。底部は外反する。 外面 口縁部は横ナデ。以下はナデ。底部は寛周り。 内面 口縁部は横ナデ。以下はナデ。
2	土師器 罎	頸～肩部片 口径 - 器高(5.3) 底径 -	掘り方	①細砂 赤褐色粒 ②酸化焰 硬質 ③赤褐色	コの字状の口縁を有する。口縁部の屈曲がやや弱い。 外面 口縁部は横ナデ。接合痕残る。胴部は横方向の寛周り。 内面 口縁部は横ナデ。以下はナデ。
3	土師器 罎	口縁～肩部 口径(13.1)器高(9.9) 底径 -	掘り方	①砂粒 赤褐色粒 ②酸化焰 硬質 ③明赤褐色	コの字状の口縁を有する。胴部上平の張り強い。 外面 口縁部は横ナデ。胴部は横方向の寛周り。 内面 口縁部は横ナデ。以下は横ナデ。
4	土師器 罎	口縁～肩部片 口径(18.8)器高(5.4) 底径 -	竈	①砂粒 ②酸化焰 硬質 ③によい褐色	コの字状の口縁を有する。口縁部の屈曲が弱い。 外面 口縁部は横ナデ。接合痕残る。胴部は横方向の寛周り。 内面 口縁部は横ナデ。以下はナデ。

A区16号住居跡 (第45・46図 P L16・62)

位置 本住居跡はA区の東部南端にあり、884・一298グリッドに位置する。本住居跡の近くにはA区14号・15号・23号住居跡がある。

重複 なし。

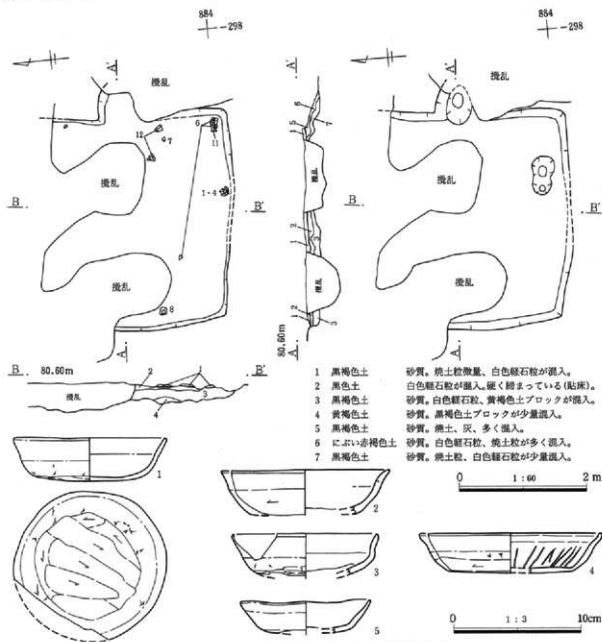
形状 本住居跡は、北壁面、北東部、床面の多くの部分を攪乱に掘り込まれているので正確な形状は把握できないが、南北方向の壁の様子から方形に近いのではないと思われる。東西方向は3.36mを測る。

方位 N-96°-E

構造 床面の多くを攪乱により掘り込まれている。本住居跡から柱穴・周溝・貯蔵穴等は検出されていない。

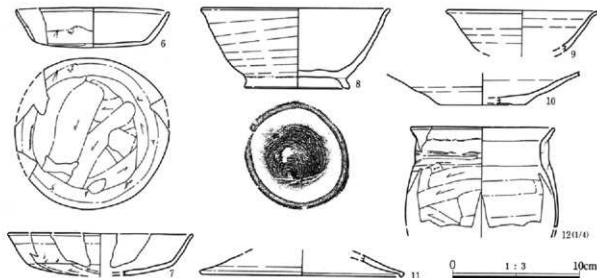
竈 竈は本住居跡の東壁面の中央部を掘り込んで造られている。竈は攪乱に掘り込まれていて、残存がよくない。左袖付近が検出されただけである。

出土遺物 残存する床面・掘り方面・埋土から土師器・土師器・甕、須恵器・皿・蓋が出土している。



第45図 A区16号住居跡、掘り方、出土遺物(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第46図 A区16号住居跡出土遺物(2)

A区16号住居跡

番号	種類 器種	現 存 量 (cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
1	土師器 杯	口径～底3/4 口径 11.9 器高 3.4 底径 7.8	床直	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③によい赤褐色	口縁部はやや内湾気味に外傾する。 外面 口縁部は横ナゲ。底部は寛削り。 内面 口縁部は横ナゲ。以下はナゲ。
2	土師器 杯	口径1/4 口径(13.3)器高 3.5 底径 -	埋土	①砂粒 ②酸化焰 硬質 ③赤褐色	口縁部はやや内湾気味に外傾し、端部は外反する。 外面 口縁部は横ナゲ。以下は寛削り。 内面 口縁部は横ナゲ。以下はナゲ。
3	土師器 杯	口径～底部 口径 11.3 器高(3.3) 底径 -	埋土	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③によい赤褐色	口縁部はやや内湾気味に外傾し、中程で外反する。 外面 口縁部は横ナゲ。底部は寛削り。 内面 口縁部は横ナゲ。以下はナゲ。
4	土師器 杯	口径～底1/4 口径(14.4)器高 3.1 底径(10.0)	床直	①砂粒 白色粒少量 ②酸化焰 硬質 ③によい赤褐色	口縁部はやや内湾気味に外傾し、端部は直立する。 外面 口縁部は横ナゲ。底部は寛削り。中程に未調整部有り。 内面 口縁部は横ナゲ。放射状の暗文有り。
5	土師器 杯	口径1/5 口径(10.2)器高(2.5) 底径 -	埋土	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③によい赤褐色	口縁部はやや内湾気味に外傾する。内外面共に磨減が著しい。 外面 口縁部は横ナゲ。底部は寛削り後ナゲ。 内面 口縁部は横ナゲ。以下はナゲ。
6	土師器 杯	ほぼ完形 口径 11.9 器高 3.1 底径 9.0	床直	①細砂 白色粒少量 ②酸化焰 硬質 ③によい褐色	口縁部はやや内湾気味に外傾する。 外面 口縁部は横ナゲ。底部は寛削り。 内面 口縁部は横ナゲ。以下はナゲ。
7	土師器 杯	口径～底1/2 口径(14.6)器高(3.4) 底径 -	掘り方	①砂粒 ②酸化焰 硬質 ③によい赤褐色	口縁部は直線的に外傾し、端部で外反する。 外面 口縁部は横ナゲ。底部は寛削り。中程に未調整部有り。 内面 口縁部は横ナゲ。以下はナゲ。
8	須恵器 塊	口径～底3/4 口径 14.8 器高 6.3 底径 7.0	床直	①粗砂 1～5mmの小石 ②還元焰 硬質 ③灰色	腹部がやや張り、口縁部でやや外反する。縦壺整形。右回転糸切り。高台部に接合痕残る。
9	須恵器 塊	口径部 口径(11.8)器高(3.2) 底径 -	埋土	①粗砂 1mm程度の粒子 ②還元焰 硬質 ③暗灰色	腹部が張り、口縁部で外反する。縦壺整形。右回転糸切り。口縁部は横ナゲ。
10	須恵器 皿	体～底部 口径 - 器高(2.7) 底径(6.8)	床直	①砂粒 ②還元焰 硬質 ③灰褐色	高台を有しない皿と思われる。内外面共に縦壺整形後ナゲ。右回転糸切り。
11	須恵器 蓋	口径1/6 口径(15.9)器高(1.7) 底径 -	床直	①細砂 ②やや酸化焰 硬質 ③内面 黒褐色 外面 によい黄褐色	やや直線的に開く。返しは内傾する。縦壺整形。
12	土師器 奘	口径～肩2/3 口径(15.0)器高(10.5) 底径 -	床直	①砂粒 ②酸化焰 硬質 ③褐色	コの字状の口縁を有する。口縁部の屈曲、胴部の張りが強い。 外面 口縁部は横ナゲ。接合痕残る。胴部は横・斜方向の寛削り。 内面 口縁部は横ナゲ。以下はナゲ。

A区17号住居跡 (第47・48図 P.L17・63)

位置 本住居跡はA区の東部北端にあり、900・-287グリッドに位置する。本住居跡の北側は調査区外にあたり調査することができなかった。本住居跡の近くにはA区15号住居跡がある。

重複 なし。

形状 本住居跡の北側部分は調査ができなかったが、東西方向、南北方向の長さの関係をみると、ほぼ方形に近い形状ではないかと思われる。調査できた部分で計測した本住居跡の規模は東西方向3.80m、南北方向2.40mを測る。

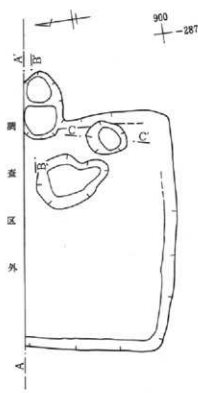
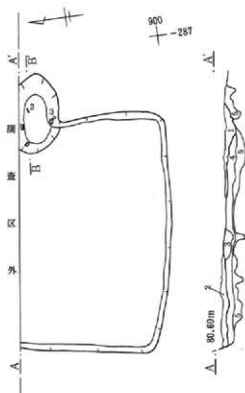
方位 N-101°-E

構造 本住居跡の床面は焼土の混じる黒褐色土を主体とした貼り床になっている。また、竈の右袖近く

に、形状が楕円形の貯蔵穴が検出された。この貯蔵穴の径は52~65cm、深さは54cmを測る。埋土は黄褐色土の混じる黒褐色土である。また竈の正面からは楕円形に近い床下土坑も検出されている。柱穴、周溝は検出されなかった。

竈 竈は本住居跡の東壁面の中央部を掘り込んで造られていると思われる。竈は掘り方面に近い状態で残存していた。竈の規模は煙道方向94cm、燃焼部幅60cmを測る。

出土遺物 本住居跡の竈から土師器坏・須恵器坏・埴が出土している。土師器坏には放射状の暗文が施されている。



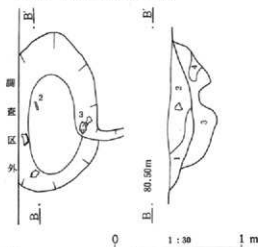
- 1 黒褐色土 砂質。白色軽石粒少量、焼土粒が多く混入。
- 2 黒褐色土 砂質。白色軽石粒少量、20mm程の焼土粒がブロック状に混入。
- 3 黒褐色土 砂質。白色軽石粒少量、粘土の土が攪拌されていると思われる。
- 4 黒褐色土 白色軽石粒混入。黄褐色砂、及び焼土粒の混入、硬く締まっている。粘床と思われる。
- 5 黒褐色土 黄褐色砂の混入。



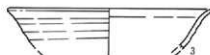
0 1:60 2m

第47図 A区17号住居跡、掘り方

第3章 検出された遺構と遺物



- 電
- 1 黒褐色土 やや多量の焼土粒を含む。
 - 2 黒褐色土 1層よりやや明るい。多量の焼土粒、焼土ブロックを含む。
 - 3 黒褐色土 やや多量の焼土粒及び、黄褐色砂質土ブロックを含む。
 - 4 黒褐色土 黄褐色砂質土ブロックを含む。



0 1:3 10cm

第48図 A区17号住居跡竈、出土遺物

A区17号住居跡

番号	種類 器種	残存 量(cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・器形・文様の特徴
1	土器 碗	口縁～底1/5 口径(13.8)器高 3.3 底径 -	竈	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③明赤褐色	口縁部は直線的に外傾し、端部でやや内湾する。 外面 口縁部は横ナデ。底部は底周りに。中程に束調整部有り。 内面 口縁部は横ナデ。放射状の暗文有り。
2	須恵器 碗	体～底部 口径 - 器高(1.7) 底径 7.6	竈	①砂粒 ②酸化焰 硬質 ③に黄褐色	胴部がやや張り。横楕圆形。右回転糸切り。
3	須恵器 埴	口縁片 口径(16.0)器高(5.2) 底径 -	竈	①細砂 ②還元焰 硬質 ③灰色	胴部がやや張り、口縁部で外反する。横楕圆形。右回転糸切り。

A区18号住居跡 (第49・50図 P L14・63)

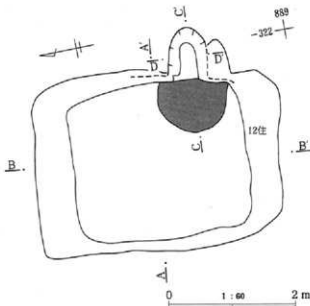
位置 本住居跡はA区中央部にあり、889・-322グリッドに位置する。本住居跡の近くにはA区11号住居跡がある。

重複 A区12号住居跡と重複している。本住居跡の上面にA区12号住居跡が造られている。

形状 本住居跡の形状は南北方向を長辺とする長方形である。その規模は東西方向2.47m、南北方向2.79mである。床面積は6.45m²である。

方位 N-95°-E

構造 A区12号住居跡のすぐ下から本住居跡の床面が検出されている。床面は黄褐色土を含む黒色土でつくられている。また、竈の前の床面では焼土が集中する箇所が検出された。床面からは柱穴・周溝・貯蔵穴等は検出されていない。



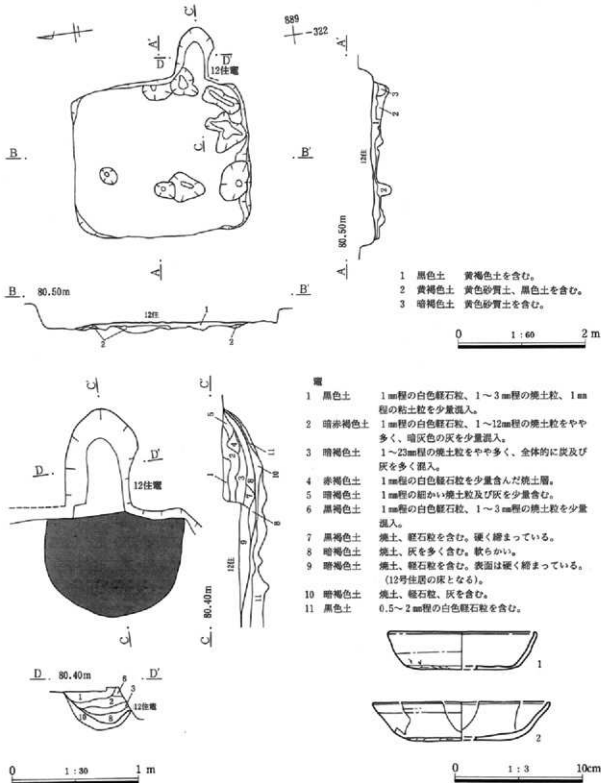
第49図 A区18号住居跡

3. 奈良・平安時代の遺構と遺物

竈 竈は本住居跡の東壁面のやや南寄りを掘り込んで造られている。A区12号住居跡の竈に右側の壁が壊されている。竈の規模は煙道方向77cm、燃焼部幅

59cmを測る。

出土遺物 本住居跡の竈から土師器片が出土している。



第50図 A区18号住居跡掘り方、竈、出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

A区18号住居跡

番号	種類 器 種	規 格 法 寸 重 (cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
1	土師器 坏	口縁～底1/3 口径(11.5)器高 3.0 底径 —	竈	①細砂 ②酸化焙 硬質 ③褐色	口縁部は直線的に外傾し、端部でやや内湾する。 外面 □縁部は横ナデ。底部は寛削り。中程に未調整部有り。 内面 □縁部は横ナデ。
2	土師器 坏	口縁～底部 口径(13.8)器高 3.0 底径 —	竈	①細砂 白色粒少量 ②酸化焙 硬質 ③にぶい赤褐色	口縁部は直線的に外傾し、端部で内湾する。 外面 □縁部は横ナデ。以下はナデ。底部は寛削り。 内面 □縁部は横ナデ。

A区20号住居跡 (第51・52図 P L.18・20・63)

位置 本住居跡はA区東部にあり、882・ー303グリッドに位置する。本住居跡の近くにはA区16号住居跡がある。

重複 A区24号住居跡と重複している。A区24号住居跡の上面に本住居跡が造られている。

形状 本住居跡の南壁面は擾乱によって、掘り込まれている。また、西壁は検出できなかった。その形状はやや東西方向が長辺となるがほぼ方形と思われる。本住居跡の規模は東西方向3.55m、南北方向3.50mである。床面積は10.22㎡である。

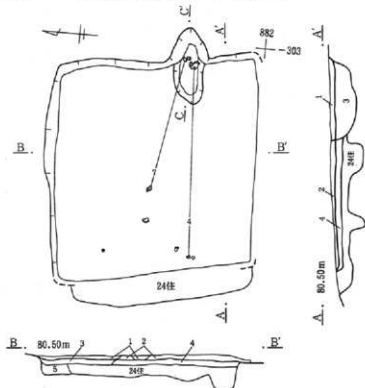
方位 N-87°-E

構造 本住居跡は擾乱のためか、埋土の堆積が薄く、東から西に行くほど浅い。そのため、西壁を検出することができなかった。床面から柱穴・周溝・貯蔵穴等は検出されていない。掘り方面の調査で、竈の左袖部分が崩れたものと思われる高まりを検出した。

竈 竈は本住居跡の東壁面のやや南寄り掘り込んで造られている。床面の高さでは、両袖を確認することができなかった。竈の前の掘り込みがやや長い。竈内から土器が出土している。竈の規模は煙道方向60cm、燃焼部幅50cmを測る。

出土遺物 竈・掘り方面から土師器埴・坏・壺、須恵器坏・大甕が出土している。発掘調査時に本住居跡の床面より出土したとされた須恵器の長頸壺及び緑釉陶器の碗は、整理作業時において本住居跡と

A区24号住居跡の平面図等を再検討し、取り上げられた標高を吟味した結果、A区24号住居跡の遺物とするのが妥当ではないかと考え、本書においてはそのように掲載した。また竈内から出土した土師器埴は、竈の構築の際に転用して使われた可能性がある。古墳時代の遺構外遺物として掲載した。

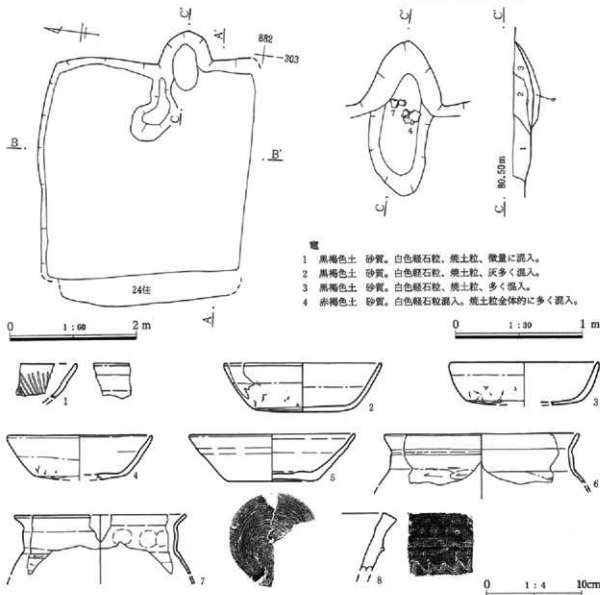


- 1 黒褐色土 砂質。強く崩れやすい樹木の根によって擾乱されている。
- 2 黒褐色土 砂質。白色軽石粒が少量混入。
- 3 黒褐色土 1層の土に白色軽石粒が混入。
- 4 黒褐色土 砂質。白色軽石粒、焼土粒が少量混入。20号住居の粘床。強く踏まっている。
- 5 にぶい黄褐色土 砂質。白色軽石粒、黒褐色土ブロックが多く混入。

0 1:60 2 m

第51図 A区20号住居跡

3. 奈良・平安時代の遺構と遺物



- 電
- 1 黒褐色土 砂質。白色軽石粒、焼土粒、微量に混入。
 - 2 黒褐色土 砂質。白色軽石粒、焼土粒、灰多く混入。
 - 3 黒褐色土 砂質。白色軽石粒、焼土粒、多く混入。
 - 4 赤褐色土 砂質。白色軽石粒混入。焼土粒全体的に多く混入。

第52図 A区20号住居跡掘り方、甕、出土遺物

A区20号住居跡

番号	甕 類 器 種	残 存 法 量 (cm)	出土位置	①胎土②酸化③色調	器形・器形・文様の特徴
1	土師器 坏	口縁片 口径 - 器高 (2.7) 底径 -	掘り方	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③によい赤褐色	口縁部はやや内両気味に外傾する。 外面 口縁部は横ナゲ。底部は寛削り。中腹に未調整部有り。 内面 口縁部は横ナゲ。放射状の暗文有り。
2	土師器 坏	口縁~底部 口径 12.3 器高 3.8 底径 (7.9)	掘り方	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③によい褐色	口縁部はやや内両気味に外傾する。 外面 口縁部は横ナゲ。底部は寛削り。中腹に未調整部有り。 内面 口縁部は横ナゲ。以下はナゲ。
3	土師器 坏	口縁~底1/4 口径 (11.6) 器高 (3.3) 底径 (9.0)	埋土	①細砂 ②酸化焰 軟質 ③明赤褐色	口縁部はやや内両気味に外傾し、端部は直立する。 外面 口縁部は横ナゲ。底部は寛削り。中腹に未調整部有り。 内面 口縁部は横ナゲ。
4	土師器 坏	口縁~底1/2 口径 11.3 器高 3.5 底径 -	掘り方	①細砂 白色粒 ②酸化焰 硬質 ③によい褐色	口縁部はやや内両気味に外傾する。 外面 口縁部は横ナゲ。底部は寛削り。中腹に未調整部有り。 内面 口縁部は横ナゲ。以下はナゲ。
5	須恵器 坏	口縁~底1/6 口径 (12.9) 器高 3.6 底径 (7.0)	埋土	①細砂 白色顆粒 ②酸化焰 硬質 ③黄灰色	口縁部は直線的に外反する。輪縁整形。右回転糸切り。

第3章 検出された遺構と遺物

番号	種類 器種	残存 量(cm)	出土位置	①治土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
6	土師器 壺	口縁部片 口径 20.4 器高(5.3) 底径 -	埋土	①砂粒 ②酸化焙 硬質 ③にぶい赤褐色	コの字状の口縁を有する。口縁部の屈曲がやや弱い。 外面 口縁部は横ナデ。胴部は横方向の瓦雨り。 内面 口縁部は横ナデ。以下はナデ。
7	土師器 壺	口縁~胴部片 口径(18.0)器高(6.3) 底径 -	竈	①細砂 ②酸化焙 硬質 ③明赤褐色	コの字状の口縁を有する。口縁部の屈曲が強い。 外面 口縁部は横ナデ。胴部は横方向の瓦雨り。 内面 口縁部は横ナデ。指面痕残る。以下はナデ。
8	須恵器 大甕	口縁部片 口径 - 器高 - 底径 -	埋土	①砂粒多量 ②還元焙 硬質 ③灰色	口縁直下には一条の隆帯が貼付されている。 外面 口縁部部に自然粘着する。板状文有り。 内面 口縁部に自然粘着する。

A区21号住居跡 (第53図 P L19)

位置 本住居跡はA区の東部の南端にあり、876・-308グリッドに位置する。本住居跡の近くに、A区11号掘立柱建物跡、A区24号・25号溝がある。

重複 なし。

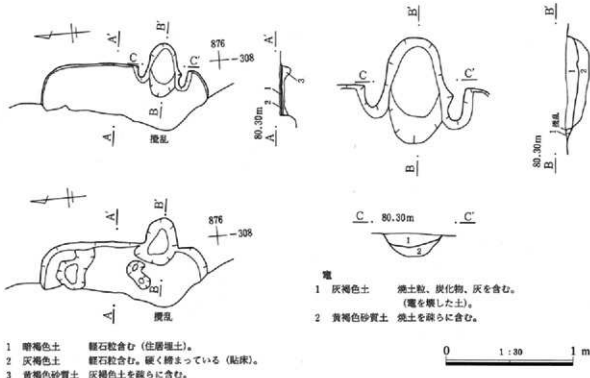
形状 本住居跡は覆乱によって、竈付近を残して、大部分が掘り込まれており、その形状は、はっきりしない。南北方向は2.64mを測る。

方位 N-95°-E

構造 本住居跡の竈前より、軽石粒を含む灰褐色土で硬く締まっている床面が検出された。しかし、柱穴・周溝・貯蔵穴等は検出されていない。

竈 東壁面の南寄り掘り込んで造られている。竈は左右両袖の残りがよかった。規模は煙道方向66cm、燃焼部幅46cmを測る。

出土遺物 住居埋土より土師器杯・壺、須恵器杯・壺等の細かい破片が出土している。



第53図 A区21号住居跡、掘り方、竈

A区22号住居跡 (第54図 P L19・63)

位置 本住居跡はA区東部の南端にあり、871・-296グリッドに位置する。本住居跡の近くにはA区23号住居跡がある。

重複 A区1号円形周溝遺構と重複している。本住居跡は、A区1号円形周溝遺構の内側に造られている。

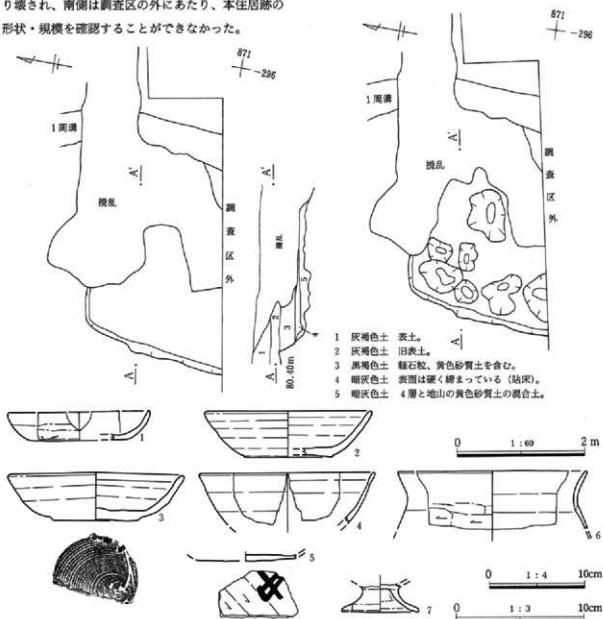
形状 本住居跡は、攪乱に掘り込まれていたり、円形周溝遺構との重複もあることから、調査区を拡張して調査を進めた。しかし、床面の多くは攪乱により壊され、南側は調査区の外に当たり、本住居跡の形状・規模を確認することができなかった。

方位 はっきりしない。

構造 本住居跡は硬く締まっている暗灰色土を主体にした床面が検出された。柱穴・周溝・貯蔵穴等は検出されなかった。

竈 東壁面に造られていると思われるが、検出されなかった。

出土遺物 住居埋土より土師器杯・甕・台付甕、須恵器杯・埴輪が出土している。底部外面に「中」と墨書されている土師器杯も出土している。



第54図 A区22号住居跡、掘り方、出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

A区22号住居跡

番号	種類 器種	残存 法	残存 量(cm)	出土位置	①胎土②胎成③色調	器形・器型・文様の特徴
1	土師器 坏	口縁～底部片	口径(11.0)器高 2.2 底径(8.0)	埋土	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③褐色	口縁部は内湾気味に外傾する。 外面 口縁部は横ナデ。底部は直筒形。中程に米罎部有り。 内面 口縁部は横ナデ。
2	須恵器 坏	口縁～底1/4	口径(13.1)器高 3.6 底径(6.9)	埋土	①白色細粒 小石含む ②還元焰 硬質 ③灰色	口縁部は直線的に外反する。輪軸整形。右回転糸切り。
3	須恵器 坏	口縁～底部	口径(13.6)器高 3.8 底径 6.7	埋土	①砂粒 ②やや還元焰 硬質 ③灰黄色	口縁部はやや外反する。輪軸整形。右回転糸切り。糸切りの際に糸がとんだと思われる跡有り。底部縦高台状。
4	須恵器 坏	口縁部片	口径(13.8)器高(4.1) 底径 -	埋土	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③褐灰～灰黄褐色	丸みをもって立ち上がり、口縁部でやや外反する。輪軸整形。
5	土師器 坏	底部片	口径 - 器高 - 底径 -	埋土	①砂粒 ②酸化焰 硬質 ③明赤褐色	平底。底部外面に「中」の墨書有り。
6	土師器 甕	口縁～肩部片	口径(19.7)器高(6.1) 底径 -	掘り方	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③明赤褐色	コノ字状の口縁を有する。口縁部の屈曲が弱い。 外面 口縁部は横ナデ。接合痕残る。胴部は横方向の直筒形。 内面 口縁部は横ナデ。以下はナデ。
7	土師器 台付甕	台部1/4	口径 - 器高(2.9) 底径(8.2)	埋土	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③によい赤褐色	裾部がラッパ状に開く。 外面 横ナデ。 内面 横ナデ。

A区23号住居跡 (第55・56図 P.L19)

位置 本住居跡はA区東部の南端にあり、875・-296グリッドに位置する。本住居跡の近くにはA区22号住居跡、1号円形周溝遺構がある。

重複 なし。

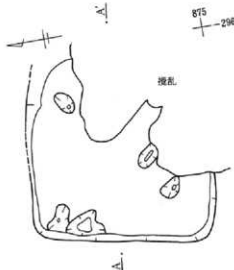
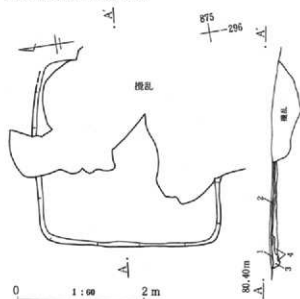
形状 本住居跡は、東側及び南東部は覆土に掘り込まれている。しかし北側及び西側の残存がよいので推定した本住居跡の形状は、ほぼ方形と思われる。その規模は東西方向2.90m、南北方向2.92m。床面積は(7.73)m²と思われる。

方位 N-98°E (他の住居跡と同様に東壁面に竈が造られていると考えた場合)

構造 軽石粒を含む灰褐色土を主体にした硬く締まった床面が検出されたのみで、柱穴・周溝・貯蔵穴等は検出されなかった。

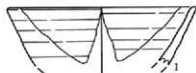
竈 検出されなかった。

出土遺物 遺物量は少ない。住居埋土より須恵器坑が出土している。



第55図 A区23号住居跡、掘り方

- 1 灰褐色土 軽石粒、黄色砂質土を含む。
- 2 灰褐色土 軽石粒を含む。硬く締まっている(粘床)。
- 3 灰褐色土 軽石粒、黄色砂質土を含む。
- 4 灰黄褐色土 3層と地山の黄色砂質土の混合。



第56図 A区23号住居跡出土遺物

A区23号住居跡

番号	種類 器種	残存 量 (cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
1	須恵器 埴	口縁~体部片 口径(14.7)器高(4.6) 底径 -	埋土	①細砂 ②還元焰 硬質 ③灰色	丸みをもって立ち上がり、口縁部でやや外反する。壱曜整形。

A区24号住居跡 (第57・58図 P.L.20・63・64)

位置 本住居跡はA区東部にあり、882・-304グリッドに位置する。本住居跡の近くにはA区16号住居跡がある。

重複 A区20号住居跡と重複している。本住居跡の上面にA区20号住居跡が造られている。また、本住居跡の西壁が20号住居跡よりも西側で検出された。

形状 本住居跡の形状は、ほぼ方形である。その規模は東西方向2.71m、南北方向2.73mである。床面積は6.89m²である。

方位 N-86°-E

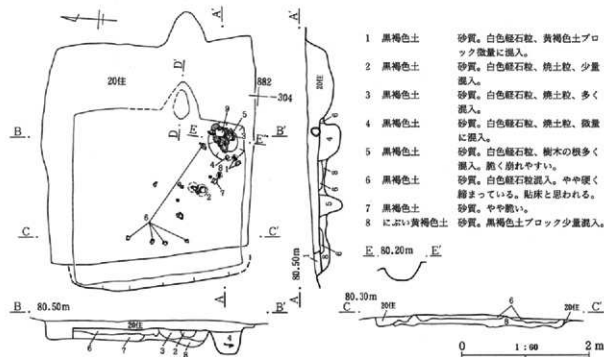
構造 軽石粒を含む黒褐色土でできた硬く締まった床面が検出されている。また、竈の右袖近くに貯蔵

穴が検出された。この貯蔵穴の形状は円形で径46~60cm、深さ24cmを測る。貯蔵穴の中から多数の遺物が出土している。埋土は、黄褐色土を含む黒褐色土であった。柱穴・周溝等は検出されていない。

掘り方調査のおり、本住居跡の中央部よりやや北側に少し高いテラス状のところが検出された。

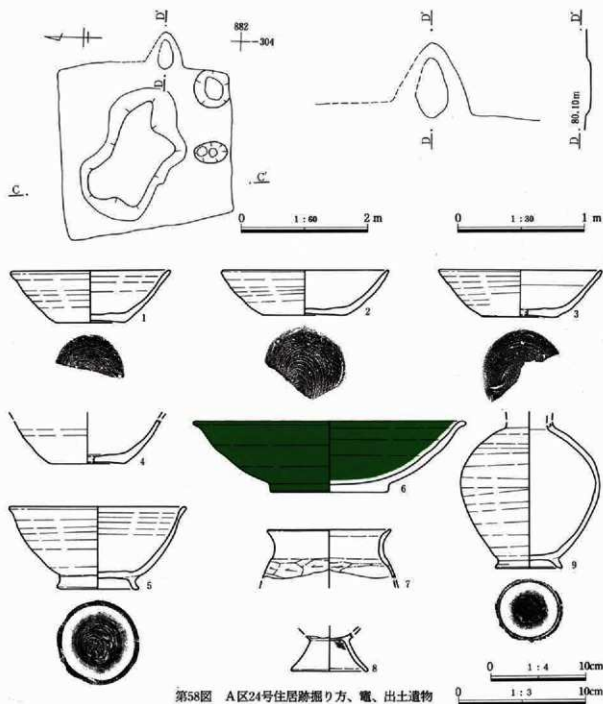
竈 竈は本住居跡の東壁面のやや南寄り掘り込んで造られている。ほとんど掘り方面に当たる。左側はA区20号住居跡の竈の袖等により、壊されている。竈の規模は煙道方向50cm、燃焼部幅50cmを測る。

出土遺物 貯蔵穴、掘り方面より、土師器台付壺、須恵器坏・埴・長頸壺、緑釉陶器碗が出土している。



第57図 A区24号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



第58図 A区24号住居跡掘り方、電、出土遺物

A区24号住居跡

番号	種類	残存量 (cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
1	須恵系 杯	口縁～底1/3 口径(12.5)器高 4.1 底径 5.2	掘り方	①細粒 白色粒 ②やや還元焰 硬質 ③により褐色	腰部の張りは弱くやや直線的に外傾する。口縁部で外反する。轆轤成形。右回転糸切り。
2	須恵系 杯	口縁～底部 口径(13.0)器高 3.6 底径 6.4	埋土	①粗砂 ②還元焰 硬質 ③明灰青色	やや内湾気味に外傾する。轆轤成形。右回転糸切り。
3	須恵系 杯	口縁～底1/3 口径(12.7)器高 3.7 底径 (6.0)	貯蔵穴	①細砂 ②還元焰 硬質 ③灰色	腰部の張りは弱くやや直線的に外傾する。轆轤整形。右回転糸切り。

3. 奈良・平安時代の遺構と遺物

番号	種類	残存法	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
4	須恵器 坏	体～底部 口径 - 器高(3.5) 底径(6.0)	埋土	①粗砂 ②還元焰 硬質 ③黄灰色	内湾気味に外傾する。輪軸整形。右回転糸切り。
5	須恵器 埴	口径～底1/2 口径 13.7 器高 6.5 底径 5.6	貯蔵穴	①粗砂 白色粒子 ②還元焰 硬質 ③暗灰色	腹部が張り、口縁部で外反する。輪軸整形。右回転糸切り。貼り付け高台。
6	緑釉陶器 碗	口径～底1/4 口径(21.7)器高 5.6 底径 9.4	貯蔵穴	①緑釉 ②還元焰 硬質 ③灰白色	腹部の張りは弱く、口縁部で外反する。輪軸整形後回転製ナダ。削り出し高台でべた。内外面底部施釉。京都洛北産。9世紀前半。
7	土師器 甕	口径～肩1/4 口径(12.9)器高(5.1) 底径 -	埋土	①粗砂 ②酸化焰 硬質 ③明赤褐色	コの字状の口縁を有する。口縁部の屈曲が弱い。外面 口縁部は横ナダ。胴部は横方向の直削り。内面 口縁部は横ナダ。以下はナダ。接合痕残る。
8	土師器 台付甕	台部1/4 口径 - 器高(4.0) 底径(8.0)	掘り方	①粗砂 ②酸化焰 硬質 ③明赤褐色	ラッパ状に開く台部。外面 底部は直削り。台部はナダ。内面 ナダ。台上半に厚層きのような直削り有り。
9	須恵器 長頸壺	肩～底部 口径 - 器高(15.4) 底径 7.0	埋土	①砂粒 ②還元焰 硬質 ③灰色	胴上半に最大径をもつ。外面 胴部は輪軸整形後ナダ。高台部は横ナダ。内面 ナダ。

B区1号住居跡(第59・60図 P.L21)

位置 本住居跡はB区の西部にあり、925・-384グリッドに位置する。本住居跡の近くにはB区1号土坑がある。また、竈近くにB区1号ピットがある。

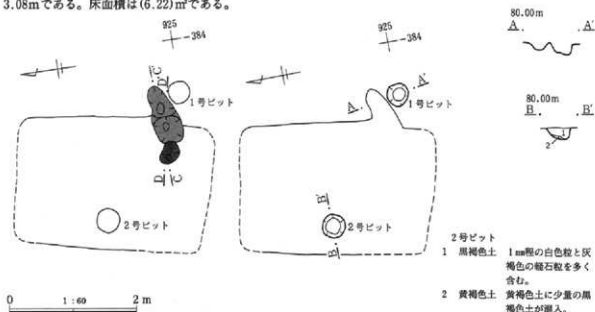
重複 本住居内に円形のB区2号ピットが重複している。このピットは径34cm、深さ20cm、埋土は黒褐色土を主体にしたもので、細かい軽石粒を含む。B区1号ピットの規模、埋土も同様である。

形状 本住居跡の形状は、南北方向を長辺とする長方形である。その規模は東西方向2.10m、南北方向3.08mである。床面積は(6.22)㎡である。

方位 N-101°-E

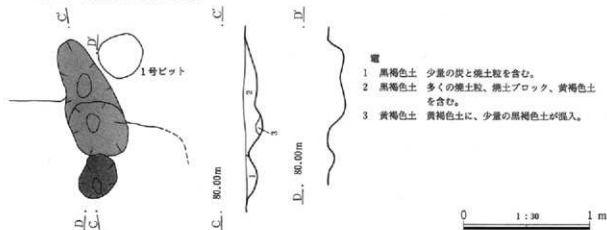
構造 黄褐色土を主体にした平らな面が検出された。これは床面ではなく、本住居跡の掘り方面と思われる。柱穴・周溝・貯蔵穴等は検出されていない。
竈 竈は本住居跡の東壁面のやや南寄り掘り込んで造られている。残存していたのは、掘り方に近い竈の状態である。全体的に焼土がよく残っていた。竈の規模は煙道方向57cm、燃焼部幅30cmを測る。

出土遺物 出土遺物なし。



第59図 B区1号住居跡、掘り方

第3章 検出された遺構と遺物



第60図 B区1号住居跡

B区3号住居跡 (第61・62図 P L 21・64)

位置 本住居跡はB区の東部にあり、913・281グリッドに位置する。本住居跡の竈の上面をA区16号溝が通る。

重複 B区4号住居跡と重複している。B区4号住居跡の上面に本住居跡が造られている。また、B区8号・9号・18号土坑、B区16号溝とも重複している。

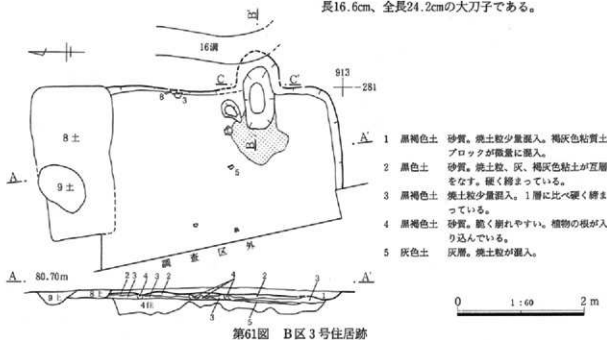
形状 本住居跡の西側部分は調査区外にあたり、調査することができなかった。また、8号土坑が本住居跡の北辺を掘り込んでおり、形状を正確に把握することはできなかった。南北方向は(3.93)mを測る。

方位 N-85-E

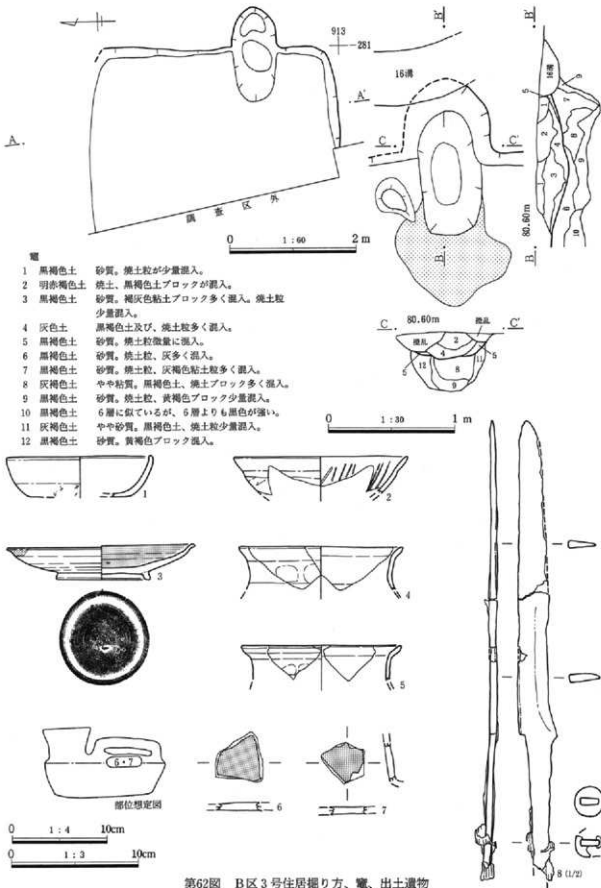
構造 黒褐色土を主体にした床面が検出されている。竈前の床面から灰が集中して検出された。本住居跡からは、柱穴・周溝・貯蔵穴等は検出されなかった。

竈 竈は本住居跡の東壁面のやや南寄りを掘り込んで造られている。竈の上面をB区16号溝が掘り込んでいるため煙道部の残存があまりよくない。両袖部も検出できなかった。竈の前の床面には灰がよく残っていた。竈の規模は煙道方向68cm、燃焼部幅65cmを測る。

出土遺物 床面及び埋土より、土師器坏・甕、灰釉陶器皿・平瓶、鉄製品が出土している。鉄製品は刃長16.6cm、全長24.2cmの大刀子である。



第61図 B区3号住居跡



第62図 B区3号住居掘り方、窠、出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

B区3号住居跡

番号	種類 器種	残 法	存 量(cm, g)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
1	土師器 坏	口縁～底1/4 口径(11.2)器高(3.2) 底径(8.2)		埋土	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③よじ赤褐色	口縁部は内湾気味に外傾する。 外面 口縁部は横ナデ。底部は莖削り。中程に未調整部有り。 内面 口縁部は横ナデ。
2	土師器 坏	口縁～底部片 口径(13.6)器高(3.0) 底径(8.2)		埋土	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③よじ赤褐色	口縁部は内湾気味に外傾し、肩部で外反する。 外面 口縁部は横ナデ。底部は莖削り。 内面 口縁部は横ナデ。放射状の曜文有り。
3	灰釉陶器 皿	口縁～高台2/3 口径 14.3 器高 2.9 底径 6.8		床直	①胎密 ②還元焰 硬質 ③灰白色	やや内湾気味に立ち上がり、口縁部で外反する。輪縁整形。貼り付け高台。黒笹14号窯式器。9世紀前半。
4	土師器 甕	口縁部片 口径(17.2)器高(4.6) 底径 -		埋土	①細砂 赤褐色粒 ②酸化焰 硬質 ③褐色	コの字状の口縁を有する。口縁部の屈曲がやや弱い。 外面 口縁部は横ナデ。接合痕残る。 内面 口縁部は横ナデ。以下はナデ。
5	土師器 甕	口縁部片 口径(16.8)器高(3.8) 底径 -		床直	①細砂 白色細粒 ②酸化焰 硬質 ③よじ赤褐色	コの字状の口縁を有する。口縁部の屈曲が強い。 外面 口縁部は横ナデ。工具痕有り。 内面 口縁部は横ナデ。以下はナデ。
6	灰釉陶器 平瓶	肩部片 口径 - 器高 - 底径 -		埋土	①胎密 ②還元焰 硬質 ③灰オリーブ色	水平に近い。外面施釉。遺物7と同一か？
7	灰釉陶器 平瓶	肩部片 口径 - 器高 - 底径 -		埋土	①胎密 ②還元焰 硬質 ③灰白色	水平に近い。外面施釉。遺物6と同一か？
8	鉄製品 刀子	ほぼ完形 長さ24.2 幅 2.1 厚さ 0.4 重さ 20.48		床直		刃長16.6cm。身の中程に錆ぶくれが見られる。刃部の中程から刃区にかけて研が磨りによる内反りがある。茎の部分には柄と思われる木材痕が付着している。表面は全体的にクラック状に割れが入っている。古代鉄と思われる。

B区4号住居跡 (第63図 P.L21・64)

位置 本住居跡はB区の東部にあり、910・-281グリッドに位置する。

重複 本住居跡はB区3号住居跡と重複している。本住居跡の上面にB区3号住居跡が造られている。また、B区8号・18号土坑が本住居跡を掘り込む。

形状 本住居跡の西側部分は調査区外にあたり、B区3号住居跡同様調査することができなかった。また、8号土坑により、本住居跡の北辺を掘り込まれており、その形状を正確に把握できなかった。南北方向は(3.66)mを測る。

方位 N-97°E

構造 B区3号住居跡の下面より、本住居跡の黒褐色土を主体にした床面が検出された。床面は硬く締

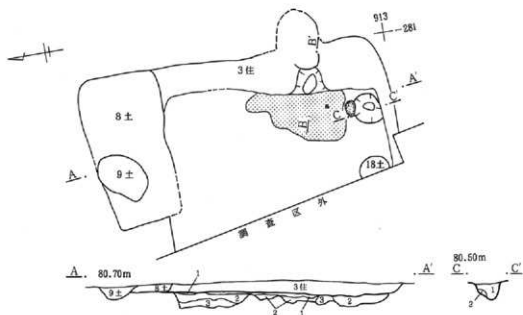
まっており、灰や焼土粒を含む。また、甕の右袖近くに貯蔵穴が検出された。この貯蔵穴の形状は円形で径43～47cm、深さ14～29cmを測る。この貯蔵穴の埋土は軽石粒を含む黒色土である。柱穴・周溝等は検出されていない。

甕 甕は本住居跡の東壁面のやや南寄り掘り込んで造られている。甕の左袖側をB区3号住居跡の甕が掘り込んでいる。甕の前の床面には灰がよく残っていた。甕の規模は煙道方向39cm、燃焼部幅41cmを測る。

出土遺物 出土した遺物は少ない。甕内より土師器坏・甕が出土している。

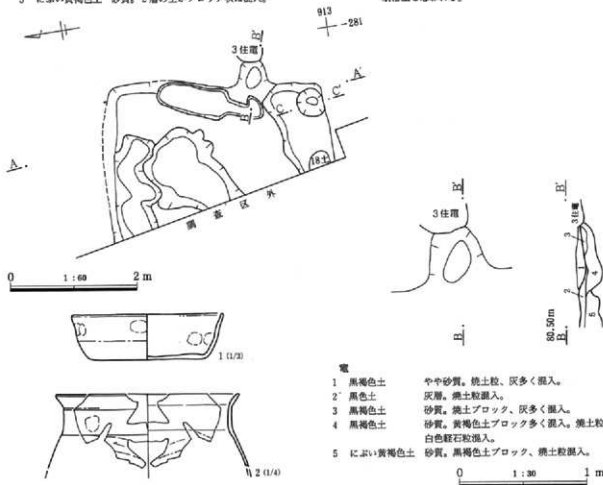
B区4号住居跡

番号	種類 器種	残 法	存 量(cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
1	土師器 坏	口縁～底1/4 口径(11.8)器高(3.6) 底径(9.4)		甕	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③よじ赤褐色	口縁部は内湾気味に外傾する。 外面 口縁部は横ナデ。指頭痕有り。底部は莖削り。 内面 口縁部は横ナデ。指頭痕有り。
2	土師器 甕	口縁～肩部片 口径(19.3)器高(7.7) 底径 -		甕	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③よじ赤褐色	コの字状の口縁を有する。口縁部の屈曲がやや弱い。 外面 口縁部は横ナデ。指頭痕残る。胴部は横方向の莖削り。 内面 口縁部は横ナデ。以下はナデ。



- 1 黒褐色土 砂質。黄褐色ブロック、焼土粒微量混入。硬く締まっている。
- 2 灰褐色土 砂質。黒褐色及び、黄褐色土の混入。
- 3 によい黄褐色土 砂質。2層の土がブロック状に混入。

- 貯蔵穴
- 1 黒色土 やや砂質。白色軽石粒が混入。
- 2 黒色土 やや砂質。白色軽石粒、黄褐色土ブロックが混入。崩落土と思われる。



- 竈
- 1 黒褐色土 やや砂質。焼土粒、灰多く混入。
- 2 黒色土 灰層。焼土粒混入。
- 3 黒褐色土 砂質。焼土ブロック、灰多く混入。
- 4 黒褐色土 砂質。黄褐色土ブロック多く混入。焼土粒、白色軽石粒混入。
- 5 によい黄褐色土 砂質。黒褐色土ブロック、焼土粒混入。

第63図 B区4号住居跡、掘り方、竈、出土遺物

(2) 掘立柱建物跡

A区4号掘立柱建物跡 (第64図 P L22・64)

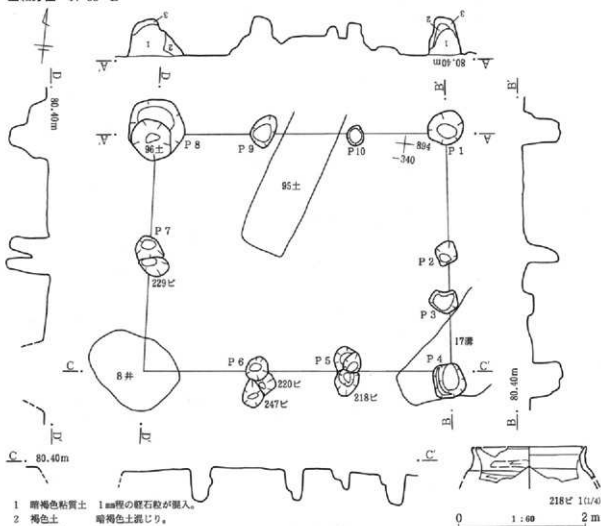
位置 本掘立柱建物跡はA区中央部に近い894・-340グリッドに位置する。近くにはA区3号・A区4号住居跡がある。

重複 本掘立柱建物跡の南東隅を中世以降のA区17号溝、南西隅をA区8号井戸跡、北辺をA区95号土坑が掘り込む。また、柱穴P5は218号ピット、P6は220号ピット、P7は229号ピットと重複する。

主軸方位 N-83°-E

形態 2×3間 (3.72) ~ 3.93m × 4.56 ~ (4.89m) の東西棟である。北西隅をA区8号井戸跡に掘り込まれているため、計測値は推定の部分もある。梁側の柱間は1.71~2.03mである。平均柱間は1.913mを測る。また、柱穴はほぼ柱軸に沿って並ぶ。P3は柱軸にあるので深さは浅いが掲載しておいた。桁側の柱間は1.44~1.77mである。平均柱間は1.575mを測る。柱穴はほぼ柱軸に沿って並ぶ。

柱穴 柱穴の平面形はP8の様な大きい円形のもの



1 暗褐色粘質土 1mm程度の礫石粒が混入。

2 褐色土 暗褐色土混じり。

3 暗褐色土 褐色土混じり。

第64図 A区4号掘立柱建物跡、出土遺物

A区218号ピット

番号	種類 器種	掘 法	存 量 (cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・器形・文様の特徴
1	土師陶 壺	口縁~頸部 口径(9.8)器高(3.8) 底径 -	埋土		①砂胎 ②酸化焙 硬質 ③褐色	コの字状の口縁を有する壺。口縁部の器壁が厚い。 外面 口縁部は横ナデ、底削り。胴部は横方向の底削り。 内面 口縁部は横ナデ。以下はナデ。

と小さい円形のものに分かれる。柱穴の規模は径24～96cm、深さ60～68cmを測る。柱痕跡は、あまりはっきりしない。柱穴の埋土をみると、暗褐色土を主体にして、やや細かい軽石粒が多数混入しており、奈良・平安時代の土層と思われる。

内部施設 なし。 **出土遺物** 柱穴P5と重複する218号ピットからコの字状の口縁をした土師器壺の口縁部片が出土している。

A区5号獨立柱建物跡 (第65図 P.L22・64)

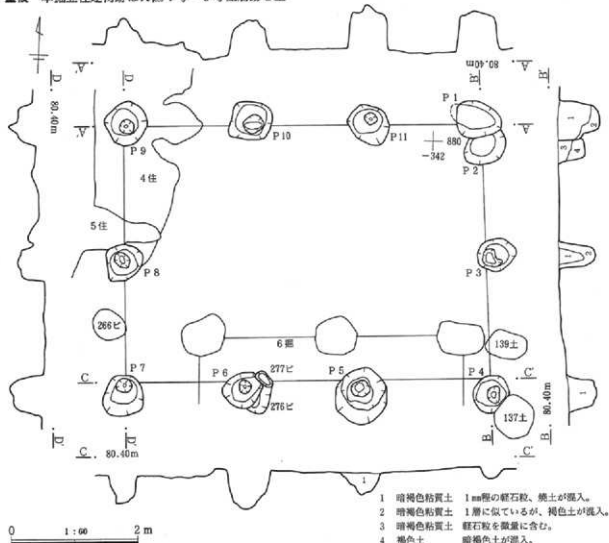
位置 本獨立柱建物跡はA区の中央部南端に近い880・-342グリッドに位置する。近くにはA区4号獨立柱建物跡がある。

重複 本獨立柱建物跡はA区4号・5号住居跡と重

複する。本獨立柱建物跡の柱穴が、これらの住居跡の床面下より検出されている。また、A区6号獨立柱建物跡とも重複しているが、新旧関係ははっきりしない。柱穴も土坑、ピットとの重複が見られる。特に柱穴P6は276号・277号ピットと重複する。

主軸方位 N-89°-E

形態 2×3間(4.11～4.38m×5.64～5.88m)の東西棟である。梁側の柱間は2.00～2.22mである。平均柱間は2.123mを測る。柱穴は、ほぼ柱軸に沿って並ぶがP3はやや東にずれる。また、P1・P2は重複関係にある。桁側の柱間は1.70～2.15mで



第65図 A区5号獨立柱建物跡、出土遺物

- 1 暗褐色粘質土 1mm程度の軽石粒、焼土が混入。
- 2 暗褐色粘質土 1層に似ているが、褐色土が混入。
- 3 暗褐色粘質土 軽石粒を散量に含む。
- 4 褐色土 暗褐色土が混入。

第3章 検出された遺構と遺物

ある。平均柱間は1.920mを測る。柱穴はほぼ柱軸に沿って並ぶがP4・P5はやや南にずれる。

柱穴 柱穴の平面形は円形のものが多い。柱穴の規模は径50～90cm、深さ40～70cmを測る。柱痕跡は、

ほとんどのものがはっきりしている。柱穴の埋土は、暗褐色土に細かい軽石粒が混入した土である。

内部施設 なし。 **出土遺物** 柱穴P6・P10より土師器環が出土している。

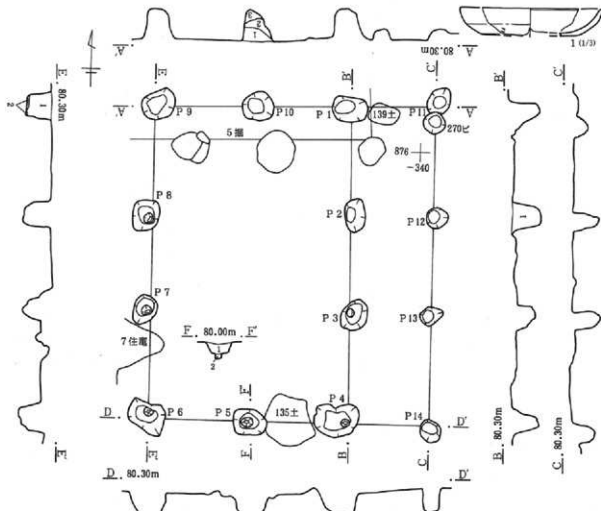
A区5号掘立柱建物跡

番号	種類 器名	残存 法 量(cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
1	土師器 環	小片 口径(11.0)器高(2.5) 底径 -	P10 埋土	①細砂少量 ②酸化焰 硬質 ③明褐色	口縁は内湾しながら立ち上がる。 外面 口縁部はナデ。底部は篋削り。 内面 ナデ。
2	土師器 環	小片 口径(9.8)器高(1.9) 底径 -	P6 埋土	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③にぶい褐色	平底。口縁は直線的に立ち上がる。 外面 口縁部は横ナデ。煤付着の箇所あり。 内面 ナデ。

A区6号掘立柱建物跡 (第66図 P L22・64)

位置 本掘立柱建物跡はA区の中央部南端に近い876・-340グリッドに位置する。近くにはA区8号・9号掘立柱建物跡がある。

重複 本掘立柱建物跡はA区5号掘立柱建物跡と重複しているが、その新旧関係ははっきりしない。ま



1 暗褐色粘質土 1mm程度の軽石粒、1mm程度の褐色土粒が混入。

2 暗褐色粘質土 褐色土がブロック状に入り込む。

3 褐色土 明褐色土混じり。

第66図 A区6号掘立柱建物跡、出土遺物

た、A区7号住居跡の竈の北側に柱穴があり、柱軸の上では重複関係となる。

主軸方位 N-0°-E

形態 (2+1)×3間(4.08~4.20+1.80~1.92m×6.48~6.68m)の南北棟。身舎東側に1間幅(平均幅1.860m)の庇をもつ。庇の桁側の柱間は身舎部の柱間とほぼ同じで2.08~2.44mである。平均柱間は2.280mを測る。身舎部の梁側の柱間は1.96~2.12mである。平均柱間は2.070mを測る。柱穴はほぼ柱軸に沿って並ぶ。桁側の柱間は1.96~2.42mである。平均柱間は2.193mを測る。柱穴は、ほぼ柱軸に沿って並ぶ。P6がやや北にずれる。

A区6号掘立柱建物跡

番号	種類 器種	残存 量(cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
1	土師 器 坏	口縁~底部 口径(11.0)器高(2.3) 底径 -	P6 埋土	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③ぶい橙色	口縁は内湾しながら立ち上がる。 外面 口縁部は横ナデ。底部は寛削り。 内面 ナデ。

A区7号掘立柱建物跡(第67図 P.L.22)

位置 本掘立柱建物跡はA区の西側の南端に近い867・-347グリッドに位置する。近くにA区7号住居跡がある。

重複 なし。

主軸方位 N-8°-W(南北棟とみた場合)

形態 本掘立柱建物跡の南側部分は調査区外にあたり、確認できなかったが、北辺の方向が似ている12号掘立柱建物跡のように2×2間(4.20m×不可)の南北棟になると思われる。梁側の柱間は2.03~

本遺跡で検出された21棟の掘立柱建物跡の中で庇がつくものは、A区17号掘立柱建物跡と本掘立柱建物跡のみである。奈良・平安時代の遺構としては、本掘立柱建物跡だけである。

柱穴 柱穴の平面形は楕円形のものが多い。庇の柱穴は身舎部よりも一回り小さい。その径は40~56cmを測る。身舎部の柱穴の径は36~96cm、深さ53~66cmを測る。柱痕跡は、比較的好く分かるものが多い。柱穴の埋土は、暗褐色土に細かい軽石粒が混入した土である。

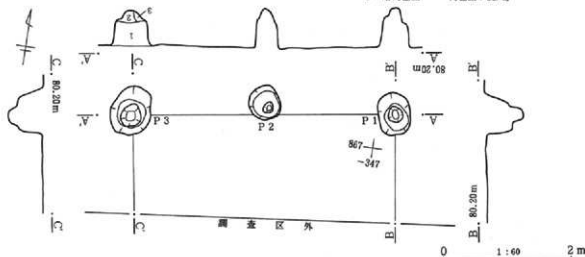
内部施設 なし。 **出土遺物** P6から土師器坏が出土している。

2.21mである。平均柱間は2.10mを測る。柱穴はほぼ柱軸に沿って並ぶ。

柱穴 柱穴の平面形は円形のものが多い。柱穴の規模は径50~80cm、深さ56~60cmを測る。柱痕跡は、はっきりしている。柱穴の埋土は、暗褐色土に細かい軽石粒が混入した土である。

内部施設 なし。 **出土遺物** なし。

- 1 暗褐色粘質土 1mm程の軽石粒が混入。
- 2 褐色土 暗褐色土が僅かに混じる。
- 3 暗褐色土 褐色土が混入。



第67図 A区7号掘立柱建物跡

A区8号掘立柱建物跡 (第68図 P L23)

位置 本掘立柱建物跡はA区中央部の南端に近い869・-331グリッドに位置する。近くにはA区8号住居跡、9号掘立柱建物跡がある。

重複 なし。

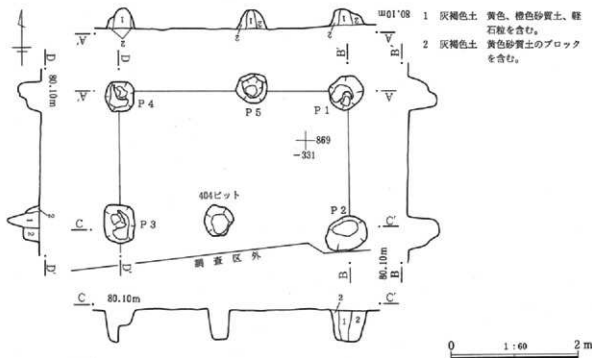
主軸方位 N-1°-W (南北棟とみた場合)

形態 本掘立柱建物跡の南側部分は調査区外にあたり、確認できなかった。庇を持たないが柱軸の方向が似ている6号掘立柱建物跡のような2×3間(3.63m×不可)あるいは2×2間の南北棟になると思われる。また404号ピットが本掘立柱建物跡の内部に

位置しており、総柱建物跡の可能性もある。梁側の柱間は1.53~2.10mである。平均柱間は1.835mを測る。柱穴はほとんどが柱軸に沿って並ぶが、P5はやや東にずれている。

柱穴 柱穴の平面形は円形のものが多い。柱穴の規模は径44~68cm、深さ30~51cmを測る。柱痕跡は、はっきりしている。柱穴の埋土は、灰褐色土に黄色砂質土、軽石粒が混入した土である。

内部施設 なし。 **出土遺物** なし。



第68図 A区8号掘立柱建物跡

A区8号掘立柱建物跡 (第69図 P L23)

位置 本掘立柱建物跡はA区中央部の南端に近い877・-331グリッドに位置する。近くにはA区8号住居跡、9号掘立柱建物跡がある。

重複 本掘立柱建物跡はA区16号溝、8号住居跡に掘り込まれている。

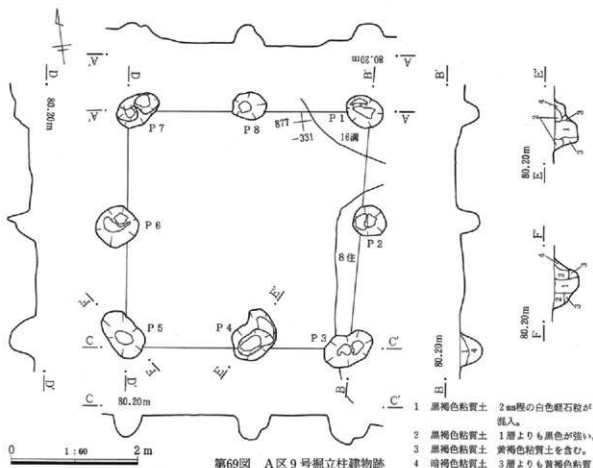
主軸方位 N-8°-E (南北棟とみた場合)

形態 2×2間(東西3.57~3.78m×南北3.63~3.75m)のほぼ方形である。棟方向は確定できない。東西方向の柱間は1.62~1.95mである。平均柱間は

1.838mを測る。南北方向の柱間は1.71m~2.04mである。平均柱間1.845mを測る。柱穴はほぼ柱軸に沿って並ぶが、P2がやや北へ、P3がやや西へずれる。

柱穴 柱穴の平面形は楕円形のものが多い。柱穴の規模は径44~83cm、深さ36~40cmを測る。柱痕跡は、比較的はっきりしている。柱穴の埋土は、粘性の強い黒褐色土に軽石粒が混入した土である。

内部施設 なし。 **出土遺物** なし。



第69図 A区9号掘立柱建物跡

A区10号掘立柱建物跡 (第70・71図 P L23・64)

位置 本掘立柱建物跡はA区中央部の南側に近い881・-316グリッドに位置する。近くにはA区11号住居跡がある。

重複 本掘立柱建物跡はA区10号住居跡の床面下よりピットが検出されている。

主軸方位 N-90°-E (東西棟とみた場合)

形態 2×2間 (東西4.50~4.53m×南北4.41~4.47m) のほぼ方形である。棟方向は確定できない。東西方向の柱間は2.24~2.31mである。平均柱間は2.258mを測る。南北方向の柱間は2.12~2.33mである。平均柱間は2.220mを測る。柱穴はほぼ柱軸に沿って並ぶ。東辺の柱軸上に417号ピット・418号ピット

とが並ぶ。

柱穴 柱穴の平面形は円形のものが多い。柱穴の規模は径50~90cm、深さ46~60cmを測る。ほとんどのピットの柱痕跡は、はっきりしている。東辺の柱軸上に417号ピット・418号ピットも柱痕跡が見える。これらのピットは、柱穴の埋土とほぼ同じ土層をしている。本掘立柱建物跡の施設に関わるものかどうかは不明。柱穴の埋土は、灰褐色土に細かい軽石粒が混入した土である。

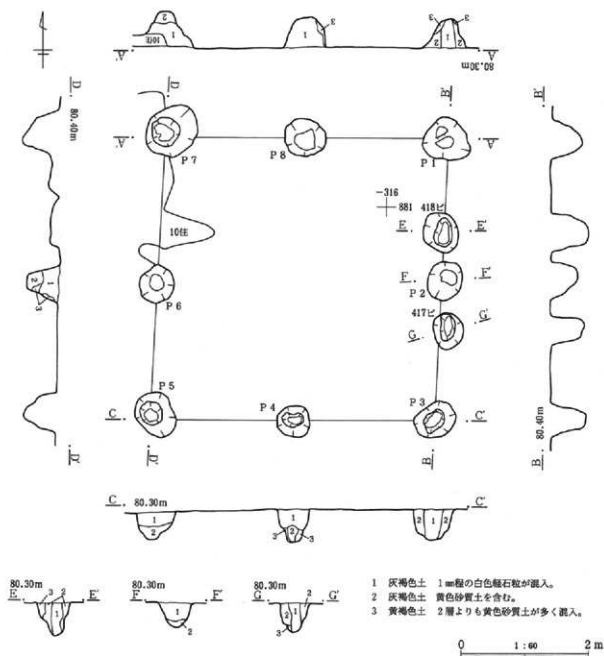
内部施設 なし。 **出土遺物** 柱穴P4の埋土中より土師器片が出土している。また418号ピットからも土師器片が出土している。



第70図 A区10号掘立柱建物跡・418ピット出土遺物



第3章 検出された遺構と遺物



第71図 A区10号掘立柱建物跡

A区10号掘立柱建物跡

番号	種類 器種	残存 量(cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
1	土師器 坏	口縁片 口縁 13.0 器高(3.3) 底径 -	P 4 埋土	①細砂 白色胎 ②酸化焰 硬質 ③橙色	口縁部はやや内湾しながら立ち上がる。 外面 口縁部は横ナデ。体部に指押さえ痕あり。 内面 横ナデ。

A区418号ピット

番号	種類 器種	残存 量(cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
1	土師器 坏	小片 口径 - 器高 - 底径 -	埋土	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③にぶい黄褐色	体部に横をもつ。 外面 口縁部は横ナデ。以下は寛削り。 内面 口縁部は横ナデ。

A区11号掘立柱建物跡 (第72図 P L23・64)

位置 本掘立柱建物跡はA区東側の南端に近い875・-310グリッドに位置する。近くにはA区21号住居跡や円形溝遺構がある。

重複 本掘立柱建物跡は中近世のA区22号溝と重複し、溝に掘り込まれている。

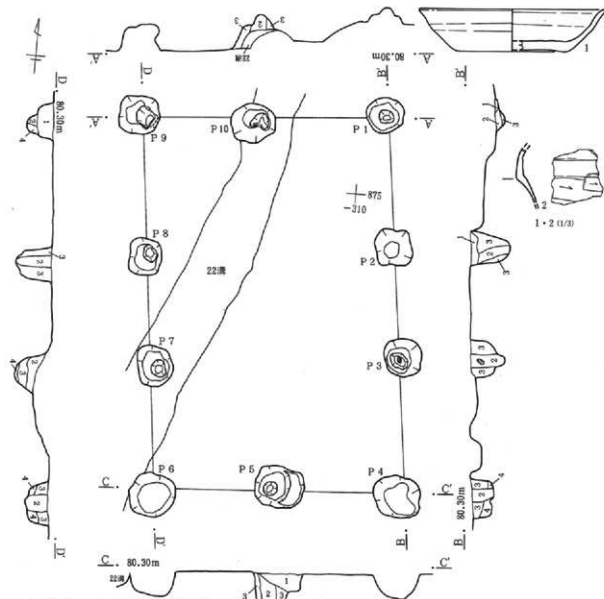
主軸方位 N-6°-W

形態 2×3間 (3.84~3.96m×5.97~6.00m) の南北棟である。梁側の柱間は1.83~2.13mである。平均柱間1.950mを測る。桁側の柱間は1.77~2.13

m、平均柱間は1.995mを測る。柱穴はほぼ柱軸に沿って並ぶが、P4がやや南にずれる。

柱穴 柱穴の平面形は円形のものが多い。柱穴の規模は径50~80cm、深さ43~62cmを測る。柱穴跡は、はっきりしているものが多い。柱穴の埋土は、黒褐色土に細かい軽石粒が混入した土である。

内部施設 なし。 **出土遺物** 柱穴P3の埋土より礫石、P4の埋土より土師器壺、P5の埋土より須恵器杯の破片が出土している。



- 1 褐色粘質土 1mm程度の白色軽石粒が混入。
 2 黒褐色粘質土 白色軽石粒、黄褐色土ブロックが混入。
 3 黒褐色粘質土 褐色土張り。
 4 黄褐色土 黒褐色粘質土張り。

第72図 A区11号掘立柱建物跡、出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

A区11号掘立柱建物跡

番号	種類	検出法	残存差(cm)	出土位置	①粘土②礫成③色調	器形・器形・文様の特徴
1	須恵器 坏	口縁~底部 口縁(14.4)器高 3.3 底径(8.6)	P 5 埋土	①細砂 ②還元焰 硬質 ③灰色	口縁は直線的に外反する。縦線成形。右回転糸切り。	
2	土師器 斐	口縁下半~胴部片 口縁 - 器高 - 底径 -	P 4 埋土	①細砂 ②還元焰 硬質 ③によい褐色	口縁がコの字状になる。 外面 口縁はナデ。肩部は横方向の筋有り。 内面 ナデ。	

A区12号掘立柱建物跡 (第73図 P L23・24)

位置 本掘立柱建物跡はA区中央部の南端に近い877・-324グリッドに位置する。近くにはA区10号住居跡や9号掘立柱建物跡がある。

重複 本掘立柱建物跡はA区8号住居跡、13号住居跡の床面下より検出されている。

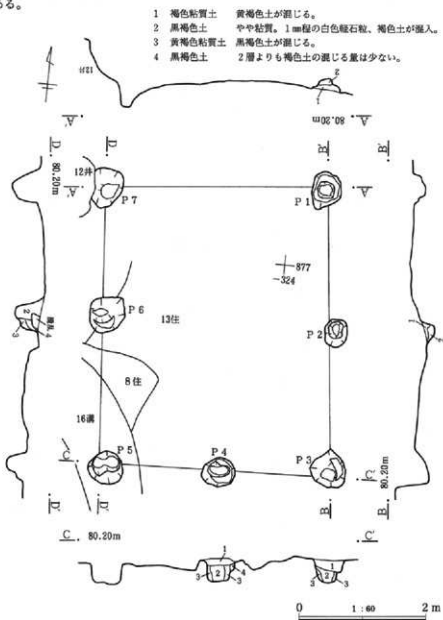
主軸方位 N-4°-E

形態 2×2間(3.51~3.60m×4.35~4.53m)の南北棟である。梁側の柱間は1.77~1.83mである。平均柱間は1.778mを測る。桁側の柱間は1.98~2.37mである。平均柱間は2.220mを測る。柱穴はほぼ柱軸に沿って並ぶ。P 8にあたる柱穴は確認されなかった。

柱穴 柱穴の平面形は円形のものが多い。柱穴の規模は径34~65cm、深さ36~45cmを測る。柱痕跡は、P 3・P 4を除けばあまりはっきりしない。柱穴の埋土は、黒褐色土に細かい軽石粒が混入した土である。

内部施設 なし。

出土遺物 なし。



第73図 A区12号掘立柱建物跡

D区1号掘立柱建物跡 (第74図 PL24)

位置 本掘立柱建物跡はD区西側の894・-242グリッドに位置する。近くにはD区1・2号溝がある。重複なし。

主軸方位 N-9°-E (南北棟とみた場合)

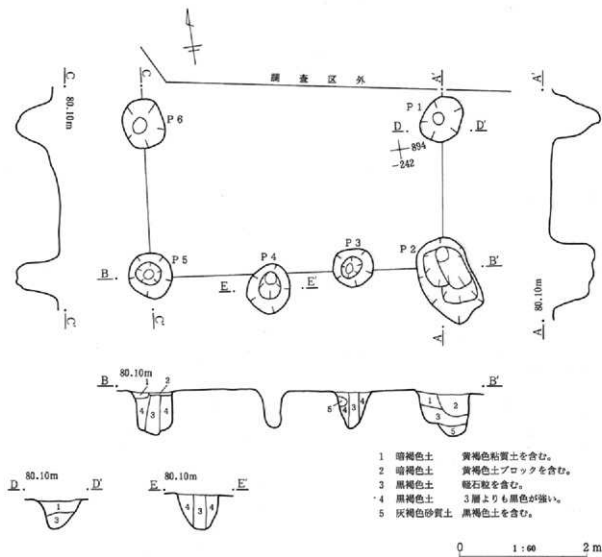
形態 本掘立柱建物跡の北側は調査区外のため確認できなかった。東西、南北方向の柱間を比較すると南北棟と思われる。東西方向を梁側と考えたと柱間にばらつきがあるが3間になっており、D区2号掘立柱建物跡に近い大きさの3×3間(4.68m×不可)の南北棟になるのではないかとと思われる。梁側の柱間は1.28~1.95mである。平均柱間は1.560mを測

る。桁側の柱間は2.16~2.37mである。平均柱間は2.265mを測る。柱穴はほぼ柱軸に沿って並ぶが、P4の位置がやや南にずれる。

柱穴 柱穴の平面形は円形のものが多い。P2は他の柱穴に比べて大きく形状も楕円形である。柱穴の規模は径56~80cm、深さ56~67cmを測る。柱痕跡は、P3・P4・P5ではっきり認められる。柱穴の埋土は、黒褐色土に細かい軽石粒が混入した土である。

内部施設 なし。

出土遺物 なし。



第74図 D区1号掘立柱建物跡

D区2号掘立柱建物跡 (第75図 P L24・65)

位置 本掘立柱建物跡はD区西側の889・-236グリッドに位置する。近くにはD区1・3号掘立柱建物跡がある。

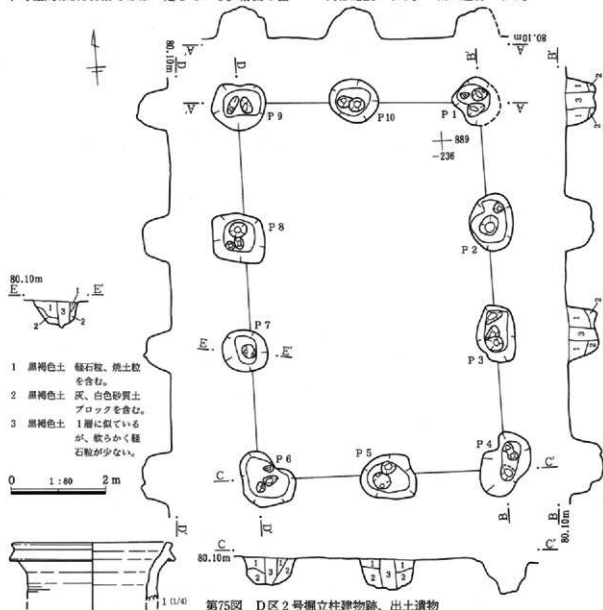
重複 なし。 **主軸方位** N-0°-E

形態 2×3間 (5.00~5.16m×7.96~8.00m) の南北棟である。梁側の柱間は2.38~2.64mである。平均柱間は2.540mでほぼ一定している。桁側の柱

間は2.28~2.94mである。平均柱間は2.660mを測る。柱穴はほぼ柱軸に沿って並ぶ。

柱穴 柱穴の平面形は楕円形のものが多い。柱穴の規模は径82~138cm、深さ55~72cmを測る。柱痕跡は、はっきりしているものが多い。柱穴の埋土は、黒褐色土に細かい軽石粒が混入した土である。

内部施設 なし。 **出土遺物** なし。



第75図 D区2号掘立柱建物跡、出土遺物

D区2号掘立柱建物跡

番号	種類 器種	技法	存 量(cm)	出土位置	①粘土②焼成③色調	器形・器形・文様の特徴
1	須恵物 壺	口縁片 口縁(16.6)器高(6.2) 底径 -		P 3 埋土	①白色粒 2mm程度の石 ②還元焼 硬質 ③暗灰色	外筒気味に立ち上がる口縁。口唇部に突帯が通る。輪縁成形。

D区3号掘立柱建物跡 (第76図 P L24)

位置 本掘立柱建物跡はD区西側の881・-227グリッドに位置する。近くにはD区3・4号溝がある。
重複 なし。

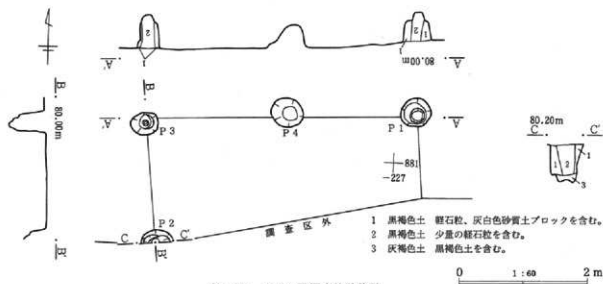
主軸方位 N-6°-W (南北棟とみた場合)

形態 本掘立柱建物跡の南側は調査区外のため確認できなかった。東西、南北方向の柱間を比較したところ、2×2間の方形に近いものか、D区2号掘立柱建物跡のような2×3間の南北棟になるのではな

いかと思われる。東西方向の総長は4.32m、柱間間は2.03~2.31mである。平均柱間は2.160mを測る。東西方向の柱穴はほぼ柱軸に沿って並ぶ。

柱穴 柱穴の平面形は円形のものが多い。柱穴の規模は径35~53cm、深さ46~60cmを測る。柱痕跡の大部分ははっきりしている。柱穴の埋土は、黒褐色土に細かい軽石粒が混入した土である。

内部施設 なし。 **出土遺物** なし。



第76図 D区3号掘立柱建物跡

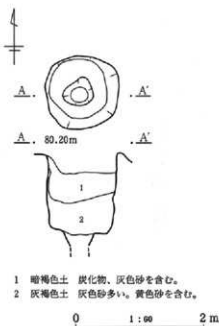
(3) 井戸跡

A区9号井戸跡 (第77~79図 P L24・65)

位置 A区中央部の南端に近い879・-334グリッドに位置する。本井戸跡の近くには、A区9号掘立柱建物跡がある。

重複 なし。

概要 確認面の形状は円形である。その規模は径117cm×117cm、筒状の部分の径は48cm×44cm、深さ114cm以上を測る。調査の途中で水が湧き出て、壁面が崩れやすくなったため、底面まで掘り進めることができなかった。断面形が方形に近いが、壁面に連続的にアグリが生じたためと思われる。細い筒状の部分を見ると本来は漏斗状と思われる。アグリの最上部は確認面から深さ75cm、径122cmである。本井戸跡



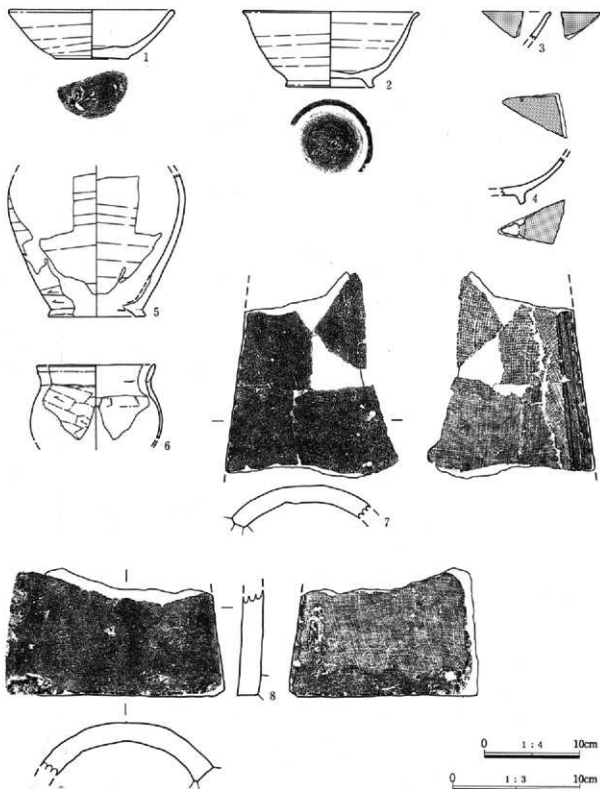
- 1 暗褐色土 炭化物、灰色砂を含む。
- 2 灰褐色土 灰色砂多い。黄色砂を含む。

第77図 A区9号井戸跡

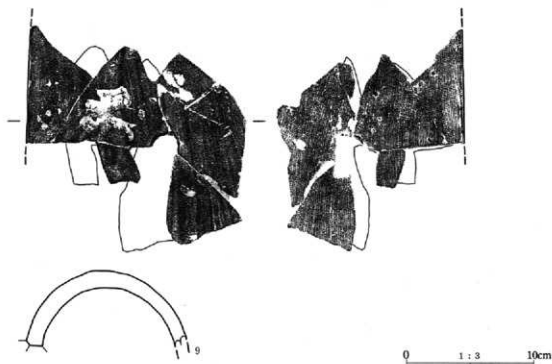
第3章 検出された遺構と遺物

の埋土は炭化物、灰色土を含む暗褐色土である。筒状の部分については、壁面が崩れ易いため、土層の確認ができなかった。

出土遺物 本井戸跡の埋土から土師器甕、須恵器
 坏・埴、瓦、縦14.0cm・横10.3cm・厚さ2.3cm・重さ
 410.2gの自然石(粗粒輝石安山岩)が出土している。



第78図 A区9号井戸跡出土遺物(1)



第79図 A区9号井戸跡出土遺物(2)

A区9号井戸跡

番号	種類 器種	残存 法 量(cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
1	須恵器 坏	口縁～底部 口径(12.8)器高 3.8 底径(5.0)	埋土	①砂粒 ②やや酸化焰 硬質 ③灰褐色	内湾気味に立ち上がる。轆轤成形。右回転糸切り。 外面 口縁部は横ナデ。底部周辺に回転調整を施す。 内面 ナデ。
2	須恵器 埴	口縁～底部 口径(13.8)器高 6.0 底径 6.2	埋土	①砂粒 白色粒 ②酸化焰 硬質 ③灰黄褐色	腹が張り、口縁部が外反する。轆轤成形。右回転糸切り。 外面 口縁部は横ナデ。以下は轆轤成形後ナデ調整。 内面 轆轤成形後ナデ調整。
3	灰釉陶器 碗	口縁片 口径 - 器高 - 底径 -	埋土	①緻密 ②還元焰 硬質 ③灰色	口縁部の外径が小さい。内外面施釉。黒帯90号窯式期古段階。
4	灰釉陶器 碗	体～底部 口径 - 器高 - 底径 -	埋土	①緻密 ②還元焰 硬質 ③灰色	高台は角高台がやや崩れた形。施釉は内外面体部見込み部まで刷毛塗り。
5	須恵器 壺	胴中～底1/2 口径 - 器高(15.1) 底径(9.8)	埋土	①石英 赤褐色粒 ②やや酸化焰 軟質 ③暗灰黄色	胴部の最大径は上半にくると思われる。 外面 胴部下半は横方向の透削り。
6	土師器 罍	口縁～胴部 口径(12.4)器高(7.9) 底径 -	埋土	①砂粒 ②酸化焰 硬質 ③にょい赤褐色	コノ字状の口縁を有する。胴部との境界を強く断る。 外面 口縁部は横ナデ。胴部は直削り。 内面 口縁部はナデ。輪痕み残存。胴部は寛ナデ。
7	瓦 男瓦	破片 厚さ 1.3	埋土	①粗砂 白色緑石粒 ②還元焰 硬質 ③灰色	2枚割。表面は回転糸痕あり。無文。布目側は粘土板合わせ目なし。布合わせ目あり。製作地は笠懸家跡群。8世紀のものと思われる。
8	瓦 男瓦	破片 厚さ 1.5	埋土	①粗砂 白色緑石粒 ②還元焰 硬質 ③灰色	2枚割。表面は回転糸痕あり。無文。布目側は粘土板・布目の合わせ目なし。糸切り痕不明。製作地は笠懸家跡群。8世紀のものと思われる。
9	瓦 男瓦	破片 厚さ 1.3	埋土	①粗砂 白色緑石粒 ②還元焰 並 ③黄灰色	2枚割か。表面は回転糸痕なし。縦痕あり。無文。布目側は粘土板・布目の合わせ目なし。糸切り痕あり。陶土でなく、合成粘土のため。製作地は道跡周辺か。時期は7～8世紀。

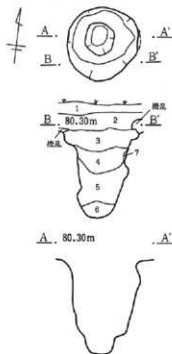
A区11号井戸跡 (第80図 P.L.24・65)

位置 A区中央部の南端に近い869・-326グリッドに位置する。本井戸跡の近くには、A区8号住居跡・13号住居跡がある。

重複 なし。

概要 本井戸跡の南側は調査区外になっているため、調査区を拡張して調査した。確認面の平面形状は円形で、その規模は径114cm×116cmを測る。底面の形状も円形で、径44cm×50cm、深さは150cmを測る。断面形は円筒形である。中程及び底面に近い壁面でオーバーハンクしている箇所があり、アグリと思われる。アグリの最上部は確認面より深さ51cmで、これより上下幅75cmにわたって連続していると思われる。土層の確認は表土より行った。本井戸跡の埋土は白色軽石粒を含む黒褐色土である。底面に近くなるほど、粘質土の占める割合が高くなる。

出土遺物 本井戸跡の埋土から土師器壺、須恵器碗、大甕の破片が出土している。須恵器の大甕は破片が多量に出土しているが、接点がなく接合できなかった。径ははっきりしないが、相当大きな甕と思われる。内面には青海波文がうっすらみえる。焼成は酸化焰である。



- 1 暗褐色土 表土。
- 2 暗褐色土 旧耕作土。
- 3 暗灰色土 1mm程度の白色砂粒をやや多く含む。軟質。
- 4 黒褐色土 1mm程度の白色軽石粒を多く含む。
- 5 黒褐色土 4層と土質は似ているが、軽石粒の混入は微量。
- 6 黒色土 黒褐色土を少量、白色粘土（崩落土）を少量含む。
- 7 褐色土 壁の崩落土。



0 1:60 2m



0 1:4 10cm

0 1:3 10cm

第80図 A区11号井戸跡、出土遺物

A区11号井戸跡

番号	種類 器種	残存 量 (cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・器形・文様の特徴
1	須恵器 壺	口縁～底1/6 口径(13.6) 器高 3.8 底径(6.6)	埋土	①粗砂 石英 ②還元焰 硬質 ③灰色	内湾気味に立ち上がる。筒體成形。右回転糸切り。
2	須恵器 碗	体～底部 口径 - 器高(2.0) 底径 6.9	埋土	①粗砂 ②還元焰 硬質 ③黄灰色	筒體成形。右回転糸切り。腹部の張り弱い。
3	土師器 壺	口縁～肩部 口径(11.2) 器高(4.0) 底径 -	埋土	①粗砂 ②酸化焰 硬質 ③によい赤褐色	コの字状の口縁を有する。胴部との境界を強く割でる。 外面 頸部は寛ナア。肩部は斜め及び横方向の隆起あり。 内面 ナア。

3. 奈良・平安時代の遺構と遺物

A区12号井戸跡 (第81図 P L24・66)

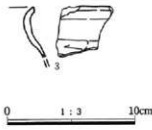
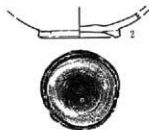
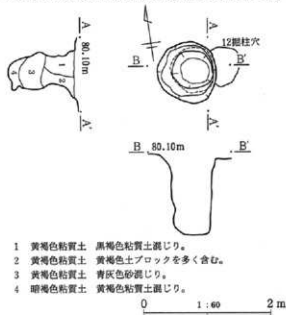
位置 A区中央部の南端に近い878・-326グリッドに位置する。近くには、A区8号住居跡がある。

重複 A区12号掘立柱建物跡と重複しており、柱穴P7を掘り込んでいる。

概要 確認面の平面形状は円形で、その規模は、径94cm×98cmを測る。底面の形状も円形で、径58cm×64cmを測る。深さは125cmを測る。断面形は円筒形である。中程及び底面に近い壁面にオーバーハングしている箇所があり、アグリと思われる。特に底部近くは大きくオーバーハングしている。アグリの最上部は確認面より深さ39cmで、これより上下幅66cmにわたって連続していると思われる。本井戸跡の埋土は黒褐色土を含む黄褐色粘質土である。

出土遺物 埋土から土師器甕、須恵器坏・埴、縦16.0cm・横4.7cm・厚さ3.3cm・重さ491.6gの自然石

(粗粒輝石安山岩)が出土している。また、殿石も出土しており、縄文時代の遺構外遺物として掲載した。



第81図 A区12号井戸跡、出土遺物

A区12号井戸跡

番号	種類	残存法	残存量(cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
1	須恵器 埴	口縁～体部 口径(11.8)器高(5.4) 底径 -	-	埋土	①細砂 白色細粒 ②還元焰 硬質 ③灰色	腹部が張り、口縁部がやや外反する。簡輪成形。
2	須恵器 坏	底部片 口径 - 器高(1.9) 底径 5.8	-	埋土	①粗砂 ②還元焰 硬質 ③灰色	腹部が張り、簡輪成形。未切り痕がわずかに残る。右回転未切りか?付け高台。
3	土師器 甕	口縁片 口径 - 器高 - 底径 -	-	埋土	①砂粒 ②酸化焰 硬質 ③褐色	口縁部の唇壁が厚い。口唇部は外傾し、沈降状になっている。外面 口縁部は横ナゲ。胴部は横方向の寛削り。内面 口縁部は横ナゲ。

(4) 溝

本遺跡から77条の溝が検出されている。その内の14条が奈良・平安時代の溝である。これらの中で、A区20号・21号溝とB区1号・2号溝は、同一の溝と思われるが、幅・長さともに本遺跡の最大級の規

模をもつ。溝の底からは、鋤跡と思われる痕跡がでている。本遺跡の西に隣接する波志江中野面遺跡でも、As-B下水田跡より下層で、同様な大溝が検出されている。

第3章 検出された遺構と遺物

A区20号溝 (第82・84図 P.L25・66)

位置 本溝はA区東端にあり、897・-268グリッドに位置する。近くにはA区15号住居跡がある。

重複 A区21号溝に掘り込まれている。

形態 本溝は東に傾きながら直線状に走向する。北側でA区21号溝と重複する。溝の底には筋跡と思われる痕跡が残る。本溝の北に位置するB区1号溝はその形態から、同一の溝と思われる。長さは24.7m、溝の上端幅375~493cm、下端幅10~24cm、深さは断面観察で108cmを測る。走向方位はN-15°-Eである。法面は緩やかで断面形は碗状に近い。

出土遺物 埋土から土師器環が出土している。



A区21号溝 (第83・84図 P.L25・66)

位置 本溝はA区東端にあり、897・-268グリッドに位置する。近くにはA区15号住居跡がある。

重複 A区20号溝を掘り込む。

形態 本溝は東に傾きながら直線状に走向する。北側でA区20号溝と重複する。本溝の北に位置するB区2号溝はその形態から、同一の溝と思われる。長さは28.2m、溝の上端幅153~237cm、下端幅15~36cm、深さは断面観察で108cmを測る。走向方位はN-15°-Eである。断面形は、V字状に近い。

出土遺物 埋土から土師器環、須恵器環が出土している。



0 1:3 10cm

第82図 A区20号溝出土遺物

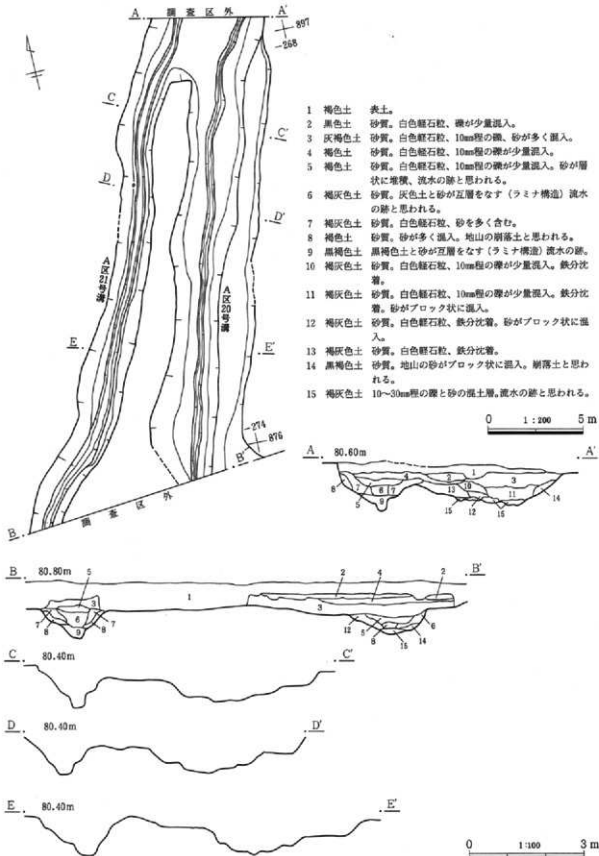
A区20号溝		残存量(cm)	出土位置	①粘土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
番号	種類				
1	土師器環	口縁~底部 口径(9.8) 筒高(2.7) 底径 -	埋土	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③によい褐色	口縁部は内湾気味に外傾する。 外面 口縁部横ナデと底部寛削りの間に、調整の不明な部分有り。 内面 ナデ。
2	土師器環	口縁~底1/3 口径(11.2) 筒高(2.8) 底径(9.1)	埋土	①細砂 ②酸化焰 軟質 ③によい褐色	口縁部は内湾気味に外傾する。 外面 口縁部横ナデと底部寛削りの間に、調整の不明な部分有り。 内面 ナデ。



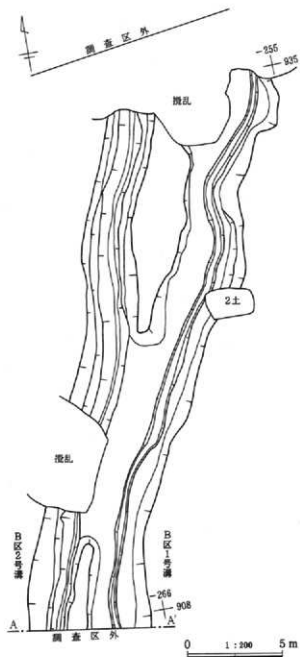
0 1:3 10cm

第83図 A区21号溝出土遺物

A区21号溝		残存量(cm)	出土位置	①粘土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
番号	種類				
1	土師器環	口縁~底部 口径(11.0) 筒高(3.1) 底径 -	埋土	①細砂 白色細砂 ②酸化焰 硬質 ③明赤褐色	口縁部は内湾気味に立ち上がるが、口縁端部で外反する。 内外面に共に唇面があらわれている。外面にキズあり。底部寛削りは磨滅が著しく、単位不明。内面に指押さえ気あり。
2	須恵器環	口縁~底1/2 口径(12.4) 筒高 3.2 底径(8.0)	埋土	①粗砂 3mm程の小石 ②還元焰 硬質 ③灰色	口縁は直線的に外反する。壱輪成形。右側転系切り。 内面 壱輪成形後ナデ。
3	須恵器環	ほぼ兜形 口径 11.4 筒高 3.4 底径 6.0	埋土	①砂粒 ②還元焰 硬質 ③灰オリープ色	口縁は直線的に外反する。壱輪成形。右側転系切り。



第84図 A区20・21号溝



B区1号溝 (第85・86図 P L25・66)

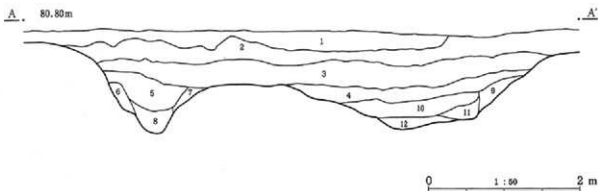
位置 本溝はB区東端にあり、935・-255グリッドに位置する。近くにはB区3号溝がある。

重複 B区2号溝に掘り込まれている。

形態 本溝は東に傾きながら直線状に走向する。南側でB区2号溝と重複する。本溝の北側は攪乱により、その流れが分からなくなってしまった。溝の底には鋤跡と思われる痕跡が残る。本溝の南に位置するA区20号溝はその形態から、同一の溝と思われる。長さは30.2m、溝の上端幅206~345cm、下端幅10~45cm、深さは断面観察で125cmを測る。走向方位はN-20°-Eである。法面は緩やかで断面形は椀状に近い。

出土遺物 埋土から土師器環、須恵器環・壺が出土している。

- | | | |
|----|------|--|
| 1 | 褐色土 | 黄土。 |
| 2 | 黒色土 | 砂質。白色輝石粒、礫が少量混入。 |
| 3 | 褐色土 | 砂質。白色輝石粒、10mm程の礫が少量混入。 |
| 4 | 褐色土 | 砂質。白色輝石粒、10mm程の礫が少量混入。砂が層状に堆積。流水の跡と思われる。 |
| 5 | 褐灰色土 | 砂質。灰色土と砂が互層をなす(ラミナ構造) 流水の跡と思われる。 |
| 6 | 褐灰色土 | 砂質。白色輝石粒、砂を多く含む。 |
| 7 | 褐色土 | 砂質。砂が多く混入。地山の崩落土と思われる。 |
| 8 | 黒褐色土 | 黒褐色土と砂が互層をなす(ラミナ構造) 流水の跡。 |
| 9 | 褐灰色土 | 砂質。白色輝石粒、10mm程の礫が少量混入。鉄分沈着。 |
| 10 | 褐灰色土 | 砂質。白色輝石粒、10mm程の礫が少量混入。鉄分沈着。砂がブロック状に混入。 |
| 11 | 褐灰色土 | 砂質。白色輝石粒、鉄分沈着。砂がブロック状に混入。 |
| 12 | 褐灰色土 | 10~30mm程の礫と砂の混土層。流水の跡と思われる。 |



第85図 B区1・2号溝

B区2号溝 (第85・87図 P L25・66)

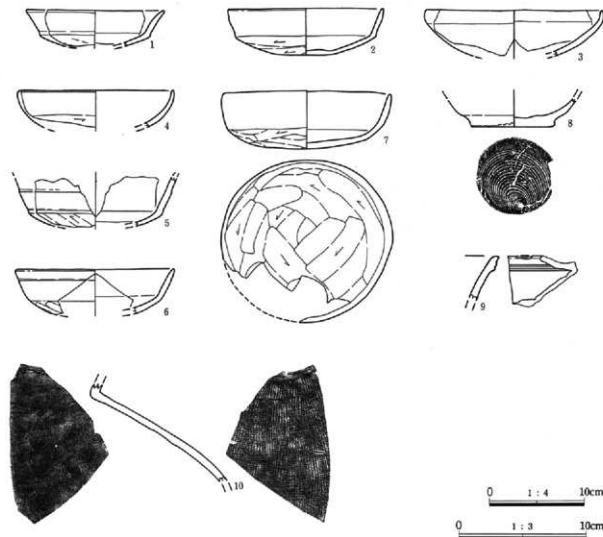
位置 本溝はB区東端にあり、935・-225グリッドに位置する。近くにはB区3号溝がある。

重複 B区1号溝を掘り込む。

形態 本溝は東に傾きながら直線状に走向する。南側でB区1号溝と重複する。本溝の北側は攪乱により、その流れは不明である。本溝の南に位置するA

区21号溝はその形態から、同一の溝と思われる。長さは27.8m、溝の上端幅200~292cm、下端幅10~35cm、深さは断面観察で135cmを測る。走向方位はN-20°-Eである。断面形は、V字状に近い。

出土遺物 埋土から須恵器甕?が出土している。



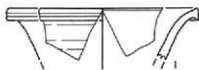
第86図 B区1号溝出土遺物

B区1号溝

番号	種類	残存 法 量(cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・器形・文様の特徴
1	土師陶 罎	口縁~体部 口径(10.8)器高(2.9) 底径 -	埋土	①赤褐色粒 ②酸化焰 軟質 ③褐色	丸底で外縁を有する。口縁部は外反する。 外面 口縁部は横ナゲ。底部は寛削り。 内面 口縁部は横ナゲ。以下はナゲ。
2	土師陶 罎	口縁~底1/2 口径12.2 器高 3.6 底径 -	埋土	①砂粒 ②酸化焰 軟質 ③褐色	口縁部は直線的に外傾する。 外面 口縁部は横ナゲ。底部は寛削り。 内面 口縁部は横ナゲ。以下はナゲ。

第3章 検出された遺構と遺物

番号	種類 器種	残存 量(cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・器形・文様の特徴
3	土師器 環	口縁～底部 口径(13.9)器高(3.7) 底径 -	埋土	①砂粒 白色粒 ②酸化焰 硬質 ③褐色	丸底で口縁部がややC字状に内湾する。 外面 口縁部は横ナデ。体部は寛削り後ナデ。 内面 口縁部は横ナデ。以下はナデ。
4	土師器 環	口縁～底部 口径(12.2)器高(2.9) 底径 -	埋土	①砂粒 ②酸化焰 硬質 ③褐色	口縁部はわずかに内湾気味に外傾する。 外面 口縁部は横ナデ。底部は寛削り。 内面 口縁部は横ナデ。以下はナデ。
5	土師器 環	口縁～底部 口径 - 器高(3.9) 底径 -	埋土	①砂粒 赤褐色粒 ②酸化焰 硬質 ③明赤褐色	口縁部は直線的に外傾する有段口縁。 外面 口縁部は横ナデ。底部は寛削り。 内面 口縁部は横ナデ。以下はナデ。
6	土師器 環	口縁～底1/5 口径(12.4)器高(3.6) 底径 -	埋土	①赤褐色粒 ②酸化焰 やや軟質 ③褐色	口縁部は直線的に外傾する。 外面 口縁部は横ナデ。口縁部に僅強い凹縁有り。底部は寛削り。 内面 口縁部は横ナデ。以下はナデ。
7	土師器 環	口縁～底部 口径 13.2 器高 4.6 底径 -	埋土	①粗砂 ②酸化焰 硬質 ③褐色	丸底で、口縁部はわずかに内湾気味に外傾する。 外面 口縁部は横ナデ。底部は寛削り。 内面 口縁部は横ナデ。以下はナデ。
8	須恵器 環	底部片 口径 - 器高(2.3) 底径(6.5)	埋土	①粗砂 ②酸化焰 硬質 ③浅黄色	内湾気味に立ち上がる体部。轆轤成形。右回転糸切り。 外面 底部の周辺は回転調整を行う。
9	須恵器 壺	口縁片 口径 - 器高 - 底径 -	埋土	①砂粒 ②還元焰 硬質 ③灰白色	口縁部は外反しながら立ち上がり、外向きに面をもつ。
10	須恵器 壺	頸～肩部 口径 - 器高 - 底径 -	埋土	①1～5mmの粒子 ②還元焰 硬質 ③灰色	頸部はくの字状に屈曲する。 外面 格子状の叩き目。 内面 磨滅しているが、同心円状の当て目。



第87図 B区2号溝出土遺物

0 1:4 10cm

B区2号溝

番号	種類 器種	残存 量(cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・器形・文様の特徴
1	須恵器 壺?	口縁片 口径(20.0)器高(5.5) 底径 -	埋土	①砂粒 ②還元焰 硬質 ③灰色	口縁部は外湾しながら立ち上がり、外向きに面をもつ。口縁部端部に凹縁有り。 内外面 自然釉有り。

B区3号溝 (第88図 P L26)

位置 本溝はB区東端にあり、936-264グリッドに位置する。近くにはB区1号・2号溝がある。

重複 なし。

形態 本溝はやや東に傾きながら、B区1号・2号溝と併行して、直線状に走向する。本溝の中程は擾乱により、その先の流れが不明である。B区4号溝と重複関係にあるB区15号溝は本溝と同一である可能性がある。長さは18.6m、溝の上端幅50～78cm、下端幅22～50cm、深さは断面観察で38cmを測る。走向方位はN-17°-Eである。断面形は、碗状に近い。
出土遺物 なし。

B区4号溝 (第88図 P L26)

位置 本溝はB区東端にあり、936-264グリッドに位置する。近くにはB区3号溝がある。

重複 B区15号溝と本溝の南側で重複しているが、その新旧関係は不明である。

形態 本溝はやや東に傾きながら、B区1号・2号溝と併行して、直線状に走向する。本溝の中程は擾乱により、流れが不明で、南側は再び直線状に走向する。長さは29.7m、溝の上端幅55～80cm、下端幅18～40cm、深さは断面観察で38cmを測る。走向方位はN-15°-Eである。断面形は方形に近い。
出土遺物 なし。

3. 奈良・平安時代の遺構と遺物

B区15号溝 (第88図 P L26)

位置 本溝はB区東端にあり、909・-273グリッドに位置する。近くにはB区1号・2号溝がある。

重複 B区4号溝と重複関係にあるが新旧は不明。

形態 本溝はやや東に傾きながら、B区1号・2号溝と併行して、直線状に走向する。本溝はB区3号溝と同一の可能性ある。長さは8.6m、溝の上端幅38~55cm、下端幅10~18cm、深さは断面観察で14cmを測る。走向方位はN-16°-Eである。断面形は、椀状に近い。

出土遺物 なし。

B区3号溝

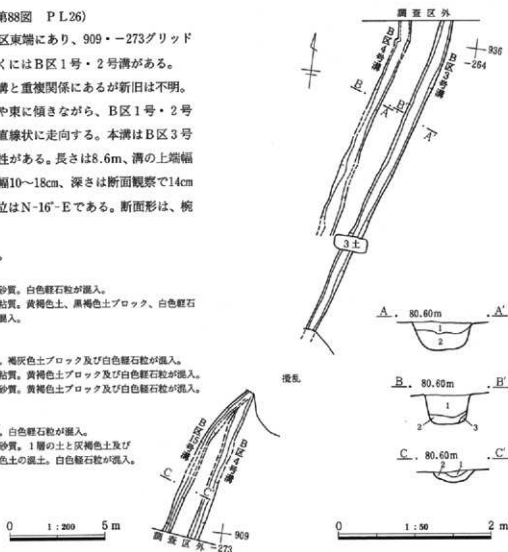
- 1 黒褐色土 やや砂質。白色軽石粒が混入。
- 2 灰褐色土 やや粘質。黄褐色土、黒褐色土ブロック、白色軽石粒が混入。

B区4号溝

- 1 黒褐色土 砂質。褐灰色土ブロック及び白色軽石粒が混入。
- 2 灰褐色土 やや粘質。黄褐色土ブロック及び白色軽石粒が混入。
- 3 黒褐色土 やや砂質。黄褐色土ブロック及び白色軽石粒が混入。

B区15号溝

- 1 黒褐色土 砂質。白色軽石粒が混入。
- 2 黒褐色土 やや砂質。1層の土と灰褐色土及び黄褐色土の混土。白色軽石粒が混入。



第88図 B区3・4・15号溝

B区5号溝 (第89・90図 P L26・66)

位置 本溝はB区中央部にあり、935・-300グリッドに位置する。近くにはB区7号溝がある。

重複 B区6号溝、B区19号土坑に掘り込まれている。また、B区14号溝を掘り込む。

形態 本溝は重複関係にあるB区6号溝と併行して東西方向に走向する。本溝の中段は攪乱により、大きく掘り込まれている。長さは75.5m、溝の上端幅30~136cm、下端幅10~47cm、深さは断面観察で65cmを測る。走向方位はN-69°-E、N-79°-Eである。断面形は、V字形に近い。

出土遺物 土師器環・甕、須恵器環・甕が出土している。

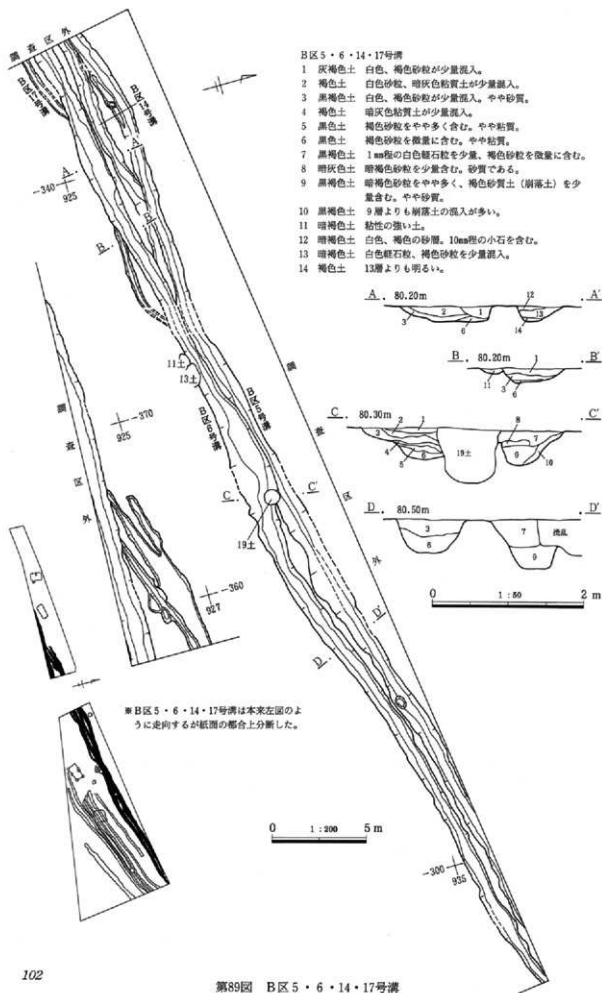
B区6号溝 (第89図 P L26)

位置 本溝はB区中央部にあり、935・-300グリッドに位置する。近くにはB区7号溝がある。

重複 B区19号土坑に掘り込まれている。また、B区5号・14号・17号溝を掘り込む。

形態 本溝は重複関係にあるB区5号溝と併行して東西方向に走向する。長さは86.5m、溝の上端幅46~198cm、下端幅19~103cm、深さは断面観察で45cmを測る。走向方位はN-81°-E、N-74°-Eである。断面形は、V字形に近い。

出土遺物 なし。



3. 奈良・平安時代の遺構と遺物

B区14号溝 (第89・91図 P L26・66)

位置 本溝はB区中央部にあり、925・-340グリッドに位置する。近くにはB区17号溝がある。

重複 B区5号・6号溝に掘り込まれる。

形態 本溝は重複関係にあるB区6号溝の下から東西方向に走向する。長さは32.8m、溝の上端幅23~121cm、下端幅10~110cm、深さは断面観察で20cmを測る。走向方位はN-73°-E、N-84°-Eである。断面形は、椀状に近い。

出土遺物 土師罎、須恵器壺が出土している。



0 1:4 10cm

0 1:3 10cm

第90図 B区5号溝出土遺物

B区5号溝

番号	種類	残存量 (cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・器形・文様の特徴
1	土師罎 環	口縁~底部 口径(19.9)器高 3.6 底径 -	埋土	①砂粒 ②酸化焰 硬質 ③にぶい赤褐色	口縁部はわずかに内湾気味に外傾する。 外面 口縁部は横ナデ。底部は貫削り。 内面 口縁部は横ナデ。以下はナデ。
2	須恵器 環	底部片 口径 - 器高(2.7) 底径(6.8)	埋土	①粗砂 1~5mm程度の石 ②還元焰 硬質 ③灰色	内湾気味に立ち上がる体部。縦線成形。右回転糸切り。
3	土師罎 壺	口縁片 口径(19.4)器高(4.4) 底径 -	埋土	①砂粒 ②酸化焰 硬質 ③にぶい赤褐色	口縁部の器壁が厚い。口唇部は外傾し、洗鉢状になっている。 外面 口縁部は横ナデ。胴部は横方向の貫削り。 内面 口縁部は横ナデ。以下はナデ。
4	須恵器 壺	口縁片 口径(25.0)器高(4.5) 底径 -	埋土	①砂粒 白色細粒 ②還元焰 硬質 ③灰色	口縁部は外湾しながら、外向きに面をもつ。



第91図 B区14号溝出土遺物

0 1:4 10cm

B区14号溝

番号	種類	残存量 (cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・器形・文様の特徴
1	土師罎 壺	口縁片 口径(15.4)器高(3.3) 底径 -	埋土	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③にぶい橙色	コノ字状の口縁を有する。 外面 口縁部は横ナデ。 内面 口縁部は横ナデ。
2	須恵器 壺	口縁~胴部 口径(14.3)器高(6.0) 底径 -	埋土	①細砂 ②還元焰 硬質 ③灰色	口縁部は外向きに面をもつ。口縁端部に比類が混る。口縁端部及び胴部に自然釉あり。

B区16号溝 (第92図 P L27)

位置 本溝はB区東端にあり、930・-277グリッドに位置する。近くにはB区4号溝がある。

重複 B区3号・4号住居跡を掘り込む。

形態 本溝は途切れ途切れであるが、南北方向に走向する。長さは16.5m、溝の上端幅28~46cm、下端幅11~37cm、深さは断面観察で16cmを測る。走向方位はN-9°Eである。断面形は、椀状に近い。本溝の埋土は白色軽石粒を含む黒褐色土である。

出土遺物 なし。

D区3号溝 (第92図 P L27)

位置 本溝はD区東側にあり、889・-224グリッドに位置する。近くにはD区3号掘立柱建物跡がある。

重複 なし。

形態 本溝は、南北方向に走向する。中程で攪乱に掘り込まれている。本溝の長さは9.0m、溝の上端幅28~65cm、下端幅10~45cm、深さは断面観察で8cmを測る。走向方位はN-4°Wである。断面形は皿状に近い。本溝の埋土は多量の軽石粒を含む黒褐色土である。

出土遺物 なし。

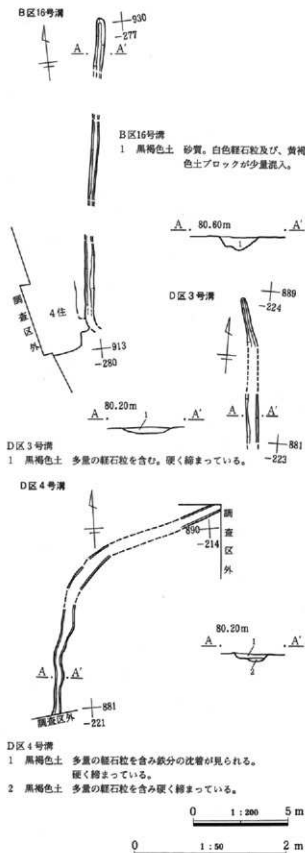
D区4号溝 (第92図 P L27)

位置 本溝はD区東側にあり、890・-214グリッドに位置する。近くにはD区3号溝がある。

重複 なし。

形態 本溝は、中程で直角近くに曲がる。本溝の長さは15.8m、溝の上端幅28~74cm、下端幅16~58cm、深さは断面観察で9cmを測る。走向方位は北辺でN-71°E、西辺でN-11°Eである。断面形は皿状に近い。本溝の埋土は多量の軽石粒を含む黒褐色土である。

出土遺物 なし。



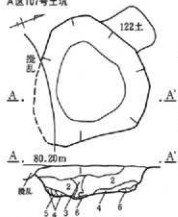
第92図 B区16・D区3・4号溝

(5) 土坑

遺構名 (第93図 P.L.)	平面形 位置(G)	長軸 方向	長軸×短軸 深さ (cm)	備考 (遺物等)
A区107号土坑 (第93図 P.L.27・66)	円形 869・-355	不可	189×188 53	土師器環 A122土
A区122号土坑 (第93図 P.L.27)	長方形 869・-354	7°-W	57×68 14	A107土 重層
A区141号土坑 (第93図 P.L.27・67)	楕円形 895・-340	3°-W	156×83	土師砂甕
A区163号土坑 (第93図 P.L.47・67)	長方形 907・-381	26°-E	326×245 70	土師砂甕 須恵砂甕

遺構名 (第93図 P.L.)	平面形 位置(G)	長軸 方向	長軸×短軸 深さ (cm)	備考 (遺物等)
A区179号土坑 (第93図 P.L.27・67)	方形 883・-313	不可	142×123 17	土師砂甕 須恵砂甕
B区1号土坑 (第93図 P.L.27)	長方形 925・-374	76°-E	380×175 27	
B区18号土坑 (第93図 P.L.27・67)	円形 914・-283	不可	35×24 40	須恵器環 B3住

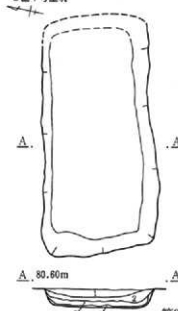
A区107号土坑



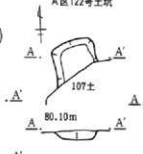
A区107号土坑

- 1 黒褐色粘質土 1~2mm程の軽石粒、5mm程の褐色土粒、20~50mm程の褐色土ブロックが混入。
- 2 暗褐色粘質土 1mm程の軽石粒、1~2mm程の褐色土粒、褐色土ブロック、2mm程の赤褐色土粒が混入。
- 3 暗褐色土 褐色土が多量に混じる。
- 4 褐色粘質土 1mm以下の軽石粒が混入。
- 5 黄褐色土 粘質少ない。
- 6 黄褐色土 暗褐色土混じり。

B区1号土坑



A区122号土坑



A区122号土坑

- 1 黒褐色粘質土 1mm程の軽石粒が混入。灰褐色粘質土混じり。

A区179号土坑



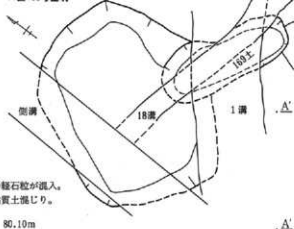
A区179号土坑

- 1 黒褐色粘質土 0.5mm程の白色軽石粒が混入。
- 2 暗褐色粘質土 黒褐色粘質土混じり。

B区1号土坑

- 1 黒褐色土 1mm程の白色と灰褐色の軽石粒を多く含む。(平安時代住居堀土と同じ土層) 硬い。
- 2 黒褐色土 全体に砂質。上層と異なり全体に灰色の強い黒褐色土。
- 3 灰黄褐色土 砂質である。粒が細かく均一である。
- 4 灰黄褐色土 3層よりも黄褐色土が多く含まれている。

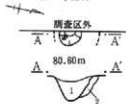
A区163号土坑



A区163号土坑

- 1 灰褐色土 褐色粘土ブロックを少量含む。
- 2 褐色土 灰褐色土を含む。

B区18号土坑



B区18号土坑

- 1 黒褐色土 砂質。焼土粒を微量に混入。
- 2 黒褐色土 砂質。黄褐色土ブロックが混入。

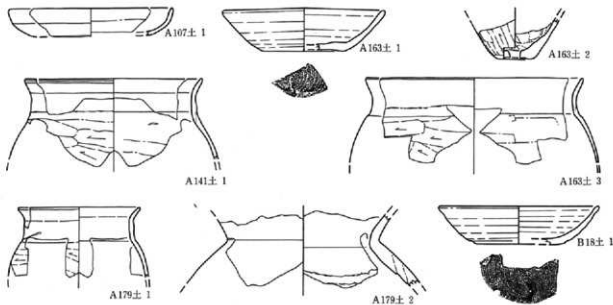
A区141号土坑



第93図 A区107・122・141・163・179・B区1・18号土坑

0 1:60 2m

第3章 検出された遺構と遺物



第94図 A区107・141・163・179・B区18号土坑出土遺物

A区107号土坑

番号	種類 器種	残存 法量(cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
1	土師器 杯	口縁~底部 口径(12.8)器高(2.2) 底径 -	埋土	①砂粒 ②酸化焰 硬質 ③明褐色	口縁は内湾気味に外傾する。 外面 口縁部は横ナデ。底部は寛削り。中間はナデ。 内面 口縁部は横ナデ。以下はナデ。

A区141号土坑

番号	種類 器種	残存 法量(cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
1	土師器 壺	口縁~肩1/3 口径(18.6)器高 9.3 底径 -	埋土	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③にぶい赤褐色	コの字状の口縁を有する壺。 外面 口縁部は横ナデ。胴部は横方向の寛削り。 内面 口縁部は横ナデ。胴部はナデ。

A区163号土坑

番号	種類 器種	残存 法量(cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
1	須恵器 杯	口縁~底1/5 口径(12.6)器高 3.4 底径(6.6)	埋土	①細砂 白色細粒 ②還元焰 硬質 ③灰色	口縁はわずかに内湾気味に立ち上がる。縦輪成形。右回転糸切り。 外面 口縁部は横ナデ。 内面 口縁部は横ナデ。
2	土師器 甕	底部片 口径 - 器高(4.3) 底径 3.7	埋土	①砂粒 赤褐色粒 ②酸化焰 硬質 ③にぶい褐色	径1cmほどの孔を有する小型の甕。 外面 縦方向の寛削り。 内面 寛ナデ。
3	土師器 壺	口縁~肩1/6 口径(22.8)器高(9.0) 底径 -	埋土	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③赤褐色	コの字状の口縁を有する壺。やや屈曲は弱い。 外面 口縁部上半は横ナデ。下半は寛ナデ。胴部は横方向の寛削り。 内面 口縁部上半は横ナデ。以下は寛ナデ。

A区179号土坑

番号	種類 器種	残存 法量(cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
1	土師器 壺	口縁~肩部 口径(12.6)器高(7.4) 底径 -	埋土	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③褐色	コの字状の口縁を有する壺。屈曲は強い。 外面 口縁部は横ナデ。工具痕を有するナデ調整。胴部は寛削り。 内面 口縁部は横ナデ。以下は工具痕を有するナデ調整。
2	須恵器 壺	肩部~肩部 口径 - 器高(7.8) 底径 -	埋土	①砂粒 白色粒 ②還元焰 硬質 ③灰色	くの字状に外反する口縁。 外面 口縁部、胴部に自然釉が掛かる。 内面 口縁部、胴部に自然釉が掛かる。

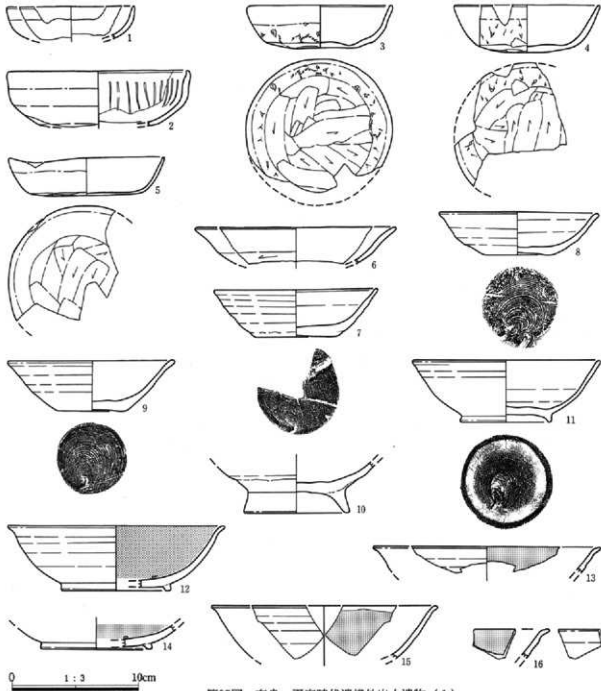
B区18号土坑

番号	種類 器種	残存 法量(cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
1	須恵器 杯	口縁~底1/4 口径(12.6)器高 3.6 底径(7.2)	埋土	①細砂 ②還元焰 硬質 ③灰色	口縁は内湾気味に立ち上がる。縦輪成形。

(6) 遺構外出土遺物(第95~97図 P L67・68)

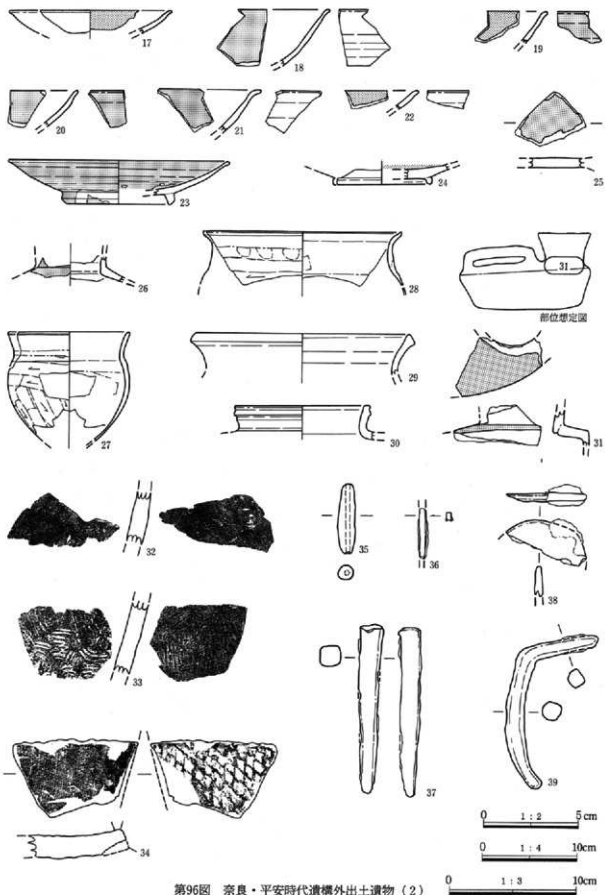
奈良・平安時代の遺構外遺物は遺物収納箱で8箱程出土している。これらの遺物のうち、本書では比較的遺存の良い45点を掲載した。掲載した土師器や須恵器は9世紀の特徴を示すものがほとんどである。本遺跡の住居跡の遺物の時期とほぼ合致する。灰釉陶器は完形のもの出土していないが、黒笹14

号窯式のものが多くあり、今後の県内の灰釉陶器の研究に貴重な資料となると思われる。また、釘や刀子などの鉄製品や鉄蒔が数多く出土している。本遺跡では小鍛冶の遺構は検出されていないので、周辺の遺跡との関係を考える必要がある。



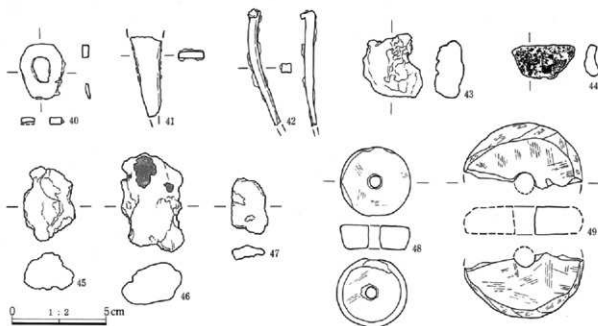
第95図 奈良・平安時代遺構外出土遺物(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第96図 奈良・平安時代遺構外出土遺物(2)

3. 奈良・平安時代の遺構と遺物



第97図 奈良・平安時代遺構外出土遺物(3)

奈良・平安時代遺構外出土遺物

番号	種類 器種	残存 量 法 量(cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
1	土師器 環	口～体部片 口径(10.0)器高(2.6) 底径 -	A区 5号溝 埋土	①粗砂 ②酸化焰 硬質 ③鈍い褐色	丸底。口縁部は内湾傾向を有する。 外面 口縁部は横ナゲ。以下は割減が著しい。 内面 口縁部は横ナゲ。
2	土師器 環	口～底1/3 口径(14.1)器高(4.4) 底径(9.6)	A区 グリッド	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③よじ赤褐色	口縁部が内湾しながら立ち上がる。 外面 口縁部は横ナゲ。底部は貫削り。中間はナゲと思われる。 内面 放射状の増文が施されている。口～底部に油煙が付着。
3	土師器 環	口～底部2/3 口径 11.4 器高 3.4 底径 8.6	D区 表探	①粗砂 ②酸化焰 硬質 ③よじ褐色	平底。口縁部はやや内湾しながら立ち上がる。 外面 口縁部は横ナゲ。底部は貫削り。中間に未調整部分有り。 内面 口縁部は横ナゲ。
4	土師器 環	口～底部1/5 口径(11.2)器高 3.8 底径 -	A区 グリッド	①粗砂 ②酸化焰 硬質 ③明赤褐色	平底。口縁部はやや直線的に外傾する。 外面 口縁部は横ナゲ。底部は貫削り。中間に未調整部分有り。 内面 口縁部は横ナゲ。以下はナゲ。
5	土師器 環	口～底部1/4 口径(12.3)器高 3.0 底径(9.0)	A区 グリッド	①粗砂 ②酸化焰 硬質 ③明褐色	平底。口縁部は直線的に外傾する。 外面 口縁部は横ナゲ。底部は貫削り。中間はナゲと思われる。 内面 口縁部は横ナゲ。
6	土師器 皿	口縁部片 口径(15.7)器高(2.9) 底径 -	A区 1号土坑 埋土	①粗砂 ②酸化焰 硬質 ③褐色	大きく外傾する。口縁部はさらに外反する。 外面 口縁部は横ナゲ。底部は貫削り。 内面 口縁部は横ナゲ。
7	須恵器 環	口～底部1/4 口径(12.8)器高 4.8 底径(6.6)	A区 グリッド	①細砂 ②還元焰 硬質 ③灰青褐色	底部より直線的に立ち上がる。轆轤成形。右回転糸切り。 外面 底部の刻線部に糸切り痕が見える。粘土円柱上での巻き上げによって成形されたものと思われる。
8	須恵器 環	完形 口径 12.4 器高 3.4 底径 5.5	A区 表探	①砂粒 ②還元焰 硬質 ③灰青色	やや腰が張り、口縁部は外反する。轆轤成形。右回転糸切り。 外面 口縁に油煙と思われる部分有り。体～底部にかけて吸炭。 内面 体～底部にかけて吸炭有り。
9	須恵器 環	4/5 口径 13.0 器高 4.1 底径 5.6	A区 表探	①粗砂 ②還元焰 硬質 ③灰オリーブ色	やや腰が張り、口縁部は外反する。轆轤成形。右回転糸切り。 内外面 吸炭あり。
10	須恵器 塊	体～高台 口径 - 器高(4.0) 底径(7.0)	C区 グリッド	①砂粒 3mm程度の小石 ②酸化焰 硬質 ③明赤褐色	やや腰が張る器形。轆轤成形。右回転糸切り。付け高台。
11	須恵器 塊	口～高台1/6 口径(14.5)器高(4.9) 底径 6.8	A区 グリッド	①粗砂 ②還元焰 硬質 ③灰黄色	腰が張り、口縁部はやや外反する。轆轤成形。右回転糸切り。 外面 整形時のナゲによるものか、使用の磨減によるか体部下 部の轆轤線が消えている。体部下半部、底部、高台部に吸炭有。

第3章 検出された遺構と遺物

番号	種類 器種	検出 位置 量(cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・彫形・文様の特徴
12	灰釉陶器 碗	口～高台1/4 口径(16.6)器高 5.1 底径(7.8)	A区 グリッド	①緻密 微量の白色粒 ②還元焰 硬質 ③灰白色	口縁部は外反し、腰部が丸みをもって狭く張る。高台は角高台。黒笹14号窯式期。 内面 全面的に施釉されている。トチン痕あり。
13	灰釉陶器 碗	口縁部片 口径(17.6)器高(2.1) 底径 -	A区 グリッド	①緻密 ②還元焰 硬質 ③灰白色	口縁部は外反する。黒笹14号窯式期。 内面 全面施釉。
14	灰釉陶器 碗	底～高台1/6 口径 - 器高(2.0) 底径(8.0)	A区 グリッド	①緻密 ②還元焰 硬質 ③灰オリーブ色	腰部が丸みをもって張る。高台は角高台。黒笹14号窯式期。 内面 全面施釉。トチン痕有り。
15	灰釉陶器 碗	口縁部片 口径(17.6)器高(4.2) 底径 -	A区 グリッド	①緻密 ②還元焰 硬質 ③灰黄色	口縁部の外反が小さい。施釉は内面が刷毛塗りされている。光ヶ丘1号窯式期。
16	灰釉陶器 碗	口縁部片 口径 - 器高 - 底径 -	A区 グリッド	①緻密 ②還元焰 硬質 ③灰白色	口縁部は外反する。施釉は内面が刷毛塗りされている。黒笹14号窯式期。
17	灰釉陶器 碗	口縁部片 口径(12.4)器高 1.8 底径 -	A区 91号土坑 塚土	①緻密 ②還元焰 硬質 ③灰色	口縁部がやや直線的である。施釉は内面に刷毛塗りされている。光ヶ丘1号窯式期。
18	灰釉陶器 碗	口縁部片 口径 - 器高 - 底径 -	A区 グリッド	①緻密 ②還元焰 硬質 ③灰白色	口縁部の外反が小さい。施釉は内面に刷毛塗りされている。光ヶ丘1号窯式期。
19	灰釉陶器 碗	口縁部片 口径 - 器高 - 底径 -	A区 グリッド	①緻密 ②還元焰 硬質 ③灰色	口縁部の外反が小さい。施釉は内外面に刷毛塗りされている。光ヶ丘1号窯式期。
20	灰釉陶器 碗	口縁部片 口径 - 器高 - 底径 -	A区 グリッド	①緻密 ②還元焰 硬質 ③灰オリーブ色	口縁部の外反が小さい。施釉は内外面に刷毛塗りされている。光ヶ丘1号窯式期。
21	灰釉陶器 碗	口縁部片 口径 - 器高 - 底径 -	A区 グリッド	①緻密 ②還元焰 硬質 ③灰白色	口縁部は細く大きく開く。施釉は内面に刷毛塗りされている。黒笹14号窯式期。
22	灰釉陶器 皿	口縁部片 口径 - 器高 - 底径 -	A区 グリッド	①緻密 ②還元焰 硬質 ③灰白色	口縁部は外反する。施釉は内面に刷毛塗りされている。光ヶ丘1号窯式期。
23	灰釉陶器 皿	1/4 口径(17.1)器高 3.5 底径(8.0)	A区 グリッド	①緻密 ②還元焰 硬質 ③灰白色	口縁部の外反が小さく、高台は角高台がやや崩れた形状である。施釉は内外面ともに、体部見込み部まで、刷毛塗りされている。トチン痕あり。黒笹90号窯式期の古段階。
24	灰釉陶器 皿	底～高台1/6 口径 - 器高(1.6) 底径(7.2)	A区 グリッド	①緻密 ②還元焰 硬質 ③灰黄色	高台は角高台。黒笹14号窯式期。 内面 全面施釉。
25	灰釉陶器 碗または 皿	底部片 口径 - 器高 - 底径 -	A区 グリッド	①緻密 ②還元焰 硬質 ③灰黄色	碗または皿の底部と思われる。施釉は内面に刷毛塗りされている。黒笹14号窯式期か。
26	灰釉陶器 壺	頸部片 口径 - 器高(2.7) 底径 -	C区 21号溝 塚土	①緻密 ②還元焰 硬質 ③灰オリーブ色	胴部から直立する。広口蓋か。外面に施釉されている。
27	土師器 壺	口～頸部1/4 口径(12.6)器高(11.5) 底径 -	A区 グリッド	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③にぶい赤褐色	コの字状口縁の張。寛ナゲで胴部との境を強調する。 外面 口縁部は横ナゲ。頸部は寛ナゲ。胴部は横と縦の範囲あり。 内面 口縁部は横ナゲ。以下は寛ナゲ。
28	土師器 壺	口～頸部片 口径(19.8)器高(5.7) 底径 -	A区 グリッド	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③橙色	口唇部は外傾し、弱い沈線状になる。口縁の屈曲に鋭さがない。 外面 口縁部は横ナゲ。頸部に指頭痕あり。胴部は筒形あり。 内面 口縁部は横ナゲ。以下は寛ナゲ。
29	須恵器 壺	口縁部片 口径(22.4)器高(4.4) 底径 -	A区 グリッド	①粗砂 ②還元焰 硬質 ③灰色	口縁部は外反する。口唇部が外傾する。
30	須恵器 壺	口縁部片 口径(13.2)器高(3.6) 底径 -	C区 グリッド	①細砂 ②還元焰 硬質 ③灰色	口縁部外面に2条1組の沈線が横位に施されている。やや肩が張る器形である。
31	灰釉陶器 平底	頸部片 口径 - 器高 - 底径 -	A区 グリッド	①緻密 ②還元焰 硬質 ③灰白色	頸部及び体部下半は施釉されていない。

3. 奈良・平安時代の遺構と遺物

番号	種類 器種	残存 量(cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・器形・文様の特徴
32	須志器 壺	胴部片 口径 - 器高 - 底径 -	C区 11号溝 埋土	①細砂 白色粒 ②還元焰 硬質 ③灰色	大甕の胴部。 外面 全体的に磨減している。ハケメと思われる痕跡あり。 内面 全体的に磨減している。
33	須志器 壺	胴部片 口径 - 器高 - 底径 -	C区 24号溝 埋土	①細砂 白色細粒 ②還元焰 硬質 ③灰色	大甕の胴部。 外面 平行吹き目。 内面 同心円状の吹き目。
34	瓦 女瓦	破片 厚さ 1.7	A区 22号溝 埋土	①粗砂 ②弱酸化焰 ③にぶい黄褐色	横巻作り。表面は斜格子全面吹き。布目側は寄木痕あり。粘土板・布目の合わせ目なし。側部周取り1回。陶土でなく、合成粘土のため。製作地は遺跡周辺。時期は7～8世紀。
35	土製品 土罐	完形 縦 3.7 横 0.9 厚さ 0.8 孔径 0.2	A区 グリッド	①細砂 白色細粒 ②酸化焰 硬質 ③にぶい橙色	円筒形状の管状土罐。
番号	種類 器種	残存 量 (cm, g)	出土位置	器形・技法の特徴	
36	鉄製品 釘?	後端部欠 長さ 2.7 幅 0.3 厚さ 0.4 重さ 1.29	A区 グリッド	断面は方形。表面にクラック状の割れが入る。古代鉄と思われる。	
37	鉄製品 釘?	完形 長さ 8.9 幅 1.1 厚さ 1.1 重さ 19.13	A区 グリッド	先端部から面の方に太くした形状。断面は方形。表面はクラック状に割れが入っている。古代鉄と思われる。	
38	鉄製品 器種不明 板状	不明 長さ 4.2 幅 - 厚さ 0.5 重さ 7.54	A区 グリッド	半円形で器種ははっきりしない。錆ぶくれが目立つ。割れ口には鉄の合わせ目が見える。割れの様子から古代鉄と思われる。	
39	鉄製品 器種不明 棒状	不明 長さ 10.9 幅 1.0 厚さ 1.0 重さ 17.10	A区 グリッド	折れ曲がったような形状で出土している。器種が不明のため使用によってこの形状になったかはっきりしない。断面の形状も方形と円形で違いがある。表面の割れの様子から古代鉄と思われる。	
40	鉄製品 切羽?	完形 長さ 2.9 幅 2.3 厚さ 0.4 重さ 3.24	A区 グリッド	孔径 1.35cm×0.9cm。表面はクラック状に割れが入っている。古代鉄と思われる。	
41	鉄製品 刀子	基部 長さ 4.2 幅 1.7 厚さ 0.35 重さ 4.83	C区 グリッド	刃区に近い部分である。表面はクラック状に割れが入っている。古代鉄と思われる。	
42	鉄製品 釘	先端部欠 長さ 6.2 幅 0.5 厚さ 0.5 重さ 5.26	B区 グリッド	頭を直角に曲げた形状。頭の部分は 8mm程の大きさ。断面は方形。表面はクラック状に割れが入っている。古代鉄と思われる。	
43	鉄滓	長さ 5.1 幅 4.8 厚さ 2.3 重さ 64.9	A区 グリッド	平面形は丸みをもつ。表面は気体が抜けたような小さな穴や裂片が抜けたような穴がある。白色の小石が入り込む。	
44	原料鉄または鉄滓	長さ 1.6 幅 3.2 厚さ 0.8 重さ 7.3	A区 グリッド	表面は気体が抜けたような小さな穴がたくさんある。磁石を近づけると吸い付く。	
45	鉄滓	長さ 5.9 幅 4.1 厚さ 3.0 重さ 89.3	A区 グリッド	表面は気体が抜けたような小さな穴がたくさん見える。磁石を近づけるとやや吸い付く。	
46	鉄滓	長さ 7.8 幅 4.8 厚さ 2.8 重さ 87.5	A区 グリッド	表面は褐色土に覆われている。ところどころ炭や石が入り込んでいる。	
47	鉄滓 板状	長さ 2.9 幅 4.4 厚さ 1.2 重さ 19.7	C区 グリッド	表面は褐色土に覆われている。ところどころ炭が抜けた痕がある。磁石を近づけるとやや吸い付く。	
番号	種類 器種	残存 量 (cm, g)	出土位置	石 材	器形・器形・文様の特徴
48	石製品 紡錘車	完形 広径3.8 狭径3.6 孔径0.8 厚さ1.3 重さ25.6	A区 グリッド	砥沢石	断面は薄台形。上下面はよく磨れている。下面は紡錘に向かっ高くする。
49	石製品 紡錘車	1/2 広径5.8 狭径5.5 孔径1.1 厚さ1.5 重さ15.1	A区 グリッド	二ツ岳輝石	側面に丸みを持つが、断面は長方形に近い。上下面はよく磨れている。

4. 中世以降の遺構と遺物

本遺跡から検出された中世以降の遺構や遺物の数量は比較的多い。検出された遺構としては、掘立柱建物跡7棟、柱穴列2基、井戸跡15基、溝63条、土坑213基、火葬遺構1基、竪穴状遺構4基、地下式

土坑1基、ピット群等がある。これらの遺構は本遺跡全体から検出されているが、特にA区西側、C区東側に集中して検出されている。

(1) 掘立柱建物跡・柱穴列

A区1号掘立柱建物跡 (第98図 P L28)

位置 本掘立柱建物跡はA区の南西端に近い880・-373グリッドに位置する。近くにはA区7号井戸跡やA区14号掘立柱建物跡がある。

重複 本掘立柱建物跡はA区13号掘立柱建物跡と重複する。A区13号掘立柱建物跡は整理作業において図面を検討して確認したため、本掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。

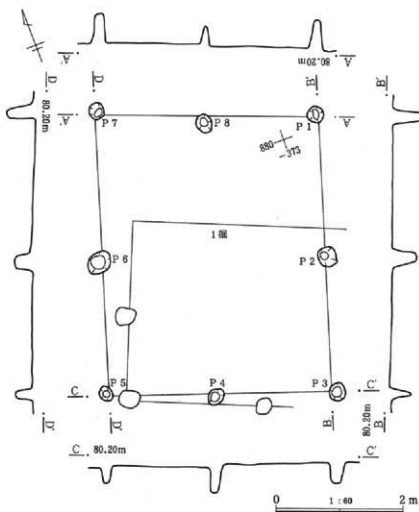
主軸方位 N-17°-E

形態 本掘立柱建物跡は2×3間(3.48~3.69m×4.38~4.47m)の南北棟である。梁側の柱間は1.70~1.95mである。平均柱間は1.793mを測り、ほぼ一定している。桁側の柱間は2.12~2.37mである。平均柱間は2.213mを測る。柱穴はほぼ柱軸に沿って並ぶが、P3がやや東に、P5がやや南にずれる。

柱穴 柱穴の平面形は円形のものが多く、古代の掘立柱建物跡よりも小振りである。柱穴の規模は径21~42cm、深さ37~48cmを測る。柱痕跡は、はっきりしない。

内部施設 なし。

出土遺物 なし。



第98図 A区1号掘立柱建物跡

A区2号掘立柱建物跡 (第99図 P L 28)

位置 本掘立柱建物跡はA区の西端に近い885・-382グリッドに位置する。近くにはA区175号土坑やA区16号掘立柱建物跡がある。

重複 本掘立柱建物跡はA区72号土坑と重複している。72号土坑がP6を掘り込んでいる。

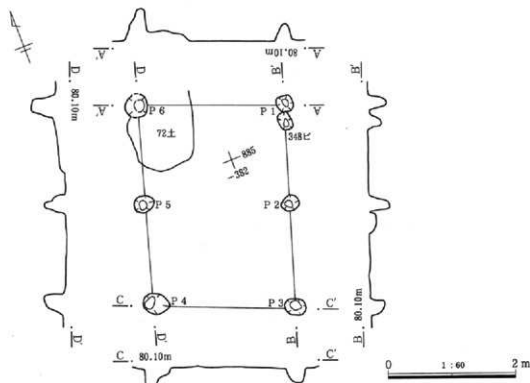
主軸方位 N-18°-E

形態 本掘立柱建物跡は1×2間(2.31~2.34m×3.15~3.24m)の南北棟である。梁側の平均全長は

2.325mである。桁側の柱間は1.56~1.62mである。平均柱間は1.598mを測り、ほぼ一定している。柱穴はほぼ柱軸に沿って並ぶ。P1は348号ピットと重複している。

柱穴 柱穴の平面形は円形のものが多い。柱穴の規模は径24~43cm、深さ30~42cmを測る。柱痕跡は、はっきりしない。

内部施設 なし。 **出土遺物** なし。



第99図 A区2号掘立柱建物跡

A区13号掘立柱建物跡 (第100図 P L 69)

位置 本掘立柱建物跡はA区の南西端に近い877・-371グリッドに位置する。近くには、A区14号掘立柱建物跡、A区4号溝がある。

重複 本掘立柱建物跡はA区1号掘立柱建物跡と重複する。本掘立柱建物跡は整理作業において、図面上のピットを検討して本遺構と認めたため、A区1号掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。

主軸方位 N-68°-W

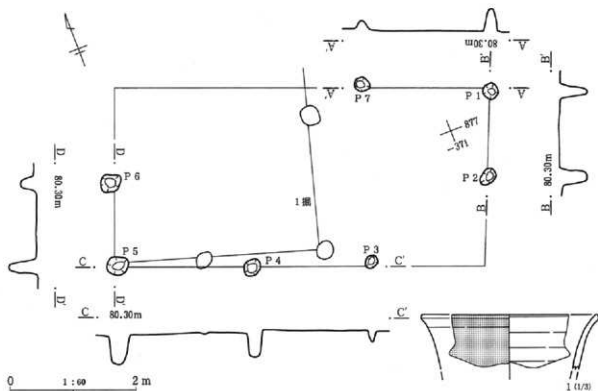
形態 本掘立柱建物跡は2×3間(2.79~(2.82)m×(5.85)~(6.00)m)の東西棟である。梁側の柱

間は1.32~(1.52)mである。平均柱間は(1.40)mである。桁側の柱間は1.92~2.16mである。平均柱間は(1.973)mを測る。柱穴はほぼ柱軸に沿って並ぶが、P3がやや北に、P6がやや西にずれる。なお、北西隅及び南東隅の柱穴は検出されていない。

柱穴 柱穴の平面形は円形のものが多い。柱穴の規模は径18~36cm、深さ40~44cmを測る。柱痕跡は、はっきりしない。

内部施設 なし。

出土遺物 P6より器種は不明であるが、古瀬戸陶器が出土している。



第100図 A区13号掘立柱建物跡、出土遺物

A区13号掘立柱建物跡

番号	種類 器種	残存 量(cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
1	古瀬戸 陶器 器種不明	口縁片 口径(13.6)器高(4.2) 底径 -	P 6 埋土	①緻密 ②還元焼 紫黄 ③灰オリーブ色	筒筒成形。外反して立ち上がる器形。胎土は灰輪。13～14世紀。

A区14号掘立柱建物跡 (第101図)

位置 本掘立柱建物跡はA区の西側中央部に近い883・-369グリッドに位置する。近くにはA区1号掘立柱建物跡がある。

重複 本掘立柱建物跡はA区15号掘立柱建物跡と重複するが本掘立柱建物跡との新旧関係は不明。また、A区57号・59号・184号土坑、A区3号・4号溝と重複している。これらの遺構に掘り込まれている。

主軸方位 N-68°-W

形態 本掘立柱建物跡は2×2間(3.72~3.99m×4.26~4.32m)の東西棟である。梁側については東辺には柱穴が中程にないので、西辺のみ計測した。梁側の柱間は1.86~1.89mである。平均柱間は1.925mを測る。桁側の柱間は2.01~2.28mである。平均柱間は2.145mを測る。柱穴はP1とP2の間で検

出されず、P3が柱軸よりも北にずれている。また、北西隅から主軸方位と同じ方向で長さ7.71mの柵列がのびる。柵列の柱間は1.73~2.22mである。平均柱間は1.928mを測る。

柱穴 柱穴の平面形は円形のものが多いが、P1・P2は2つのピットが重複している。古代の掘立柱建物跡よりも小振りである。柱穴の規模は径16~40cm、深さ26~50cmを測る。柱痕跡ははっきりしない。内部施設なし。出土遺物なし。

A区15号掘立柱建物跡 (第102図)

位置 本掘立柱建物跡はA区の西側中央部に近い883・-363グリッドに位置する。近くにはA区5号溝がある。

4. 中世以降の遺構と遺物

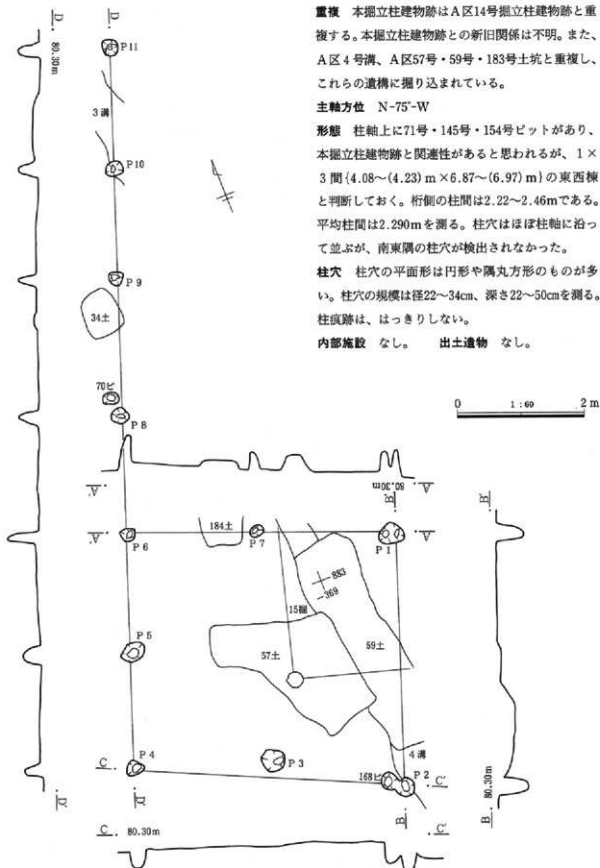
重複 本掘立柱建物跡はA区14号掘立柱建物跡と重複する。本掘立柱建物跡との新旧関係は不明。また、A区4号溝、A区57号・59号・183号土坑と重複し、これらの遺構に掘り込まれている。

主軸方位 N-75°-W

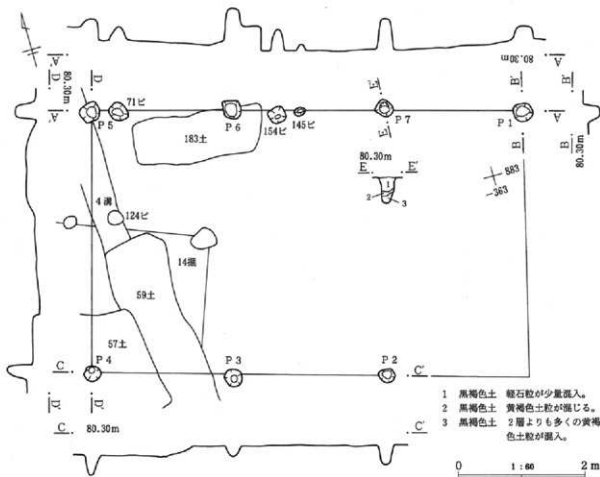
形態 柱軸上に71号・145号・154号ピットがあり、本掘立柱建物跡に関連性があると思われるが、1×3間(4.08~(4.23)m×6.87~(6.97)m)の東西棟と判断しておく。桁側の柱間は2.22~2.46mである。平均柱間は2.290mを測る。柱穴はほぼ柱軸に沿って並ぶが、南東隅の柱穴が検出されなかった。

柱穴 柱穴の平面形は円形や隅丸方形のものが多く、柱穴の規模は径22~34cm、深さ22~50cmを測る。柱痕跡は、はっきりしない。

内部施設 なし。 **出土遺物** なし。



第101図 A区14号掘立柱建物跡



第102図 A区15号独立柱建物跡

A区16号独立柱建物跡 (第103図)

位置 本独立柱建物跡はA区の西端中央に近い892・-373グリッドに位置する。近くにはA区2号井戸跡やA区3号竪穴状遺構がある。

重複 本独立柱建物跡はA区17号独立柱建物跡と重複する。本独立柱建物跡との新旧関係は不明。また、A区5号井戸跡と重複し、掘り込まれている。

主軸方位 N-69°-W

形態 本独立柱建物跡は柱軸上に多くのピットが検出されているが、1×3間(4.56~(4.68)m×(6.12)~(6.63m)の東西棟である。桁側の柱間は1.98~2.28mである。平均柱間は2.210mである。柱穴はほぼ柱軸に沿って並ぶが、南西隅の柱穴が検出されていない。

柱穴 柱穴の平面形は円形のものが多い。柱穴の規模は径28~37cm、深さ20~42cmを測る。柱痕跡は、

はっきりしない。

内部施設 なし。

出土遺物 なし。

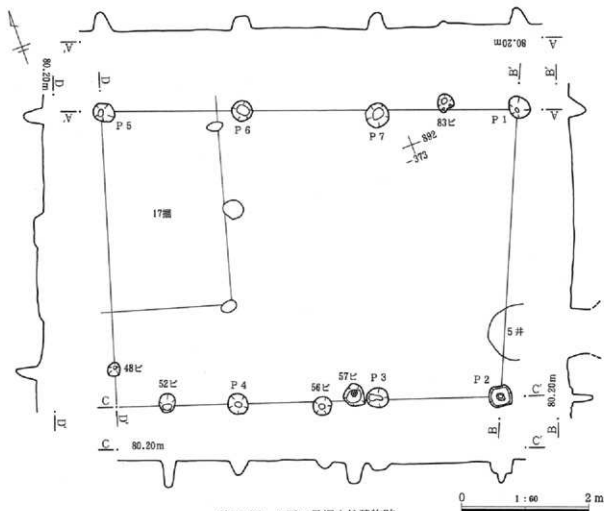
A区17号独立柱建物跡 (第104図)

位置 本独立柱建物跡はA区の西端中央に近い893・-377グリッドに位置する。近くにはA区2号井戸跡やA区3号竪穴状遺構がある。

重複 本独立柱建物跡はA区16号独立柱建物跡と重複するが、本独立柱建物跡との新旧関係は不明。

主軸方位 N-73°-W

形態 本独立柱建物跡は(2+1)×3間(2.82~2.85m+1.02~1.05×4.50~4.53m)の東西棟である。北辺の東に1間幅(平均1.035m)の庇をもつ身舎部の梁側の柱間は1.35~1.53mである。平均柱



第103図 A区16号掘立柱建物跡

間は1.418mを測る。桁側の柱間は2.22~2.28mである。平均柱間は2.258mを測り、ほぼ一定である。柱穴はほぼ柱軸に沿って並ぶが、P2がやや東にずれる。

柱穴 柱穴の平面形は楕円や円形のものが目立つ。柱穴の規模は径17~47cm、深さ22~26cmを測る。柱痕跡は、はっきりしない。

内部施設 なし。

出土遺物 なし。

A区1号柱穴列 (第104図 P L52)

位置 本柱穴列はA区の西端中央よりやや北に近い897・-363グリッドに位置する。近くにはA区2号住居跡がある。

重複 本柱穴列はA区2号溝と重複する。

主軸方位 N-71°-W

形態 全長4.23mで東西方向に走向する。柱間は1.89~2.31mである。平均柱間は2.10mで一定しない。

柱穴 柱穴の平面形はほぼ楕円形である。柱穴の規模は径27~42cm、深さ27~51cmを測る。柱痕跡は、はっきりしない。

出土遺物 なし。

A区2号柱穴列 (第104図 P L52)

位置 本柱穴列はA区の西端中央よりやや北に近い897・-366グリッドに位置する。近くにはA区2号住居跡がある。

重複 本柱穴列はA区3号溝、A区36号土坑と重複し、これらの遺構を掘り込む。

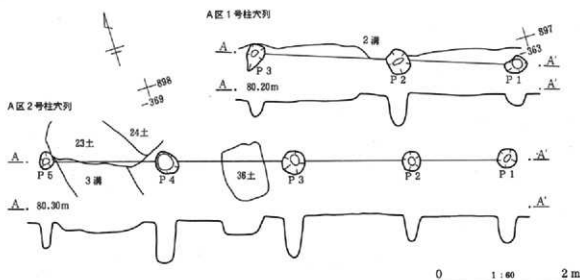
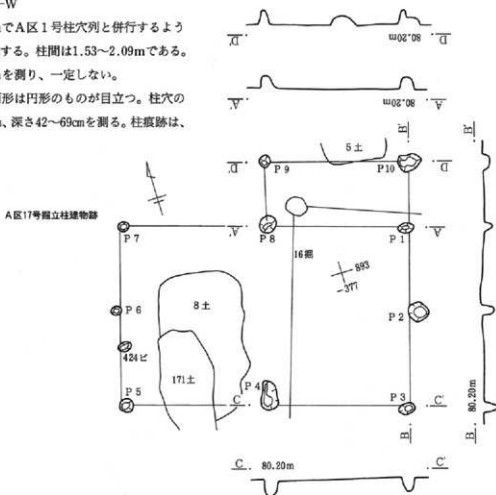
第3章 検出された遺構と遺物

主軸方位 N-73°-W

形態 全長7.35mでA区1号柱穴列と併行するように東西方向に走向する。柱間は1.53~2.09mである。平均柱間は1.89mを測り、一定しない。

柱穴 柱穴の平面形は円形のものが目立つ。柱穴の規模は径24~33cm、深さ42~69cmを測る。柱痕跡は、はっきりしない。

出土遺物 なし。



第104図 A区17号掘立柱建物跡、A区1・2号柱穴列

(2) 井戸跡

A区1号井戸跡 (第105図 P.L28・69)

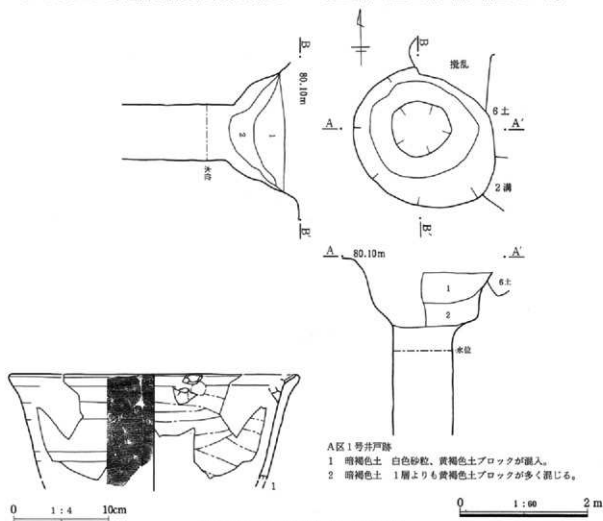
位置 A区西端に近い902・-376グリッドに位置する。本井戸跡の近くには、A区2号・4号井戸跡がある。

重複 A区2号溝、A区6号土坑を掘り込む。

概要 確認面の平面形状は円形で、その規模は、径が200cm×242cmを測る。調査の途中で水が湧き出て、壁面が崩れやすくなったため、底面まで掘り進めることができなかった。底面も確認面と同様に円形と

思われる。筒状の部分の径は88cm×90cmを測る。水位は確認面より140cmの深さを示す。断面形は漏斗状をなし、やや筒状の部分が太い。アグリは確認できなかった。本井戸跡の埋土は白色砂粒や黄褐色土ブロックを含む暗褐色土である。筒状の部分については、壁面が崩れ易いため、土層の確認をすることができなかった。

出土遺物 埋土から内耳埴が出土している。



A区1号井戸跡
1 暗褐色土 白色砂粒、黄褐色土ブロックが混入。
2 暗褐色土 1層よりも黄褐色土ブロックが多く混じる。

第105図 A区1号井戸跡、出土遺物

A区1号井戸跡

番号	種類 器種	残存 法 量(cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
1	軟質陶器 内耳埴	口縁～体部 口径(30.2)器高(11.2) 底径 -	埋土	①砂粒 ②還元焰 硬質 ③灰色	口縁部が短く、内側に一度絞をもって折れる。14世紀後半。 外面 横方向の筋ナデ。 内面 体部は斜め方向の筋ナデ。耳は口縁部付近に付く。

第3章 検出された遺構と遺物

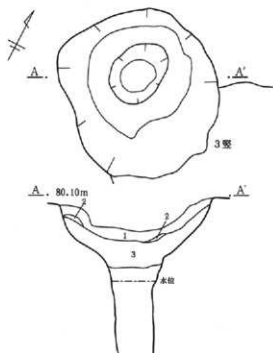
A区2号井戸跡 (第106図 P L28)

位置 A区西端に近い898・-375グリッドに位置する。本井戸跡の近くには、A区1号・2号溝がある。

重複 A区3号竪穴状遺構を掘り込む。

概要 確認面の平面形状は円形で、径が256cm×270cmを測る。調査の途中で水が湧き出て、壁面が崩れやすくなったため、底面まで掘り進めることができなかった。筒状の部分の径は77cm×107cmを測る。水位は確認面より128cmの深さを示す。断面形は漏斗状をなし、やや筒状の部分が細い。筒状の部分については底部に近づくほど細くなると思われる。アグリは確認できなかった。本井戸跡の埋土は褐色土を含む暗褐色土である。筒状の部分については、壁面が崩れ易いため、土層の確認をすることができなかった。

出土遺物 埋土から須恵器類の破片が出土しているが、本井戸跡に伴う遺物とは考えにくい。



A区2号井戸跡

- 1 暗褐色土 褐色土が少量混入。
- 2 暗褐色土 褐色土混じり。
- 3 暗褐色土 2層よりも多く褐色土が混入。

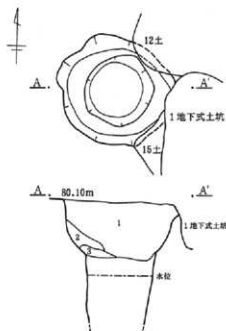
A区3号井戸跡 (第106図 P L28)

位置 A区西端に近い909・-375グリッドに位置する。本井戸跡の近くには、A区1号溝がある。

重複 A区1号地下式土坑・12号・15号土坑に掘り込まれている。

概要 平面形状は、円形である。径は176cm×180cmを測る。調査の途中で水が湧き出て、壁面が崩れやすくなったため、底面まで掘り進めることができなかった。筒状の部分の径は112cm×112cmを測る。水位は確認面より116cmの深さを示す。断面形は漏斗状をなし、やや筒状の部分が太い。底部に近づくほど、細くなると思われる。アグリは確認できなかった。本井戸跡の埋土は黄褐色土ブロックを含む暗褐色土である。筒状の部分については、壁面が崩れ易いため、土層の確認をすることができなかった。

出土遺物 なし。



A区3号井戸跡

- 1 暗褐色土 褐色土、褐色土ブロック微量が混入。
- 2 暗褐色土 褐色土、黄色砂、灰色砂が混入。
- 3 暗褐色土 褐色土が混入。

0 1:60 2 m

第106図 A区2・3号井戸跡

4. 中世以降の遺構と遺物

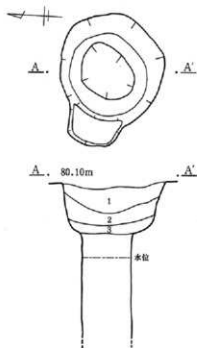
A区4号井戸跡 (第107図 P L28)

位置 A区西端に近い904・-375グリッドに位置する。本井戸跡の近くには、A区1号・3号井戸跡がある。

重複 なし。

概要 確認面の形状はほぼ円形である。その径は167cm×214cmを測る。調査の途中で水が湧き出て、壁面が崩れやすくなったため、底面まで掘り進めることができなかった。筒状の部分の径は73cm×93cmを測る。水位は確認面より112cmの深さを示す。本井戸跡の断面形は漏斗状をなし、やや筒状の部分が太い。アグリは確認できなかった。本井戸跡の埋土は褐色土、軽石粒を含む暗褐色土である。筒状の部分については、壁面が崩れ易いため、土層の確認をすることができなかった。

出土遺物 なし。



A区4号井戸跡

- 1 暗褐色土 1～2m程の褐色土、軽石粒が混入。
- 2 暗褐色土 1～2m程の褐色土が混入。
- 3 暗褐色土 褐色土が混入。

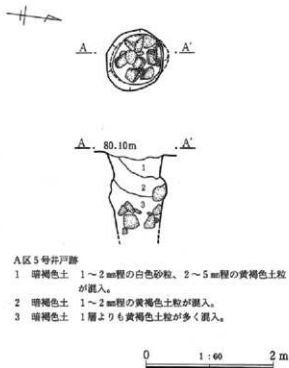
A区5号井戸跡 (第107・108図 P L28・69)

位置 A区西端の中央部に近い890・-373グリッドに位置する。本井戸跡の近くには、A区7号井戸跡がある。

重複 なし。

概要 確認面の形状は円形である。その径は88cm×98cmを測る。径が小さいことや壁面が崩れやすくなったため、底面まで掘り進めることができなかった。深さは125cm以上である。断面形は上面にやや開く円筒形である。本井戸跡の中段にオーバーハングしている箇所があり、アグリと思われる。アグリの上層は確認面より深さ34.5cm、最下部は90cm、径は93cmである。オーバーハングしている壁面より下から多くの円礫と石製骨蔵器が出土している。石が出土した箇所以下の筒状の部分については、壁面が崩れ易いため、土層の確認をすることができなかった。

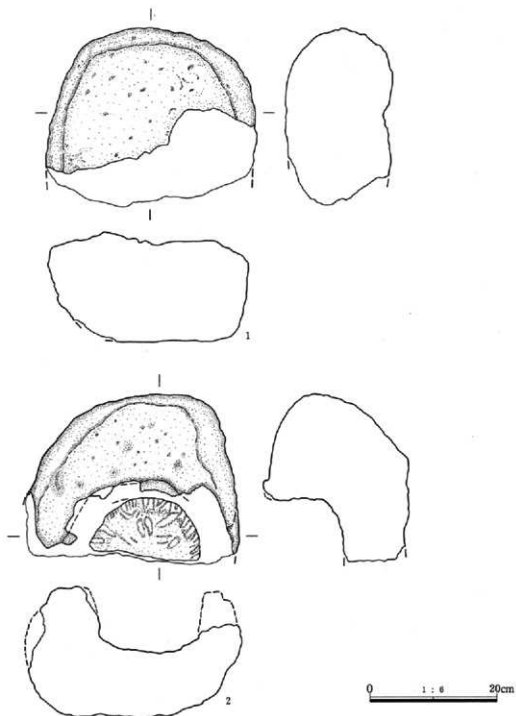
出土遺物 埋土より多くの円礫とともに石製骨蔵器の蓋及び身と思われる石が出土している。



A区5号井戸跡

- 1 暗褐色土 1～2m程の白色砂粒、2～5m程の黄褐色土粒が混入。
- 2 暗褐色土 1～2m程の黄褐色土粒が混入。
- 3 暗褐色土 1層よりも黄褐色土粒が多く混入。

第107図 A区4・5号井戸跡



第108図 A区5号井戸跡出土遺物

A区5号井戸跡

番号	種類 器種	残存 法 量(cm,kg)	出土位置	石 材	器形・整形・文様の特徴
1	石製品 骨環跡 蓋?	1/2 長さ(28.2) 幅(32.6) 厚さ 31.8 重さ(18.5)	埋土	二ツ岳石	外形は卵形で底面はほぼ平らにつくられている。側面は縁をもつ。大きさでは2の骨環跡に近い。蓋部は中心部でやや窪むが、縁は歪らず、違うタイプの骨環跡の蓋の部分と思われる。
2	石製品 骨環跡 身	1/2 長さ(26.1) 幅(33.1) 厚さ 22.0 重さ(14.8)	埋土	二ツ岳石	刺繍や欠けが目立ち外形がつかみにくい。卵形にちかいいものと思われる。口径16cm・深さ11cm程の納骨孔がある。孔の内部は工具をあてた痕跡が残る。納骨孔の周囲に幅2cmほどの縁が通る。

4. 中世以降の遺構と遺物

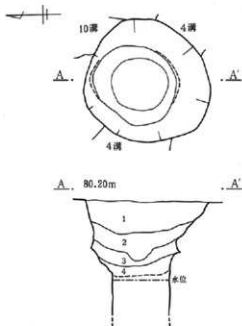
A区6号井戸跡 (第109図 PL29)

位置 A区西側の南端に近い866・-367グリッドに位置する。本井戸跡の近くには、A区1号掘立柱建物跡がある。

重複 A区4号・10号溝を掘り込んでいる。

概要 確認面の形状は円形である。その径は193cm×195cmを測る。調査の途中で水が湧き出て、壁面が崩れやすくなったため、底面まで掘り進めることができなかった。筒状の部分の径は114cm×132cmを測る。水位は確認面より124cmの深さを示す。断面形は円筒状の部分が太い漏斗状を呈する。壁面の中程に湧水のため崩れてしまい、オーバーハングしている箇所がある。アグリと思われる。アグリの最上部は確認面より深さ75cm、最下部は120cm、径は141cmである。埋土は褐色土及び軽石粒を含む暗褐色土である。筒状の部分については、壁面が崩れ易いため、土層の確認をすることができなかった。

出土遺物 なし。



A区6号井戸跡

- 1 暗褐色土 1～2mm径の軽石粒、褐色土が混入。
- 2 暗褐色土 10～20mm径の褐色土ブロックが混入。
- 3 暗褐色土 褐色土混じり。
- 4 暗褐色土 褐色土(湿性土)混じり。

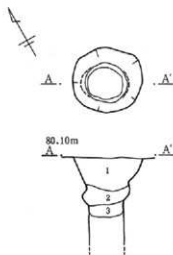
A区7号井戸跡 (第109図 PL29)

位置 A区西端の中央部に近い884・-375グリッドに位置する。本井戸跡の近くにはA区1号掘立柱建物跡、5号井戸跡がある。

重複 なし。

概要 確認面の形状は円形である。その径は102cm×110cmを測る。下面の径が小さいこと(62cm×64cm)や壁面が崩れやすくなっていたため、底面まで掘り進めることができなかった。深さは138cm以上である。断面形は上面が開く円筒状である。壁面の中程にオーバーハングしている箇所があり、アグリと思われる。アグリの最上部は確認面より深さ42cm、最下部は78cm、径は78cmである。本井戸跡の埋土は褐色土を含む暗褐色土である。

出土遺物 なし。



A区7号井戸跡

- 1 暗褐色土 褐色ブロック、褐色粒微量に混入。
- 2 暗褐色土 褐色土混じり。
- 3 暗褐色土 2層よりも褐色土が多量に混じっている。

0 1:60 2m

第109図 A区6・7号井戸跡

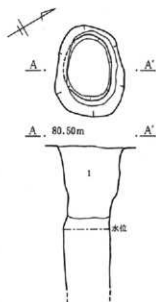
A区8号井戸跡 (第110図 P L29)

位置 A区の中央部に近い886・-344グリッドに位置する。本井戸跡の近くにはA区3号住居跡がある。

重複 A区4号掘立柱建物跡の柱穴を掘り込む。

概要 確認面の形状は東西に広い楕円形である。その径は111cm×147cmを測る。調査の途中で水が湧き出て、壁面が崩れやすくなったため、底面まで掘り進めることができなかった。水位は確認面より124cmの深さを示す。断面形は上面が開く円筒状である。壁面に断続的にオーバーハングしている所があり、アグリと思われる。アグリの最上部は確認面より深さ33cm、上下幅は165cmである。本井戸跡の埋土は軽石粒、灰白色土を含む暗褐色土である。以下の土層については、壁面が崩れ易いため確認することができなかった。

出土遺物 なし。



A区8号井戸跡

1 暗褐色土 1mm程度の軽石粒が混入。灰白色土も少量混じる。

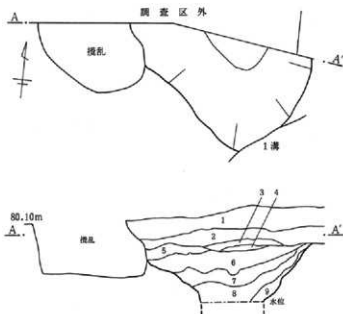
A区10号井戸跡 (第110図 P L29)

位置 A区の北西端に近い911・-398グリッドに位置する。本井戸跡の近くに、A区3号井戸跡がある。

重複 A区1号溝が本井戸跡を掘り込む。

概要 本井戸跡の北側は調査区外になっていたため、形状を把握することができないが、円形に近いと思われる。東西方向で297cmを測る。また、調査の途中で水が湧き出て、壁面が崩れやすくなったため、底面まで掘り進めることができなかった。水位は確認面より124cmの深さを示す。断面形は漏斗状を呈する。アグリは確認できなかった。本井戸跡の埋土は灰白色の粘質土を多く含む暗褐色土である。以下の土層については、水位が上昇し、崩れやすいため、確認できなかった。

出土遺物 なし。



A区10号井戸跡

- 1 褐色土 黄色砂を含む。
- 2 暗褐色粘質土 2~5mm程度の褐色土粒、10~20mm程度の褐色土ブロック、灰白色粘質土を含む。
- 3 褐色粘質土 1層に似ているが、1層よりも暗褐色土を含む。
- 4 暗褐色粘質土 シルト状の褐色土を含む。
- 5 暗褐色粘質土 シルト状の褐色土を4層よりも多量に含む。
- 6 暗褐色粘質土 灰白色粘質土ブロックを多量に含む。
- 7 暗褐色粘質土 灰白色粘質土ブロックを微量に含む。
- 8 褐色粘質土 暗褐色粘質土を微量に含む。
- 9 暗褐色粘質土 礫を含む。

0 1:60 2m

第110図 A区8・10号井戸跡

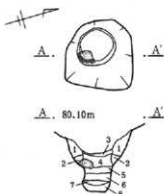
A区13号井戸跡 (第111図 P L29)

位置 A区の中央部の南端に近い898・-354グリッドに位置する。本井戸跡の近くには、A区8号・13号住居跡がある。

重複 A区2号溝を掘り込んでいる。

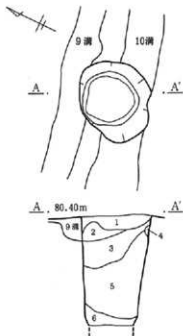
概要 本井戸跡は調査時にA区71号土坑と呼称していたが、図面、写真等の資料を用いて検討し、井戸跡として扱うほうがよいだろうと考え、A区13号井戸跡として、本書では掲載することにした。確認面の形状はほぼ円形である。その径は110cm×132cmを測る。底面の形状も円形で、その径は70cm×88cmを測る。深さは100cmを測る。断面形は漏斗状を呈する。底面に近い壁面がオーバーハングしており、アグリと思われる。アグリの最上部は確認面より深さ78cm、最下部は105cm、径は45cmである。本井戸跡の埋土は砂質の黒褐色土や黄色砂質土である。

出土遺物 漏斗状のくびれ部より、大きめの円礫が出土している。



A区13号井戸跡

- | | | |
|---|--------|--------------------|
| 1 | 褐色土 | 黒褐色土混じり。 |
| 2 | 黒褐色土 | 褐色土混じり。 |
| 3 | 黒褐色粘質土 | 黄色砂質土が少量混じる。 |
| 4 | 黒褐色土 | 黄色砂質土が3層より多く混じる。 |
| 5 | 黒褐色土 | 黄色砂質土が4層より多く混じる。 |
| 6 | 黄色砂質土 | 黒褐色土が凝状に混入。 |
| 7 | 黄色砂質土 | 黒褐色土が混じる。 |
| 8 | 黄色砂質土 | 6層よりも黒褐色土が多く凝状に混入。 |

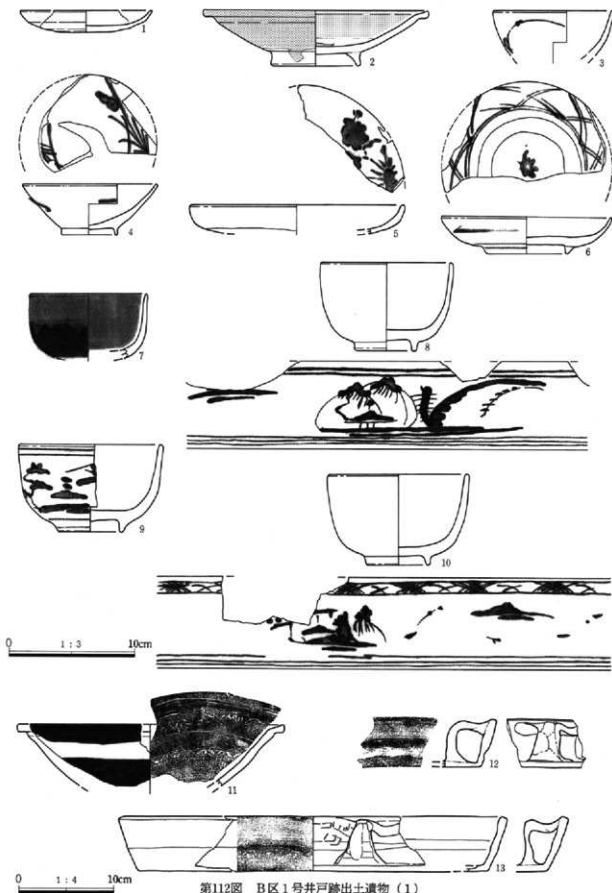


B区1号井戸跡

- | | | |
|---|------|--------------------------|
| 1 | 褐色土 | 全体的に粘性が少ない。 |
| 2 | 褐色土 | 1層に似ているが、3~10mm程度の小石が混入。 |
| 3 | 暗褐色土 | 0.5~2mm程度の白色珪石粒を含む。 |
| 4 | 褐色土 | 灰褐色砂混じり。 |
| 5 | 暗褐色土 | 全体的に粘性が少なく、やや黄色を帯びている。 |
| 6 | 暗褐色土 | 灰褐色砂を多く含む。 |

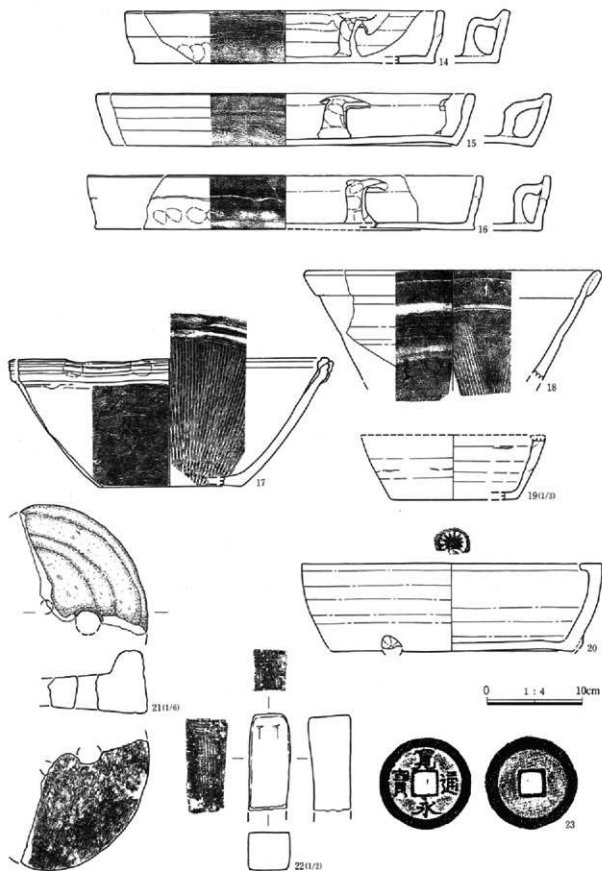
0 1:60 2m

第111図 A区13・B区1号井戸跡



第112図 B区1号井戸跡出土遺物(1)

4. 中世以降の遺構と遺物



第113図 B区1号井戸跡出土遺物(2)

第3章 検出された遺構と遺物

B区1号井戸跡

番号	種類 器種	残存 法 量(cm)	出土位置	①胎土②施成③色調	器形・整形・文様の特徴
1	志戸島? 陶器 灯明皿	1/6 口径(10.4) 器高 2.2 底径(4.6)	埋土	①白色粒 ②還元焰 締 ③赤褐色	見込は平坦で腰部に鼓をもつ。軸葉は内外面ともに簡軸。 外面 腰部は内転弧有り。 内面 油煙の痕跡あり。
2	瀬戸美濃 陶器 皿	口縁→底1/2 口径 17.7 器高 4.4 底径 6.6	埋土	①緑褐色 ②還元焰 硬質 ③灰オリーブ色	口縁が脚状に成形されている。見込に環状の重ね焼きの痕跡あり。 軸葉は灰軸。18世紀。
3	肥前(波 佐見)磁 器染付碗	口縁→体部 口径(9.3) 器高(3.6) 底径 -	埋土	①夾雑物なし ②還元焰 締 ③白色	口縁から中碗と思われる。軸葉は透明軸。外面に草花文を描く。 18世紀。
4	肥前(波 佐見)磁 器染付碗	口縁→底1/4 口径(10.6) 器高 4.2 底径 4.2	埋土	①緑褐色 ②還元焰 締 ③灰色	器形は底部から直線的に立ち上がる。内外面に草花文が描かれて いる。軸葉は透明軸。19世紀。
5	瀬戸美濃 陶器 皿	口縁→体1/4 口径(16.8) 器高(2.3) 底径 -	埋土	①夾雑物なし ②還元焰 締 ③灰白色	軸葉は脚縁升軸。17~18世紀。内面に彫刻による草花に纏と思わ れる文様が施されている。
6	肥前(波 佐見)磁 器皿	口縁→底1/3 口径(13.3) 器高 2.9 底径(6.3)	埋土	①緑褐色 ②還元焰 締 ③白色	外面は3本の横線文。内面は2重の交叉文。見込には花卉と思わ れる菊華印あり。また、見込縁の目縁が直線あり。18世紀。
7	瀬戸美濃 陶器 碗	口縁→体3/4 口径 9.1 器高(5.1) 底径 -	埋土	①細砂 ②還元焰 締 ③灰色	口縁から中碗と思われる。胴部に輪縁凹縁に沿って沈線が施され ている。腰部に筒軸がかけられ、内面から口縁には灰軸がかけられ ている。磨製。18世紀中頃から後半。
8	肥前 陶胎染付 碗	口縁→底3/4 口径 10.6 器高 7.0 底径 4.8	埋土	①緑褐色 ②還元焰 締 ③灰色	中碗。腰が張る形状。外面に口縁部と底部に横線を施し、この間 に東屋山水の削れた文様を描く。軸葉は透明軸。18世紀。
9	肥前 陶胎染付 碗	口縁→底1/4 口径(11.0) 器高 6.9 底径(5.0)	埋土	①砂粒 ②還元焰 締 ③灰色	中碗。腰が張る形状。外面に口縁部と底部に横線を施し、この間 に東屋山水の削れた文様を描く。軸葉は透明軸。18世紀。
10	肥前 陶胎染付 碗	口縁→底3/4 口径 11.2 器高 7.2 底径 5.0	埋土	①緑褐色 ②還元焰 締 ③灰色	中碗。腰が張る形状。外面に口縁部と底部に横線を施し、この間 に東屋山水の削れた文様を描く。口縁部に交叉文も描く。軸葉は 透明軸。18世紀。
11	肥前(唐 津)陶器 鉢	口縁→体部 口径(28.0) 器高(6.6) 底径 -	埋土	①白色粒 ②やや軟質 ③暗赤褐色	輪縁成形。口縁部は脚状に外反する。内面文様は三鳥が施され ているが、むらがあり、象嵌されていない箇所もある。軸葉は鉄 軸と白泥による。胴部外面に刷毛目あり。18世紀。
12	炊貫陶器 焙烙	口縁→底部片 口径 - 器高 5.1 底径 -	埋土	①細砂 ②還元焰 硬質 ③ぶい黄褐色	底部は平坦である。耳は内盤と底部に跨って付く。瓦質。 外面 口縁部は横ナデ。体部は接合痕及び指押さえあり。
13	炊貫陶器 焙烙	口縁→底部 口径(39.8) 器高 5.8 底径(37.0)	埋土	①細砂 ②還元焰 硬質 ③黒褐色	底部は平坦である。耳は内盤と底部に跨って付く。瓦質。 外面 口縁部は横ナデ。体部下半は寛クスリ。 内面 寛ナデ。耳の接合部で腹のあたりが顯著。
14	炊貫陶器 焙烙	口縁→底部 口径(32.8) 器高 5.5 底径(32.0)	埋土	①細砂 ②還元焰 硬質 ③オリーブ黒色	底部は平坦である。耳は内盤と底部に跨って付く。瓦質。 外面 口縁部は横ナデ。体部に指押さえ痕あり。 内面 ナデ。
15	炊貫陶器 焙烙	口縁→底1/4 口径(40.2) 器高 5.5 底径(36.8)	埋土	①砂粒 ②還元焰 硬質 ③黒褐色	底部は平坦である。耳は内盤と底部に跨って付く。瓦質。 外面 ナデ。 内面 口縁部は寛ナデ。以下はナデ。耳に指押さえ痕あり。
16	炊貫陶器 焙烙	口縁→底部 口径(42.0) 器高 5.7 底径(40.0)	埋土	①細砂 ②やや還元焰 硬質 ③灰色	底部は平坦である。耳は内盤と底部に跨って付く。 外面 口縁部は横ナデ。体部上半に接合痕。下半に指押さえ。 内面 ナデ。
17	堺・明石 石器 磨り鉢	口縁→底1/5 口径(32.4) 器高 13.6 底径(15.0)	埋土	①砂粒 ②還元焰 締 ③赤褐色	口縁部帯3段。口縁部内の凸部が大きい。平砥。18世紀中頃。 外面 片口の外面に指押さえあり。 内面 磨目。
18	瀬戸美濃 陶器 磨り鉢	口縁片 口径 30.8 器高(11.7) 底径 -	埋土	①砂粒 ②還元焰 締 ③ぶい黄褐色	口縁部は折り直す。軸葉は内外面簡軸。19世紀。 内面 磨目。
19	炊貫陶器 火入れ?	口縁→底1/2 口径(12.0) 器高(5.1) 底径 10.0	埋土	①細砂 ②還元焰 軟質 ③暗灰色	底部から外傾しながら直線的に立ち上がる。口縁は内折する。 外面 ナデ。 内面 横方向の寛ナデ。
20	炊貫陶器 火鉢	口縁→底部 口径(31.7) 器高(9.3) 底径(25.6)	埋土	①細砂 ②還元焰 硬質 ③暗灰色	口縁は内折する。体部に足がつく。 外面 ナデ。焼けて変色あり。 内面 寛ナデ。底部に押印が2箇所。

4. 中世以降の遺構と遺物

番号	種類 器種	残存 量 (cm)	出土位置	石 材	器形・器形・文様の特徴				
21	石製品 石臼上臼	1/4 推定径(32.0) 厚さ9.9 重さ(4.0kg)	埋土	粗粒輝石安山岩	上縁から3.5cm窪む。窪みの形は同心円状である。窪みに径約3.5cmの供給口をもつ。裏面は転用されたのか、磨減が激しく、割まれた目が分らない。芯受けの径は2cmと思われる。				
22	石製品 砥石	両側小口残 長さ7.6 幅3.25 厚さ3.05 重さ153.3g	埋土	砥沢石	研磨主体は中形位を研ぐ。金属を研いだと想定される。使用面は表・裏の計2面。両側部・小口面に欄目タゲネあり。欠損時は旧時である。中砥。				
番号	種類 器種	残存 量	銘 名 初 年	出土位置	外径 (cm) 縦×横	孔径 (cm) 縦×横	厚さ (mm) 最小～最大	重さ (g)	備 考
23	貨幣 銅銭	完形	寛永通寶 1697年	埋土	2.46×2.46	0.56×0.58	1.25～1.40	3.35	裏面は無文。表面の字体から新寛永(3期)と思われる一文銭。

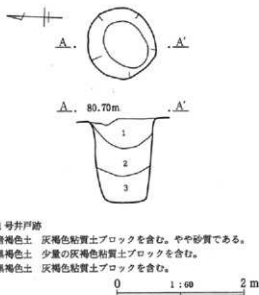
C区1号井戸跡(第114図 P L70)

位置 C区西側中央部に近い936・-221グリッドに位置する。本井戸跡の近くに、C区1号土坑がある。

重複 なし。

概要 確認面の形状は円形である。その径は106cm×110cmを測る。底面の形状も円形である。深さ132cmを測る。断面形は円筒状を呈する。アグリは確認できなかった。埋土はやや砂質である暗褐色土と粘質土を含む黒褐色土である。

出土遺物 常滑の大甕片が出土している。

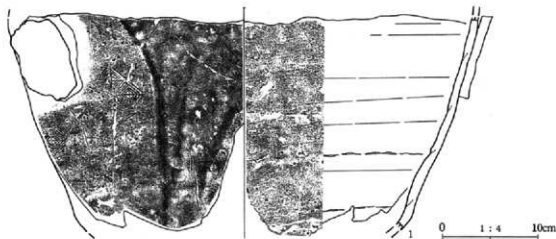


C区1号井戸跡

1 暗褐色土 灰褐色粘質土ブロックを含む。やや砂質である。

2 黒褐色土 少量の灰褐色粘質土ブロックを含む。

3 黒褐色土 灰褐色粘質土ブロックを含む。



第114図 C区1号井戸跡、出土遺物

C区1号井戸跡

番号	種類 器種	残存 量 (cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・器形・文様の特徴
1	常滑 伊器 大甕	割部片 口径 - 器高(23.0) 底径 -	埋土	①粗砂 ②還元焼 締 ③灰色	紐造り成形。筒合部外面に帯状に敷き板あり。胴部に重ね積みの際の器片が密着している。縦位に自然輪が流れている。13～14世紀。

C区2号井戸跡 (第115図)

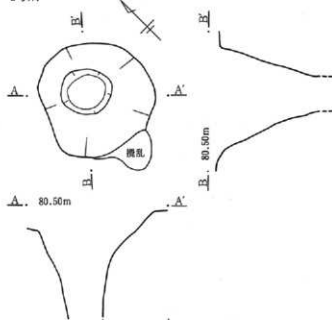
位置 C区中央部に近い941・-206グリッドに位置する。本井戸跡の近くには、C区5号土坑がある。

重複 なし。

概要 確認面の形状は円形である。その径は186cm×186cmを測る。壁面が崩れやすかったため、底面まで掘り進めることができなかった。深さは161cm以上と思われる。筒状の部分の径は70cm×80cmを測る。断面形は漏斗状を呈する。筒状の部分はさらに深く続くと思われるが、壁面が崩れ易いため、底面まで調査できなかった。アグリも確認できなかった。

出土遺物 なし。

2号井戸



C区3号井戸跡 (第115図 P L 29)

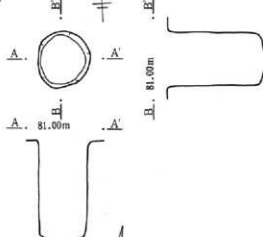
位置 C区中央部の北端に近い953・-190グリッドに位置する。本井戸跡の近くに、C区12号溝がある。

重複 なし。

概要 確認面の形状は円形である。その径は83cm×90cmを測る。底面の形状は円形で径は上面とほとんど変わっていない。深さは154cmを測る。断面形は円筒状を呈する。上面と下面の径の差がほとんどない。アグリは確認できなかった。

出土遺物 なし。

3号井戸



C区4号井戸跡 (第115図 P L 29)

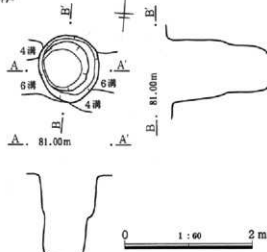
位置 C区東側の北端に近い952・-148グリッドに位置する。本井戸跡の近くに、C区の土坑群がある。

重複 本井戸跡はC区4号溝・6号溝を掘り込む。

概要 確認面の形状は円形である。その径は96cm×106cmを測る。底面の形状も円形で径は72cm×78cmを測る。深さは158cmを測る。断面形は円筒状を呈する。中程にやや段をもつような形状になっており、アグリと思われる。アグリの最上部は確認面より深さ33cm、最下部は63cm、径は84cmである。

出土遺物 なし。

4号井戸



第115図 C区2・3・4号井戸跡

(3) 溝

本遺跡から検出された溝77条のうち63条が中世以降の溝である。以下63条の溝について説明する。

A区1号溝 (第116図 P L30)

位置 A区北西端近くの913・-311グリッドに位置する。近くにA区1号地下式土坑やA区3号・4号井戸跡等がある。

重複 A区10号井戸跡、A区163号・169号土坑を掘り込む。また、A区18号・19号溝に掘り込まれている。

形態 本溝は、ほぼ直線状に走向する。長さは19.1m、溝の上端幅108～203cm、下端幅18～67cm、深さは断面観察で49cmを測る。走向方位はN-49°-E。断面は、法面が緩やかなV字形に近い。1条細い流れが南へ分流している。この分流した溝はA区3号溝との関連が考えられる。

出土遺物 なし。

A区2号溝 (第116図 P L30)

位置 本溝はA区西側の903・-377グリッドに位置する。周辺には数多くの遺構が検出されている。

重複 本溝はA区2号住居跡、A区65号土坑等を掘り込む。また、A区1号・13号井戸跡、A区6号・10号・25号・26号・29号・66号土坑、A区5号溝等に掘り込まれている。A区5号溝と重複する部分の流路がはっきりしなかったが、断面の土層観察では5号溝に掘り込まれる。また、本溝の走向からA区3号溝との重複関係もあると思うが、不明である。

形態 本溝は、ほぼ直線状に東西方向に走向し、東側でほぼ直角に折れ曲がりL字状を呈する。長さは北辺で20.9m、東辺で8.5mである。溝の上端幅100～255cm、下端幅18～37cm、深さは断面観察で59cmを測る。走向方位は北辺がN-78°-W、東辺がN-11°-Eである。断面は、法面が緩やかなV字形に近い。この溝はその形態から、地名の西屋敷に何らかの関係のある遺構ではないかと調査を進めたが、不明で

ある。

出土遺物 なし。

A区3号溝 (第117図 P L30)

位置 本溝はA区西側の899・-369グリッドに位置する。本溝の北側にA区2号溝がある。

重複 本溝は、その走向からA区2号溝との重複があると思われるが、不明である。A区30号土坑を掘り込む。A区23・24・29号土坑に掘り込まれている。

形態 本溝の始まりがはっきりせず、A区1号・2号溝との関係も不明である。A区45号土坑以下の部分をA区4号溝としたが、同じ溝である可能性は高い。本溝はA区30号土坑のところやや折れるが、ほぼ直線状に南北方向に走向する。長さは11.6m、溝の上端幅45～138cm、下端幅20～115cm、深さは断面観察で16cmを測る。走向方位はN-9°-Wである。断面は法面が緩やかな皿状に近い。**出土遺物** なし。

A区4号溝 (第117図 P L30)

位置 本溝はA区西側の890・-368グリッドに位置する。本溝の北側にA区3号溝がある。

重複 本溝はA区45号・57号・59号土坑、A区10号・11号・12号溝、6号井戸跡に掘り込まれている。

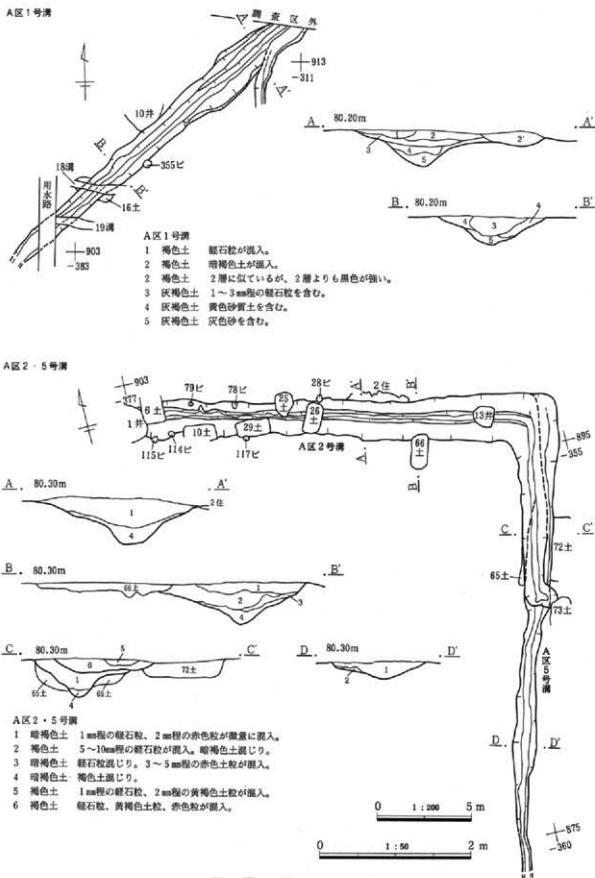
形態 A区3号溝との関係で本溝の始まりがはっきりしないが、A区45号土坑以南を本溝としている。ただし、3号溝と同一の可能性はある。本溝は直線状に南北方向に走向する。長さは23.8m、溝の上端幅28～122cm、下端幅14～90cm、深さは断面観察で20cmを測る。走向方位はN-5°-Wである。断面は、法面が緩やかな皿状に近い。**出土遺物** なし。

A区5号溝 (第116図 P L30)

位置 本溝はA区西側の875・-360グリッドに位置する。本溝の西側にA区2号溝がある。

重複 本溝はA区72号土坑、A区2号溝を掘り込む。しかし、本溝の始まりや2号溝と重複する部分の流

第3章 検出された遺構と遺物



第116図 A区1・2・5号溝

路が不明である。両溝の断面の土層の観察から本溝が2号溝の上位を流れることは明らかである。

形態 本溝の始まりは不明であるが、A区2号溝の東辺の上位を直線状に南北方向に走向すると思われる。長さは25.6m、溝の上端幅48~125cm、下端幅17~45cm、深さは断面観察で25cmを測る。走向方位はN-15°-Eである。断面は緩やかな皿状に近い。

出土遺物 埋土から土師器片が出土したが、奈良・平安時代の遺構外遺物として掲載した。

A区7号溝 (第117図 P L 30)

位置 本溝はA区西側の南西端にあり、870・-379グリッドに位置する。近くにはA区11号溝がある。

重複 本溝はA区192号ピットに掘り込まれている。

形態 本溝は直線状にほぼ東西方向に走向する。長さは13.7m、溝の上端幅70~148cm、下端幅40~125cm、深さは断面観察で15cmを測る。走向方位はN-61°-Wである。断面は法面が緩やかな皿状に近い。A区8号・9号・10号・11号溝の走向が似ている。その関連性については不明。

出土遺物 なし。

A区8号溝 (第117図 P L 30)

位置 本溝はA区西側の南西端にあり、867・-373グリッドに位置する。近くにはA区7号溝がある。

重複 本溝はA区9号溝に掘り込まれている。

形態 本溝は直線状にほぼ東西方向に走向する。長さは5.6m、9号溝と重複するため幅・深さははっきりしない。走向方位はN-67°-Wである。断面は法面が緩やかな皿状に近い。A区7号・9号・10号・11号溝との走向が似ている。特に11号溝との関連性が考えられるが不明である。

出土遺物 なし。

A区9号溝 (第117図 P L 30)

位置 本溝はA区西側の南西端にあり、867・-373グリッドに位置する。近くにはA区7号溝がある。

重複 本溝はA区8号溝を掘り込む。

形態 本溝は直線状にほぼ東西方向に走向する。長さは5.7m、溝の上端幅35~83cm、下端幅28~68cm、深さは断面観察で11cmを測る。走向方位はN-67°-Wである。断面は、法面が緩やかな皿状に近い。A区7号・8号・10号・11号溝との走向が似ている。A区8号溝と同様に、特に11号溝との関連性が考えられるが不明である。

出土遺物 なし。

A区10号溝 (第117図 P L 30)

位置 本溝はA区西側の南西端にあり、871・-373グリッドに位置する。近くにはA区11号溝がある。

重複 本溝はA区4号溝を掘り込む。A区6号井戸跡に掘り込まれている。

形態 本溝は直線状にほぼ東西方向に走向する。長さは14.6m、溝の上端幅70~160cm、下端幅42~129cm、深さは断面観察で25cmを測る。走向方位はN-60°-Wである。断面は法面が緩やかな皿状に近い。A区7号・8号・9号・11号溝との走向が似ている。

出土遺物 なし。

A区11号溝 (第118図 P L 30)

位置 本溝はA区西側の南西端にあり、868・-371グリッドに位置する。近くにはA区10号溝がある。

重複 本溝はA区4号溝を掘り込む。

形態 本溝は直線状にほぼ東西方向に走向する。長さは9.0m、溝の上端幅137~170cm、下端幅110~165cm、深さは断面観察で14cmを測る。走向方位はN-62°-Wである。断面は法面が緩やかな皿状に近い。A区7号・8号・9号・10号溝との走向が似ているが、その関連性は不明である。

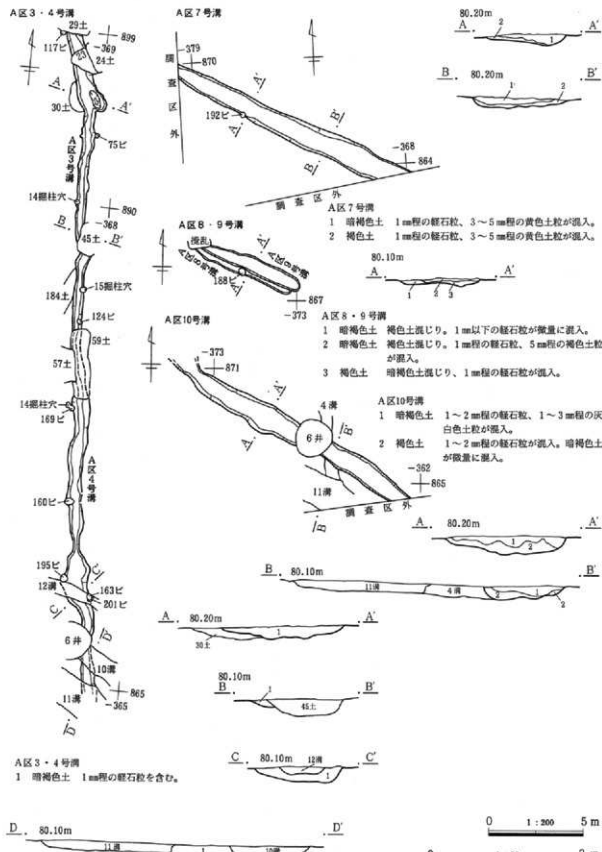
出土遺物 なし。

A区12号溝 (第118図 P L 30)

位置 本溝はA区西側の南西端にあり、872・-372グリッドに位置する。近くにはA区10号溝がある。

重複 本溝はA区4号溝を掘り込む。

第3章 検出された遺構と遺物



第117図 A区3・4・7・8・9・10号溝

形態 本溝は直線状にほぼ東西方向に走向する。長さは7.4m、溝の上端幅60～85cm、下端幅29～68cm、深さは断面観察で12cmを測る。走向方位はN-76°-Wである。断面は法面が緩やかな皿状に近い。A区10号溝との重複が考えられるが不明である。

出土遺物 なし。

A区14号溝 (第119図 P L31)

位置 本溝はA区西側にあり、911・-346グリッドに位置する。A区5号溝に沿うように走向している。

重複 本溝はA区89号土坑を掘り込む。また、A区73号・78号・84号・106号土坑に掘り込まれている。

形態 本溝はほぼ南北方向に走向する。長さは45.1m、溝の上端幅70～187cm、下端幅30～80cm、深さは断面観察で23cmを測る。走向方位はN-5°-E、N-23°-E、N-12°-Eである。断面は法面が緩やかな皿状に近い。

出土遺物 なし。

A区15号溝 (第119図 P L31)

位置 本溝はA区西側にあり、888・-351グリッドに位置する。近くにはA区4号・5号・6号住居跡

がある。

重複 なし。

形態 本溝はA区14号溝に沿うようにほぼ南北方向に走向する。長さは7.4m、溝の上端幅30～83cm、下端幅13～44cm、深さは断面観察で10cmを測る。走向方位はN-6°-Eである。断面は法面が緩やかな皿状に近い。

出土遺物 なし。

A区16号溝 (第119図 P L31)

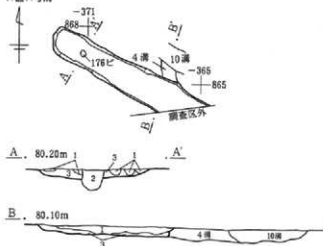
位置 本溝はA区中央部にあり、910・-332グリッドに位置する。近くにはA区17号溝がある。

重複 本溝はA区9号・12号独立柱建物跡の柱穴、A区8号住居跡を掘り込む。また、410号・414号・415号ピットに掘り込まれている。

形態 本溝はA区の北側では南北方向に走向し、南側でやや折れ曲がる。長さは45.5m、溝の上端幅46～138cm、下端幅15～96cm、深さは断面観察で46cmを測る。走向方位はN-1°-W、N-41°-W、である。断面は法面が緩やかな碗状に近い。

出土遺物 なし。

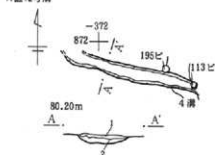
A区11号溝



A区11号溝・176号ピット

- 1 暗褐色土 1mm以下の軽石粒、1mm以下の褐色土粒が混入。
- 2 暗褐色土 1mm以下の軽石粒、褐色土混じり。(湿性土)
- 3 褐色土 赤褐色土混じり。

A区12号溝



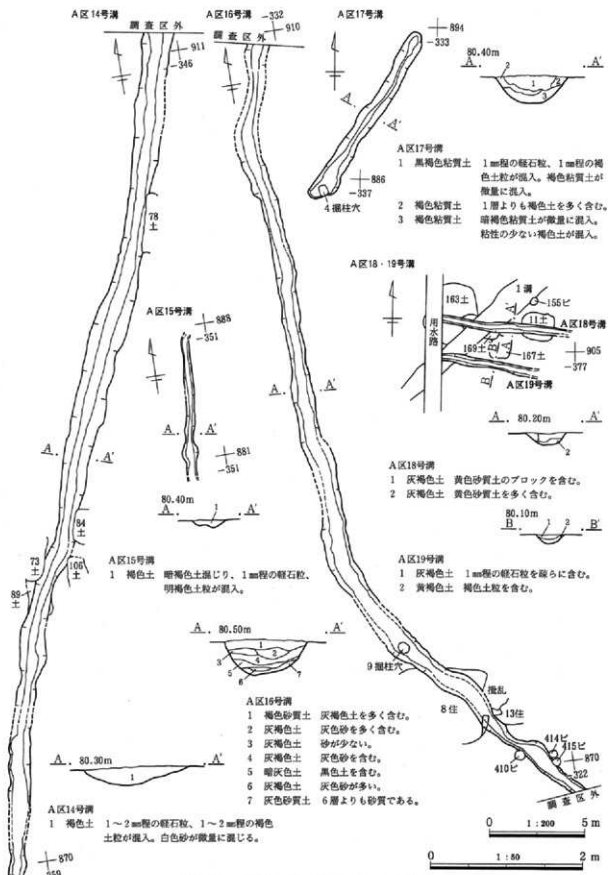
A区12号溝

- 1 暗褐色土 1mm程の軽石粒、1mm程の赤褐色土粒が混入。
- 2 褐色土 1mm程の軽石粒、暗褐色土混じり。

0 1:200 5m

0 1:80 2m

第118図 A区11・12号溝



第119図 A区14・15・16・17・18・19号溝

4. 中世以降の遺構と遺物

A区17号溝 (第119図 P L31)

位置 本溝はA区中央部にあり、894・-333グリッドに位置する。近くにはA区16号溝がある。

重複 A区8号掘立柱建物跡の柱穴を掘り込む。

形態 本溝はやや東に傾き、直線状に走向する。長さは10.3m、溝の上端幅76~117cm、下端幅10~75cm、深さは断面観察で37cmを測る。走向方位はN-31°-Eである。断面は法面が緩やかな椀状に近い。

出土遺物 なし。

A区18号溝 (第119図 P L31)

位置 本溝はA区西側の北西端にあり、905・-377グリッドに位置する。近くにはA区19号溝がある。

重複 本溝はA区1号溝、A区11号・163号・169号土坑を掘り込む。西側は用水路に切られている。

形態 本溝はほぼ東西方向に走向する。本溝の東側の流路は不明である。東側でA区3号溝と関連をもつ可能性もある。長さは6.8m、溝の上端幅37~50cm、下端幅16~25cm、深さは断面観察で16cmを測る。走向方位はN-82°-Wである。断面は法面が緩やかな皿状に近い。

出土遺物 なし。

A区19号溝 (第119図 P L32)

位置 本溝はA区西側の北西端にあり、905・-377グリッドに位置する。近くにはA区18号溝がある。

重複 本溝はA区1号溝を掘り込む。西側は用水路に切られている。近くにはA区2号竪穴状遺構があるが重複関係は不明である。

形態 本溝はA区18号溝に併行して、ほぼ東西方向に走向する。本溝の東側の流路は不明である。長さは5.2m、溝の上端幅35~52cm、下端幅14~24cm、深さは断面観察で12cmを測る。走向方位はN-80°-Wである。断面は法面が緩やかな皿状に近い。

出土遺物 なし。

A区22号溝 (第120図 P L32)

位置 本溝はA区中央部にあり、905・-312グリッ

ドに位置する。A区22~25号溝がまとまっている。

重複 本溝はA区24号・25号溝を掘り込む。

形態 本溝は重複関係にある24号・25号溝と併行して、ほぼ南北方向に走向する。長さは39.2m、溝の上端幅69~110cm、下端幅16~50cm、深さは断面観察で35cmを測る。走向方位は本溝の北側からN-44°-E、N-18°-W、N-14°-Eである。断面は法面がやや急で、椀状に近い。

出土遺物 理土から女瓦が出土しているが、奈良・平安時代の遺構外遺物として掲載した。

A区23号溝 (第120図 P L32)

位置 本溝はA区中央部にあり、905・-312グリッドに位置する。A区22~25号溝がまとまっている。

重複 本溝はA区25号溝に掘り込まれる。

形態 南北方向に走向し、25号溝と重複し、それ以南の溝の流路は不明である。長さは10.5m、溝の上端幅70~100cm、下端幅35~78cm、深さは断面観察で13cmを測る。走向方位は本溝の北側からN-6°-Wである。断面は法面が緩やかで、皿状に近い。

出土遺物 なし。

A区24号溝 (第120図 P L32)

位置 本溝はA区中央部にあり、905・-312グリッドに位置する。A区22~25号溝がまとまっている。

重複 本溝はA区22号溝に掘り込まれ、25号溝を掘り込む。

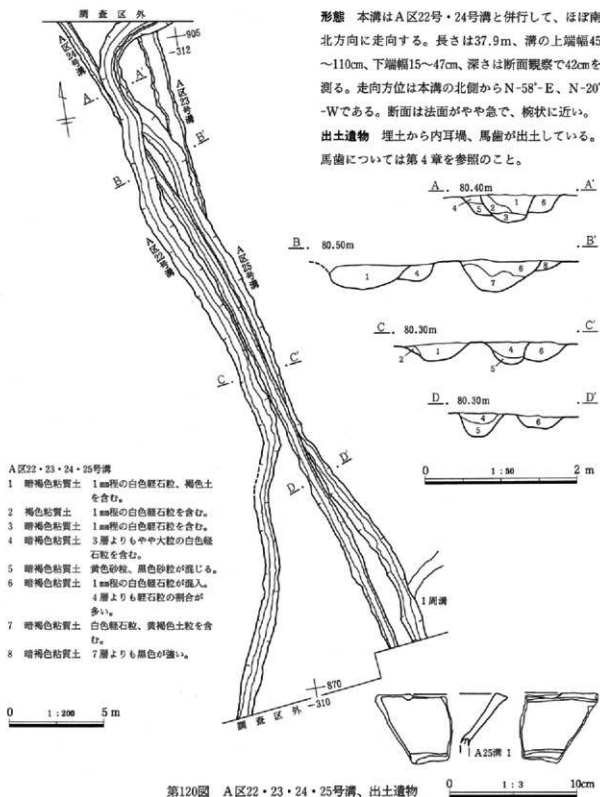
形態 本溝は南北方向に走向する。長さは37.6m、溝の上端幅50~81cm、下端幅19~30cm、深さは断面観察で30cmを測る。走向方位はN-19°-Wである。断面は法面がやや急で、椀状に近い。

出土遺物 なし。

A区25号溝 (第120図 P L5・32・71)

位置 本溝はA区中央部にあり、905・-312グリッドに位置する。A区22~25号溝がまとまっている。

重複 本溝はA区22号・24号溝に掘り込まれ、A区23号溝、A区1号円形周溝遺構を掘り込む。



第120図 A区22・23・24・25号溝、出土遺物

A区25号溝		現存		出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・器形・文様の特徴
番号	種類	方法	量(cm)			
1	軟質陶器 内耳埴	□縁片 □径 - 器高 - 底径 -	-	埋土	①細砂 ②還元相 並 ③黒褐色	□唇部外側が丸みを帯びて突出する。中度的なものと思われる。

B区7号溝 (第121図 P L 32)

位置 本溝はB区の中央部にあり、937・-303グリッドに位置する。近くにはB区2号住居跡がある。

重複 なし。

形態 本溝はB区8号～13号溝と併行しながら、東西方向に走向する。多くの溝が東西方向に走向するので、道路跡の可能性もあると調査を進めたが、硬化面を確認できなかった。本溝の長さは21.7m、溝の上端幅18～69cm、下端幅15～51cm、深さは断面観察で15cmを測る。走向方位はN-69°-Eである。断面は皿状に近い。

出土遺物 なし。

B区8号溝 (第121図 P L 32・71)

位置 本溝はB区中央部にあり、930・-292グリッドに位置する。近くにはB区7号溝がある。

重複 B区2号住居跡を掘り込む。

形態 本溝はB区9号～13号溝と併行しながら、東西方向に走向する。本溝の長さは34.5m、溝の上端幅22～96cm、下端幅16～66cm、深さは断面観察で28cmを測る。走向方位はN-65°-Eである。断面は皿状に近い。

出土遺物 埋土より磁器染付碗が出土している。

B区9号溝 (第121図 P L 32)

位置 本溝はB区中央部にあり、930・-292グリッドに位置する。近くにはB区8号溝がある。

重複 B区2号住居跡を掘り込む。また、B区1号井戸跡に掘り込まれている。本溝の西端でB区8号溝と重複する。

形態 本溝はB区10号～13号溝と併行しながら、東西方向に走向する。本溝の長さは33.7m、溝の上端幅32～63cm、下端幅12～35cm、深さは断面観察で21cmを測る。走向方位はN-70°-Eである。断面は皿状に近い。

出土遺物 なし。

B区10号溝 (第121図 P L 32)

位置 本溝はB区中央部にあり、930・-292グリッドに位置する。近くにはB区8号・9号溝がある。

重複 B区2号住居跡を掘り込む。また、B区1号井戸跡に掘り込まれている。本溝の西端でB区9号溝と重複する。

形態 本溝はB区11号～13号溝と併行しながら、東西方向に走向する。本溝の長さは32.9m、溝の上端幅25～90cm、下端幅10～56cm、深さは断面観察で27cmを測る。走向方位はN-70°-Eである。断面は皿状に近い。

出土遺物 なし。

B区11号溝 (第121図 P L 32)

位置 本溝はB区中央部にあり、930・-292グリッドに位置する。近くにはB区10号・12号溝がある。

重複 B区12号溝に掘り込まれている。

形態 本溝はB区10号・13号溝と併行しながら、東西方向に走向する。本溝の長さは34.7m、溝の上端幅32～72cm、下端幅14～40cm、深さは断面観察で26cmを測る。走向方位はN-68°-Eである。断面は皿状に近い。

出土遺物 なし。

B区12号溝 (第121図 P L 32・71)

位置 本溝はB区中央部にあり、930・-292グリッドに位置する。近くにはB区10号・13号溝がある。

重複 B区11号溝を掘り込む。

形態 本溝はB区10号・12号溝と併行しながら、東西方向に走向する。本溝の長さは37.8m、溝の上端幅30～112cm、下端幅9～69cm、深さは断面観察で23cmを測る。走向方位はN-66°-Eである。断面は皿状に近い。

出土遺物 埋土から陶器染付碗が出土している。

B区13号溝 (第121図 P L 32)

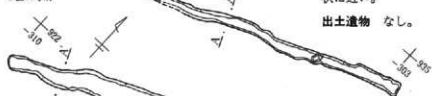
位置 本溝はB区中央部にあり、925・-292グリッドに位置する。近くにはB区12号溝がある。

第3章 検出された遺構と遺物

B区7号溝



B区13号溝



B区7号溝

- 1 暗褐色土 1mm程の白色軽石粒、微粒砂（川砂）が層になって流入。
- 2 暗褐色土 1mm程の白色軽石粒が流入。1層よりも粘質大。

B区13号溝

- 1 暗褐色土 1～2mm程の白色軽石粒が流入。紫色を帯びている。

重複 なし。

形態 本溝はB区8号～12号溝と併行しながら、東西方向に走向する。本溝の長さは20.7m、溝の上端幅58～130cm、下端幅35～87cm、深さは断面観察で9cmを測る。走向方位はN-64°-Eである。断面は、皿状に近い。

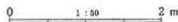
出土遺物 なし。

B区8～12号溝



B区8・9・10・11・12号溝

- 1 暗褐色土 1mm程の白色軽石粒、微粒砂（川砂）が層になって流入。
- 2 暗褐色土 1mm程の白色軽石粒が流入。1層よりも粘質大。
- 3 暗褐色土 1～2mm程の白色軽石粒、2mm程の黄褐色土粒が流入。
- 4 暗褐色土 1～2mm程の白色軽石粒、1mm程の黄褐色土粒、黄褐色土ブロックが流入。



第121図 B区7・8・9・10・11・12・13号溝、出土遺物

4. 中世以降の遺構と遺物

B区8号溝

番号	種類 器種	残存 法 量(cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
1	製作地不詳 磁器 染付碗	口縁～高台部 口径(7.9) 器高(4.8) 底径(3.0)	埋土	①緻密 ②還元焼成 ③白色	器形は丸みをもつ。口縁から小碗と思われる。スタンプ文。明治以降。

B区12号溝

番号	種類 器種	残存 法 量(cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
1	製作地不詳 陶器 染付碗	口縁片 口径 - 器高 - 底径 -	埋土	①緻密 ②還元焼成 ③灰色	口縁部に横線文が描かれている。胎土は透明釉。

C区1号溝 (第122図 P L33)

位置 本溝はC区北東端にあり、962・-146グリッドに位置する。近くにはC区6号溝がある。

重複 C区12号土坑、C区2号溝を掘り込む。C区9号・10号・13号土坑、C区24号溝に掘り込まれる。

形態 本溝は北西～南東方向に走向する。本溝の長さは36.5m、溝の上端幅40～70cm、下端幅13～25cm、深さは断面観察で33cmを測る。走向方位は北東からN-71°-W、N-45°-W、N-22°-Wである。断面はV字形に近い。

出土遺物 なし。

C区2号溝 (第122図 P L33)

位置 本溝はC区北東端にあり、961・-151グリッドに位置する。近くにはC区3号溝がある。

重複 C区4号・5号・6号溝を掘り込む。また、C区12号土坑、C区1号溝に掘り込まれる。

形態 本溝は南北方向に走向する。本溝の長さは11.4m、溝の上端幅25～34cm、下端幅10～27cm、深さは断面観察で8cmを測る。走向方位はN-1°-Wである。断面は血状に近い。

出土遺物 なし。

C区3号溝 (第122図 P L33)

位置 本溝はC区北東端にあり、955・-153グリッドに位置する。近くにはC区2号溝がある。

重複 C区4号・5号・8号・9号溝を掘り込む。また、C区7号溝に掘り込まれる。

形態 本溝は北東～南西方向に走向する。本溝の長

さは17.0m、溝の上端幅28～55cm、下端幅15～33cm、深さは断面観察で16cmを測る。走向方位はN-53°-Eである。断面は血状に近い。

出土遺物 なし。

C区4号溝 (第122図 P L33)

位置 本溝はC区北東端にあり、960・-160グリッドに位置する。近くにはC区1号溝がある。

重複 C区2号・3号・6号溝、C区4号井戸跡に掘り込まれている。また、C区9号溝を掘り込むが、そののちの流路は不明である。

形態 本溝は北西～南東方向に走向する。本溝の長さは18.6m、溝の上端幅35～83cm、下端幅10～45cm、深さは断面観察で12cmを測る。走向方位はN-63°-Wである。断面は血状に近い。

出土遺物 なし。

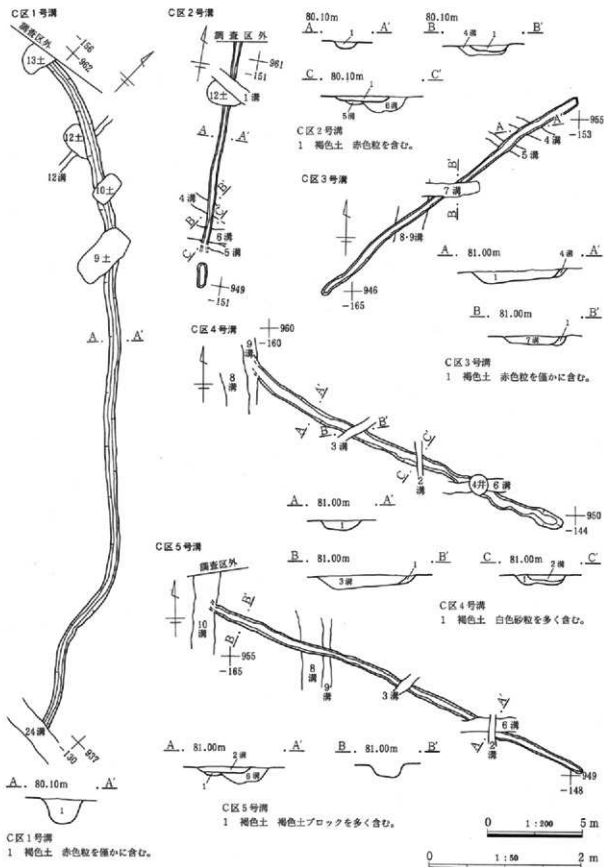
C区5号溝 (第122図 P L33)

位置 本溝はC区北東端にあり、949・-148グリッドに位置する。近くにはC区4号溝がある。

重複 C区2号・3号・6号溝に掘り込まれている。また、C区8号・9号・10号溝を掘り込む。

形態 本溝は北西～南東方向に走向する。本溝の長さは21.4m、溝の上端幅28～51cm、下端幅15～34cm、深さは断面観察で16cmを測る。走向方位はN-67°-Wである。断面は血状に近い。

出土遺物 なし。



第122図 C区1・2・3・4・5号溝

C区6号溝 (第123図 P L33)

位置 本溝はC区北東端にあり、951・-145グリッドに位置する。近くにはC区1号溝がある。

重複 C区2号溝、C区4号井戸跡に掘り込まれている。また、C区4号・5号溝を掘り込む。

形態 本溝は東西方向に走向する。走向から本溝はA区7号溝と同一の可能性がある。本溝の長さは10.8m、溝の上端幅48~87cm、下端幅21~63cm、深さは断面観察で30cmを測る。走向方位はN-89°-Wである。断面は血状に近い。

出土遺物 なし。

C区7号溝 (第123図 P L34)

位置 本溝はC区北東端にあり、953・-172グリッドに位置する。近くにはC区6号溝がある。

重複 C区3号・8号・9号・10号・11号溝を掘りこむ。

形態 本溝は東西方向に走向する。走向から本溝はA区6号溝と同一の可能性がある。本溝の長さは14.6m、溝の上端幅60~96cm、下端幅42~78cm、深さは断面観察で13cmを測る。走向方位はN-89°-Wである。断面は血状に近い。

出土遺物 なし。

C区8号溝 (第123図 P L34)

位置 本溝はC区中央部の東側にあり、960・-160グリッドに位置する。近くにはC区10号溝がある。

重複 C区3号・5号・7号・21号・24号・28号溝に掘り込まれている。また、C区9号・31号溝を掘りこむ。

形態 本溝は南北方向に走向し、南端で二股に分流する。本溝の長さは64.5m、溝の上端幅45~150cm、下端幅8~42cm、深さは断面観察で70cmを測る。走向方位はN-4°-W、N-72°-Wである。断面はV字形に近い。

出土遺物 なし。

C区9号溝 (第123図 P L34)

位置 本溝はC区中央部の東側にあり、960・-160グリッドに位置する。近くにはC区1号溝がある。

重複 C区3号・4号・5号・7号・8号溝に掘り込まれている。また、C区31号溝を掘りこむ。

形態 本溝は8号溝と併行して南北方向に走向し、A区31号溝と重複するあたりから流路が不明となる。本溝の長さは16.4m、溝の上端幅55~79cm、下端幅10~16cm、深さは断面観察で39cmを測る。走向方位はN-1°-Wである。断面はV字形に近い。

出土遺物 なし。

C区10号溝 (第124図 P L34)

位置 本溝はC区中央部にあり、959・-166グリッドに位置する。近くにはC区11号溝がある。

重複 C区5号・7号・24号・32号溝に掘り込まれている。

形態 本溝は南北方向に走向する。重複関係にあるA区24号溝と関連をもつと思われるが不明である。本溝の長さは40.6m、溝の上端幅39~108cm、下端幅19~69cm、深さは断面観察で46cmを測る。走向方位はN-4°-Wである。断面はV字形に近い。

出土遺物 なし。

C区11号溝 (第124図 P L34)

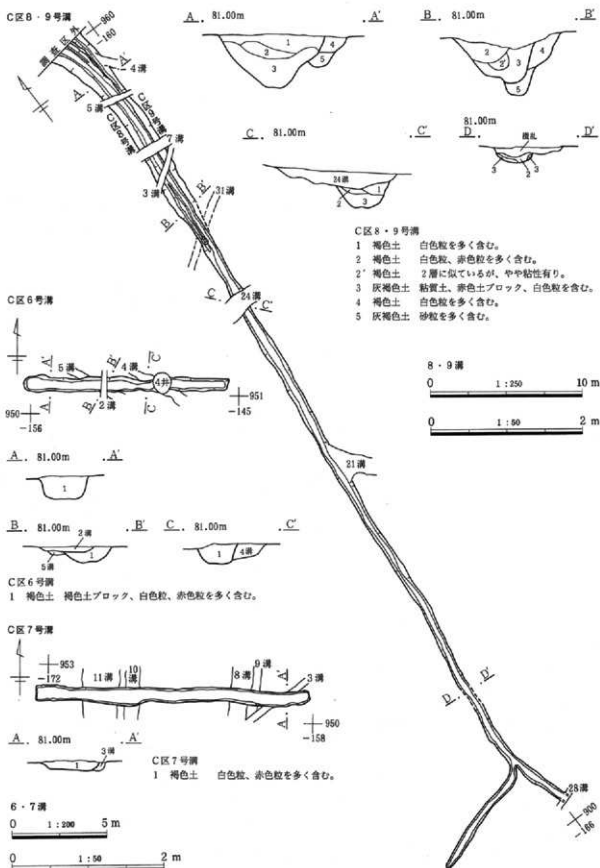
位置 本溝はC区中央部にあり、959・-166グリッドに位置する。近くにはC区12号溝がある。

重複 C区7号溝、C区23号土坑に掘り込まれている。また、C区32号溝を掘り込む。

形態 本溝は南北方向に走向する。本溝の長さは41.7m、溝の上端幅73~185cm、下端幅19~85cm、深さは断面観察で61cmを測る。走向方位はN-4°-Wである。断面はV字形に近い。

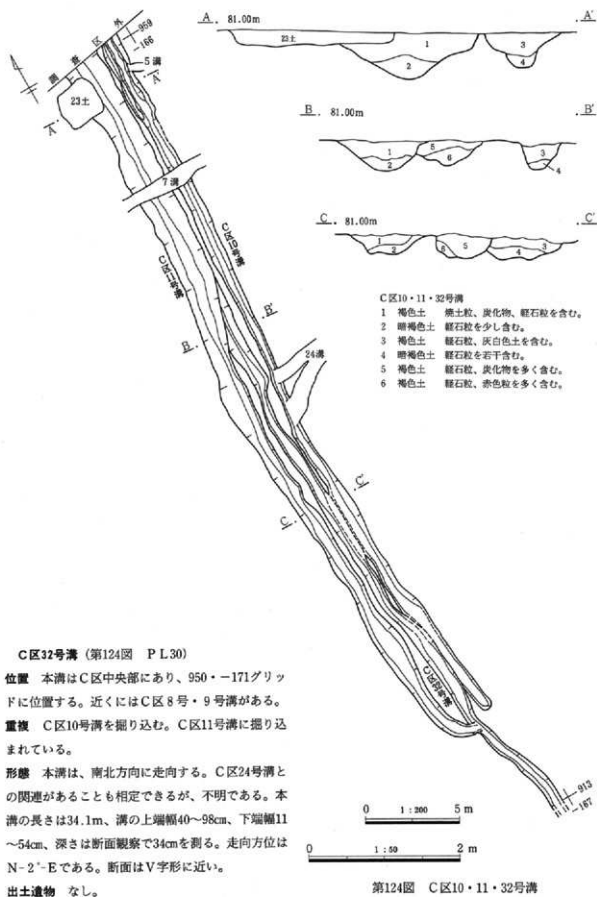
出土遺物 須恵器大甕が出土しているが、奈良・平安時代の遺構外出土遺物として掲載した。

第3章 検出された遺構と遺物



第123図 C区6・7・8・9号溝

4. 中世以降の遺構と遺物



C区32号溝 (第124図 P L30)

位置 本溝はC区中央部にあり、950・-171グリッドに位置する。近くにはC区8号・9号溝がある。

重複 C区10号溝を掘り込む。C区11号溝に掘り込まれている。

形態 本溝は、南北方向に走向する。C区24号溝との関連があることも相定できるが、不明である。本溝の長さは34.1m、溝の上端幅40~98cm、下端幅11~54cm、深さは断面観察で34cmを測る。走向方位はN-2°-Eである。断面はV字形に近い。

出土遺物 なし。

C区12号溝 (第125図 P L35)

位置 本溝はC区中央部にあり、955・-178グリッドに位置する。近くにはC区11号溝がある。

重複 C区29号・30号溝を掘り込む。

形態 本溝は南北方向に蛇行して走向する。本溝の長さは41.8m、溝の上端幅24~164cm、下端幅8~72cm、深さは断面観察で25cmを測る。走向方位は北からN-10°-E、N-15°-W、N-12°-Eである。断面は椀状に近い。

出土遺物 なし。

C区13号溝 (第125図 P L35)

位置 本溝はC区南東端にあり、910・-100グリッドに位置する。近くにはC区19号溝がある。

重複 C区16号溝に掘り込まれる。

形態 本溝は東西方向に走向する。本溝より西にあるC区14号溝と走向が似ている。本溝の長さは10.2m、溝の上端幅100~298cm、下端幅94~275cm、深さは断面観察で16cmを測る。走向方位はN-85°-Eである。断面は皿状に近い。

出土遺物 なし。

C区14号溝 (第125図 P L35)

位置 本溝はC区南東端にあり、908・-121グリッドに位置する。近くにはC区18号溝がある。

重複 C区15号溝に掘り込まれる。

形態 本溝は東西方向に走向する。本溝より東にあるC区13号溝と走向が似ている。本溝の長さは30.7m、溝の上端幅170~289cm、下端幅120~256cm、深さは断面観察で14cmを測る。走向方位はN-85°-Eである。断面は皿状に近い。

出土遺物 埋土から土器が出土しているが、古墳時代遺構外出土遺物として掲載した。

C区15号溝 (第125図 P L35)

位置 本溝はC区南東端にあり、935・-125グリッドに位置する。近くにはC区13号溝がある。

重複 C区14号・17号~19号・22号~24号溝を掘り

込む。

形態 本溝は南北方向に走向する。中程でやや丸い部分をもつが、ほぼ直線状である。本溝の長さは34.8m、溝の上端幅65~250cm、下端幅10~206cm、深さは断面観察で18cmを測る。走向方位はN-5°-Wである。断面は皿状に近い。

出土遺物 なし。

C区16号溝 (第126図 P L35)

位置 本溝はC区南東端にあり、910・-105グリッドに位置する。近くにはC区14号溝がある。

重複 C区13号・19号溝を掘り込む。

形態 本溝は南北方向に走向する。本溝の長さは3.9m、溝の上端幅40~65cm、下端幅23~35cm、深さは断面観察で26cmを測る。走向方位はN-4°-Wである。断面はV字形に近い。

出土遺物 なし。

C区17号溝 (第126図 P L35)

位置 本溝はC区東端にあり、930・-110グリッドに位置する。近くにはC区23号溝がある。

重複 C区15号溝に掘り込まれ、C区22号溝を掘り込む。

形態 本溝は二股に分かれて東西方向に走向する。本溝の長さは14.5m、溝の上端幅40~360cm、下端幅10~330cm、深さは断面観察で15cmを測る。走向方位はN-89°-Wである。断面は皿状に近い。

出土遺物 なし。

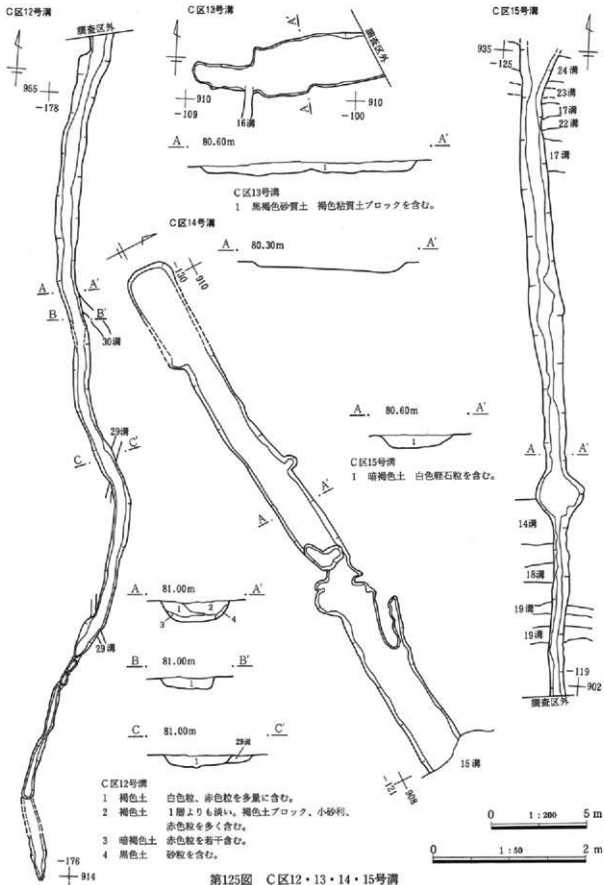
C区18号溝 (第126図 P L35)

位置 本溝はC区南側東寄りにあり、910・-120グリッドに位置する。近くにはC区14号溝がある。

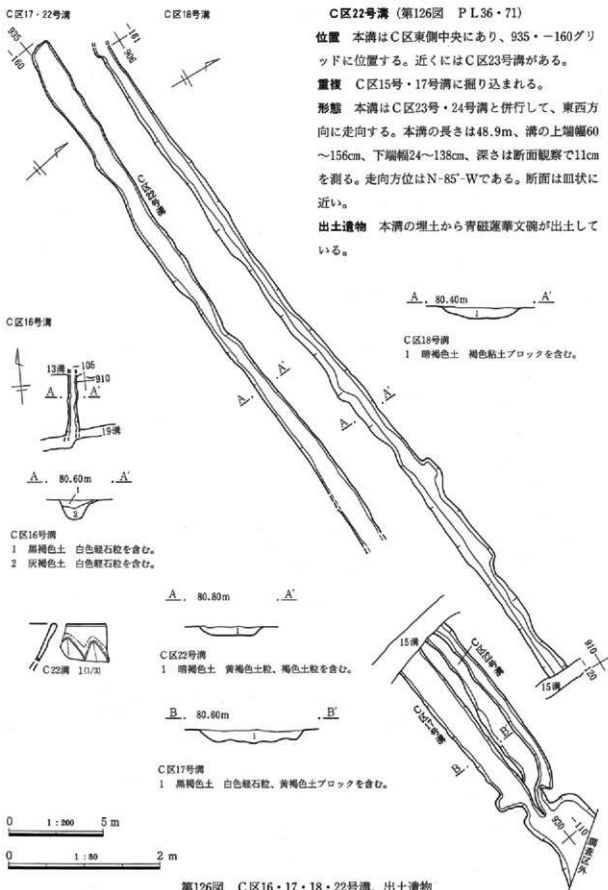
重複 C区15号溝に掘り込まれる。

形態 本溝は東西方向に走向する。本溝の長さは41.4m、溝の上端幅65~155cm、下端幅13~108cm、深さは断面観察で14cmを測る。走向方位はN-86°-Eである。断面は皿状に近い。

出土遺物 なし。



第3章 検出された遺構と遺物



C区22号溝 (第126図 P.L.36・71)

位置 本溝はC区東側中央にあり、935・-160グリッドに位置する。近くにはC区23号溝がある。

重複 C区15号・17号溝に掘り込まれる。

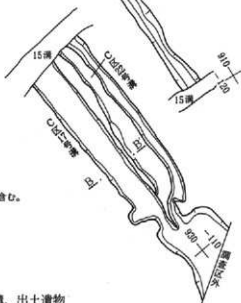
形態 本溝はC区23号・24号溝と併行して、東西方向に走向する。本溝の長さは48.9m、溝の上端幅60～156cm、下端幅24～138cm、深さは断面観察で11cmを測る。走向方位はN-85°-Wである。断面は皿状に近い。

出土遺物 本溝の埋土から青磁蓮華文碗が出土している。

A. 80.40m A'

C区18号溝

1 暗褐色土 褐色粘土ブロックを含む。



C区22号溝

番号	種類 器種	残存 法 量(cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
1	中国青磁 碗	口縁片 口徑 - 御高 - 底径 -	埋土	①緻密 ②還元焼成 ③灰白色	外面に鎮蓮弁文あり。電泉窯系青磁碗。13世紀中～後半。

C区19号溝 (第127図 P L35)

位置 本溝はC区南側東寄りにあり、900・-100グリッドに位置する。近くにはC区18号溝がある。

重複 C区15号・16号・20号・28号溝に掘り込まれる。

形態 本溝はC区18号溝と併行しながら、東西方向に走向する。本溝の東端と西端は二股になる。本溝の長さは66.6m、溝の上端幅138～242cm、下端幅50～179cm、深さは断面観察で11cmを測る。走向方位はN-86°-Eである。断面は皿状に近い。

出土遺物 なし。

C区20号溝 (第127図 P L36)

位置 本溝はC区南側東寄りにあり、905・-140グリッドに位置する。近くにはC区18号溝がある。

重複 C区19号溝を掘り込む。

形態 本溝は19号溝のところで直角に曲がる。本溝の長さは12.3m、溝の上端幅31～44cm、下端幅11～30cm、深さは断面観察で17cmを測る。走向方位は北辺でN-87°-E、東辺でN-5°-Wである。断面はU字形に近い。

出土遺物 なし。

C区21号溝 (第127図 P L36)

位置 本溝はC区東側中央にあり、920・-140グリッドに位置する。近くにはC区22号溝がある。

重複 C区8号溝を掘り込む。また、C区1号整穴状遺構に掘り込まれる。

形態 本溝は東西方向に走向する。本溝の長さは26.7m、溝の上端幅56～270cm、下端幅28～200cm、深さは断面観察で16cmを測る。走向方位はN-88°-Wである。断面は皿状に近い。

出土遺物 埋土から灰胎陶器壺が出土しているが、

奈良・平安時代遺構外出土遺物として掲載した。

C区23号溝 (第127図 P L36)

位置 本溝はC区東側中央にあり、930・-111グリッドに位置する。近くにはC区24号溝がある。

重複 C区15号溝に掘り込まれている。

形態 本溝は中程で攪乱に掘り込まれている。全体としては、C区22号・24号溝と併行して東西方向に走向する。本溝の長さは51.8m、溝の上端幅29～105cm、下端幅15～75cm、深さは断面観察で10cmを測る。走向方位はN-86°-Wである。断面は皿状に近い。

出土遺物 なし。

C区24号溝 (第127図 P L24)

位置 本溝はC区東側中央にあり、935・-120グリッドに位置する。近くにはC区22号・23号溝がある。

重複 A区1号・8号・10号溝を掘り込む。また、A区15号溝に掘り込まれる。

形態 本溝は、C区22号・23号溝と併行して東西方向に走向する。10号溝のところで二股に分かれる。C区10号・32号溝と関連も考えられる。本溝の長さは59.3m、溝の上端幅93～294cm、下端幅38～250cm、深さは断面観察で20cmを測る。走向方位はN-84°-Wである。断面は皿状に近い。

出土遺物 埋土から須恵器大甕が出土しているが、奈良・平安時代遺構外出土遺物として掲載した。

C区25号溝 (第127図 P L5・37)

位置 本溝はC区中央部南端にあり、900・-170グリッドに位置する。近くにはC区26号溝がある。

重複 なし。

形態 本溝は、C区26号・27号溝と併行して東西方

向に弧状に走向する。本溝の長さは10.5m、溝の上端幅31～72cm、下端幅17～50cm、深さは断面観察で34cmを測る。走向方位はN-88°-Eである。断面はV字形に近い。

出土遺物 なし。

C区26号溝 (第127図 P L37)

位置 本溝はC区中央部南端にあり、900・-165グリッドに位置する。近くにはC区27号溝がある。

重複 なし。

形態 本溝は、C区25号・27号溝と併行して東西方向に弧状に走向する。本溝の長さは19.9m、溝の上端幅37～68cm、下端幅20～50cm、深さは断面観察で11cmを測る。走向方位はN-83°-Eである。断面は皿状に近い。

出土遺物 なし。

C区27号溝 (第127図 P L37)

位置 本溝はC区中央部南端にあり、900・-165グリッドに位置する。近くにはC区26号溝がある。

重複 C区28号溝を掘り込む。

形態 本溝は、C区25号・26号溝と併行して東西方向に弧状に走向する。本溝の長さは22.0m、溝の上端幅17～40cm、下端幅8～24cm、深さは断面観察で10cmを測る。走向方位はN-85°-Eである。断面はU字形に近い。

出土遺物 なし。

C区28号溝 (第127図 P L37)

位置 本溝はC区中央部南端にあり、901・-162グリッドに位置する。

重複 C区19号溝を掘り込む。また、C区8号・27号溝に掘り込まれる。近くにはC区26号溝がある。

形態 本溝は、C区27号溝と接するように東西方向に弧状に走向する。C区27号溝と重複した後、走向を変える。本溝の長さは31.2m、溝の上端幅25～65cm、下端幅8～40cm、深さは断面観察で15cmを測る。走向方位は西からN-85°-E、N-75°-Eである。断

面はU字形に近い。

出土遺物 なし。

C区29号溝 (第128図 P L34)

位置 本溝はC区中央部北側にあり、940・-172グリッドに位置する。近くにはC区11号溝がある。

重複 C区12号・30号溝に掘り込まれている。

形態 本溝は、南北方向に蛇行して走向する。本溝はC区11号溝とも関連があると思われるが不明である。本溝の長さは19.4m、溝の上端幅22～43cm、下端幅6～22cm、深さは断面観察で18cmを測る。走向方位は北からN-44°-E、N-10°-E、N-5°-Wである。断面は皿状に近い。

出土遺物 なし。

C区30号溝 (第128図 P L34)

位置 本溝はC区中央部北側にあり、945・-175グリッドに位置する。近くにはC区10号溝がある。

重複 C区11号・12号溝に掘り込まれている。また、C区29号溝を掘り込む。

形態 本溝は、北西から南東方向に走向する。本溝は11号溝と重複するあたりで二股に分かれる。本溝の長さは8.3m、溝の上端幅27～110cm、下端幅5～81cm、深さは断面観察で15cmを測る。走向方位はN-35°-Wである。断面は皿状に近い。

出土遺物 なし。

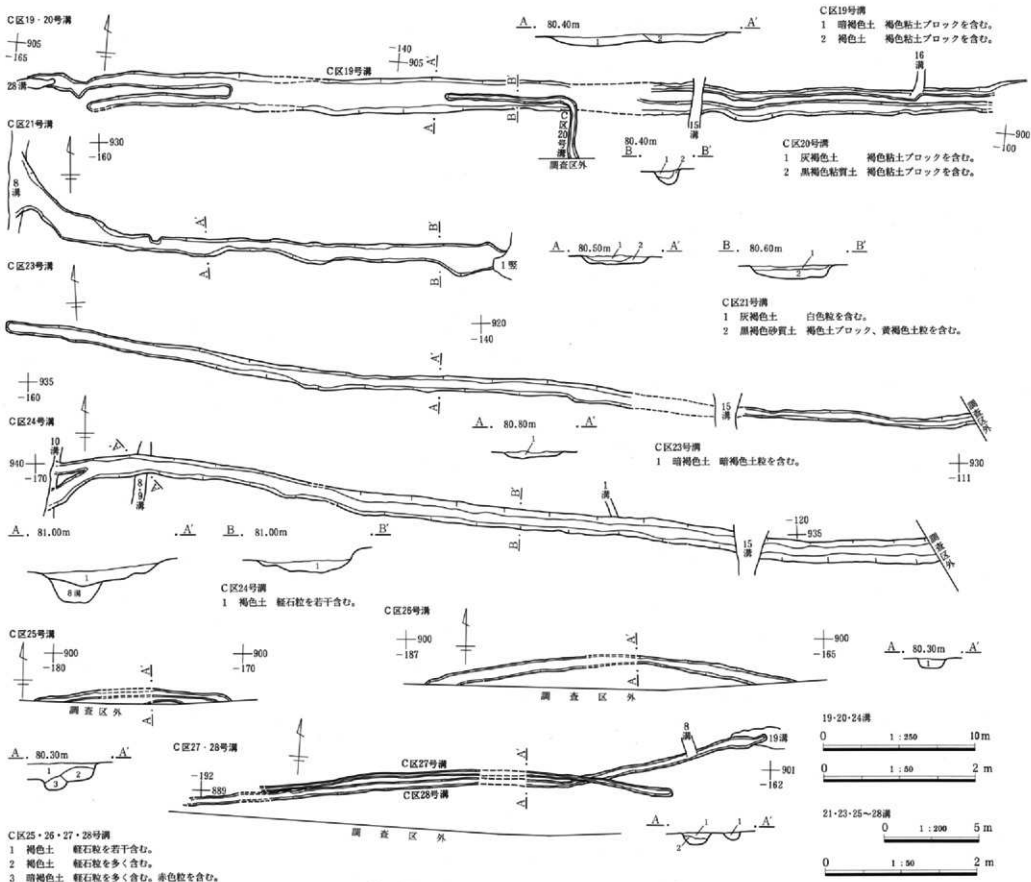
C区31号溝 (第128図 P L36)

位置 本溝はC区中央部北側にあり、942・-165グリッドに位置する。近くにはC区6号溝がある。

重複 C区15号土坑を掘り込む。また、C区8号溝に掘り込まれている。

形態 本溝は、ほぼ東西方向に走向するが、中程で南西へ折れるように流れる。本溝の長さは17.3m、溝の上端幅27～43cm、下端幅17～32cm、深さは不明。走向方位は西からN-55°-E、N-82°-Eである。

出土遺物 なし。



第127図 C区19・20・21・23・24・25・26・27・28号溝

4. 中世以降の遺構と遺物

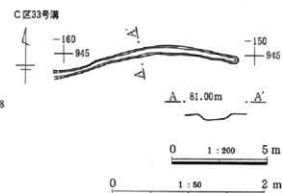
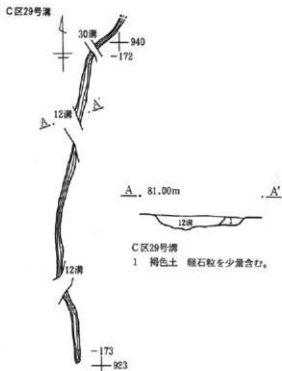
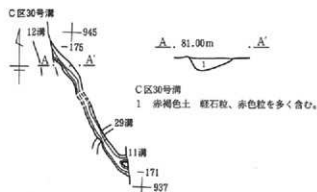
C区33号溝 (第128図 P L37)

位置 本溝はC区北東部にあり、945・-150グリッドに位置する。近くにはC区31号溝がある。

重複 C区8号溝と重複関係になると思われるが、擾乱に掘り込まれていて、はっきりしない。

形態 本溝は、東西方向に弧状に走向する。本溝の長さは10.0m、溝の上端幅25~45cm、下端幅13~30cm、深さは断面観察で8cmを測る。走向方位はN-79°-Wである。断面形は血状に近い。

出土遺物 なし。



第128図 C区29・30・31・33号溝

D区1号溝 (第129図 P L37・71)

位置 本溝はD区西端にあり、896・-248グリッドに位置する。近くにはD区1号掘立柱建物跡がある。

重複 D区2号溝に掘り込まれている。

形態 本溝は、やや東に傾いているが、南北方向に走向する。本溝の長さは17.8m、溝の上端幅153~300cm、下端幅70~165cm、深さは断面観察で81cmを測る。走向方位はN-9°-Eである。断面形は血状に近い。

出土遺物 本溝の埋土から熔烙、片口鉢が出土している。

D区2号溝 (第129図 P L37・71)

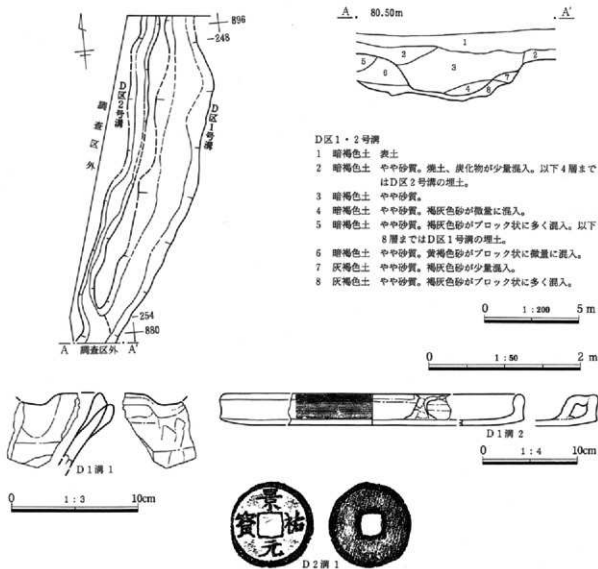
位置 本溝はD区西端にあり、896・-246グリッドに位置する。近くにはD区1号掘立柱建物跡がある。

重複 D区1号溝を掘り込む。

形態 本溝は、やや東に傾いているが、南北方向に走向する。本溝の長さは17.7m、溝の上端幅60~120cm、下端幅13~125cm、深さは断面観察で89cmを測る。走向方位はN-17°-Eである。断面形は血状に近い。

出土遺物 本溝の埋土から北宋銭が出土している。

第3章 検出された遺構と遺物



第129図 D区1・2号溝、出土遺物

D区1号溝			出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴				
番号	種類	残存量 (cm)							
1	軟質陶器 片口鉢	口縁部片 口径 - 器高 - 底径 -	埋土	①砂粒 ②還元焰 硬質 ③灰色	口縁の一部を外傾させて片口を造っている。 外面 口縁部は横ナデ。片口のところに指押さえ痕あり。 内面 ナデ。				
2	軟質陶器 燗罏	口~底部片 口径(31.6)器高 3.3 底径(32.0)	埋土	①砂粒 ②還元焰 硬質 ③灰黄褐色	底部は平坦で、内壁付近は反る。耳は内壁と底部に跨って付く。 外面 横ナデ。 内面 荒ナデ。				
D区2号溝									
番号	種類	残存	銭名 初鋳年	出土位置	外径(cm) 縦×横	孔径(cm) 縦×横	厚さ(mm) 最小~最大	重量(g)	備考
1	貨幣 銅銭	完形	景祐元寶 北宋 1034年	埋土	2.29×2.25	0.59×0.60	1.00~1.10	1.83	字体は真書体。

(4) その他の遺構

ここでは、火葬遺構、地下式土坑、竪穴状遺構を説明する。本遺跡の竪穴状遺構の中には埋土より土師器や須恵器が出土しているものもあるが、埋土の堆積状況及び既に刊行された文献に倣って、本書では中世以降の遺構として扱うのがよいのではないかと考え、ここで説明することにする。

A区1号火葬遺構 (第130図 P L52)

位置 本遺構はA区西端の現道下にあり、890・-380グリッドに位置する。近くにはA区2号掘立柱建物跡をはじめ中世掘立柱建物跡がある。

重複 本遺構はA区160号土坑に掘り込まれている。

形態 本遺構は、長方形の土坑に住居跡の竈の様な突出部がついた形状をしている。長方形の部分は48cm×(95cm)を測る。長軸はやや東に傾き、N-13°Eである。突出部は土坑の東辺の中央部に位置する。長軸は25cm程である。この突出部付近に焼土、炭化物、骨片が集中する。

出土遺物 埋土から炭化物、焼土、灰、骨片が出土している。炭化物、骨片については、「第4章自然科学分析」を参照のこと。

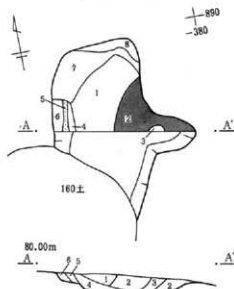
A区1号地下式土坑 (第131図 P L52)

位置 本遺構はA区北西端にあり、911・-372グリッドに位置する。近くにはA区3号井戸跡、A区1号溝がある。

重複 A区16号土坑に掘り込まれている。また、A区12号・15号土坑、3号井戸跡を掘り込む。

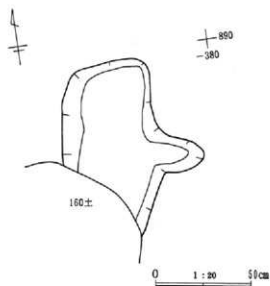
形態 本遺構は、当初A区1号竪穴状遺構として呼称していたが、A区13号土坑(欠番扱い)とトンネル状に繋がることが確認された。そこでA区1号地下式土坑と呼称することにした。方形の部分の規模は2.70m×2.82m(上端の短軸×長軸)、深さは48cmを測り、ほぼ一定の高さを維持する。

出土遺物 埋土から須恵器環の底部片が出土している。



A区1号火葬遺構

- 1 灰褐色土 炭化物が多い。焼土、骨片を含む。
- 2 赤褐色土 焼土を多く含む。炭化物、骨片を含む。
- 3 灰褐色土 攪乱。
- 4 灰褐色土 炭化物と灰褐色土の混合。
- 5 灰白色土 灰層。
- 6 黒色土 炭化物が多い。
- 7 灰褐色土 炭化物が多い。大きな木炭片も多い。焼土を含む。
- 8 灰褐色土 炭化物を疎らに含む。



第130図 A区1号火葬遺構、掘り方

第3章 検出された遺構と遺物



A区2号竪穴状遺構 (第132図 P L52)

位置 本遺構はA区北西端にあり、905・-377グリッドに位置する。近くにはA区4号井戸跡、19号溝がある。

重複 なし。

形態 本遺構の平面形は、方形である。その規模は1.44m×1.59m（上端の短軸×長軸）を測る。深さは21cmを測り、ほぼ一定の高さを維持する。

出土遺物 埋土よりコの字状の口縁と思われる土師器壁の破片が出土している。

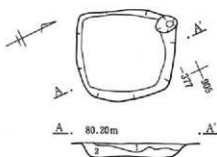
A区3号竪穴状遺構 (第132図 P L52)

位置 本遺構はA区西側中央にあり、898・-373グリッドに位置する。近くにはA区2号溝がある。

重複 A区2号井戸跡に掘り込まれる。

形態 本遺構の平面形は、長方形である。その規模は2.76m×3.48m（上端の短軸×長軸）を測る。東辺は攪乱によって掘りこまれている。深さは21cmを測り、ほぼ一定の高さを維持する。

出土遺物 埋土から、焼成が酸化焰の須恵器壁の底部片が出土している。



A区3号竪穴状遺構

1 暗褐色土 黄褐色土が少量混じる。



4. 中世以降の遺構と遺物

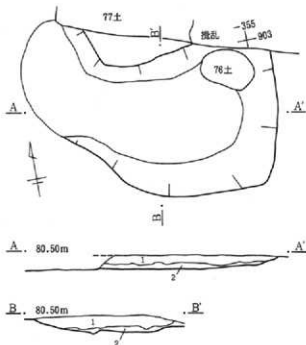
A区4号竪穴状遺構 (第133図)

位置 本遺構はA区西側の北部にあり、903・-355グリッドに位置する。近くにはA区2号・14号溝がある。

重複 A区76号・77号土坑に掘り込まれる。

形態 本遺構の平面形は、攪乱に掘り込まれ、また全体的に削平されており、不定形である。その規模は2.46m×4.11m（上端の短軸×長軸）を測る。深さは24cmを測り、ほぼ一定の高さを維持する。

出土遺物 なし。



A区4号竪穴状遺構

- 1 褐色土 2mm程の軽石粒、1mm程の黄褐色土粒が混入。
2 褐色土 2mm程の軽石粒、1mm程の黄褐色土粒、40mm程の黄褐色土ブロックが混入。

C区1号竪穴状遺構 (第133図)

位置 本遺構はC区東側中央にあり、930・-130グリッドに位置する。近くにはC区22号溝がある。

重複 C区21号溝を掘り込む。また、C区25号土坑に掘り込まれる。

形態 本遺構の平面形は、ほぼ長方形である。その規模は5.24m×9.64m（上端の短軸×長軸）を測る。東辺は攪乱によって掘りこまれている。深さは24cmを測り、ほぼ一定の高さを維持する。

出土遺物 なし。



C区1号竪穴状遺構

- 1 灰褐色土 黄褐色土ブロックを含む。

第133図 A区4・C区1号竪穴状遺構

(5) 土坑

本遺跡の発掘調査において検出された土坑は総数209基である。その内訳を検出された調査区別に見ていくとA区162基・B区17基・C区29基・D区1基である。次に、時代別に見ていくと奈良・平安時代7基・中世以降202基と分けられる。遺物が埋土から出土しているものは、209基のうち8基のみで

あり、埋土の堆積状況、重複関係などから時期を決定した。奈良・平安時代の土坑については「第3章 3. 奈良・平安時代の遺構と遺物 (5) 土坑」で掲載している。また、その平面形状で見ると長方形が全体の54%を占める。特に中世以降は長い土坑が、併行して検出される傾向にある。

遺構名 (第 図 P.L.)	平面図 位置(G)	長軸 方向	長軸×短軸 深さ(cm)	備考 (遺物等)
A区1号土坑 (第134図)	長方形 904・-379	90°-E	135×53 20	
A区2号土坑 (第134図 P.L.37)	長方形 904・-373	5°-E	161×85 24	
A区3号土坑 (第134図 P.L.37)	円形 911・-375	不可	87×77 22	
A区4号土坑 (第134図 P.L.38)	円形 900・-378	不可	96×89 10	
A区5号土坑 (第134図 P.L.38)	長方形 896・-377	8°-W	102×63 38	
A区6号土坑 (第134図 P.L.38)	長方形 903・-377	0°-E	166×115 34	A1井重 覆
A区7号土坑 (第135図 P.L.38)	円形 887・-376	不可	82×70 63	
A区8号土坑 (第135図)	長方形 894・-379	14°-E	235×136 35	A17土 重覆
A区9号土坑 (第135図 P.L.38)	長方形 899・-375	56°-W	132×83 39	
A区10号土坑 (第135図 P.L.38)	長方形 900・-375	83°-W	170×93 52	
A区11号土坑 (第135図 P.L.46)	長方形 907・-380	81°-W	167×142 45	A18溝重 覆
A区12号土坑 (第135図 P.L.38)	円形 909・-376	不可	137×124 50	A3井・ 1地重覆
A区15号土坑 (第135図 P.L.38)	不定形 906・-375	不可	115×47 25	
A区16号土坑 (第135図)	長方形 911・-372	44°-E	134×99 50	A1地重 覆
A区17号土坑 (第135図 P.L.39)	円形 914・-367	不可	48×43 16	
A区18号土坑 (第135図 P.L.39)	長方形 906・-367	8°-W	133×58 36	A19土重 覆
A区19号土坑 (第135図 P.L.39)	長方形 906・-367	5°-W	196×128 27	A18土重 覆
A区20号土坑 (第135図 P.L.39)	長方形 908・-365	78°-W	162×93 35	A21土重 覆
A区21号土坑 (第135図 P.L.39)	長方形 908・-365	68°-W	107×80 19	A20土重 覆
A区22号土坑 (第135図 P.L.39)	長方形 885・-373	9°-E	248×75 20	A28土重 覆
A区23号土坑 (第136図 P.L.39)	長方形 899・-369	62°-W	155×85 24	A24土重 覆
A区24号土坑 (第136図 P.L.39)	長方形 899・-369	37°-W	169×83 41	A23土重 覆
A区25号土坑 (第136図 P.L.39・71)	楕円形 901・-369	15°-E	129×95 38	古瀬戸皿 2溝重覆

遺構名 (第 図 P.L.)	平面図 位置(G)	長軸 方向	長軸×短軸 深さ(cm)	備考 (遺物等)
A区26号土坑 (第136図)	長方形 900・-367	26°-E	163×88 35	A2溝重 覆
A区27号土坑 (第136図)	長方形 905・-373	79°-W	262×58 13	
A区28号土坑 (第136図 P.L.39)	長方形 885・-373	9°-E	115×52 7	A22土重 覆
A区29号土坑 (第136図 P.L.39)	長方形 900・-372	85°-W	181×88 30	A117ピ 重覆
A区30号土坑 (第136図)	長方形 897・-369	9°-E	156×53 11	A3溝重 覆
A区31号土坑 (第136図 P.L.39)	長方形 886・-378	85°-E	257×65 32	
A区32号土坑 (第136図)	長方形 881・-378	3°-E	276×80 25	
A区33号土坑 (第136図 P.L.40)	長方形 880・-371	7°-E	150×93 35	
A区34号土坑 (第136図 P.L.40)	長方形 889・-370	8°-W	70×57 64	
A区35号土坑 (第136図 P.L.40)	長方形 898・-368	45°-W	115×80 28	A58土・ 35ピ重覆
A区36号土坑 (第136図 P.L.40)	長方形 897・-367	4°-E	89×65 25	A58土重 覆
A区37号土坑 (第136図)	楕円形 890・-369	不可	72×72 12	
A区38号土坑 (第137図 P.L.40)	長方形 896・-366	78°-W	235×97 63	
A区39号土坑 (第137図 P.L.40)	長方形 904・-367	80°-W	118×83 23	
A区41号土坑 (第137図)	長方形 896・-366	13°-E	860×90 46	A46土重 覆
A区42号土坑 (第137図 P.L.40)	長方形 893・-373	不可	63×45 13	A38ピ重 覆
A区43号土坑 (第137図 P.L.40)	円形 894・-372	不可	54×49 14	
A区44号土坑 (第137図 P.L.41・71)	円形 881・-371	不可	48×42 22	北宋銭
A区45号土坑 (第137図 P.L.41)	長方形 889・-368	10°-E	151×100 21	A3・4 溝重覆
A区46号土坑 (第137図)	長方形 895・-366	11°-E	188×74 46	A41土重 覆
A区47号土坑 (第137図 P.L.41)	円形 913・-364	不可	43×37 16	
A区48号土坑 (第137図 P.L.41)	円形 915・-363	不可	74×65 24	
A区49号土坑 (第137図 P.L.41)	楕円形 914・-362	不可	62×48 17	

4. 中世以降の遺構と遺物

遺構名 (第 図 P.L.)	平面図 位置(G)	長軸 方向	長軸×短軸 長さ(cm)	備考 (遺物等)
A区50号土坑 (第137図 P.L.41)	円形 913・-362	不可	46×40 32	
A区51号土坑 (第137図)	長方形 887・-361	12°-E	324×90 6	
A区52号土坑 (第137図 P.L.41)	長方形 895・-362	61°-W	101×81 20	
A区53号土坑 (第137図)	長方形 896・-361	71°-W	100×79 93	
A区54号土坑 (第137図)	長方形 893・-359	67°-W	71×51 21	A55土重 複
A区55号土坑 (第137図)	円形 893・-359	不可	38×39 2	A54土重 複
A区56号土坑 (第138図 P.L.41)	長方形 902・-367	7°-W	47×22 25	
A区57号土坑 (第138図)	不定形 884・-368	不可	254×138 22	A125ビ 他遺物
A区58号土坑 (第138図 P.L.42)	長方形 896・-368	57°-W	96×51 20	A35・36 土重複
A区59号土坑 (第138図)	長方形 884・-368	5°-E	351×101 21	A57土・ 4調査重 複
A区60号土坑 (第138図 P.L.42)	長方形 892・-368	18°-E	95×66 11	
A区61号土坑 (第138図)	長方形 868・-340	64°-W	205×82 8	A186ビ 重複
A区62号土坑 (第138図 P.L.42)	長方形 867・-373	82°-W	93×60 25	A36ビ重 複
A区63号土坑 (第138図 P.L.42)	円形 887・-365	不可	105×91 12	
A区64号土坑 (第138図 P.L.42)	長方形 866・-377	22°-E	287×173 31	A187ビ 重複
A区65号土坑 (第138図)	長方形 892・-357	17°-E	367×70 44	A2・5 調査重 複
A区66号土坑 (第138図 P.L.42)	長方形 887・-362	14°-E	181×85 21	A2調査重 複
A区67号土坑 (第138図 P.L.42)	長方形 893・-365	10°-E	168×75 32	
A区68号土坑 (第139図)	長方形 894・-364	10°-E	321×75 28	
A区69号土坑 (第139図 P.L.42)	楕円形 892・-362	不可	85×68 37	
A区70号土坑 (第139図)	長方形 886・-362	86°-W	291×73 15	A130ビ 重複
A区72号土坑 (第139図)	長方形 891・-355	12°-E	335×54 20	
A区73号土坑 (第139図 P.L.43)	長方形 887・-356	19°-E	257×100 14	A14調査 89土重複
A区74号土坑 (第139図 P.L.43)	長方形 900・-356	16°-E	90×74 29	
A区75号土坑 (第139図 P.L.43)	楕円形 907・-355	不可	82×65 65	
A区76号土坑 (第139図)	長方形 903・-356	58°-W	111×77 30	
A区77号土坑 (第139図 P.L.43)	長方形 905・-359	70°-W	290×76 24	A4調査重 複
A区78号土坑 (第139図 P.L.43)	長方形 904・-348	11°-E	315×69 41	A14調査重 複
A区79号土坑 (第139図)	長方形 880・-355	20°-E	218×90 26	A80土重 複
A区80号土坑 (第139図)	長方形 879・-355	7°-E	350×80 23	A79土重 複

遺構名 (第 図 P.L.)	平面図 位置(G)	長軸 方向	長軸×短軸 長さ(cm)	備考 (遺物等)
A区81号土坑 (第140図 P.L.43)	長方形 882・-354	25°-E	195×92 24	A106土 重複
A区82号土坑 (第140図 P.L.43)	楕円形 885・-353	13°-E	132×85 46	
A区83号土坑 (第140図 P.L.43)	円形 880・-353	不可	69×63 25	
A区84号土坑 (第140図)	長方形 888・-354	13°-E	185×85 11	A14調査重 複
A区86号土坑 (第140図 P.L.44)	楕円形 891・-348	87°-E	119×83 10	
A区87号土坑 (第140図 P.L.44)	楕円形 890・-347	41°-W	76×40 6	
A区88号土坑 (第140図 P.L.44)	長方形 879・-353	15°-E	154×74 11	
A区89号土坑 (第140図 P.L.44)	長方形 885・-356	7°-E	232×129 18	A73土・ 14調査重 複
A区90号土坑 (第140図 P.L.44)	長方形 875・-358	15°-E	344×119 22	A91・92 土重複
A区91号土坑 (第140図 P.L.44)	長方形 875・-358	68°-W	242×78 27	A90・93 土重複
A区92号土坑 (第140図 P.L.44)	長方形 875・-358	68°-W	39×85 27	A90土重 複
A区93号土坑 (第140図 P.L.44)	長方形 875・-358	0°-E	75×80 27	A91土重 複
A区94号土坑 (第140図 P.L.44)	長方形 885・-347	14°-E	142×64 17	
A区95号土坑 (第140図)	長方形 870・-340	19°-E	333×80 32	
A区97号土坑 (第141図 P.L.44)	長方形 886・-348	89°-W	163×111 5	A98・10 5土重複
A区98号土坑 (第141図 P.L.44)	長方形 886・-348	68°-W	78×92 28	A97・99 土重複
A区99号土坑 (第141図 P.L.44)	長方形 886・-348	41°-E	126×105 24	A98・10 0土重複
A区100号土坑 (第141図 P.L.44)	長方形 886・-348	29°-E	125×90 37	A99・10 1土重複
A区101号土坑 (第141図 P.L.45)	長方形 885・-350	26°-E	145×90 39	A100土 重複
A区102号土坑 (第141図)	長方形 889・-348	20°-E	82×64 15	
A区103号土坑 (第141図)	長方形 870・-358	21°-E	213×87 18	
A区104号土坑 (第141図 P.L.45)	楕円形 871・-357	不可	125×94 8	
A区105号土坑 (第141図)	長方形 887・-347	6°-E	216×75 9	A97土重 複
A区106号土坑 (第141図)	長方形 886・-355	7°-E	322×117 16	A14調査 81土重複
A区108号土坑 (第141図 P.L.45)	楕円形 866・-356	0°-E	109×65 30	
A区109号土坑 (第141図)	円形 866・-349	不可	32×66 36	
A区111号土坑 (第141図 P.L.45)	楕円形 872・-353	不可	82×75 14	
A区112号土坑 (第141図 P.L.45)	楕円形 872・-352	不可	67×49 11	
A区113号土坑 (第141図)	楕円形 875・-343	不可	76×63 20	
A区115号土坑 (第142図)	円形 878・-345	不可	70×67 20	

第3章 検出された遺構と遺物

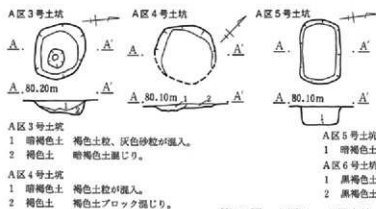
遺構名 (調査 P.L.)	平面図 位置(G)	長軸 方向	長軸×短軸 長さ(cm)	備考 (遺物等)
A区116号土坑 (第142図)	円形 885・344	不可	77×65 25	A 8 井重 複
A区117号土坑 (第142図 P.L.45)	円形 887・345	不可	60×46	A118土 重複
A区118号土坑 (第142図 P.L.45・71)	楕円形 887・345	67°-E	80×43	軟質陶器 片口鉢
A区119号土坑 (第142図 P.L.45)	円形 889・345	不可	67×53 28	A 243土 重複
A区120号土坑 (第142図)	円形 885・346	不可	68×55 23	
A区124号土坑 (第142図)	円形 879・341	不可	70×54 38	A 5 掘重 複
A区126号土坑 (第142図)	楕円形 888・339	50°-E	105×67 23	
A区128号土坑 (第142図 P.L.45)	円形 883・342	不可	62×61 36	
A区130号土坑 (第142図 P.L.46)	円形 887・339	不可	74×74 18	
A区132号土坑 (第142図 P.L.46)	円形 882・338	不可	58×52 14	
A区133号土坑 (第142図 P.L.46)	楕円形 869・355	32°-W	78×33 13	
A区135号土坑 (第142図)	不定形 871・343	不可	114×102 24	
A区137号土坑 (第142図)	円形 875・340	不可	65×62 22	A 5 掘重 複
A区139号土坑 (第142図)	楕円形 877・340	67°-W	62×41 13	
A区140号土坑 (第142図 P.L.46)	楕円形 867・340	不可	51×85 68	
A区142号土坑 (第142図 P.L.45)	楕円形 895・337	84°-W	119×84 9	
A区143号土坑 (第143図)	楕円形 881・337	0°-E	110×84 12	
A区144号土坑 (第143図)	円形 880・338	不可	69×64 30	
A区145号土坑 (第143図)	楕円形 872・338	84°-E	109×35 16	
A区146号土坑 (第143図)	長方形 907・323	78°-W	242×70 49	
A区147号土坑 (第143図)	長方形 909・327	81°-E	175×63 73	
A区148号土坑 (第143図)	円形 896・324	不可	88×88 14	
A区149号土坑 (第143図)	長方形 900・320	18°-W	292×140 18	
A区150号土坑 (第143図 P.L.46)	長方形 906・378	0°-E	105×100 14	A11土重 複
A区151号土坑 (第143図)	楕円形 906・321	75°-E	87×33 12	
A区152号土坑 (第143図 P.L.46)	方形 903・379	不可	117×100 19	A353土 他重複
A区153号土坑 (第143図 P.L.46)	楕円形 903・379	10°-W	160×86 15	A354土 他重複
A区154号土坑 (第143図 P.L.46)	方形 903・379	不可	107×113 16	A152土 重複
A区155号土坑 (第143図)	方形 895・380	70°-W	232×187 24	
A区156号土坑 (第143図 P.L.46)	長方形 901・379	1°-W	135×100 15	

遺構名 (調査 P.L.)	平面図 位置(G)	長軸 方向	長軸×短軸 長さ(cm)	備考 (遺物等)
A区157号土坑 (第144図 P.L.47)	楕円形 893・381	90°-E	77×47	
A区158号土坑 (第144図 P.L.47)	楕円形 891・382	14°-E	114×94 40	
A区159号土坑 (第144図 P.L.47)	長方形 890・381	20°-E	230×128 30	A335土 他重複
A区160号土坑 (第144図 P.L.47)	円形 890・381	20°-E	120×92 35	A159土 他重複
A区161号土坑 (第144図 P.L.47)	楕円形 888・381	16°-E	99×67 16	A159土 重複
A区162号土坑 (第144図 P.L.47)	楕円形 911・380	32°-W	150×71 52	
A区164号土坑 (第144図 P.L.47)	方形 874・383	不可	110×104 35	
A区165号土坑 (第144図 P.L.47)	長方形 881・380	11°-E	167×73 16	
A区167号土坑 (第144図)	方形 906・380	不可	124×99 28	A168土 他重複
A区168号土坑 (第144図)	楕円形 906・380	82°-E	85×46 16	A167土 重複
A区169号土坑 (第144図 P.L.47)	楕円形 907・381	62°-W	217×90 16	A163土 他重複
A区171号土坑 (第144図 P.L.47)	楕円形 893・379	0°-E	194×91 24	A 8 土重 複
A区172号土坑 (第144図 P.L.47)	長方形 887・382	20°-E	202×106 18	A361土 重複
A区173号土坑 (第144図)	長方形 887・383	53°-E	138×49 11	
A区175号土坑 (第144図)	楕円形 885・383	61°-E	85×58 6	
A区176号土坑 (第145図 P.L.48)	長方形 895・382	75°-W	207×125 20	A177土 他重複
A区177号土坑 (第145図 P.L.48)	長方形 895・383	5°-E	254×116 60	A176土 重複
A区180号土坑 (第145図 P.L.48)	円形 884・315	不可	129×122 23	
A区182号土坑 (第145図)	楕円形 905・319	15°-W	49×25 19	
A区183号土坑 (第145図 P.L.48)	長方形 885・369	81°-W	204×74 37	A15掘重 複
A区184号土坑 (第145図)	長方形 887・369	22°-E	287×78 11	A 4 掘・ 97土重 複
B区2号土坑 (第145図 P.L.48)	長方形 924・261	86°-W	251×154 47	B 1 溝重 複
B区3号土坑 (第145図 P.L.48)	長方形 926・267	86°-W	176×75 41	B 3 溝重 複
B区4号土坑 (第145図 P.L.48)	長方形 928・272	84°-W	115×78 33	
B区5号土坑 (第145図 P.L.48)	長方形 930・272	84°-W	134×91 44	
B区6号土坑 (第145図 P.L.48)	長方形 932・271	81°-W	104×73 39	
B区7号土坑 (第145図 P.L.49)	長方形 931・255	2°-E	259×169 25	
B区8号土坑 (第146図 P.L.49)	長方形 918・284	85°-E	242×128 13	B 9 土・ 3 住重複
B区9号土坑 (第146図 P.L.49)	長方形 918・284	38°-E	85×58 19	B 8 土重 複
B区10号土坑 (第146図 P.L.49)	楕円形 929・330	74°-E	103×67 24	B11・12 土重複

4. 中世以降の遺構と遺物

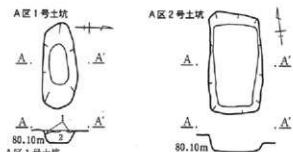
遺構名 (第 図 P.L.)	平面図 位置(G)	長軸 方向	長軸×短軸 深さ(cm)	備考 (遺物等)
B区11号土坑 (第146図 P.L.49)	不定形 929・-330	不可	84×55 11	B10・13 土層複
B区12号土坑 (第146図 P.L.49)	楕円形 929・-330	73°-W	180×60	B10土重 複
B区13号土坑 (第146図 P.L.49)	楕円形 929・-330	84°-E	114×75 14	B10・11 土層複
B区14号土坑 (第146図)	楕円形 927・-325	20°-W	114×83 20	
B区17号土坑 (第146図)	円形 931・-345	不可	103×102 39	
B区19号土坑 (第146図)	円形 932・-322	不可	82×82 70	B5・6 溝重複
C区1号土坑 (第146図)	長方形 928・-223	83°-W	215×102 53	
C区5号土坑 (第146図 P.L.49)	円形 942・-214	不可	96×93 83	
C区6号土坑 (第146図 P.L.49)	楕円形 967・-130	83°-W	274×161 39	
C区7号土坑 (第146図 P.L.49)	不定形 970・-139	不可	175×143 12	
C区8号土坑 (第147図)	長方形 963・-130	83°-W	391×93 12	
C区9号土坑 (第147図 P.L.49)	楕円形 955・-136	84°-W	116×85 12	
C区10号土坑 (第147図 P.L.49)	楕円形 954・-131	不可	不可	C11土重 複
C区11号土坑 (第147図 P.L.49)	楕円形 954・-131	不可	不可	C10土重 複
C区12号土坑 (第147図 P.L.50)	楕円形 954・-133	70°-W	216×179 39	
C区13号土坑 (第147図 P.L.50)	長方形 961・-142	1°-E	137×96 13	
C区14号土坑 (第147図 P.L.50)	長方形 957・-149	0°-E	323×150 28	C1溝重 複
C区15号土坑 (第147図 P.L.50)	長方形 959・-151	4°-W	161×99 11	C1溝重 複
C区16号土坑 (第147図)	長方形 956・-151	4°-W	162×103 22	
C区17号土坑 (第147図 P.L.50)	楕円形 960・-153	88°-W	182×63 12	C1・2 溝重複
C区18号土坑 (第147図 P.L.50)	長方形 961・-158	15°-E	158×131 43	
C区19号土坑 (第148図 P.L.50)	円形 950・-154	不可	93×88 15	

遺構名 (第 図 P.L.)	平面図 位置(G)	長軸 方向	長軸×短軸 深さ(cm)	備考 (遺物等)
C区20号土坑 (第148図 P.L.50)	円形 949・-156	不可	93×78 18	
C区21号土坑 (第148図 P.L.51)	不定形 949・-159	不可	175×133 9	
C区22号土坑 (第148図 P.L.51)	楕円形 948・-224	5°-E	246×216 76	
C区23号土坑 (第148図 P.L.51)	楕円形 943・-198	不可	124×116 47	
C区24号土坑 (第148図)	楕円形 943・-198	70°-E	98×89 10	C25土重 複
C区25号土坑 (第148図)	長方形 943・-198	14°-E	145×91 31	C24土重 複
C区26号土坑 (第148図 P.L.51)	円形 949・-207	不可	276×251 130	
C区27号土坑 (第148図 P.L.51)	長方形 949・-195	0°-E	215×115 19	
C区28号土坑 (第148図 P.L.51)	方形 959・-164	不可	221×210 15	C11溝重 複
C区29号土坑 (第149図)	長方形 919・-140	4°-W	614×137 15	
C区30号土坑 (第149図 P.L.51)	不定形 925・-133	不可	250×230 12	
C区31号土坑 (第149図 P.L.51)	円形 948・-142	不可	128×122 29	
C区32号土坑 (第149図 P.L.52)	長方形 942・-157	4°-E	144×89 14	
D区1号土坑 (第149図 P.L.52)	長方形 880・-246	82°-E	95×66 24	



A区3号土坑
1 暗褐色土 褐色土粒、灰色砂粒が混入。
2 褐色土 暗褐色土混じり。

A区4号土坑
1 暗褐色土 褐色土粒が混入。
2 褐色土 褐色土ブロック混じり。

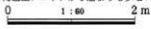


A区1号土坑
1 暗褐色土 褐色土粒が混入。
2 褐色土 褐色土ブロック混じり。

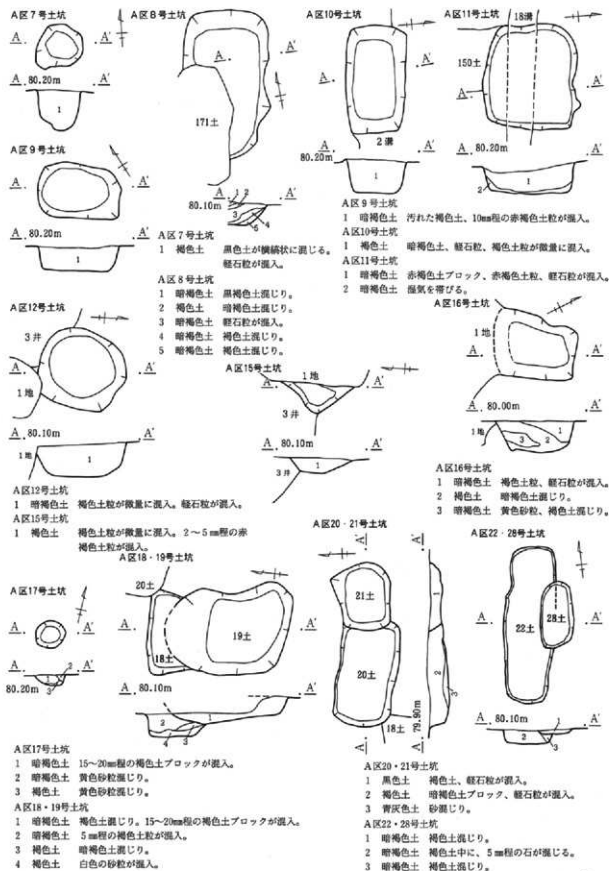


A区5号土坑
1 暗褐色土 10~12mm程の褐色土ブロック、褐色土粒が混入。
A区6号土坑
1 黒褐色土 褐色土ブロックを含む。
2 黒褐色土 1層に近いが、褐色土ブロックが1層よりも少ない。

第134図 A区1~6号土坑

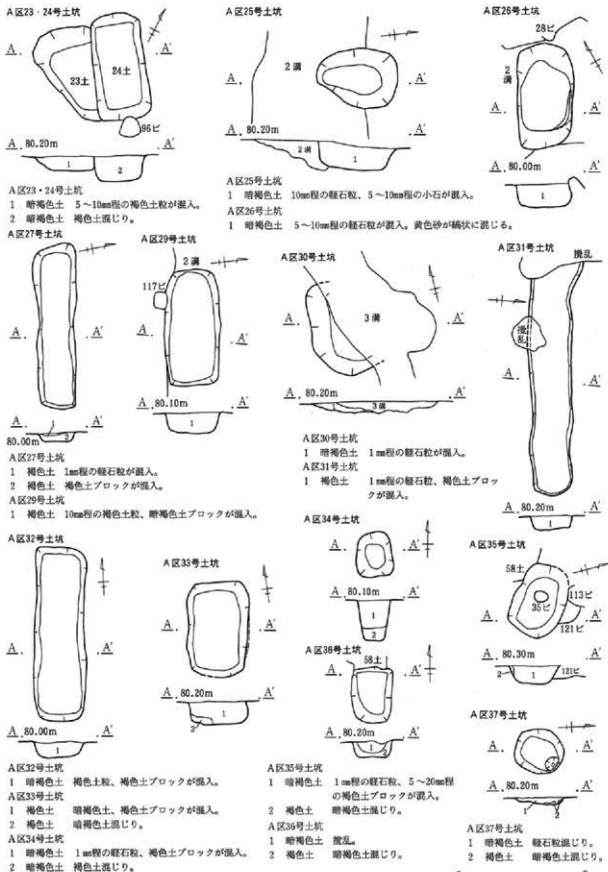


第3章 検出された遺構と遺物



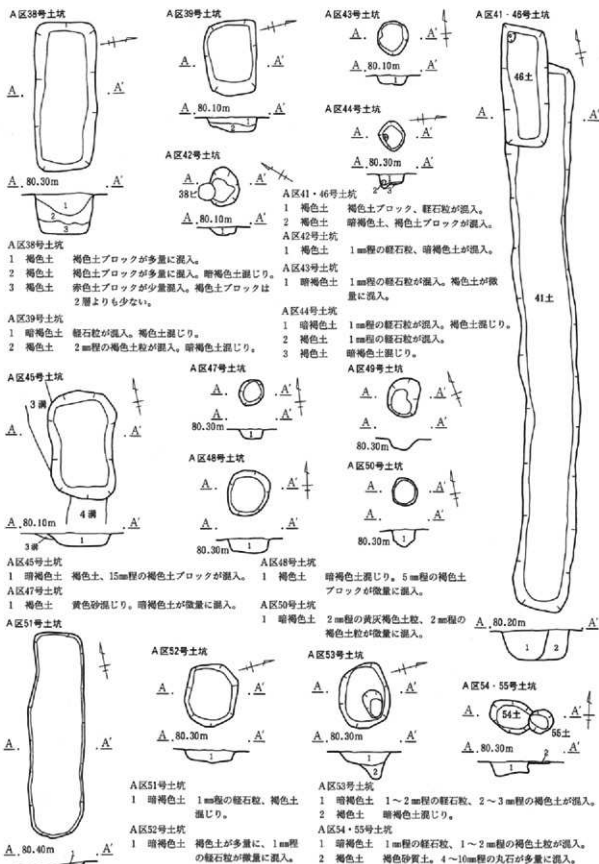
第135図 A区7～12・15～22・28号土坑

0 1:60 2m



第136図 A区23~27・29~37号土坑

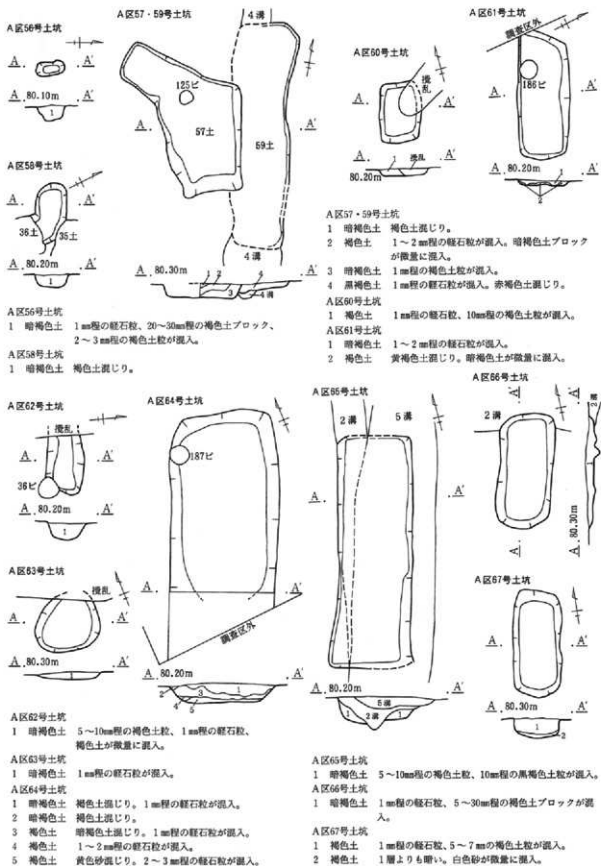
第3章 検出された遺構と遺物



第137図 A区38・39・40~55号土坑

0 1:90 2m

4. 中世以降の遺構と遺物



第138図 A区56～67号土坑

0 1:60 2m

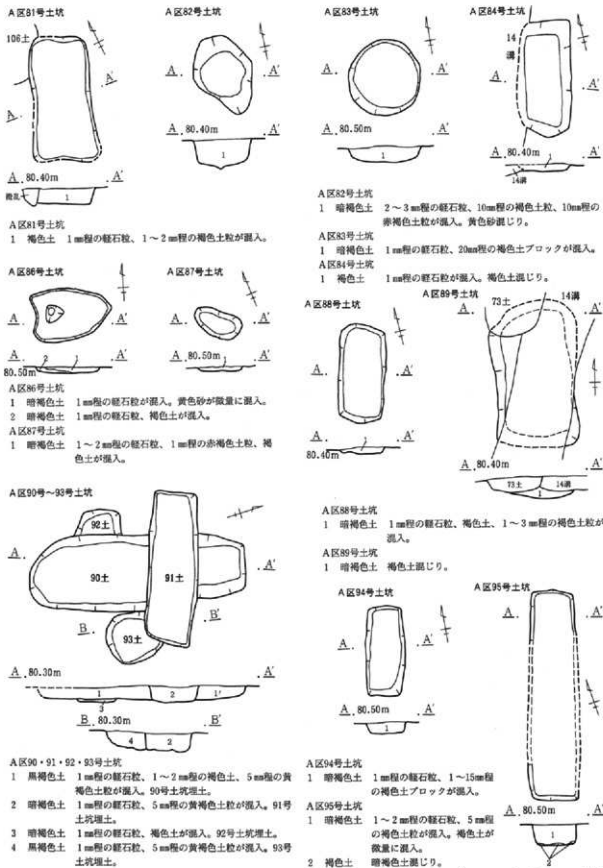
第3章 検出された遺構と遺物



第139図 A区68~70・72~80号土坑

0 1:60 2m

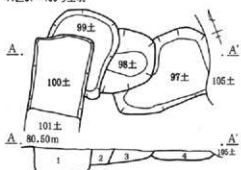
4. 中世以降の遺構と遺物



第140図 A区81~84・86~95号土坑

第3章 検出された遺構と遺物

A区97~100号土坑



A区97・98・99・100号土坑

- 1 褐色土 1mm程の軽石粒、10~20mm程の赤褐色土ブロック、灰白色砂、黄色砂が混入。
- 2 褐色土 1mm程の軽石粒、5~10mm程の赤褐色土粒が混入。
- 3 暗褐色土 1mm程の軽石粒、5~10mm程の褐色土粒が混入。(粘性土)
- 4 暗褐色土 1mm程の軽石粒、10mm程の褐色土粒が混入。3層よりも粘性少。

A区101号土坑



A区101号土坑

- 1 暗褐色土 5~20mm程の褐色土ブロックが多量に混入。1~2mm程の軽石粒、5~15mm程の赤褐色土ブロックが混入。

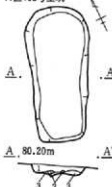
A区102号土坑



A区102号土坑

- 1 暗褐色土 1mm程の軽石粒、褐色土、10mm程の褐色土粒が混入。

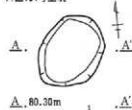
A区103号土坑



A区103号土坑

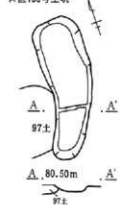
- 1 暗褐色土 1~3mm程の軽石粒、10mm程の黄褐色土粒、10mm程の白色粘土粒が混入。
- 2 黒褐色土 褐色土混じり。
- 3 褐色砂質土 黒褐色土混じり。

A区104号土坑



A区104号土坑

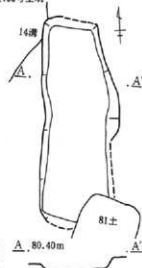
A区105号土坑



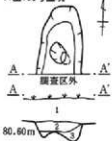
A区104号土坑

- 1 黒褐色土 1mm程の軽石粒、1mm程の灰白色砂、褐色土が混入。

A区106号土坑



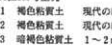
A区108号土坑



A区108号土坑

- 1 褐色粘質土 現代の耕作土。
- 2 暗褐色土 1~2mm程の軽石粒、1~3mm程の褐色土粒、褐色土が混入。
- 3 暗褐色粘質土 褐色土が混入。(2層よりも多量)。

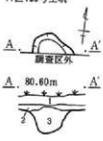
A区109号土坑



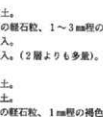
A区109号土坑

- 1 褐色粘質土 現代の耕作土。
- 2 褐色粘質土 現代の耕作土。
- 3 暗褐色粘質土 1~2mm程の軽石粒、1mm程の褐色土粒が混入。

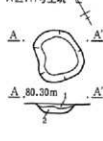
A区109号土坑



A区111号土坑



A区111号土坑



A区112号土坑



A区111号土坑

- 1 黒褐色粘質土 灰褐色粘質土混じり。
- 2 暗褐色粘質土 黒褐色土混じり。

A区112号土坑

- 1 黒褐色粘質土 暗褐色土混じり。
- 2 暗褐色粘質土 黒褐色土混じり。

A区113号土坑

- 1 暗褐色粘質土 1mm以下の軽石粒が混入。褐色土が微量に混入。
- 2 褐色粘質土 暗褐色土混じり。
- 3 褐色粘質土 2層に近いが2層よりも褐色が強い。

第141図 A区97~106・108・109・111~113号土坑



4. 中世以降の遺構と遺物



A区115号土坑

1 暗褐色粘質土 1mm程の軽石粒が混入。明褐色土が微量に混入。

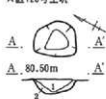
A区116号土坑

1 暗褐色粘質土 1mm程の軽石粒が混入。褐色土混じり。

2 褐色粘質土 暗褐色土混じり。

3 褐色粘質土 暗褐色土混じり。

A区120号土坑

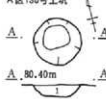


A区120号土坑

1 暗褐色粘質土 1~2mm程の軽石粒、5~10mm程の褐色土粒が混入。褐色土混じり。

2 褐色粘質土 暗褐色土混じり。

A区130号土坑



A区130号土坑

1 暗褐色粘質土 1mm程の軽石粒、5mm程の赤褐色土粒が混入。

A区132号土坑

1 暗褐色粘質土 1mm程の軽石粒が混入。

A区133号土坑

1 暗褐色粘質土 1mm程の軽石粒、1mm程の褐色粘質土粒が混入。

A区137号土坑



A区137号土坑

1 暗褐色粘質土 1~2mm程の軽石粒、50mm程の黄褐色砂ブロックが混入。

A区139号土坑

1 暗褐色粘質土 1mm程の軽石粒、汚れた褐色粘質土混じり。焼土粒を含む。

A区140号土坑

1 褐色土 現代の耕作土。

2 暗褐色粘質土 1mm程の軽石粒、褐色土粒が微量に混入。

3 暗褐色粘質土 1mm程の軽石粒、黒褐色粘質土混じり。褐色土が微量に混入。

4 褐色粘質土 1~3mm程の軽石粒、褐色粘質土混じり。



A区116号土坑

1 暗褐色粘質土 1mm程の軽石粒が混入。明褐色土が微量に混入。

A区116号土坑

1 暗褐色粘質土 1mm程の軽石粒が混入。褐色土混じり。

2 褐色粘質土 暗褐色土混じり。

3 褐色粘質土 暗褐色土混じり。

A区124号土坑



A区124号土坑

1 暗褐色粘質土 軽石粒を微量に含む。

2 褐色土 暗褐色土混じり。

A区126号土坑

1 暗褐色粘質土 暗褐色粘質土混じり。

A区128号土坑

1 褐色粘質土 褐色土、灰白色土混じり。



A区117・118号土坑

1 暗褐色粘質土 1mm程の軽石粒が混入。明褐色土が微量に混入。

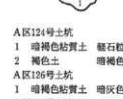
A区117・118号土坑

1 暗褐色粘質土 1mm程の軽石粒が混入。褐色土混じり。

2 褐色粘質土 暗褐色土混じり。

3 褐色粘質土 暗褐色土混じり。

A区126号土坑



A区124号土坑

1 暗褐色粘質土 軽石粒を微量に含む。

2 褐色土 暗褐色土混じり。

A区126号土坑

1 暗褐色粘質土 暗褐色粘質土混じり。

A区128号土坑

1 褐色粘質土 褐色土、灰白色土混じり。



A区119号土坑

1 暗褐色粘質土 1mm程の軽石粒が混入。明褐色土が微量に混入。

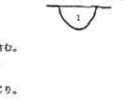
A区119号土坑

1 暗褐色粘質土 1mm程の軽石粒が混入。褐色土混じり。

2 褐色粘質土 暗褐色土混じり。

3 褐色粘質土 暗褐色土混じり。

A区126号土坑



A区124号土坑

1 暗褐色粘質土 軽石粒を微量に含む。

2 褐色土 暗褐色土混じり。

A区126号土坑

1 暗褐色粘質土 暗褐色粘質土混じり。

A区128号土坑

1 褐色粘質土 褐色土、灰白色土混じり。



A区135号土坑

1 暗褐色粘質土 1mm以下の軽石粒、1mm程の灰白色土粒（粘質少）、焼土が微量に、黄褐色土ブロックが混入。

2 暗褐色粘質土 1mm以下の軽石粒が混入。

3 黒褐色粘質土 2~3mm程の軽石粒、2mm程の灰白色土粒（粘質少）が混入。

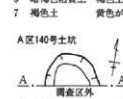
4 褐色粘質土 暗褐色粘質土、1mm程の軽石粒が混入。

5 褐色土 粘質が少ない。

6 暗褐色粘質土 褐色土が微量に混じる。

7 褐色土 黄色が強い。砂質である。

A区137号土坑



A区137号土坑

1 暗褐色粘質土 1~2mm程の軽石粒、50mm程の黄褐色砂ブロックが混入。

A区139号土坑

1 暗褐色粘質土 1mm程の軽石粒、汚れた褐色粘質土混じり。焼土粒を含む。

A区140号土坑

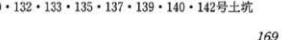
1 褐色土 現代の耕作土。

2 暗褐色粘質土 1mm程の軽石粒、褐色土粒が微量に混入。

3 暗褐色粘質土 1mm程の軽石粒、黒褐色粘質土混じり。褐色土が微量に混入。

4 褐色粘質土 1~3mm程の軽石粒、褐色粘質土混じり。

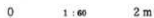
A区142号土坑



A区142号土坑

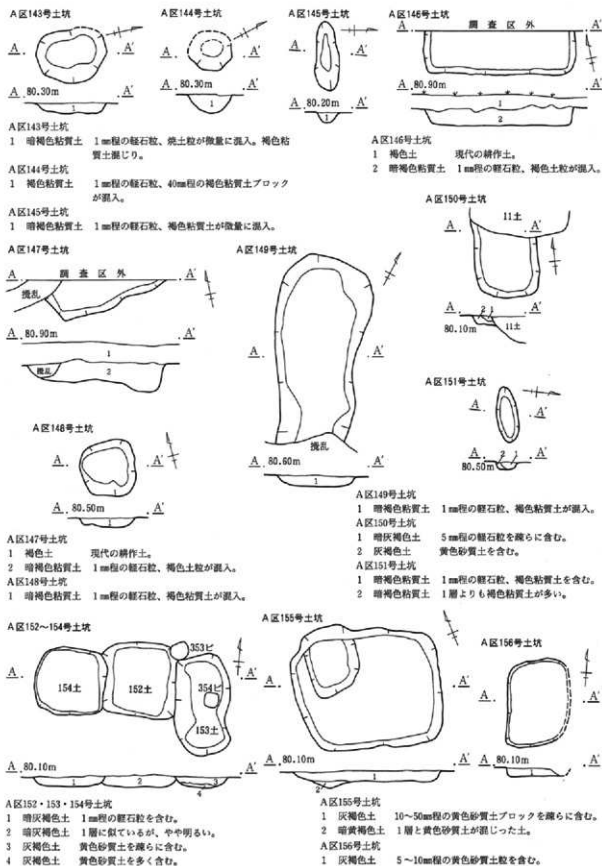
1 暗褐色粘質土 1mm以下の軽石粒が混入。

2 褐色粘質土 黒褐色土混じり。



第142図 A区115~120・124・126・128・130・132・133・135・137・139・140・142号土坑

第3章 検出された遺構と遺物



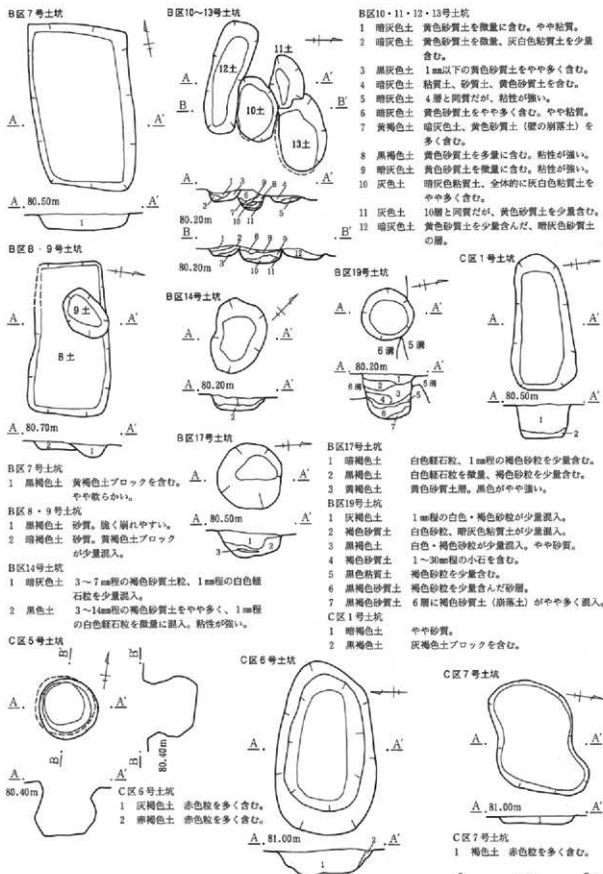
第143図 A区143~156号土坑

0 1:60 2m

4. 中世以降の遺構と遺物



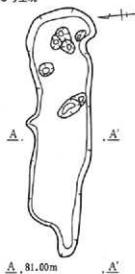
第144図 A区157~162・164・165・167~169・171~173・175号土坑



第146図 B区7~14・17・19・C区1・5~7号土坑

第3章 検出された遺構と遺物

C区8号土坑



C区8号土坑

1 灰褐色土 赤色粒を多量に含む。

C区9号土坑

1 褐色土 赤色粒を多く含む。

C区10・11号土坑

1 褐色土 赤色粒を多く含む。

2 褐色土 赤色粒を若干含む。

3 褐色土 赤色粒を僅かに含む。

4 褐色土 赤色粒を多く含む。

C区14号土坑



C区14号土坑

1 黒褐色土 褐色土を若干含む。

2 褐色土 赤色粒を若干含む。

3 褐色土 赤色粒を多く含む。

C区17号土坑

1 暗褐色土 赤色粒、褐色土を若干含む。

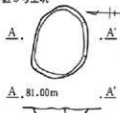
C区18号土坑

1 暗褐色土 褐色土を若干含む。

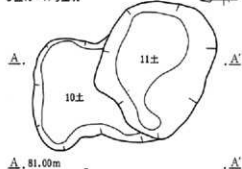
2 暗褐色土 赤色粒を若干含む。

3 暗褐色土 赤色粒を若干含む。炭化物、白色粒を多く含む。

C区9号土坑



C区10・11号土坑



C区12号土坑

1 褐色土 炭化物を僅かに含む。

2 褐色土 赤色粒、炭化物を若干含む。

3 黒色土 赤色粒、炭化物を多量に含む。

C区13号土坑

1 褐色土 赤色粒を僅かに含む。

C区12号土坑



C区13号土坑



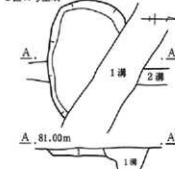
C区15号土坑



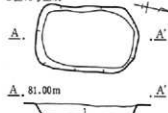
C区15号土坑

1 褐色土 赤色粒を多く含む。

C区17号土坑



C区16号土坑



C区16号土坑

1 褐色土 赤色粒を若干含む。

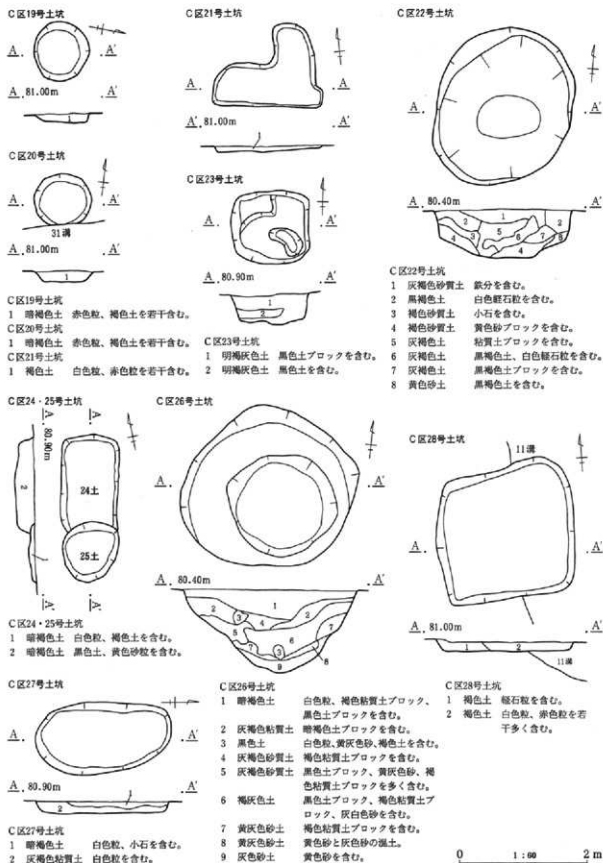
C区18号土坑



第147図 C区8～18号土坑

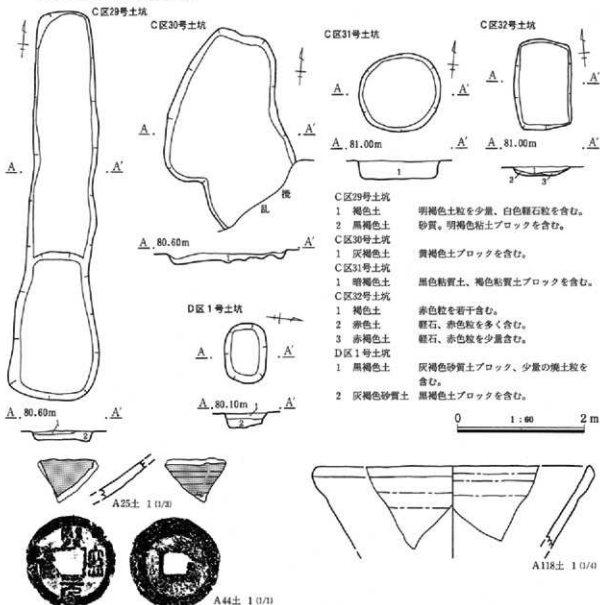
0 1:60 2m

4. 中世以降の遺構と遺物



第148図 C区19～28号土坑

第3章 検出された遺構と遺物



- C区29号土坑
1 褐色土 明褐色土粒を少量、白色軽石粒を含む。
2 黒褐色土 砂質。明褐色粘土ブロックを含む。
- C区30号土坑
1 灰褐色土 黄褐色土ブロックを含む。
- C区31号土坑
1 暗褐色土 黒色粘質土、褐色粘質土ブロックを含む。
- C区32号土坑
1 褐色土 赤色粒を若干含む。
2 赤色土 軽石、赤色粒を多く含む。
3 赤褐色土 軽石、赤色粒を少量含む。
- D区1号土坑
1 黒褐色土 灰褐色砂質土ブロック、少量の焼土粒を含む。
2 灰褐色砂質土 黒褐色土ブロックを含む。

第149図 C区29～32・D区1号土坑、土坑出土遺物

A区25号土坑									
番号	種類	残存	数量 (cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴			
1	古瀬戸皿	外部片	口径 - 器高 - 底径 -	埋土	①緻密 ②還元焰 硬質 ③灰白色	内外面ともに胎土は灰褐色。外面にトシテツツあり。14世紀～15世紀。			
A区44号土坑									
番号	種類	残存	銭名	出土位置	外径 (cm)	孔径 (cm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備考
1	貨幣銅銭	完形	熙寧元寶? 北宋 1068年	埋土	2.40×2.43	0.57×0.62	1.40～1.60	3.19	字体は篆書体。
A区118号土坑									
番号	種類	残存	数量 (cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴			
1	軟質陶器片口鉢	口縁部片	口径 (28.8) 器高 (8.7) 底径 -	埋土	①細砂 白色粒 ②還元焰 ③陶灰色	直線的に立ち上がる器形。14世紀後半～15世紀前半。外面 口縁部は横ナデ。以下はナデ。刻線著しい。内面 摺り鉢として使用したと思われる使用痕あり。			

(6) ピット群

本遺跡から、数多くのピットが検出されている。検出されたピットの中で掘立柱建物跡の柱穴になったものや掘立柱建物跡の想定ライン上にあるピットは、掘立柱建物跡の説明の中で扱うこととした。それ以外のピットをピット群として本項で説明する。

これらのピット群の大部分はA区西側に集中し、C・D区にはほとんどみられない。B区にピットが2基検出されただけである。また、これらのピット群の中には埋土から古代の遺物が出土しているものもあるが、一括してこの項に掲載することとした。

遺構名 (第 図)	平面形 位置(G)	径 深さ(cm)	備 考 (埋土、出土遺物等)
A区1号ピット (第151図)	楕円形 915・-375	24~30 26	
A区3号ピット (第151図)	楕円形 910・-360	47~51 39	埋土は黒褐色粘質土
A区4号ピット (第151図)	円形 905・-370	17~18 21	埋土は黒褐色粘質土 A区5号ピットと重複
A区5号ピット (第151図)	楕円形 905・-370	20~40 29	A区4号ピットと重複
A区6号ピット (第151図)	円形 905・-370	24~27 27	埋土は黒褐色粘質土
A区7号ピット (第151図)	円形 905・-370	18~19 26	埋土は黒褐色粘質土
A区8号ピット (第151図)	楕円形 900・-370	22~29 29	埋土は黒褐色粘質土 A区2号溝と重複
A区9号ピット (第151図)	楕円形 900・-370	25~32 32	埋土は黒褐色粘質土
A区10号ピット (第151図)	楕円形 900・-375	20~23 12	埋土は黒褐色粘質土
A区11号ピット (第151図)	楕円形 900・-375	20~30 20	埋土は黒褐色粘質土
A区12号ピット (第151図)	円形 900・-375	18 18	埋土は黒褐色粘質土
A区13号ピット (第151図)	円形 900・-370	18~21 13	
A区14号ピット (第151図)	円形 900・-370	21 26	埋土は黒褐色粘質土
A区15号ピット (第151図)	円形 900・-370	12~15 4	埋土は黒褐色粘質土
A区16号ピット (第151図)	楕円形 875・-375	19~35 24	埋土は黒褐色粘質土
A区17号ピット (第151図)	円形 900・-370	20~21 20	埋土は黒褐色粘質土
A区18号ピット (第151図)	円形 900・-370	16~18 12	埋土は黒褐色粘質土
A区19号ピット (第151図)	楕円形 900・-370	26~30 25	埋土は黒褐色粘質土
A区20号ピット (第151図)	円形 900・-370	19~23 27	埋土は黒褐色粘質土
A区21号ピット (第151図)	楕円形 890・-375	27~35 31	埋土は黒褐色粘質土
A区22号ピット (第151図)	円形 900・-365	18~25 20	埋土は黒褐色粘質土 A区2号溝と重複
A区23号ピット (第151図)	円形 900・-370	25 14	埋土は黒褐色粘質土
A区24号ピット (第151図)	円形 900・-360	18~28 17	埋土は黒褐色粘質土

遺構名 (第 図)	平面形 位置(G)	径 深さ(cm)	備 考 (埋土、出土遺物等)
A区25号ピット (第151図)	円形 900・-370	15 12	埋土は黒褐色粘質土
A区26号ピット (第151図)	円形 900・-370	20~21 31	埋土は黒褐色粘質土
A区27号ピット (第151図)	楕円形 900・-370	18~22 28	埋土は黒褐色粘質土
A区28号ピット (第151図)	円形 900・-365	30~40 47	埋土は黒褐色粘質土 A区2号溝と重複
A区29号ピット (第151図)	円形 900・-365	16 16	埋土は黒褐色粘質土
A区30号ピット (第151図)	円形 900・-365	17~21 17	埋土は黒褐色粘質土
A区31号ピット (第151図)	楕円形 900・-365	33~41 50	
A区32号ピット (第151図)	円形 900・-365	30 46	A区33号ピットと重複
A区33号ピット (第151図)	楕円形 900・-365	20~22 54	A区32号ピットと重複
A区34号ピット (第151図)	楕円形 905・-370	30~43 54	埋土は黒褐色粘質土
A区35号ピット (第151図)	円形 895・-365	18~22 28	A区35号土坑と重複
A区36号ピット (第151図)	円形 900・-370	31 50	埋土は黒褐色粘質土 A区62号土坑と重複
A区37号ピット (第151図)	楕円形 895・-375	18~24 24	埋土は黒褐色粘質土
A区38号ピット (第151図)	円形 895・-375	26~27 30	埋土は黒褐色粘質土 A区42号土坑と重複
A区40号ピット (第151図)	楕円形 895・-375	36~44 28	埋土は黒褐色粘質土
A区45号ピット (第151図)	円形 890・-375	19~21 43	埋土は黒褐色粘質土
A区46号ピット (第151図)	楕円形 890・-375	14~20 14	
A区47号ピット (第151図)	楕円形 890・-375	31~41 32	埋土は黒褐色粘質土
A区49号ピット (第151図)	円形 890・-375	24~28 24	埋土は黒褐色粘質土
A区51号ピット (第151図)	円形 890・-375	12~17 48	
A区53号ピット (第151図)	円形 890・-375	26~31 35	埋土は黒褐色粘質土
A区56号ピット (第151図)	楕円形 890・-375	19~28 25	埋土は黒褐色粘質土
A区60号ピット (第151図)	円形 885・-375	27~34 41	

第3章 検出された遺構と遺物

遺構名 (第 図)	平面形 位置(G)	径 深さ(cm)	備 考 (埋土、出土遺物等)
A区63号ピット (第151図)	円形 885・375	30~35 42	埋土は黒褐色粘質土
A区64号ピット (第151図)	円形 885・375	21~25 33	埋土は黒褐色粘質土
A区66号ピット (第151図)	円形 885・370	18~25 5	埋土は黒褐色粘質土
A区68号ピット (第151図)	円形 885・375	21~27 18	埋土は黒褐色粘質土
A区69号ピット (第151図)	円形 885・380	21~26 16	埋土は黒褐色粘質土
A区70号ピット (第151図)	楕円形 885・370	18~25 20	埋土は黒褐色粘質土
A区74号ピット (第151図)	楕円形 890・375	22~30 23	埋土は黒褐色粘質土
A区75号ピット (第151図)	円形 895・370	20~23 23	埋土は黒褐色粘質土 A区3号溝と重複
A区77号ピット (第151図)	円形 895・375	30~36 -	
A区78号ピット (第151図)	楕円形 900・370	20~28 20	A区2号溝と重複
A区79号ピット (第151図)	円形 900・375	18~22 19	2号溝と重複
A区84号ピット (第151図)	円形 890・370	21~26 27	
A区85号ピット (第151図)	楕円形 900・375	18~22 20	埋土は黒褐色粘質土
A区86号ピット (第151図)	楕円形 900・375	12~22 20	埋土は黒褐色粘質土
A区87号ピット (第151図)	楕円形 880・370	23~37 36	埋土は黒褐色粘質土
A区88号ピット (第151図)	楕円形 895・375	15~19 32	
A区90号ピット (第151図)	円形 890・375	20~33 24	
A区92号ピット (第151図)	円形 880・375	25~30 37	埋土は黒褐色粘質土
A区94号ピット (第151図)	円形 900・365	19~20 19	埋土は黒褐色粘質土
A区96号ピット (第151図)	円形 905・370	24~25 30	埋土は黒褐色粘質土
A区96号ピット (第151図)	楕円形 900・370	28~31 43	A区24号土坑と重複
A区97号ピット (第151図)	楕円形 885・370	25~31 36	埋土は黒褐色粘質土 A区184号土坑と重複
A区98号ピット (第151図)	円形 885・375	17~22 18	
A区105号ピット (第151図)	楕円形 875・375	30~43 53	
A区106号ピット (第151図)	楕円形 880・370	14~21 11	埋土は黒褐色粘質土
A区109号ピット (第151図)	楕円形 885・375	24~37 15	埋土は黒褐色粘質土
A区111号ピット (第151図)	楕円形 895・375	15~19 14	埋土は黒褐色粘質土
A区113号ピット (第151図)	楕円形 895・365	33~45 29	A区121号ピットと重複
A区114号ピット (第151図)	円形 900・375	28 14	A区2号溝と重複
A区115号ピット (第151図)	円形 900・375	25~33 13	A区2号溝と重複

遺構名 (第 図)	平面形 位置(G)	径 深さ(cm)	備 考 (埋土、出土遺物等)
A区116号ピット (第151図)	円形 900・375	14~24 13	
A区117号ピット (第151図)	円形 900・375	20~26 47	A区29号土坑・155号ピットと重複
A区118号ピット (第151図)	円形 895・375	18~20 13	
A区120号ピット (第151図)	円形 880・375	19~28 17	埋土は黒褐色粘質土
A区121号ピット (第151図)	円形 895・365	36~40 28	埋土は黒褐色粘質土 A区113号ピットと重複
A区124号ピット (第151図)	円形 885・370	22~28 33	埋土は黒褐色粘質土 A区3号溝と重複
A区125号ピット (第151図)	円形 880・370	21~25 19	埋土は黒褐色粘質土 A区57号土坑と重複
A区126号ピット (第151図)	円形 895・360	21 29	埋土は黒褐色粘質土
A区127号ピット (第151図)	円形 890・370	30~31 45	
A区128号ピット (第151図)	楕円形 895・365	24~29 34	
A区129号ピット (第151図)	楕円形 895・360	18~32 31	埋土は黒褐色粘質土
A区130号ピット (第151図)	円形 890・360	21~27 44	埋土は黒褐色粘質土 A区70号土坑と重複
A区131号ピット (第151図)	円形 890・360	15~20 26	
A区132号ピット (第151図)	円形 885・365	19~32 16	埋土は黒褐色粘質土
A区133号ピット (第151図)	円形 890・360	23~25 36	埋土は黒褐色粘質土
A区134号ピット (第151図)	円形 890・360	25~31 46	埋土は黒褐色粘質土
A区135号ピット (第151図)	円形 885・365	29~34 27	埋土は黒褐色粘質土
A区136号ピット (第151図)	円形 885・365	25~29 47	埋土は黒褐色粘質土
A区137号ピット (第151図)	円形 885・365	16~23 22	埋土は黒褐色粘質土
A区138号ピット (第151図)	円形 885・365	14~19 20	
A区139号ピット (第151図)	円形 885・365	18~21 24	埋土は黒褐色粘質土
A区140号ピット (第151図)	円形 885・365	13~14 19	
A区141号ピット (第151図)	楕円形 885・365	15~25 36	埋土は黒褐色粘質土
A区143号ピット (第151図)	楕円形 885・365	22~25 25	
A区144号ピット (第151図)	円形 885・365	17 12	
A区146号ピット (第151図)	円形 885・370	17~21 22	埋土は黒褐色粘質土
A区148号ピット (第151図)	楕円形 900・370	16~48 38	
A区149号ピット (第151図)	楕円形 900・370	16~43 59	
A区150号ピット (第151図)	楕円形 890・365	25~43 36	埋土は黒褐色粘質土
A区151号ピット (第151図)	楕円形 875・365	20~28 25	埋土は黒褐色粘質土

4. 中世以降の遺構と遺物

遺構名 (第 図)	平面形 位置(G)	径 長さ(cm)	備 考 (埋土、出土遺物等)
A区152号ピット (第151図)	楕円形 875・-365	13-19 25	埋土は黒褐色粘質土
A区153号ピット (第151図)	楕円形 900-370	31-44 40	埋土は黒褐色粘質土
A区155号ピット (第151図)	楕円形 900・-370	23-48 49	埋土は黒褐色粘質土 A区117地ピット重複
A区156号ピット (第151図)	円形 870・-365	21-27 16	埋土は黒褐色粘質土
A区157号ピット (第151図)	楕円形 870・-365	28-33 17	埋土は黒褐色粘質土
A区158号ピット (第151図)	楕円形 885・-380	24-35 31	埋土は黒褐色粘質土
A区159号ピット (第151図)	円形 895・-375	17-31	埋土は黒褐色粘質土 A区3号整穴状と重複
A区160号ピット (第151図)	円形 875・-370	34-47 41	埋土は黒褐色粘質土 A区4号溝と重複
A区161号ピット (第151図)	円形 870・-365	18-24 23	
A区163号ピット (第151図)	円形 870・-370	29 35	A区201号ピット・12号溝と重複
A区165号ピット (第151図)	円形 880・-375	17-20 27	
A区167号ピット (第151図)	円形 900・-370	25 18	
A区170号ピット (第151図)	楕円形 895・-375	20-27 34	埋土は黒褐色粘質土
A区173号ピット (第151図)	円形 890・-375	20-26 53	埋土は黒褐色粘質土
A区175号ピット (第151図)	円形 900・-365	20-28	
A区176号ピット (第151図)	円形 865・-375	27-29	埋土は暗褐色粘質土 A区11号溝と重複
A区177号ピット (第151図)	円形 890・-370	16-18 42	
A区178号ピット (第151図)	円形 900・-370	29 42	
A区179号ピット (第151図)	円形 880・-365	29-34 25	埋土は黒褐色粘質土
A区180号ピット (第151図)	楕円形 895・-355	26-38 52	埋土は黒褐色粘質土
A区181号ピット (第151図)	円形 900・-365	24-25 44	埋土は黒褐色粘質土
A区182号ピット (第151図)	楕円形 905・-350	28-30 53	埋土は黒褐色粘質土
A区183号ピット (第152図)	円形 895・-350	31-33 35	埋土は黒褐色粘質土
A区184号ピット (第152図)	円形 895・-350	19-22 34	埋土は黒褐色粘質土
A区185号ピット (第152図)	円形 895・-350	不可 34	埋土は黒褐色粘質土 A区300号ピット重複
A区186号ピット (第151図)	円形 865・-380	28-31 17	埋土は黒褐色粘質土 A区61号土坑と重複
A区187号ピット (第151図)	円形 865・-380	29-32 22	埋土は黒褐色粘質土 A区64号土坑と重複
A区188号ピット (第151図)	円形 870・-375	34-40 36	埋土は黒褐色粘質土 A区8号溝と重複
A区189号ピット (第151図)	円形 870・-380	26-29 27	埋土は黒褐色粘質土
A区190号ピット (第151図)	円形 865・-380	20-24 17	埋土は黒褐色粘質土

遺構名 (第 図)	平面形 位置(G)	径 深さ(cm)	備 考 (埋土、出土遺物等)
A区191号ピット (第151図)	円形 865・-375	28-31 27	埋土は黒褐色粘質土
A区192号ピット (第151図)	円形 865・-375	26 -	埋土は黒褐色粘質土 A区7号溝と重複
A区193号ピット (第151図)	円形 865・-370	45-46 18	埋土は黒褐色粘質土
A区194号ピット (第151図)	円形 870・-370	33-38 22	埋土は黒褐色粘質土
A区195号ピット (第151図)	円形 870・-370	36-39 23	埋土は黒褐色粘質土 A区4号溝と重複
A区196号ピット (第151図)	円形 865・-375	29-32 27	埋土は黒褐色粘質土
A区197号ピット (第152図)	円形 895・-350	25-30 18	埋土は黒褐色粘質土
A区198号ピット (第151図)	円形 865・-360	33-35 13	埋土は黒褐色粘質土
A区199号ピット (第151図)	円形 865・-360	24-31 37	埋土は黒褐色粘質土
A区200号ピット (第152図)	円形 895・-350	不可 35	A区185号ピットと重複
A区201号ピット (第151図)	円形 870・-370	27-35 35	埋土は黒褐色粘質土 A区12号溝池と重複
A区202号ピット (第151図)	円形 875・-350	16-24 26	埋土は黒褐色粘質土
A区203号ピット (第151図)	円形 870・-370	25-35 26	A区204号ピットと重複
A区204号ピット (第151図)	円形 870・-370	47-62 32	A区203号ピットと重複
A区205号ピット (第151図)	円形 870・-355	14-15 18	埋土は暗褐色粘質土
A区206号ピット (第151図)	円形 870・-350	11-18 18	埋土は暗褐色粘質土
A区208号ピット (第151図)	円形 875・-350	21-26 49	埋土は暗褐色粘質土
A区210号ピット (第151図)	円形 880・-375	25-30 18	埋土は暗褐色粘質土
A区212号ピット (第152図)	楕円形 880・-340	25-38 34	埋土は暗褐色粘質土
A区213号ピット (第152図)	円形 885・-345	27-34 22	埋土は褐色粘質土
A区214号ピット (第152図)	円形 885・-345	26-27 19	埋土は暗褐色粘質土
A区215号ピット (第152図)	円形 885・-345	20-22 27	
A区216号ピット (第152図)	円形 885・-345	37-49 53	埋土は暗褐色粘質土
A区217号ピット (第152図)	円形 885・-340	33-37 26	埋土は暗褐色粘質土
A区221号ピット (第152図)	円形 885・-340	38-41 28	埋土は暗褐色粘質土
A区222号ピット (第152図)	円形 885・-340	30-31 32	埋土は褐色粘質土
A区223号ピット (第152図)	円形 885・-340	55-56 39	埋土は黒褐色粘質土 A区17号溝と重複
A区225号ピット (第152図)	円形 885・-340	31-32 -	埋土は暗褐色粘質土
A区226号ピット (第152図)	円形 885・-340	30-36 -	埋土は褐色粘質土
A区227号ピット (第152図)	円形 885・-340	30-41 41	埋土は褐色粘質土

第3章 検出された遺構と遺物

遺構名 (番 号)	平面形 位置(G)	径 深さ(cm)	備 考 (埋土、出土遺物等)
A区230号ピット (第152段)	円形 895・345	25~32	埋土は黒褐色粘質土
A区233号ピット (第152段)	円形 895・345	23	埋土は褐色粘質土
A区236号ピット (第152段)	円形 895・345	20~27	埋土は褐色粘質土
A区237号ピット (第152段)	円形 895・345	26	埋土は褐色粘質土
A区238号ピット (第152段)	円形 895・345	38	埋土は褐色粘質土 A区238号ピット重複
A区239号ピット (第152段)	楕円形 895・345	16	埋土は褐色粘質土 A区238号ピット重複
A区240号ピット (第152段)	円形 895・345	15~21	
A区241号ピット (第152段)	円形 875・345	22~35	
A区243号ピット (第152段)	円形 885・345	38~42	A区119土坑と重複
A区246号ピット (第152段)	円形 895・345	20~21	埋土は褐色粘質土
A区248号ピット (第151段)	円形 870・350	29~45	埋土は褐色粘質土
A区249号ピット (第151段)	円形 870・350	26~39	埋土は褐色粘質土
A区250号ピット (第151段)	円形 870・355	28~36	埋土は暗褐色粘質土
A区251号ピット (第151段)	円形 870・350	20~24	埋土は暗褐色粘質土
A区253号ピット (第152段)	円形 870・350	24~32	埋土は暗褐色粘質土
A区254号ピット (第152段 P.L.71)	円形 870・350	33~35	埋土は褐色粘質土 土師磁坏
A区258号ピット (第152段)	円形 870・345	23~31	埋土は褐色粘質土
A区259号ピット (第152段)	円形 870・345	22~29	埋土は褐色粘質土
A区266号ピット (第152段)	円形 875・345	45~56	埋土は暗褐色粘質土
A区271号ピット (第152段)	円形 880・345	27~29	埋土は褐色粘質土
A区272号ピット (第152段)	円形 880・345	38	埋土は暗褐色粘質土
A区273号ピット (第152段)	楕円形 880・345	51~78	埋土は暗褐色粘質土 A区274号ピット重複
A区274号ピット (第152段)	円形 880・345	不可	埋土は褐色粘質土 A区273号ピット重複
A区278号ピット (第152段)	円形 880・340	不可	A区279号ピットと重複
A区279号ピット (第152段)	円形 880・340	不可	A区278号ピットと重複
A区280号ピット (第151段)	円形 870・355	22~23	埋土は暗褐色粘質土
A区281号ピット (第152段)	円形 870・350	16~19	埋土は暗褐色粘質土
A区283号ピット (第152段)	円形 885・345	34~42	埋土は黒褐色粘質土
A区284号ピット (第152段)	円形 885・345	37~54	埋土は暗褐色粘質土
A区285号ピット (第152段)	円形 885・345	47~55	埋土は暗褐色粘質土

遺構名 (番 号)	平面形 位置(G)	径 深さ(cm)	備 考 (埋土、出土遺物等)
A区286号ピット (第152段)	円形 885・345	27~33	埋土は暗褐色粘質土
A区287号ピット (第152段)	円形 885・335	58~61	43
A区291号ピット (第152段)	円形 870・335	26~37	埋土は暗褐色粘質土
A区293号ピット (第151段)	円形 865・355	46~61	A区294号ピットと重複
A区294号ピット (第151段)	円形 865・355	45~57	A区293号ピットと重複
A区295号ピット (第151段)	円形 865・355	37~53	埋土は暗褐色粘質土
A区299号ピット (第152段)	円形 895・345	34~37	埋土は暗褐色粘質土
A区320号ピット (第152段)	円形 895・325	35~48	埋土は暗褐色粘質土
A区321号ピット (第152段)	円形 900・325	40~47	埋土は暗褐色粘質土
A区322号ピット (第152段)	楕円形 905・320	70~93	埋土は暗褐色粘質土
A区323号ピット (第152段)	円形 895・325	40~43	埋土は暗褐色粘質土
A区324号ピット (第152段)	円形 895・325	31~34	埋土は暗褐色粘質土
A区326号ピット (第152段)	円形 900・315	35~40	埋土は褐色粘質土
A区327号ピット (第152段)	円形 895・325	37~40	埋土は暗褐色粘質土
A区329号ピット (第152段)	円形 900・315	32~46	埋土は暗褐色粘質土
A区330号ピット (第151段)	円形 890・380	22~37	
A区331号ピット (第151段)	円形 890・380	不可	A区332号ピットと重複
A区332号ピット (第151段)	円形 890・380	不可	A区331号ピットと重複
A区334号ピット (第151段)	円形 885・380	26~34	埋土は暗褐色粘質土
A区335号ピット (第151段)	円形 890・380	46~53	A区159号土坑と重複
A区336号ピット (第151段)	円形 885・380	31~39	埋土は黒褐色粘質土
A区337号ピット (第151段)	円形 885・380	29	
A区338号ピット (第151段)	円形 890・380	15~28	
A区339号ピット (第151段)	円形 890・380	29	
A区340号ピット (第151段)	円形 890・380	23~30	埋土は黒褐色粘質土
A区341号ピット (第151段)	円形 890・380	17~19	
A区345号ピット (第151段)	円形 890・380	22~35	
A区346号ピット (第151段)	円形 890・380	18~20	
A区347号ピット (第151段)	円形 880・380	26~38	
A区350号ピット (第151段)	円形 890・380	19~24	

4. 中世以降の遺構と遺物

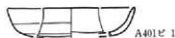
遺構名 (第 図)	平面形 位置(G)	径 深さ(cm)	備 考 (埋土、出土遺物等)
A区351号ビット (第151図)	円形 900・-380	35~38 20	
A区352号ビット (第151図)	円形 900・-380	20~21 21	
A区353号ビット (第151図)	円形 900・-380	25~28 40	A区152号土坑と重複
A区354号ビット (第151図)	円形 900・-380	24~29 40	A区153号土坑と重複
A区355号ビット (第151図)	円形 910・-380	37~39 23	
A区357号ビット (第151図)	円形 885・-380	26~29 18	
A区358号ビット (第151図)	円形 885・-380	28~32 -	埋土は黒褐色粘質土
A区359号ビット (第151図)	円形 890・-380	19~23 20	
A区361号ビット (第151図)	円形 885・-380	23~25 -	埋土は黒褐色粘質土
A区401号ビット (第151図 P L 71)	円形 870・-335	31~38 -	土師器環
A区402号ビット (第152図)	円形 870・-335	27~29 31	
A区403号ビット (第152図)	円形 880・-330	31~32 34	
A区405号ビット (第152図)	円形 885・-330	26~30 -	
A区406号ビット (第152図)	円形 885・-330	35~37 -	
A区407号ビット (第152図)	円形 885・-325	41~54 19	

遺構名 (第 図)	平面形 位置(G)	径 深さ(cm)	備 考 (埋土、出土遺物等)
A区408号ビット (第152図)	円形 885・-325	55~61 -	
A区409号ビット (第152図)	円形 885・-325	31~34 -	
A区410号ビット (第152図)	円形 870・-325	51~54 36	
A区411号ビット (第152図)	円形 885・-330	27~30 -	
A区412号ビット (第152図)	円形 870・-325	59 38	
A区413号ビット (第152図)	楕円形 870・-325	37~44 41	
A区414号ビット (第152図)	円形 870・-325	41~44 37	A区415号ビット・16号溝と重複
A区415号ビット (第152図)	円形 870・-325	42 42	A区414号ビット・16号溝と重複
A区416号ビット (第152図)	円形 870・-315	38~55 28	
A区419号ビット (第152図)	円形 890・-330	36~41 -	
A区420号ビット (第152図)	円形 885・-330	33~39 -	
A区421号ビット (第152図)	円形 885・-325	26~36 -	
A区422号ビット (第152図)	円形 890・-330	42~50 -	
A区423号ビット (第152図)	円形 885・-330	54 39	

※ B区1号、2号ビットはB区1号住居跡のところで説明する。



A254ピ 1



A401ピ 1

0 1:3 10cm

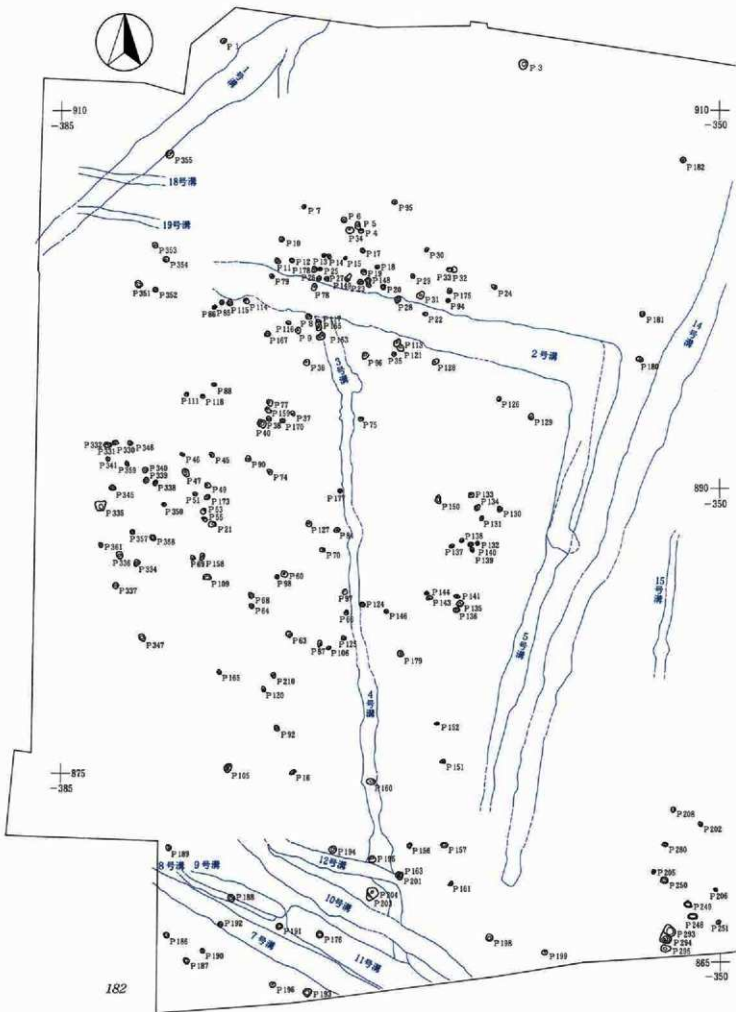
第150図 ビット出土遺物

A区254号ビット

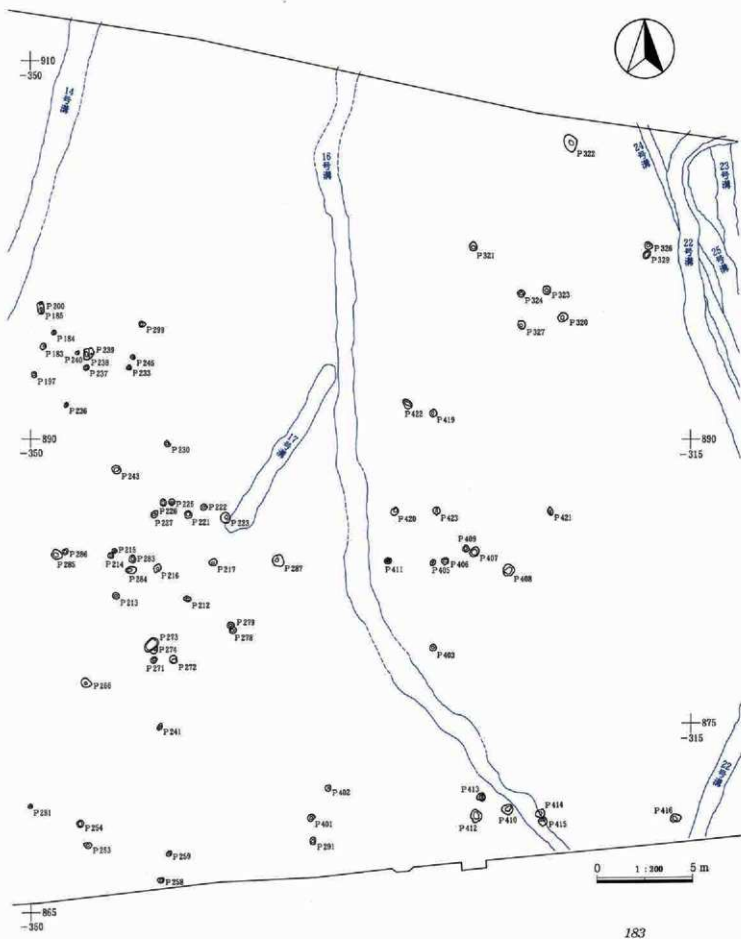
番号	種類 器種	残存 量 (cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
1	土師器 環	小片 口径(9.8)器高(1.9) 底径 -	埋土	①細砂 ②酸化鉛 硬質 ③明赤褐色	内湾気味に外傾する。 外面 口縁部は横ナデ。底部は寛削り。 内面 口縁部は横ナデ。

A区401号ビット

番号	種類 器種	残存 量 (cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
1	土師器 環	小片 口径(10.0)器高(2.3) 底径 -	埋土	①細砂 ②酸化鉛 硬質 ③橙色	内湾気味に外傾する。 外面 口縁部は横ナデ。底部は寛削り。 内面 口縁部は横ナデ。



第151図 A区ビット群(1)



第152図 A区ピット群(2)

(7) 遺構外出土遺物

(第153・154図 P.L71・72)

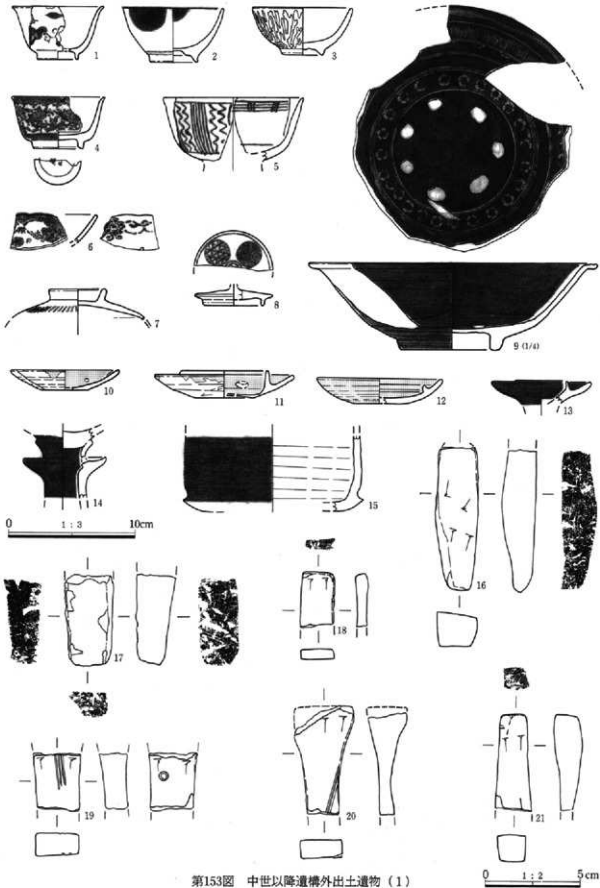
この項で掲載した遺構外遺物は30点である。ここでは、掲載したこれらの遺構外遺物の主立った特徴について概略したい。掲載した30点の遺物の内28点は、A区のグリッド遺物である。B・C区は各1点ずつであり、D区は1点もない。また、これらの遺物を種類で分類すると、陶磁器15点・磁石7点・鉄製品3点・貨幣3点・石白2点である。これらのうち陶磁器類が全体の半分を占める。その器種は碗類・皿・蓋・灯火具・香炉?など平素の生活一般に関わるものである。また、その製作地においても瀬戸美濃、唐津、志土呂などバラエティに富む。その製作時期は18世紀から近代のもの、なかでも幕末から

明治のものが目立ち、中世のものは見られない。陶磁器類の中で多いのは碗類と灯火具類で、それぞれ5点ずつを掲載した。灯火具類はその形態から、さらに灯明皿、灯明受皿、乗燭と分類することができる。陶磁器類の次に多く掲載したのは磁石である。これらの石材のほとんどは砥沢石である。いずれも金属を研ぐ際に使われた磁石と思われる。中には両側部に標目タグネをもつものもある。全体的にあまり古い時期は少ない。最後に石白であるが、上白と下白が有り、同一個体と思われる。径が40cm以上あり比較的大きい石白と思われる。

中世以降遺構外出土遺物

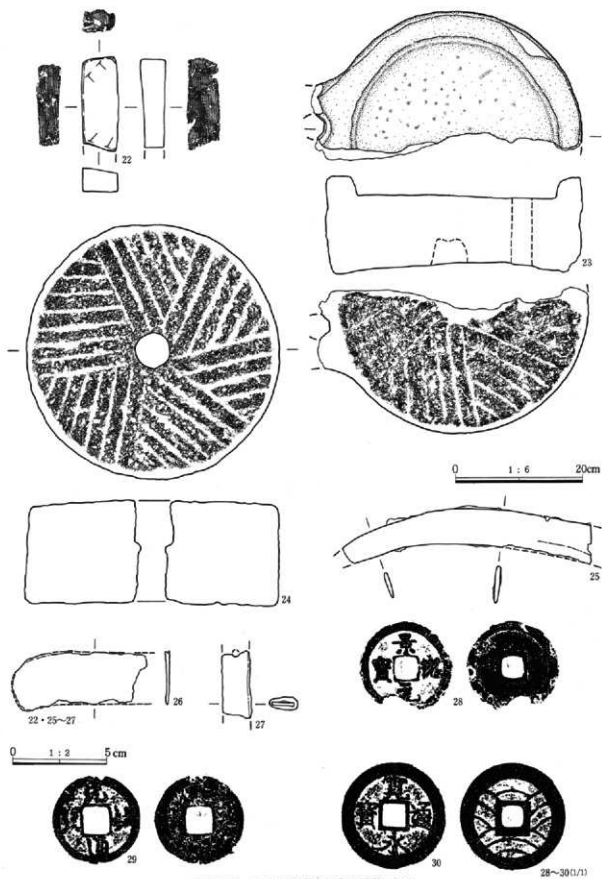
番号	種類 器種	残存 量 (cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴
1	瀬戸美濃 磁器 染付小皿	口縁～高台1/5 口径(7.0) 器高 4.2 底径(3.0)	A区 グリッド	①夾雑物なし ②還元焰 締 ③灰白色	体部外面に手書きによる雲、花文の染め付けが施されている。明治以降。
2	クロム青磁 小碗	口縁～高台3/4 口径 8.0 器高 4.3 底径 3.6	A区 グリッド	①夾雑物なし ②還元焰 締 ③灰白色	口縁部の内外面に藍色の半円形の文様、高台周囲に2重の円形線が施されている。底部は円形の段差をもつ。底部内が傷けている。明治以降。
3	クロム青磁 小碗	口縁～高台1/2 口径 7.7 器高 3.8 底径 3.0	A区 グリッド	①夾雑物なし ②還元焰 締 ③灰白色	縁部成形でなく型づくり。外面を細く削った部分に釉薬が入り、菊花のようになる。近代以降。
4	瀬戸美濃 磁器 小碗	口縁～高台1/3 口径(7.3) 器高 4.1 底径(3.8)	A区 グリッド	①夾雑物なし ②還元焰 締 ③灰白色	外面は銅版による花鳥の染め付けが施されている。底部外面に「遺山?」の号あり。明治以降。
5	肥前(淡佐見) 磁器 染付碗	口縁～底部1/4 口径(10.9) 器高(5.0) 底径 —	A区 グリッド	①夾雑物なし ②還元焰 締 ③灰白色	口縁部が小さく外反する。体部外面に3本1組の縦位の線と2本1組の波線が描かれている。口縁部内面は4本の横位の線に縦位の3本線が描かれている。19世紀前半～中頃。
6	製作地不詳 磁器 染付皿	口縁部片 口径 — 器高 — 底径 —	A区 グリッド	①夾雑物なし ②還元焰 締 ③灰白色	外形は輪花状。内外面型紙刷りによる花文の染め付けが施されている。明治以降。
7	磁器 蓋	溝み付近 口径 — 器高(2.5) 溝み径 4.4	A区 グリッド	①夾雑物なし ②還元焰 締 ③にんべん色	土鍋の蓋と思われる。環状溝をもつ。溝みの側面および天井部外面に同心円状に鉄染を施す。施染以前に灰びれを施す。内面は外面よりやや厚めに全面鉄染を施す。幕末～明治。
8	肥前 磁器 染付蓋	1/2 口径(4.7) 器高(1.4) 底径 —	A区 グリッド	①夾雑物なし ②還元焰 締 ③灰白色	天井部外面に手書きによる円形の染め付け、溝みの周囲にも染め付けを施す。内面のかえりは内傾し、煤、灰が付着している。18世紀～19世紀。
9	肥前(唐津) 陶器 鉢	口縁～高台3/4 口径 27.8 器高 9.1 底径 8.0	A区 グリッド	①夾雑物なし ②還元焰 締 ③暗赤褐色	口縁部は脚状である。内面に三島手による文様が施されている。釉薬は鉄釉と白釉による。腹部外面に刷毛目あり。また、内面に7個のトナン痕が残る。18世紀。
10	信楽? 陶器 灯火具	口～底部1/6 口径(8.4) 器高 1.6 底径(3.7)	B区 4号溝 埋土	①夾雑物なし ②還元焰 締 ③灰白色	灯明皿。内面に鉄染を施す。体部は回転磨削り。三足と思われるトナン痕有り。幕末～明治。
11	志土呂 陶器 灯火具	口～底部1/3 口径(10.8) 器高 2.2 底径(4.5)	A区 グリッド	①夾雑物なし ②還元焰 締 ③にんべん色	灯明受皿。受部が口縁部より高い。また受部に油付けの孔あり。口縁部外面及び内面に鉄染を施す。18世紀後半。

4. 中世以降の遺構と遺物



第153図 中世以降遺構外出土遺物(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第154図 中世以降遺構外出土遺物(2)

28~30(1/1)

4. 中世以降の遺構と遺物

番号	種類 器種	残存 量(cm)	出土位置	①胎土②焼成③色調	器形・整形・文様の特徴				
12	瀬戸美濃 陶器 脚付 灯台	口～底部1/4 口径(9.6)器高 2.0 底径(4.0)	A区 グリッド	①夾雑物なし ②還元焰 緑 ③灰色	灯明受皿。全面に騎輪を施した後、口縁部外面以下の軸を拭い取る。18世紀後半。				
13	製作地不詳 陶器 灯台	口縁～底部1/4 口径(7.4)器高(1.7) 底径 -	A区 グリッド	①夾雑物なし ②還元焰 緑 ③黄灰色	容器形の灯明受皿。受け部が口縁部よりやや高い。透明軸を全面に施す。幕末～明治。				
14	製作地不詳 陶器 灯台	油受部 口径 - 器高(5.5) 底径 -	A区 グリッド	①夾雑物なし ②還元焰 緑 ③黄灰色	瓶形の飛輪。芯受け部は欠損している。油受部に径5mmほどの孔を2対もつ。全面に鉄軸を施す。幕末～明治。				
15	瀬戸美濃 陶器 香炉?	割～底部 口径 - 器高(6.0) 底径 -	A区 グリッド	①夾雑物ややあり ②還元焰 硬質 ③浅灰色	盤腿成形。外面の胴部に騎輪を施す。底部及び内面は無軸である。丸底の底部に煤が付着している。江戸時代。				
番号	種類 器種	残存 量(cm, g)	出土位置	石 材	成・整形技法の特徴及び備考				
16	石製品 砥石	長さ 11.4 幅 3.4 厚さ 2.7 重さ153.0	A区 グリッド	砥沢石	研磨主体は中形位を研ぐ。金属を研いだと想定される。使用面は表・裏・両側部の計4面。天の小口は旧時欠損。中砥及び刃付砥。				
17	石製品 砥石	長さ 7.1 幅 3.6 厚さ 3.0 重さ123.1	A区 グリッド	砥沢石	研磨主体は中形位を研ぐ。金属を研いだと想定される。使用面は表・裏・両側部の計4面。小口に削り目あり。欠損時は旧時である。中砥。				
18	石製品 砥石	長さ 4.4 幅 2.8 厚さ 1.0 重さ 19.9	A区 グリッド	砥沢石	研磨主体は小形砥のため不明。金属を研いだと想定される。使用面は表・裏・両側部・天の小口の計5面。手前の小口は旧時欠損。中砥～仕上げ。				
19	石製品 砥石	長さ 4.5 幅 3.7 厚さ 2.2 重さ 57.5	A区 グリッド	砥沢石	研磨主体は中形位を研ぐ。金属を研いだと想定される。使用面は表・裏・両側部の計4面。表に2条以上の条痕あり。裏面に径6mmの円を刻す。欠損時は旧時である。中砥。				
20	石製品 砥石	長さ 8.5 幅 4.3 厚さ 3.2 重さ 88.4	A区 グリッド	砥沢石	研磨主体は中形位を研ぐ。金属を研いだと想定される。使用面は表・裏・両側部の計4面。小口は旧時の欠けと削りを思わせる箇所あり。中砥。				
21	石製品 砥石	長さ 7.8 幅 2.9 厚さ 2.2 重さ 63.7	A区 グリッド	流紋岩	研磨主体は小形砥のため不明。金属を研いだと想定される。使用面は表・裏・両側部の計4面。小口に削り目あり。欠損時は旧時である。中砥～仕上げ。				
22	石製品 砥石	長さ 7.5 幅 3.0 厚さ 1.9 重さ 69.4	A区 グリッド	砥沢石	研磨主体は中形位を研ぐ。金属を研いだと想定される。使用面は表の1面。裏・両側部・小口に削目タガネあり。中砥。				
23	石製品 石臼上白	1/2 径 41.8 厚さ 15.3 重さ18.1kg	A区 グリッド	粗粒輝石安山岩	上縁から3.5cm窪む。窪みの形は同心円状である。窪みに推定径3.3cmの供給口をもつ。抜き木を差し込む穴を突き出してつくりつけている。裏面に刻まれた目は反時計回りに6分画されている。				
24	石製品 石臼下白	完形 径 40.0 厚さ 15.4 重さ41.3kg	A区 グリッド	粗粒輝石安山岩	刻まれた目は反時計回りに6分画されている。芯棒孔は貫通しており、径は上から5.7cm、3.9cm、5.4cmを測る。上記の上白と一対になると思われる。				
番号	種類 器種	残存 量(cm, g)	出土位置	形 態 ・ 技 法 の 特 徴					
25	鉄製品 鎌	刃部4/5 長さ 13.2 幅 2.0 厚さ 0.25 重さ12.68	A区 グリッド	刃部が残る。層状に割られる様子から和鉄と思われる。					
26	鉄製品 器種不明 板状	不明 長さ 7.0 幅 2.8 厚さ 0.25 重さ 9.56	A区 グリッド	刃部あり。層状に割られる様子から和鉄と思われる。					
27	鉄製品 小柄	1/3 長さ 3.6 幅 1.5 厚さ 0.7 重さ 5.99	C区 グリッド	尻先にある孔がみえる。孔径は5mm程と思われる。割れ口から差し込まれた茎がみえる。和鉄と思われる。					
番号	種類 器種	残 存 状	名 称 初 鋳 年	出土位置	外径(cm) 縦×横	孔径(cm) 縦×横	厚さ(mm) 最小～最大	重さ(g)	備 考
28	貨幣 銅銭	完形	景祐元寶? 北宋 1034年	A区 グリッド	- ×2.47	0.59×0.60	1.00～1.10	2.08	字体は真書体。
29	貨幣 銅銭	完形	元祐通寶 北宋 1086年	A区 グリッド	2.40×2.40	0.72×0.71	0.95～1.15	2.28	字体は行書体。
30	貨幣 真鍮銭	完形	寛永通寶 1768年	A区 グリッド	2.84×2.82	0.59×0.59	1.00～1.20	4.35	裏面の波紋が11枚の四文銭。

第4章 自然科学分析

1. 自然科学分析にあたって

平成10年度の波志江西屋敷遺跡発掘調査において、A区1号火葬遺構から炭化物及び骨片・A区9号住居跡から炭化材・A区25号溝から馬歯がそれぞれ出土した。これらの遺物は発掘調査時に取り上げて保存しており、整理業務でその分析を託されていた。平成14年に整理作業に入った段階で早速これらの遺物を開封してみると馬歯を除き、炭化材や骨片は脆く崩れ易い状態になっていた。これらの分析が可能かどうか危ぶまれたが、それぞれの遺構の報告において大切な資料となるであろうと考え、分析を依頼することにした。馬歯は宮崎重雄氏に、骨片は当事業団の植崎修一郎に分析を依頼し、炭化材については放射性炭素年代測定及び樹種同定を株式会社パレオ・ラボに委託した。自然科学分析に関わるこれらの遺構の概要については、すでに第3章で述べているが、ここでは自然科学分析の背景として、各遺構の概略を述べておきたい。

A区1号火葬遺構は、本遺跡のA区西端に近い中央付近で検出された。近くには中世の独立柱建物跡が検出されている(第155図参照のこと)。その形状は、長方形の土坑の東辺に住居跡の竈跡のような突出部をもつ形状になっている。土坑状の部分は48cm×(95)cm程である。突出部は25cm程を測る(註1)。埋土の堆積状況は突出部付近に焼土が集中し、その中に炭化物・灰・骨片を含む。その西側はいくつかの土層に分けられるが、炭化物・灰・骨片・地山の土が混入したものが主体で突出部付近と比較すると焼土は少ない。ただし、灰が集中している部分もある。これらの埋土を除去すると一定の深さをもつ床面のような底面が現れ、突出部は竈の煙道のような形状となった。本遺構からは炭化物・骨片以外の遺物は出土していない。本遺構は前例に倣って(註2)中世の遺構として、本書では掲載したが、今回の炭化物と骨片の分析が、本遺構の年代を決定するのに役立つ資料が提供されることを期待している。

A区9号住居跡はA区中央部の南端で検出された。本住居跡は東向きに竈をもつ縦長の竪穴住居跡であり、他の遺構との重複関係はない。この住居跡床面の南西隅から砥石と一緒に炭化材が検出された。これが今回の分析資料である。この炭化材は直径5cm・長さ30cm程の大きさの丸太材で、発掘調査時に取り上げ保存されていた。本住居跡竈前の床面上では、まとまって炭化物・焼土粒が検出されており、埋土に炭化物・焼土粒が混入した土層も見られる。しかし、焼失住居跡の様相はなく、他の出土遺物の中に鉄製品があるが、小鍛冶遺構と思われるような痕跡も確認されていない。炭化材以外の出土遺物としては、土師器坏・須恵器坏・コの字状の口縁を有する壺・台付壺・須恵質の紡錘車・砥石・釘がある。今回の分析で、この炭化材の樹種及び放射性炭素年代測定結果から、当時の本住居跡周辺の自然環境への理解や他の出土遺物の年代観との比較を通して本住居跡の考察が深まることを期待している。

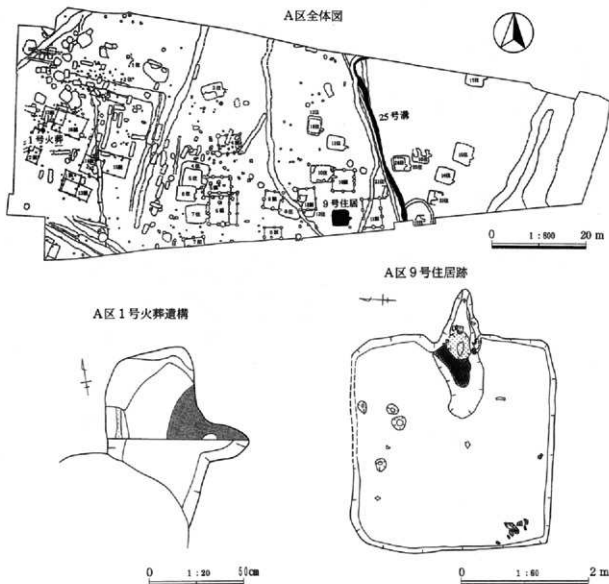
A区25号溝はA区のほぼ中央部に位置し、南北方向に走向する。本溝はA区22号・24号溝に掘り込まれ、A区23号溝、A区1号円形周溝遺構を掘り込んでいる。本溝の長さは37.9m、溝の上端幅45~110cm、下端幅15~47cm、深さは断面観察で42cmを測る。法面がやや急で、断面形は椀状に近い。馬歯以外に埋土から中世の遺物と思われる内耳環が出土している。今回出土した馬歯は、発掘調査時にその出土状況を撮影した写真資料はあるが、図面に出土地点の記載はなく、詳細は不明である。本遺跡においては、本溝のみ馬歯の出土があり、今回の分析は本溝の報告には欠かせないと思われる。

註

註1 同じような形状をした火葬遺構は上栗須寺前遺跡群篠原四反少地区（4B区）で検出された4号・5号墓坑がある。4号墓坑は東辺に突出部をもち、5号墓坑は西辺に突出部をもつ。この突出部について、本文中で「側面の突出部は煙道の役割を果たしていると思われる。」と述べている。【上栗須寺前遺跡群1】財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993 p381・382

また、上榎木光仙所遺跡からは平面形が隅丸方形を呈し、各辺にそれぞれ突出した窪みをもつ1号火葬跡が検出されている。埋土から骨片及び炭化材の他に土師器・須恵器破片および鉄器が出土している。【上榎木光仙所遺跡】財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988 p304・305

註2 前掲した「上栗須寺前遺跡群1」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993 p381・382で4号・5号墓坑を中世の遺構として掲載している。



第155図 分析資料出土遺構の位置図及び平面図

2. 波志江西屋敷遺跡A区25号溝出土の馬歯について

宮崎重雄

- ・計測値（下記）
- ・年齢：9才前後の牡令馬
- ・性別：不明
- ・体高（馬格）：日本の中型在馬相当



第3表 右上顎臼歯計測値

		第2前臼歯	第3前臼歯	第4前臼歯	第1後臼歯	第2後臼歯	第3後臼歯
歯冠近遠心径	咬合面	32.0	26.8	26.7	23.0	23.1	27.5
	中央*		26.1	24.5		23.0	28.4
歯冠頬舌径	咬合面	20.4	23.6	24.6	23.6	23.4	20.5
	中央*		23.2	24.2		23.4	21.0
原錐幅	咬合面	8.1	10.3	11.6	12.0	13.3	13.7
	中央*		10.1	11.5		13.6	13.7
歯冠高	頬側	32.0	39.0	47.7	38.1	48.0	45.0
	舌側	37.7	43.7	45.8	38.0	44.7	41.2
咬合面の傾斜		100°	90°	80°	85°	82°	50°
中附錐幅	咬合面	4.0	4.2	4.2	3.0	3.4	3.0
	中央*		4.0	4.1		3.4	3.2

*：歯根から3cm咬合面側によったところ

単位：mm

3. 波志江西屋敷遺跡出土火葬人骨

植崎 修 一 郎

はじめに

波志江西屋敷遺跡は、群馬県伊勢崎市波志江町に所在する。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団による発掘調査が、平成10(1998)年4月1日～平成11(1999)年12月7日まで行われた。本遺跡の内、中世の1号火葬遺構より火葬人骨が出土したので以下に報告する。



1号火葬遺構出土火葬人骨

1. 火葬人骨の出土状況

1号火葬遺構は、調査区の中では、ほぼ西側の端に位置している。火葬人骨は、平成10(1998)年8月6日に発見されている。この火葬遺構の大きさは、東西は約50cmだが、南側が160号土坑により切られているため南北は、約1mと推定される。東側には、煙道が約25cm突出して発見されている。このような煙道を持つ構造の火葬遺構は、群馬県では主に中世の遺跡から発見されている(清水、2001; 植崎、2002; 総貫、1997)。この煙道は、火をつける焚き口であろう。従って、火葬する際の風向きを考慮してのことと推定されるので、火葬当時は、東側から風が吹いていたであろう。

2. 火葬の方法

火葬人骨の色は、明灰色から白色を呈しているので、火葬の際の温度は約900℃以上であろう。また、火葬人骨には亀裂・ゆがみ・ねじれが認められるので、白骨化させたものを火葬したのではなく、死体をそのまま火葬したと推定される。

3. 火葬人骨の出土部位

火葬人骨は、長さ約5～10mm程度の細片が約100片出土している。その中でも、同定できた部位は、前頭骨前頭鞍部・前頭骨左眼窩上孔部・右頭頂骨乳突角部・下顎骨頤棘部の4片であった。人骨の残存状況は非常に悪く、恐らく、丁寧に取骨された後であろう。このような取骨状況は、現代に続く、ほとんどの骨を取骨する東日本タイプの取骨方法であろう(植崎、2002)。

4. 被火葬者の頭位

出土人骨の残存量が非常に少なく、出土位置が発掘時に確認できていないため、被火葬者の頭位は不明である。

5. 被火葬者の個体数

出土人骨の残存量は、非常に少ない。しかしながら、出土人骨に明らかな重複部位は認められないため、被火葬者の個体数は1個体と推定される。

6. 被火葬者の性別

人骨の残存状況が非常に悪いため、被火葬者の性別を推定するのに決定的な部位が無い。しかしながら、骨

の厚さが比較的薄いため、女性である可能性が高い。

7. 被火葬者の死亡年齢

人骨の残存状況が非常に悪いため、被火葬者の死亡年齢を推定するのに決定的な部位が無い。また、同定できた部位を見ると、前頭骨前頭稜部及び下顎骨は癒合している。前頭骨前頭稜部は2～3歳で癒合し、下顎骨は1～2歳で癒合することが知られている。さらに頭頂骨の乳突角部は、頭頂乳突縫合が外板及び内板共に癒合していない。ところが、この縫合は、高齢になっても癒合しにくいので死亡年齢の推定には使用できない。従って、死亡年齢は不明であるが、恐らく、成人であろう。

8. 非計測的形質(眼窩上孔)

今回、非計測的形質として、前頭骨左眼窩上孔が認められた。眼窩上孔とは眼窩の上であり神経が通る孔であるが、これが孔になっておらず溝になっている場合を眼窩上切痕という。日本人の歴史で見ると、この眼窩上孔は、弥生人・古墳人・鎌倉時代人・江戸時代人・現代日本人等の渡来系に多く、縄文人や現代アイヌ等の在来系には少ないことが知られている(百々、1995)。従って、本被火葬者も渡来系である可能性が高い。

まとめ

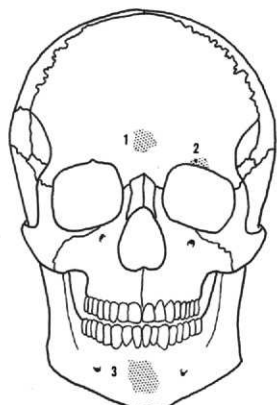
波志江西屋敷遺跡の1号火葬遺構より、中世の火葬人骨が出土した。火葬の方法は、死体をそのまま約900℃以上で火葬したと推定される。人骨の残存状況は非常に悪く、収骨を丁寧に行う東日本タイプの収骨が行われた可能性が高い。その中で、頭蓋骨3点及び下顎骨1点の合計4点が同定できた。その結果、被火葬者の個体数は1体で、性別は女性であり、死亡年齢は成人と推定された。また、非計測的形質として眼窩上孔が認められたので、被火葬者は渡来系である可能性が高い。

謝辞

本出土人骨を記載する機会を与えていただき、出土人骨に関する様々な情報をいただいた、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の角田芳昭氏に感謝いたします。

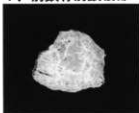
引用文献

- 清水 豊 2001「第6章 遺跡から見る中世の墓葬」『群馬町誌 通史編上』 p.445-454 群馬町誌刊行委員会
- 百々幸雄編 1995『モンゴロイドの地球3。日本人のなりたち』東京大学出版会
- 檜崎修一郎 2002「下小島神戸遺跡出土火葬人骨」『群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』20:43-50.
- 綿貫邦男編 1997「下小島神戸遺跡」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



[頭蓋骨前面観]

1. 前頭骨前頭稜部



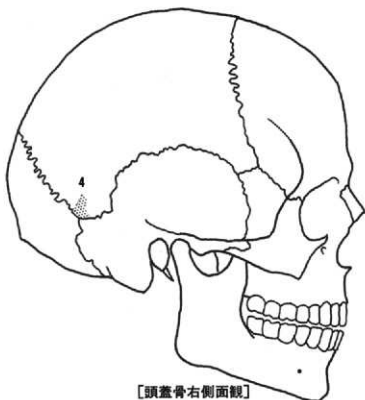
2. 前頭骨左眼窩上孔部



3. 下顎骨頭棘部



左：前面観、右：後面観



[頭蓋骨右側面観]



下顎骨標本との比較

4. 右頭頂骨乳突角部



CM

4. 波志江西屋敷遺跡出土炭化材の放射性炭素年代測定

株式会社パレオ・ラボ
山形秀樹

1. はじめに

波志江西屋敷遺跡より検出された炭化材の加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を実施した。

2. 試料と方法

試料は、A区9号住居跡から出土した炭化材(クヌギ節)1点、A区1号火葬遺構から出土した炭化材(クリ)5点の併せて6点である。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨(グラファイト)に調整した後、加速器質量分析計(AMS)にて測定した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。

3. 結果

第4表に、各試料の同位体分別効果の補正值(基準値-25.0%)、同位体分別効果による測定誤差を補正した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代を示す。

^{14}C 年代値(yrBP)の算出は、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期5,568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差($\pm 1\sigma$)は、計数値の標準偏差 σ に基づいて算出し、標準偏差(One sigma)に相当する年代である。これは、試料の ^{14}C 年代が、その ^{14}C 年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い(^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年)を較正し、より正確な年代を求めるために、 ^{14}C 年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と ^{14}C 年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて ^{14}C 年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代を算出する。

^{14}C 年代を暦年代に較正した年代の算出にCALIB 4.3(CALIB 3.0のバージョンアップ版)を使用した。なお、暦年代較正值は ^{14}C 年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、 1σ 暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその 1σ 暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。 1σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

4. 考察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代校正を行なった。暦年代校正した 1σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

引用文献

中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の ^{14}C 年代、p.3-20。

Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended ^{14}C Database and Revised CALIB3.0 ^{14}C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.

Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, F.G., v. d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

第4表. 放射性炭素年代測定および暦年代校正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ (%)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に校正した年代	
				暦年代校正値	1σ 暦年代範囲
PLD-1888 (AMS)	炭化材 No.1 (クヌギ節) A区9号住居跡	-26.6	1235 \pm 30	calAD 775	calAD 720-745 (31.8%) calAD 765-780 (18.1%) <u>calAD 790-825 (33.1%)</u> calAD 840-860 (15.5%)
PLD-1889 (AMS)	炭化材 No.1 (クリ) A区1号火葬遺構	-25.0	630 \pm 30	calAD 1305 calAD 1365 calAD 1385	<u>calAD 1300-1325 (41.1%)</u> calAD 1350-1370 (39.5%) calAD 1380-1390 (19.4%)
PLD-1890 (AMS)	炭化材 No.2 (クリ) A区1号火葬遺構	-25.6	625 \pm 25	calAD 1305 calAD 1355 calAD 1365 calAD 1385	<u>calAD 1300-1325 (43.4%)</u> calAD 1350-1370 (37.7%) calAD 1380-1390 (19.0%)
PLD-1891 (AMS)	炭化材 No.4 (クリ) A区1号火葬遺構	-25.6	660 \pm 30	calAD 1300	calAD 1290-1305 (34.8%) <u>calAD 1355-1385 (65.2%)</u>
PLD-1892 (AMS)	炭化材 No.7 (クリ) A区1号火葬遺構	-25.9	630 \pm 35	calAD 1305 calAD 1365 calAD 1385	<u>calAD 1300-1325 (41.0%)</u> calAD 1350-1370 (39.4%) calAD 1380-1390 (19.5%)
PLD-1893 (AMS)	炭化材 No.8 (クリ) A区1号火葬遺構	-24.9	625 \pm 25	calAD 1305 calAD 1365 calAD 1385	<u>calAD 1300-1325 (43.2%)</u> calAD 1350-1370 (39.3%) calAD 1380-1390 (19.5%)

5. 波志江西屋敷遺跡出土炭化材の樹種同定

株式会社パレオ・ラボ

植田 弥生

1. はじめに

ここでは、竪穴住居跡(A区9号住居跡)出土炭化材1点と火葬遺構(A区1号火葬遺構)出土炭化材6点の樹種同定結果を報告する。A区9号住居跡は、平安時代の遺構である。A区1号火葬遺構は、年代を特定する遺物が無いため炭化材を用いて放射性炭素年代測定が実施されているが(4. 波志江西屋敷遺跡出土炭化材の放射性炭素年代測定参照)、形状などから中世の可能性が考えられている。

2. 試料と方法

まず横断面を実体顕微鏡で観察して予察を行ない、次に走査電子顕微鏡で3方向(横断面・接線断面・放射断面)の材組織を拡大しその特徴をもとに同定と写真撮影を行なう。今回調査した試料は実体顕微鏡下で同定可能な種類であり、またほとんどの試料は土が浸透し脆く保存が悪い状態であったため、横断面のみを走査電子顕微鏡で拡大し最終的に同定を決定した。

3. 結果

A区9号住居跡の南東隅から出土した炭化材は、クヌギ節であった。A区1号火葬遺構から出土した炭化材6点(No.1・2・4・6・7・8)は、保存が悪いため疑問符を付けたNo.6も含めすべてクリであった(第5表)。No.8は、直径1.7cmで約5年輪の樹皮が付いた細い枝材であり、あとの試料は破片であった。

材組織記載

コナラ属コナラ亜属クヌギ節 *Quercus subgen. Q. sect. Cerris* ブナ科 図版1 1(A区9号住居跡)年輪の前半に中型の管孔が配列し、晩材部は厚壁で孔口が円形の小型の管孔が単独で放射状に分布し、細胞幅の広い広放射組織が認められた。このような形質からクヌギ節と同定した。

クヌギ節は暖帯の丘陵地から低山地の陽光地に生育する落葉高木でクヌギとアベマキの2種類が属するが、材組織は類似しているので材から種類は特定できない。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版155 2(A区1号火葬遺構 No.1) 3(A区1号火葬遺構 No.8)

年輪の始めに中型～大型の管孔が配列し徐々に径を減じてゆき、晩材部では非常に小型の管孔が火炎状に配列している環孔材で、広放射組織は認められない。このような形質からクリと同定した。

クリは丘陵地から低山地に普通の落葉高木で、人里ではよく植栽されている。果実は食用になり、材は粘りがあり耐久性にすぐれ様々な木製品に利用され、燃料材としても利用される。

4. まとめ

平安時代のA区9号住居跡から出土した建築材と推定される炭化材は、クヌギ節であった。近隣の波志江中野面遺跡からは、古墳時代前期の焼失住居跡出土の炭化材樹種が報告されているが(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、2001)、その樹種のほとんどはコナラ節であり、クヌギ節も全試料の1/5ほどが検出されている。

5. 波志江西屋敷遺跡出土炭化材の樹

当地区では、古墳時代から平安時代でも引き続きクスギ節の材が建築材として利用されていたようである。

A区1号火葬遺構から出土した複数の炭化材は、クリであった。高崎市に所在する小八木志志貝戸遺跡の中世の土坑墓から出土した炭化材も主にクリであり(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、2001)、当遺跡の結果は類似していた。当遺跡の火葬遺構からは直径1.7cmで樹皮が付いた細い枝材のクリも検出されたことから、枝払いや製材などの加工を加えずに、伐採したままの状態ですぐに火にくべたか、または枝を供えた状態が想像される。なお、火葬遺構にクリが選択使用されていたかどうかは、まだ同様な資料が少ないので、今後も資料の蓄積が必要と思われる。

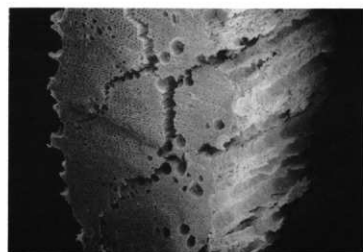
引用文献

『波志江中野面遺跡(1)―古墳時代以降編―』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001

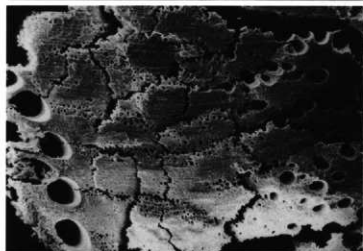
『小八木志志貝戸遺跡群3』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001

第5表 波志江西屋敷遺跡出土炭化材樹種同定結果

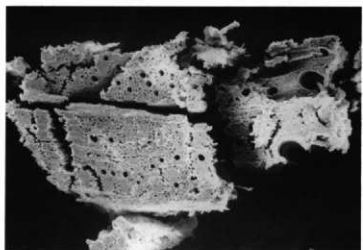
遺 構	試料No.	樹 種
A区9号住居跡	1	クスギ節
A区1号火葬遺構	1	クリ
A区1号火葬遺構	2	クリ
A区1号火葬遺構	4	クリ
A区1号火葬遺構	6	クリ?
A区1号火葬遺構	7	クリ
A区1号火葬遺構	8	クリ



1 クリ(横断面) No.8
A区1号火葬遺構 bar:1.0mm



2 クスギ節(横断面) No.1
A区1号火葬遺構 bar:1.0mm



1 クスギ節(横断面)
A区9号住居跡 bar:1.0mm

第157 釜志江西屋敷遺跡出土炭化骨樹種

第5章 まとめ

1. 波志江西屋敷遺跡A区西の掘立柱建物跡群について

飯森 康広

1 はじめに

本稿は、A区西の掘立柱建物跡群について、一連の遺構である屋敷跡と評価した上で、その構成を見ようとするものである。当初、本遺構の平面図を借りて、掘立柱建物跡を新たに5棟認定した時点で、筆者はこれらが中近世に属すると推測し、掘立柱建物跡柱穴のほか周辺の溝・土坑・井戸から中近世に属する遺物が抽出され、時期決定されることを期待していた。しかし、本遺跡の整理作業が進展する中で、こうした期待は薄れ、遺物は得られず掘立柱建物跡群の同時性も危ぶまれてきた。余談だが、筆者はほかに2号井戸の東側に分布するピット群を集約し、2号溝と重複する近世民家風の掘立柱建物跡を想定していた。だが、これも関連性の高い周辺の土坑や井戸などから、生活に関連する中近世遺物が得られなかったことで、否定的となり認定を断念した。したがって、本稿では遺物以外の検証を経て、A区西の掘立柱建物跡群が屋敷遺構であることを認定することとし、掘立柱建物跡同士の比較検討を中心にすることとする。資料はA区西に対して東側に隣接し、奈良・平安時代に属すると見られるA区東の掘立柱建物跡としたが、このA区東の掘立柱建物跡自体特性を持つことから、別の様相を示す掘立柱建物跡として、冷水村東・金古北十三町遺跡を更に比較資料に加えた。このため、掘立柱建物跡については、やや多様な要素を素描することができると考えるが、主な目的はA区西の掘立柱建物跡群の景観復元に置いているため、古代の掘立柱建物跡の検証や検討する数値の意義付けなどは不十分なものとなっている。特に桁側平均柱間の問題などは別の機会(註1)で検討したいと思う。なお遺憾ながら、筆者は本遺跡を調査段階でほとんど見ておらず、図面・写真などの諸記録を主な検討材料とした。その点で限界があることを、あらかじめ断っておきたい。

2 A区西の掘立柱建物跡の様相

(1) 主軸方位による分析

7棟全ての棟方向あるいはその直交方向は、真北に対して東方向にほぼ同じ程度傾いており、これによって掘立柱建物跡を分類することはできない。ただし、重複関係を見ると、1号掘立と13号掘立、16号掘立と17号掘立、14号掘立と15号掘立がそれぞれ重複しており、その各掘立柱建物跡同士では、若干主軸方位のズレが認められる。したがって、この建物群を一連の遺構として考えると、最低でも2時期の段階が存在することとなる。また、13号掘立の西壁面と、16号掘立の東壁面とが、同じ直線上に並んでいる。これを筆者は柱筋の一致と読んでおり、共存する掘立柱建物跡を認定する根拠の一つと考えている。重複の確率が高いことは建物を作る範囲が限定していたことを示し、その継続性が建築主の存続性を示しているものと想像する。

(2) 桁側平均柱間による分類

平均柱間について説明しなければならぬ。これは算定方法を述べることで容易に理解できると考える。先ず掘立柱建物跡の桁側柱穴の真芯距離を計測する。その数値を間数取りされている数値で割り返した数値が、すなわち桁側平均柱間である。例えば桁行3間で総長6.36mであれば、 $6.36 \div 3 = 2.12\text{m}$ (7尺)となる。架

側も全く同じである。これを各掘立柱建物跡に対して算定すると、幾つかの傾向を見ることが出来る。これについては別稿でやや詳しく述べた(註2)ので省略するが、ここでの検討でも掘立柱建物跡の時期差や機能差を想定できると考える。

A区西の掘立柱建物跡は、桁側平均柱間によって概ね3つに分類される。①1・14・15・16・17号掘立柱は2.145~2.290m(約7.1~7.5尺)。②2号掘立柱は1.598(約5.3尺)。③13号掘立柱は1.9735m(約6.5尺)。梁側については、梁側1間建物が3棟と半数近いこともあり、通常の間数で割り返す方法は採れないが、梁側を2間相当と考えて数値を求めれば、15・16号掘立柱は梁側と桁側の平均柱間が一致するタイプと見ることも可能だろう。

(3) 形態的な特徴

棟方向を見ると、中心的な建物となる15・16号掘立柱はともに東西棟で、ほかは東西・南北棟が同程度である。柱配置は、全て劔柱構造で総柱構造はない。梁側に中柱を持たない梁側1間構造のものは、2・15・16号掘立柱。後二者は中心的な建物で、梁行4.5m前後を隅柱2本で支える構造は、かつて中世屋敷の主屋建物構造として指摘したことと一致し(飯森2000)、軸組構造が他より強固であると推測される。面積は、15号掘立柱が28.64㎡、16号掘立柱が29.88㎡で、A区西では大きく中心的だが、一般的に余り大きくない。柱穴径の平均規模は、23.6~33.9cm、平均28.2cmで、後述するA区東に比べ小さい。17号掘立柱は北側に張り出しのな庇を持ち、14号掘立柱は西壁面の北側延長線上に柵列が延びていることが注目される。

(4) 分類の結果から見た建物等配置の検討

以上の検討をふまえて、ここでA区西の掘立柱建物跡で構成される屋敷景観を复原したいと思う。筆者は、これまでの検討手順によって、屋敷遺構内の建物構成がかなり分析できると考えている。本事例では掘立柱建物跡の数量が少ないことや、主軸方位による分類ができなかったことなど、分析項目に制限があった。反面、掘立柱建物跡同士の重複が多いので良い条件もあった。しかし、これらの条件を総合的にみて、やはり検討結果が独善的・偏見的な傾向に陥ってしまう暇も否めない。この点では、これまでの分析手順が有効であることを、事例研究を増やすことで補っていくしかないと考え。A区西の建物群を一連の遺構と考え、一つの屋敷として捉える根拠は、次章でみるA区東の掘立柱建物跡との比較検討によっている。この点については順序が逆になるが、次章以下で追証していきたい。

A区西の掘立柱建物跡群は概ね2時期に分かれる。これは重複関係によって、3棟程度の建物で構成されることが推測できる。既に見てきたとおり、中心的な建物は15号掘立柱と16号掘立柱である。両者はほぼ規模が同じ東西棟であり、同じ機能を持つ建物として建て替えられた各時期の主要建物と見るのが自然だろう。したがって、重複関係を踏まえて、16号掘立柱には14号掘立柱が、15号掘立柱には17号掘立柱が伴うことになる。また、前述のとおり柱筋の一致から13号掘立柱と16号掘立柱も共存する。したがって、13・14・16号掘立柱は同時期の建物となる。しかし、一つ問題が生じる。16号掘立柱は13号掘立柱と桁側平均柱間が異なっている。これは時期差か機能差を想定させるが、建築に時期差があっても問題はない。まず主要建物である16号掘立柱と14号掘立柱が建てられ、その後13号掘立柱が建てられたとしても良いだろう。一方、1・15・17号掘立柱が同時期となるが、こちらは桁側平均柱間もほぼ一致している。残る2号掘立柱だが、桁側平均柱間が違いすぎる。これは除外して考えたほうが良いと考える。

以上、2時期にわたる建物群の構成を想定した。そこで掘立柱建物跡以外にも視野を広げてみる。15号掘立柱の北側に長方形・細長方形の土坑が集中していることに気づく。それは、14号掘立柱から北に延びる柵列によっても西側を区画されている。つまり、その部分は建物群2時期を通じて土坑を配置する領域として位置づけられていたのではないだろうか。土坑群の北側を区画しているのは2号溝であり、東端部は直角に折れて南走す

1. 波志江西屋敷遺跡A区西の掘立柱

る。土坑群はこれにより東側も区画されることとなる。2号溝は、すなわち建物群を区画する溝であり、この屋敷遺構の北面・東面を区画する溝ととられるのではない。これに対して南面を区画する溝は、7～11号溝のいずれかにあたるものとしていたが想像に過ぎようか。しかし、もしそうだとすれば、屋敷の南北規模がほぼ判明することとなり、長さ30m強の規模を持つ東面が広い台形をなすこととなる。この場合、屋敷規模は1/3町(約36m)規模となり、16・15号掘立柱の面積が30㎡に満たない点も、以前屋敷遺構について検討した内容に符号することを付け加えたい(飯森1999)。仮説を積み重ねる結果となったが、それは遺物などによる検証ができないことによる。まず、掘立柱建物跡自体が時期確定できる遺物を有していない。土坑・溝も同様である。埋土による判別を可能とするテフラなどの鍵層もなかった。したがって、遺構のみの分析によって景観復原を行った次第である。

3 A区東の掘立柱建物跡の様相

(1) 主軸方位による分類

主軸方位は3種類に分かれる。①棟方向及びその直交方向が、真北をとるもの。②同じく両者が、真北に対して少し西に振れるもの。③両者が逆に少し東に振れるものである。①は4・5・6・8・10号掘立柱の計5棟。このうち、5・6号掘立柱は重複関係にある。②は7・11・12号掘立柱の計3棟。③は9号掘立柱のみ。なお、4号掘立柱は柱穴の配置が変則的で、周辺に重複する掘立柱建物跡の存在を思わせる柱穴群があることから、検討の余地があると考え、本稿では検討から除外する。

(2) 桁側平均柱間による分類

桁側平均柱間によって、概ね3種類に分かれる。①5・11号掘立柱は1.900～1.967m(約6.5尺)。②6・10・12号掘立柱は2.197～2.20m(約7.3尺)。③9号掘立柱は1.825m(約6尺)。以上の分類は、主軸方位による分類と一致しない。しかし、矛盾なく考えれば、主軸方位別の分類内容が、さらに2つに細分できることとなる。

(3) 梁側平均柱間の特徴

表6で明らかとなり、平均柱間は梁側・桁側とも、12号掘立柱を除いて、数値がほぼ一致している。したがって、こうした平均柱間が掘立柱建物跡の設計・施工上の基準になっていて、梁側・桁側の柱間を確定していると思える。しかし、12号掘立柱は違う。A区西の掘立柱建物跡も梁側・桁側柱間は一致していない。この点は本章でははっきりするが、梁側・桁側の平均柱間を一致させる掘立柱建物跡は、ある程度含まれる少数事例に過ぎない。梁側・桁側両方で同じ柱間を基準にするのは、同時期の掘立柱建物跡全体に援用できる基準とは考えられない。したがって、本区の掘立柱建物跡では、特にこの形態が多いことに注目しておく。

(4) 形態的な特徴

棟方向を見ると、南北棟が多い。前項で見たとおり、梁側と桁側の平均柱間が同じことから、2×2間の場合、正方形となり棟方向が不明となる。あるいは、屋根は寄せ棟構造でもよい。柱配置は、全て側柱構造で総柱構造はない。梁側は全て2間取りで中柱を持っており、梁側1間構造はない。この点でもA区西と異なる。面積は6号掘立柱が39.54㎡と最大で、東に庇を持つ。柱穴径の平均規模は、51.2～64.8cm、平均59.8cmでA区西に比べ大きく2倍を超える。柱穴は底面に小穴を有するものが多く、本来こうした掘り方形形態を持つものと推測され、小穴部分が柱を据えた位置を示すと考える。

4 冷水村東・金古北十三町遺跡の掘立柱建物跡の様相

(1) 概要

群馬郡群馬町大字冷水と大字金古に所在する。榛名山東南麓に広がる相馬ヶ原扇状地の扇尖部に位置する。発掘調査は、主要地方道高崎渋川線バイパスの建設に先立って行われ、中小河川によって区切られた南東方向に緩やかに傾斜する地形を横断する形で、延長約2kmの調査地である。冷水村東遺跡は、5世紀末～6世紀半ばにわたる竪穴住居跡15軒と、8世紀半ば～10世紀半ばにわたる竪穴住居跡24軒で構成される集落遺跡である。特に古墳時代には、豪族居館とみられる北谷遺跡が東側隣接地で近年発見され、同時期の集落として関係が想定される。また、東方1.2kmには圓分僧寺・尼寺があり、平安時代集落はその影響下にあるとも言える。金古北十三町遺跡は、冷水村東遺跡の北延長線上にあり、8世紀半ば～9世紀後半にわたる19軒の竪穴住居跡で構成される集落で、北端部は近世に整備された金古沼に連続するため、近世遺構が北寄りに点在する様相を示す。本稿で、掘立柱建物跡を分析する比較資料として両遺跡を選んだのは、第一に筆者が発掘調査・報告を行った遺跡であり、内容がよく理解できている点にあるが、何より掘立柱建物跡が竪穴住居跡と混在する形で点在し、ほぼ古墳時代から平安時代に当てることが可能だということがある。しかも、以下後述するが、数値的に波志江西屋敷遺跡とは別の様相を示しており、それが地域差であったとしても、同じ時期の遺構をうかがう比較資料として最適と考えたからに他ならない。ただし、本稿は中近世の掘立柱建物跡や屋敷遺構を考えることを目途としており、中世以前の掘立柱建物跡を全般的に検討する力量も余力もない。不十分な比較であると承知しながらも、検討を加える。また、金古北十三町遺跡の6区以北の掘立柱建物跡は、時期的な位置づけが難しく、かえって混乱をきたすと考え、検討から除外する。

(2) 桁・梁側平均柱間の特徴

桁側平均柱間の違いにより5つに分類できる。①1.515m(5尺)前後の数値にあるもの：A区3・4号、1区2・4・5・6、5区3号掘立の計7棟。②1.667m(5.5尺)前後の数値にあるもの：D区5・6号、5区1号掘立の計3棟。③1.970m(6.5尺)前後の数値にあるもの：B区1号、1区1号、2区1号、5区2号掘立の計4棟。④2.121m(7尺)に近い数値にあるもの：1区3号掘立の1棟。⑤2.273m(7.5尺)に近い数値のもの：B区2号掘立の1棟。以上16棟の分類では、実に10棟が5～5.5尺という小さい数値にあることがわかる。これは波志江西屋敷遺跡A区西・東両者でも2号掘立にしか見られない数値で、この点で両遺跡の平均柱間には大きな違いがあることが判明する。

次に桁・梁側平均柱間の関係を見ると、ほぼ同一の数値を持つものとして、D区1号、1区1・4号、2区1号、5区3号の計5棟があり、平均柱間の数値や分布位置に関係なく、広く分散していることがわかる。また、梁側平均柱間の各数値に注目すると、数値のパラツキが桁側に比べて著しい。この点は波志江西屋敷遺跡でも同じ傾向が読みとれる。つまり、梁行の決定は平均柱間の数値によるだけでは分からない決定要素があると想像される。したがって、現状では桁側平均柱間の比較を主な検討材料にしていくしかなく、梁側については、今後の課題とするのが正直なところだ。

(3) 形態的な特徴

柱配置は、全て側柱構造で総柱構造はない。梁側に中柱を持たない梁側1間構造のものは、D区5・6号掘立の2棟のみで、残る14棟は全て梁側2間である。ただし、D区5号掘立の梁行は2.2mで、A区西の梁側1間建物のような4mを超える梁行とは別なものである。この点では、D区6号が梁行3.355mで、A区西の数値にやや近いが、1×2間の構造を持つ一方で、平均柱穴径が90.42cmを測る長大なもので、特殊な建物である可能性があり、別格とみるのが妥当だろう。面積は1区6号掘立が30.59㎡と比較的大きいが、全体的に概して小さく均質で、庇を持つものもない。1区6号掘立は2×5間と桁側が長くとり、中では目立った構造となり、その点で面積も大きくなっている。柱穴径の平均規模は、冷水村東遺跡では約76cmと約90cmの大きな

もの2例があり、他も40～55cmでやや幅がある。金古北十三町遺跡では調査区の違いと桁側平均柱間の数値に連動する傾向が見られる。5区では3棟全てが28.90～37.69cmと小さい。1区では桁側平均柱間約2mの2棟がともに58cm前後で、一方桁側平均柱間約1.5mの4棟の内3棟は40cm弱で、1棟のみ約67cmとやや大きかった。これは同じ桁側平均柱間を採用したとき、柱穴径もほぼ同じ規格を採用した可能性を示しており、掘立柱建物跡の設計・施工の同時性を印象づけられる。

5 まとめ

(1) 各章の総括

A区西の掘立柱建物跡の検討に加えて、A区東と冷水村東・金古北十三町遺跡（以下「冷水ほか」と呼ぶ）の掘立柱建物跡を比較資料としてきた。結果としてA区西とA区東の掘立柱建物跡には、大きな違いが認められ、前者の建物群を一連の遺構とみなし、遺構全体を屋敷跡として把握できると考える。以下、確認も含めて各々の特徴と相異点を総括し、その後主な項目についてまとめる。

A区西では梁側1間建物が半数近くを占め、しかも主要建物2棟は梁行4.5m程を隅柱2本で支える構造を採っていた。桁側平均柱間は2.145（7.1尺）～2.273m（7.5尺）がほとんどであり、柱穴も平均28.2cmと他に比べ小さかった。

A区東は7棟全てが梁側2間構造で、梁側1間建物は無い。桁側平均柱間は1.81m（6尺）、1.97m（6.5尺）、2.21m（7.3尺）の3種類がほぼ等量に分布する。この数値はA区西ともほぼ一致する内容であるが、梁側平均柱間については、桁側平均柱間とほぼ同じである点で、特異な状況を示す。柱穴は平均59.8cmでA区西に比べ大きく、A区西・東西者の掘立柱建物跡には明らかな違いが認められた。

「冷水ほか」は、遺構の分布範囲が広い面、多様性を持っていた。梁側2間建物が大部分で、2棟のみ梁側1間構造であったが、ともに1×2間構造であり、A区西にみられる主要建物に採用されたものではない。桁側平均柱間は1.51m（5尺）と1.67m（5.5尺）前後のものが、16棟中10棟を占め、次いで1.97m（6.5尺）前後が4棟となり、桁側平均柱間は明らかに小さい数値にある。桁側と梁側の平均柱間を見ると、5棟が同じ数値を持つが、調査区全体に散在していた。この結果、桁・梁側平均柱間が同一なもの、少なからず存在しており、それが集中する点でA区東の特異性が明らかとなる。柱穴径について、同じ調査区にある一団の掘立柱建物跡では、桁側平均柱間と柱穴径が同調する傾向が見られた。特異な事例として、柱穴径が約90cmを測る大規模なものも存在していた。

(2) 梁側1間と梁側2間構造

前述のとおり、梁側1間構造が主要建物に採用される事例を、中世的な特徴と考えている。A区西はそれに符合している。A区東及び「冷水ほか」では、2間が主体で、1間のものは桁側2間に止まっていた。この点で、両者はA区西の掘立柱建物跡に先行するものであったと考え、古墳時代～平安時代という年代観は妥当と見てよいだろう。

(3) 桁側平均柱間と梁側平均柱間

桁側平均柱間については、「冷水ほか」で数値が1.81m（6尺）以下を持つものが主流となっており、これが時代差を示すかどうかは今後の課題となる。桁側平均柱間の数値によって分類する方法は、A区西の屋敷構成を復原する方法として採用したが、時期差か機能差を示すものと判断できたものの、量的に少ない事例であるため、あまり有効ではなかった。

梁側平均柱間については、A区東で桁側平均柱間と数値が一致する特徴を見いだしたが、これは時代差では